

とある鎮守府の、どた
ばた騒動記

sdカード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類が制海権を失ってはや十年疲弊し始めた各国は、艦娘以外にも有効な手だてはないかと模索する。

そして、作り上げたACと呼ばれる兵器それとAMIDAと呼ばれる生物兵器

これは、そんなACを使える男と艦娘達の繰り広げる

戦いの物語である……………

と言うのは建前でぶつちやけ頭の中のネジが技術的な意味でぶつとんでる奴等の日々の物語力オス3割真面目4割り AMIDA3割で進めていきます

目次

提督は着任する	1
排気管にはご用心	6
不明なユニットが接続されました	10
VOBはロマン!!!	17
演習手前、会合そして準備	27
演習前編 (狂気の勝負)	35
死神の本気 演習後編	44
一瞬の時 (演習特別編!)	52
夜戦!	60
帰還 そして日常	74
新たな仲間、そして	80

人物紹介	87
バイト前編	93
バイト 後編	99
提督の日常	107
如月はやっぱりキサラギだった	114
新入り達の讚美歌	118
プランM所謂虫ですね	125
武力偵察と言う名の殺戮	134
番外編 深海側の話し合い	139
狂喜と狂気と狂笑	143
L i vという少女	146
ペイバックタイム!	154
黒対白 そして動き出す最狂の狂気	

部屋の片隅でガタガタ震える準備はOK	231
交渉	224
イレギュラー	219
チューニング	210
君の信じるもの	204
笑うものは人ではない(よくあること)	199
h! !	191
Laugh; laugh! Laugh	180
一回戦!	173
珍しい来訪者	165
悪魔と手をとったもの	

Death of four leaves	309
Death of four leaves	302
パーティ	295
バケツ対戦車	286
AMIDA AMIDA AMIDA	280
提督として、人として	273
視察 AMIDAワシャワシャ	269
来訪者	256
拷問	248
殺戮	238
?	

間	388	一方その頃	396
es 裏	317	A M I D A 対天使	400
彼と私	323	クリスマス1	410
それぞれの思い	328	クリスマス2	415
ネクストステージ!	334	クリスマス3	422
コジマ搭載型	341	クリスマス4	428
コジマ搭載型二足歩行駆逐艦だと!ふつ	347	クリスマス5	437
くしい!	355	横須賀編&次のプロローグ	451
ただのダンモロですな	362	作戦概要	457
激闘! 不死者対首輪付き	376	誘拐	461
疾走! 激走!! ダウンヒル!!!	382	ブリーフィング	467
人物紹介2!	388	回想	476
セラフによるセラフのためのセラフの時	388	作戦開始	481

ファンタズマ	487
ファイナルカウントダウン	493
横須賀Part3 前編	500
デッドダンス	508
横須賀にて話し合い	515
会話	522
明石の過去 Part1	530
明石の過去 Part2	534
海原を滑る姉妹	538
キャラ紹介&オマケ	544
トラブルは起こるものではない、全力で 起こすものだよ四葉	551
今日も今日とて問題は山積みになるよ	

627	ゆく年くる年 レッツパーティー	618
	ning Christmas plan	613
	歯医者 Jewellery store	608
	遭遇 憂鬱な天使は何を見る？	598
	キャラ紹介 クーデルカ	593
588	四葉を継ぐ(かもしれない)もの プライド	575
	狂人は嗚うケラケラと	565
	NWGI X/v クー	557

T H E d i a m o n d

t r a p

キャラ設定 雲龍

現状とパーティー?

G u n t r e t

D e a d m a n , s h a n d

狂人(提督)

袋のネズミを誰が笑う?

632

637

645

652

661

669

673

681

提督は着任する

「やあ、世間の皆さん始めまして今日から提督を勤める四葉よっよう一樹かずきだ、ところで皆さんは AMIDA と呼ばれる兵器をご存知だろうか？

取り敢えず、知らない人向けに説明させてもらおうと

アーマードコアと呼ばれるゲームに出てくる

キサラギ製の生物兵器である。

見た目は……：……：……：そうだな……丸いのに蜘蛛の脚がワシヤワシヤと付いてると思ってくれば良い

特徴は酸を吐いたり爆発したりするのがある

さて、何故艦これなのにこんなのを長々とするか？

ソリヤーメノマエニイルカラダヨ

~~~~~二時間程前~~~~~

「君が新しい提督か、歓迎しよう！盛大になー！」

男が憲兵に高らかに歓迎された

「嫌、アノ、これの何処が？」

流石に困惑するしかなかるう、だって目の前の鎮守府と

呼ばれる建物は……………無いのである

そう、憲兵達の詰め所がある以外何も無いのだ……

「ハツハツハ、流石に驚くよねー入口こつち

そう、指示されたのは穴である。

「嫌、あのこれ落ちたら死ぬんじや？」

「大丈夫だつて、酸にも耐えるし爆発にも耐えるから？」

「何故疑問系?!これ、入ったらアカンや…」とつとと行け!」うわあああああ!!!

「よし、落ちたな……………見せてみなお前の力をさ……」

男落下中

「ギイイイヤアアア?!、無理これ絶対死ぬ!」

バシャーン

「冷た!!!」

男は着水した

「寒い……………取り敢えず、執務室何処だ?」ピコーン

「何だ、今の音?」

『執務室此方』500メートル↓

『ドック』800メートル↑

『生産室（如月と一緒にじゃないと入れません）』→1キロ先

「何？これここ絶対不味い所じゃ……………まあいい、執務室に行くか…秘書艦がいるはずだ、よし取り敢えず会って話を聞こう！そうすればなんとかなるはずだ……………」

提督移動中　カサカサカサカサカサ　何か移動中

提督は此処に着任する前のことを思い出しつつ、何故自分がこんなところにて？と思いつつながら歩いていった。

廊下は一本道で床は木で作られていて、壁は白を基調としている。しかし、窓がないのでやっぱり個々が地下であることが分かる。

執務室到着

コンコン???「誰か来たみたいなのです。」

「やあ始めまして今日からこの鎮守府？で良いのかな、に着任した四葉一樹だよろしく???」「秘書艦の暁型四番艦　電なのです。よろしくお願いします司令官さん」

「よろしくね♪さて、早速で悪いんだが……………ここ本当に鎮守府だよな?」

電「そうなのです、それがどうかしたのですか?」

「嫌、だってここ地下じゃん」

電「気にしたら駄目なのです！」

「ひでえ………まあそれは良いとして。もうひとつ質問……途中の生産室でなに？」

電「よくわからないのです、電も気になって入ろうとしたのですが……入れなかったのです。」

「なんじゃそりゃ？」

電「ここは秘書艦が二人いてもう一人如月さんが居るのですが詳しくは彼女から聞いてください」

電の話聞いて、彼は思う

（俺、もしかして………一番ヤバイところに飛ばされた？）

こうして始まる彼の地獄のような不思議な日々

そして、後に深海側に死神の代行者、生物兵器の天才

二人でひとつと呼ばれる部隊の

その最初の一時間である

次回予告

新しい仲間と共に頑張ろうと思う提督、しかしその後ろにあいつらが迫る！

次回「排気管にはご用心」お楽しみに！

やっぱりさAMIDAハ下手にてを出すもんじやないね

## 排気管にはご用心

ドック 本来は艦娘の開発に使われる場所だがそこは既に別のようなものになっていた……………

「なあ……………俺の予想だが、ここは本当にドックだよな？」

電 「そうなのです、ここは一応ドックです！」

「いやどこをどう見ればこうなるんだよ！」

そう、見た感じ物が雑多に並んでるだけの場所なのだ。

しかも、妙にバカデカイ砲とか、チェーンソーが6つ

くつついたのとか、柱とかおおよそ武器として使うようなものではないものが転がっ

ていた……………

「なあ……………本当にドックだよな？」

電 「あそこに妖精さんがいるのです。」

「あ、本当だ。ー？なんだあれ？」

そう言った彼の目の前に映ったのは妖精たちが46サンチ砲（旧海軍はセンチのこと）をこう言ってたので問題はありません。）を整備している用に見えるが

よく見ると、分解して何かしているようである……。

「オーイ、何してるのー?」

妖精「あ、提督さん始めまして。ドックにようこそ!

現在はドック担当特別技術員の如月さんからの依頼で

パイルバンカーの制作中です!」

「へ?パイルバンカー?」

妖精「はい、そうです! いちいち弾薬を使うのは大変なので一撃必殺を求めました!」

………どうやら、普通にものを作ってるようである。

「そ、そうなんだ。カサカサカサカサカサカサ      ???なんだこの音?」

妖精「総員! 退避! 退避!!!」

「へ?え?ちよつと皆?」

謎の物音に提督は護身用の軍刀にてをかける

そして……

ドシャアアアア

上から大量の生物が降ってきた……

「電」

電「何でしょうか、提督さん?」

「逃げるぞー！」

電 「無理です！前を見てください！」

電の叫びの通り前を見ると、既に何かドアの前を制圧していた……………

「逃げ場なし?!」

??? 「待って！アミチャン達！その人は新しい仲間よ！」

電 「如月さん！」

如月 「御免なさい、提督さんこの子達に悪気はないの、ただ初対面だから敵と勘違いしちゃったみたい。」

間一髪の所で助かったが、流石にこれは怖い物がある

「えっと、この生物達がアミチャンなの？」

如月 「はい、対深海凄艦用特殊生物兵器として作られたAMIDAです。」

「何か、不思議な生物だね（怖いよ、マジで怖いよ。）」

現状を軽く説明させてもらうと……………

学校の体育館二つくらいの部屋の中にとこせましとAMIDAが視界一杯にいるのだ、怖いわけがない。

如月 「そうですよね！なんといってもこの丸みとか、脚のワシャワシャ感とか全て良いですね！」



「ソ、ソウダネ！」

電「やつぱり、如月さんは壊れてます！」

如月「何をいつてるの電ちゃん……………AMIDAはロマンよ！」

どうやら、こここの如月はナニカサレテイルヨウダ

「ま、まあ取り敢えず一度執務室に行こうか！これからの内容とか、見廻りを決めないと  
いけないからね！」

電、如月「はい！」

こうして、提督と愉快的な仲間達の顔合わせが終わった

## 不明なユニットが接続されました

提督達は、今後の予定を決めるために、執務室に向けて移動している。

「なあ……さつきドックにあつた武器は何?」

如月「オーバードウエポンと呼ばれる規格外兵器です。要するにロマン武器です! 当たり前さえすれば姫級も一撃の威力を誇ります!」

どうも、こここの如月は頭の中が吹っ飛んでるみたいだ……

そして…そうこうするうちに執務室に到着

「そんなアホな、じゃあ後で見廻りあるからそんなときにそれ装備して行つてね?」

如月「どれを装備すればよいですか?」

「???そんなにあるの?」

如月「今のところは、ヒュージキャノンとマスブレードとグラインドブレードの3つがあります。」

「……………そんなにあるのかよ?!」

如月「どれにしますか?」

「じゃあ、二番目のマスブレードで、何か気になるし。」

如月「分かりました、では。電ちゃん先行つてて装備してくるから。」  
電「分かりました、待ってます。」

提督はこのとき知るよしも無かった、マスブレードがどういう武器でそれがどれ程恐ろしいかを……

その頃、地上の憲兵さん達——

憲兵1「彼、大丈夫ですかね？」

憲兵2「アハハ？大丈夫じゃない？、それにさ、あつちが残らないと面白くないじゃん！ん！」

憲兵1「面白い？何がですか？」

憲兵2「AMIDAて言ったけ？アレ、面白そうじゃん。」

どうにも会話が噛み合わない二人である

(憲兵1は女性 眼鏡を掛けた、クールキャラさん)

憲兵2は何か無駄にハイテンションな人。それでも一応この隊長 後、私が面倒なのと読みやすさを重視して隊長と書きます。誤射はされません、するほうです↑(ここ重要)

憲兵1「……………そう言うものですか……………」

隊長「そう言うものだよ、あああいしてるんだあああ君たちをおおお！ ハハ

ハハハ!!」

今日も地上は平和です

なんやかんやあつて現在………港

「何? コノデカイン」

電「如月さん、それ大丈夫なのですか?」

そう、現在如月の背中には身長と同じくらいの柱がついていた。

如月「大丈夫です、背中にアームをつけて、バランスを取ってるので問題ないです!」

「そ、そうなんだ、じゃあ気を付けて行ってきてね。」

如月&電「出撃します。」

こうして、彼女らは海に出た、そしてこれが地獄の始まりだった。

イ級1「なあ………なんで今日ヲ級とレ級の先輩方がいるんだ?」

イ級2「さあ? アレだろ新興勢力を潰しときたいんだろ。ここ、ボーキサイト多いし。」

イ級3「それもあるけど、どうもここの如月て奴が強いから増援だつてさ。」

イ級1、2「へー」

ヲ級「今日は護衛よろしく………」

レ級「パーといこうぜ! どうせ殲滅するんだから楽しまないと!」

ヲ級「レ級、あんまり調子にのらないでね。」

レ級「ハイハイ、ワカツテマスヨ。？お、来た駆逐艦二隻かすぐに終わるね♪」  
一方その頃、駆逐艦二隻……………

如月「AMIDAは良いねー」

AMIDAを一杯引き連れていた……………え？どこにいるんだよ？

如月 電

ー海

AMIDA

こんな感じに泳いできている。

AMIDA「アミー。(敵艦発見！イ級三、ヲ級エリート1、レ級エリート1!!!)」

電「そんなにいるのですか?!如月さん逃げましょう!」

如月「ウフ♪アミチャン達の初戦には丁度良いわね♪行ってきてアミチャン達！イ級を殲滅してきて！レ級とヲ級は私がやるは」

AMIDA「アミー!!! (了解!!!)」

そして……………戦闘が始まる

深海側

イ級1「?なにかくる、潜水艦か?数は500?!なんだこりや!」

イ級2 「イ級1すぐにその場から離……………ドーン！」

イ級3 「2が沈んだ、1！あしも……………ジユワ、体が?!溶解、嫌だ沈みた…」

イ級1 「3?!2?!クソ?!どこにいや……………ピタ?!

ドーン！」

ヲ級 「護衛部隊が?!…貴様、貴様ら何者だ！」

レ級 「ヲ級、叫んでる場合じゃないよ！取り敢えず、撃ちまくれ!!」

空には艦載機が飛び交い、如月に襲いかかる！

如月 「ち！被弾しましたか……………電ちゃん離れていてください！本気でいきます！」

『システムに深刻な障害が発生しています、ただちに使用を停止してください。』

謎の音声は聞こえたあと、如月の腕に柱が取り付けられる……………

ヲ級 「フン、クダランすぐに潰……………グワシヤ」

ヲ級が言い終わる前に、物言わぬ肉の塊になった……………

そう、如月の腕が燃えながら視認が難しいレベルで突っ込んで来たのだ……………

レ級 「?!ヲ級?!くそ！ヲ級の仇!!!」

如月 「邪魔」

レ級 「グワア!?!、嫌だ、コンナトコロデ私はまだ闘える！」

如月 「……………そう、なら沈みなさい。アミチャン！殺つちやつて！」

そう叫ぶと同時に大量のAMIDAがレ級に貼り付く。

レ級「ナ、ナンダコイツラハ、か、カラダガ?!、ギイイヤアア!?!」

少しずつ溶けていくレ級

如月「チェックメイトよアミチャン! 発破!」

AMIDA「熱くなれよ! ドーン!」

こうして、戦闘は終了した。多くのAMIDAが犠牲になったが無事に勝利した

補足事項

マスブレードについて

元ネタ ACVにて主任と呼ばれるAC乗りが一度撃破されたときに、近くの柱を手に取り大破してるにもかかわらず全力で殺しにくる。尚、この作品では如月が

「柱にジェットブースターつければ楽しそう」とのことで、柱にジェットブースターが取り付けられている

展開後、機関を限界まで駆動してチャージを行い

完了したら敵に向かって突っ込み右から左へ風ぎ払う

当たると相手は死ぬ。

尚、オーバードウェポンは規格外兵器なので使用後は

回避行動が取りにくい、移動速度が物凄く遅くなる等の弊害があるが、それを補うほ

どの威力を誇るのは本編の通りだ。



## VOBはロマン!!!

戦闘が無事に終了した如月達だが、ひとつの問題が発生していた……それは……

如月「ごめんねー、電ちゃん引つ張ってもらって。」

そう、オーバードウエポンは機関を限界まで駆動して使用するのである。つまり、使用後は機関がオーバーヒートするので冷却しないといけないので暫くは動きにくいのである。

電「大丈夫なのです、助けてくれたから問題ないです。」

AMIDA「アミー……（俺等じゃ、ご主人運べないからな）」

如月「それにしても、チャージ時間が長いわね、機関を新しくしないと……???誰かい  
る。」

電「敵ですか？」

そう、遠くの方に一人立っているのだ……

見た目は黒くぱつと見は深海凄艦にも見える。

???「貴方達は？」

如月「その、鎮守府に所属する。如月よ。」

電「同じく、所属する電なのです。」

???「そう、私の名前は N|W G I X / v よ。」

如月「何て言う、呼びにくい名前ですね……………」

電「N|W G I X / v ですか、他に呼び名はないのですか？」

N|W G I X / v「……………知り合いからはJと呼ばれていたは」

如月「なら、黒いからクーでどう？」

N|W G I X / v「……………良いわねそれ♪」

電「それでいいのですか?!」

こうして、N|W G I X / v『クーチャン』が仲間になった…

がN|W G I X / vは如月の背中を見て、怪訝な顔をした……

(ここからはクーチャンと書きますが、初見の人がいるのも考えて最初にフルネームで書いた後クーチャンと書くようにします。)

クーチャン「……………マスブレード、人間の可能性……………」

如月「???どうかしたのですか？」

クーチャン「いえ、何か私の記憶に引つ掛かる物があるの、気にしないで。」

電「それよりも、早く鎮守府に帰るのです!」

こうして、新しい仲間と共に帰投の道を歩む三人+Aだった……………

一方その頃、鎮守府（地下にいる我等が提督　四葉一樹はここにくる前のことを思い出してた……………

（そう言えば、俺がここに転生してきたのつて……………声が聞こえたんだよな……………）

転生前

??「助け……て」

一樹「??誰だ？俺の気のせいかな？」

彼はゲームをしているときに声が聞こえたので辺りを探していた……………そして……

一樹「穴？なんだこれ？こんなのあつ……ズル……ウワアアア?!」

滑り落ちた……………

一樹「俺、穴に縁があるみたいだな」

そう呟いたときに目の前に紙が現れた

一樹「紙？こんなのあつたか？」

??「やあ、始めまして四葉一樹くん？私は、そうだな神とも思つといてくれ」

一樹「紙だけにか？」

神「ウツサイ！……コホン、それはまあさておき、お前驚かないのか？」

一樹「如月が予想以上にぶつ壊れているから、今更神様が現れたくらいでは驚かんは

……」

神様「お前タフだな、まあいい。実はお前に特典をあげるのを忘れていてな。サービ  
スだ好きなのをやろう。」

一樹「それなら、UNACのデータと俺の機体と、オーバードウエポン使いたい放題  
だな。」

神様「……………それだけ？他の奴はコジマの無効かとかネクストを要求してるよ？」

神の一言に少し驚きつつも彼は冷静に返した

一樹「他の奴はそうかもしれないが、俺は気楽に生きたいので、その程度でOKです。」

神「そうか、分かったなら今から渡す大事に扱えよ？」

一樹「ありがとう、あんたいい神様だな。」

神「誉められたのは久し振りだよ、全く……………」

そして…彼は力を授かった

神「なら俺、帰るは…じゃあな。」

一樹「ありがとうございます。俺はこの力を仲間のために使います。」

彼が眩いた直後

神「そうそう、いい忘れてたけど……………ラバウルの石川で知ってるか？」

一樹「……………えっと、確か資料ー資料、ええ、暁型をこよなく愛する人ですね、私の  
先輩に当たたる尊敬できる人ですね。」

神「それじゃあ、ラインアーク鎮守府の風見さんは？」

一樹「ラインアーク……：f aの名前？まさか彼も？」

神「そうなんだよねー、彼等も転生者なんだよ」

一樹「……：これだから、面白いんだ人生て奴は。」

神「君、ちよくちよく主任入ってないか？VDやつてる人間にしては……」

一樹「……：Vやつてて、続編をやるのはおかしいのか？まあ、それは良いとして、うん楽しそうだ……：♪それで？彼らを潰せと？もしそうなら、あんたをこの距離でマルチプルパルスで消し炭ニスルゾ……」

彼は神に対してマルチプルパルスを展開した……

神「……：冗談はよしてくれ。彼等は善人だよ。ただ、それが言いたいだけさ。」

一樹「そうか、ならいい。マルチプルパルス起動終了」

神が嘘をついてる様子はないみたいなので、彼は展開を止めた。

神「もしかしたら、彼等から接触があるかも知れないが、判断は君に任せるよ。楽しみたまえ、この世界を。」

そう言うと、神はその場から消え去った……

神様が消えた後、一樹は考えていた……

一樹) (ラインアークの風見さんか……普通の艦娘が何処までネクストに通用するか、そして何よりも……如月、彼奴の実力が知りたい……アイツはただの艦娘じゃないはずだ……そもそも、俺が来る前にオーバードウェポンを作り上げているのがおかしい……如月、お前は何者なんだ？考えるのは後だ、まだ彼女達の練度は低い取り敢えず同じくらいの実力と思われるラインアーク鎮守府に連絡して、演習を頼もう。)

プルルীগチャ。

ラインアークの主任さん「はいはい？我等が提督は現在ラバウルにいつてていませんよー、ご用があるなら後から伝えるからこの場で言つてねー？」

一樹「始めまして、AMIDA鎮守府の四葉一樹です。実は演習を頼もうと思つてたんですが、風見さん居ないのですか、ではまた後日おかけします。」

主任「あ、演習の相手？嬉しいねー、なら提督は明日には帰るみたいだから明日来てくれるかなー？」

一樹「分かりました、明日出発し、朝には着くようにしますそれでは、彼に宜しくと。」

主任「はいはい、楽しみにしとくはー、見せてみな、お前達の力をさ。」ガチャ

(さっきの声、主任だよな？まさか、他にもいるのか？勘弁してくれ。)

彼が考えているそんなとき

テイトクー　　どうやら妖精が呼んでいるようである

一樹「どうしたんだい？帰ってきたの？」

妖精「そうだよー、迎えに行つてあげてね。」

一樹は、椅子から立ち上がり港に向けて歩き始めた……

港

如月「電ちゃんもう大丈夫だよ、機関も治つたから問題ないよ。」

電「それでも、被弾したんだから入隻するべきなのです！」

一樹「おかえり、二人とも？………後ろの子誰？」

クーチャン「N―W G I X / v長いのでクーチャンと呼んでください。ペコリ」

一樹「歓迎しよう、私の鎮守府に。(………ちよつと待て、この子どう見てもJの機体

じゃないか?!あの野郎なんつー置き土産だよ!?)」

そんなこんなで、彼は冷静になり、皆に言った。

一樹「所で皆私達には足りないものがある！それは何かかな？」

電「資源です！」

一樹「そうだね、けど俺の考えとはちよつと違うな…如月わかるか？」

如月「AMIDAが足りません！」

予想通りの答えだった

一樹「違うは！てか、これ以上増やすな！妖精さん達の精神がマツハで減ってるから！」

クーチャン「練度、すなわち私達には経験が足りません…」

一樹「そうだ、俺達には経験が足りません…と言うわけでだ、演習に行つて貰おうと思う。」

その一言に三人は驚いた

如月 電 クーチャン「「エ?」「」」

如月「三人で? (試作兵器実験のチャンス)」

電「ハワワー(だ、大丈夫なのかな?)」

クーチャン「私は賛成だ。」

彼女達の反応を見て彼は微笑みを浮かべながら言った。

一樹「場所はラインアーク鎮守府、俺達とは違い娘空と呼ばれる存在がいる。気を引き締めて行つてくれいいいな?常識は捨てろ、そもそも俺達は三人しかいない。そこでだ……:如月、お前がいけない間にオーバードウエポンを改良しておいた、使いたい放題だ。存分に暴れてこい！」

如月「!?!、ありがとう!提督、大好き!ムギユ」

如月が彼に飛び込んだ



電「提督さんも変態でしたか……………」

クーチャン「私は、このままか、まあいいでしょう、誰であろうが叩き潰すのみです！」

全員が初の演習に向けて一致団結し始めた頃

何処からか声が響く

隊長「アツアア？えつとー？提督くーん？聞こえてるかなー？」

隊長から連絡があつた

一樹「隊長？どうかしましたか？てか、どうやって……………ああそのスピーカーからでしたか」

そう、壁にスピーカーがあつたのだ

隊長「あつちの妖精さんからの届け物でこれをつけてこつちに来てほしいみたいだよ？外にあるからドックで受け取ってね♪」

一樹「了解、そんじや仕事頑張つてねー」

隊長「お互いになー」

そして、外に出て見たものそれは

VOBだつた

(軽い説明 VOBは物凄い速度の出るブースターと思つてくれれば良し！)

一樹「……………なるほど、皆背負ってね♪」

三人「嫌！（です！なのです！だ！↑から如月、電、クーチャン）」

彼女等は嫌がったが彼は笑いながら自分も背負った

一樹「大丈夫だよ、俺も使えるんだ！君たちも使えるよ！」

そんな彼の説得により無事に背負った

一樹「それじゃあ、ラインアークに向けて出発！」ゴオオオ!!!

三人「いやあああああ!?!」

そして、彼等は演習先のラインアークに向けて飛び立った……………

## 演習手前、会合そして準備

ゴオオオオオー!!!

四人は演習相手のラインアーク鎮守府に向けて飛行していた流石に飛行機よりもかなり早いので、提督の身が不安だが、こいつはオーバードウエポンを生身で使える体なのでこれくらい何の問題もない

一樹「アハハハハ!!!アーハッハー!!!最高だぜえー!」

如月、電、N—WGIX/v(クーチャン)

「イヤアアアアア!?!」

午前0600 ラインアーク鎮守府に到着……………

如月「し、死ぬかと思つたわ。」

電「ハワワー グルグル」

クーチャン「全く…私は、なんとか大丈夫だが…二人は…死にかけてるな。提督、流石にこれは不味くないか?」

提督「んー?早く来すぎたみたいだし……………挨拶しに行こうか、入口あっちみたいだし…」

如月「ア?! AMIDA 忘れた! 取り帰っちゃダメ?」

提督「駄目です、今回はオーバードウエポンを使うからな、我慢してくれ。」

如月「ウー、分かったまた今度にする。」

提督「分かってくれて嬉しいよ ナデナデ」

そんな感じに喋りながら、ラインアーク鎮守府の正面に到着した

提督「すいませーん、今日演習の相手を頼んだ四葉一樹ですが主任さんいらつしやい  
ませんか?」

主任「はいはい、やあ、早かったね悪いけどまだ帰ってきてないんだもう暫く待つ  
てくれないか?」

提督「妖精だったんだ、人間とばかり思っていたよ……」

主任「アハハ、行ってないもんね。もう少しすると帰ってくるから待ってて。」

提督「分かりました。それでは暫く待たせて貰います。」

ゴオオオオオー!!

提督「? 何の音だ?」

??? 「イイヤツホオオオオオ!!!」

主任「あ、帰ってきたみたいだねー」

キャロル「主任、そう言えば今日のこと提督に伝えたのですか？」

主任「……………ア?!忘れてた！」

キャロル「フー、ちよつとこつちに来なさい。」

主任「いやいや、きやろリン落ち着きなよ?!ドグシャ！」

キャロルと呼ばれた妖精が主任の顔を何処から取り出したのかパイルバンカーで思いつきしぶん殴つて中を舞う。

提督「えつとあの、それじゃあ、執務室で待つてると彼に伝えてください。」

キャロル「分かりました、主任?話はまだ終わつてません……………」

主任「きやろリン冷たい……………」

提督（それにしても……………さっきの悲鳴?いや、奇声か……………

誰のだ?まあ、いや今はどうやつて…ネクストを倒すかだ……………いやまてよ?現場判断にさせてみるか、それぞれの弱点を知るいい機会だ……………と、ここか。)

彼はラインアーク鎮守府の執務室の前についたそして

コンコン

提督「AMIDA鎮守府の四葉一樹です、失礼します！」

誰もいないかも知れないけど中にはいった。

ガチャ

?? 「御客さんですか？ 始めましてラインアーク鎮守府の秘書官のアクアビットです」  
「どうやら、先客がいたようだ」

提督 「始めまして、AMIDA鎮守府の四葉一樹です、実は先日そちらの鎮守府に演習を申し込んだのですが、主任の手違いで伝わってないみたいなので、本日は御願いと日程の調整にきました。」

アクアビット 「そうなのですか、そう言えば家も演習やったことないので良い機会かも知れませんか。」

「そうして、秘書官と会話をして時間を潰していると……」

ガチャ

??? 「ただいまー、??どちら様？」

「このの、提督が帰ってきたみたいだ、一樹は敬礼をしつつ、自己紹介をした。」

一樹 「AMIDA鎮守府の四葉一樹です、先程キャロルさんから聞いたかも知れませんが演習の申し込みにきたのですが。そちらの日程は大丈夫でしょうか？」

風見 「……家と？ まあ、ここもまだ新しいから良い機会かもねよろしく！ そうだな日程的には昼からで良いかな？ (石川どうしよう……近づくな言われたところから近づかれた……)」

一樹 (良い人じゃないか。)

こうして、最初の会合で昼飯の後に演習が行われることになった  
ここからは演習前までのそれぞれの様子を見ていこう。

A M I D A 鎮守府サイド

一樹「……………さて、現在我々には2つ問題がある。」

クーチャン「……………そうですね、無理矢理来たので装備がありません。」

如月「オーバードウエポン2つしかないしねー」

電「2つも持ってきたのですか?!」

如月「保険よ保険、ただ片方は良いけどもう片方が不味いのよねー。」

一樹「それもそうだが、最大の問題がある。」

三人「???」

一樹「あつちの戦力が分からない。」

三人「そう言えばそう「でしたね」(なのです)『ね』」

一樹「と言うわけで、反則かも知れないが最初からオーバードウエポンフル使用で  
いかせてもらおう!如月!今オーバードウエポンは何がある?」

如月「ヒュージキヤノンとマルチプルパルスの2つね」

ここでちよつとばかりの説明

ヒュージキヤノン

オーバードウエポンのひとつ展開後ACよりもデカイ砲を展開し、エネルギーチャージ後核弾頭をぶっぱなす凶悪兵器、尚、威力と速さは折り紙つきでゲームでもうまいやつだと下手すると殺される。

マルチプルパルス

オーバードウエポンの一つ、75×2のパルス砲を持つ

後ろ以外は効果範囲内なのでゲテモノのひとつである。

尚、オーバードウエポンは起動の間、硬直無効と、無限ブーストが可能なので全力で突っ込んできて発射することも可能

ただし、上のヒュージキヤノンはチャージ中はエネルギー全部持つてかれるので動けません。

一樹「……………おいおい、なに持ってきたんだ…まあ、いいやヒュージキヤノンは如月！電はマルチプルパルスだ！こうなりや一撃で決めるぞ！」

クーチャン「私は？」

一樹「そもそも、装備なに？」

クーチャン「プライマルアーマーとアサルトアーマー、それとライフルとミサイルね」

一樹「十分だ（まあ、J.の機体だから。知ってるけどね！）」

一樹「さて、作戦だが、有っても無くても変わらないから小細工なしでいこう！」



三人「はい！」

一樹「それじゃあ、演習までに装備の確認しといてね。」

AMIDAサイドend

アークラインサイド……

風見「……さて、今回の演習相手のAMIDA鎮守府だが……」

アクアビット「AMIDA？まさかいませんよね？」

風見「……どうやら、今回は居ないらしい、いるのですら恐怖だが……」

アリーヤ「……それでも、相手は時雨や白露と同じ普通の艦娘何でしょ？」

風見「そう言いたいんだが、クーチャンと呼ばれる。のがいるんだが、どうもこいつはネクストと同じと思われる」

アクアビット&アリーヤ「……え？その子の本名は？」

風見「N|W G I X / vらしい……知ってるか？」

アクアビット&アリーヤ「いえ、全く知りません。」

風見「そうか……（やはり知らないのか……）」

時雨「で、提督私達はどうするの？」

ヴェールヌイ コクコク

風見「そうだな、アクアビット アリーヤ 時雨 白露 ヴェールヌイ ストレイド

の六人だ」

ヴェールヌイ「司令官、三人相手にそれは……」

風見「俺もそう思うが彼の要望なんだ、何やら多くの経験を積ませてあげたいらしい。」

ヴェールヌイ「分かった。」

風見「それじゃあ今は1057、演習は1300からだ、遅れないように解散！」

アークラインサイド end

こうして、お互いに決意を固めて演習までの間に準備を整えた……

如月「うふふ♪ついにこれが使えるのね、うふふふ、アハハハ!!!」

1名ぶっ壊れてるようだが、演習はどうなるんだろうか……

## 演習前編 (狂気の勝負)

1300 ラインアーク鎮守府近くの海上

それぞれの艦娘が目標地点に到着した

AMIDA 鎮守府サイドから見ている。

一樹「作戦概要を説明する、本作戰は模擬戦だ！しかし、轟沈が無い以外実践と同じだ全力でやるように、それとこっちは人数が少ない状況判断を間違えるな！失敗すれば一瞬で落ちると思え！」

如月「提督、要注意事項は？」

一樹「ネクストと呼ばれる存在の、アクアビット&アリーヤ、そしてストレイドの三人だ、尚、クーチャンは問題ないが、如月と電あいつらはコジマ粒子を使う可能性がある出来る限り遠距離から沈めろ！それと、ヴェールヌイだが……どうもカンストのチート野郎だそうだ。こいつは出来る限り逃げ回ってチャンスを探せ、後は自己判断で頑張ってくれ。」

言っていることはカッコいいかもしれないんが実際は現場に丸投げである……

一樹「メタ発言は止めなさい」

サーセン

如月「分かりました、それでは司令官、私頑張ります！」

一樹「おう、頑張ってください！」

AMIDAサイドend

ラインアークサイド

風見「さて、演習だが……今回の注意点は如月だ……」

彼は重たく言った

アリーヤ「え？クーチャンではないのですか？」

アリーヤが当然の質問をする、それは当然だ

本来ネクストと艦娘だと速度の違いなどがあるので本来ならば同じネクストの N

—W G I X / v クーチャンに注意するはずだ

風見「そうなんだが、先程軽くあつちを見たとき如月が背中にやけにバカデカイ砲を積んでたからアウトレンジを狙ってくるかもしれん気を付けてくれ！」

六人「はい！」

風見「それじゃあ、行こうか。」

ラインアークサイドend

そうして時間は達現在両提督は執務室にいる

一樹「それじゃあ、風見さんお手柔らかに。」

風見「こちらこそよろしく。それにしても良いのか？3対6だけど…」

一樹「俺としては受けてくださりありがたいです。彼奴等には常に多くの敵と交戦する可能性を考えてもらいたいので。」

風見「そうか…じゃあ始めようか。」

風見&一樹「演習始め！」

こうして、演習が始まったしかしお互いにこのあとの地獄を知らなかった、如月の狂気を………

ラインアークサイド

白露「始まったみたいだね、さてとあつちはどう動くかな？」

ヴェールヌイ「分からないけれど気を付けないとね。」

ストレイド「ー？ねえ何か此方に突っ込んできてる？」

アリーヤ「?!パターン1 敵の電です！早いわったいなぜ?!」

そう、本来ならば駆逐艦の電がACのハイブーストと同じ速度で突っ込んでくるのだ  
それは何故かって？

前回彼等はどうやってここに来たかを思い出してほしいそうVOBだ

電はもう一度これをつけているのだ!

尚、当の本人は……………

電「ふにやー?! (無理ですいくらなんでもこれは無理です!)」

どうやらマルチプルプルスを起動した状態でVOBをつけているようだ

アリーヤ&アクアビット&ストレイド

「なんなのよあれ!」

ストレイド「いくらなんでも無茶苦茶だよ!」

アリーヤ「何か構えてるみんな逃げて!」

電「電の本気をくらえなのです!!!」

ドーン!!!

それは一瞬の出来事だった、電が通りすぎる直前に白露と時雨は光の波を見たのと同じ時に飲み込まれたそして…

時雨&白露「キヤアアアアアアア!」

ヴェールヌイ「!、二人とも大丈夫かい!」

時雨&白露 作戦続行不可

一瞬だった……………

時雨「終わっちゃった、帰還します。」

白露「私もやられたみたいね、なんなのよあれ！」

ストレイド「私に任せて！チャンスは1度！」

電「もう一度決めるのです！」

ストレイド「来なさい！決めてあげるは！」

両者が交差する直前

如月「もうー、電ちゃん仲間外れはよくないなー？」

電「如月ちゃん?!何を考えているのです！」

如月「いやいやーちよつとぼかしおてつだいをねええ!!」

急に如月が電に無線を繋いだ

ビーガガー『不明な、ユニットが接続されましたシステムに深刻な障害が発生してい

ます、ただちに使用を停止してください。』

そして：如月にヒュージキヤノンが装着され

如月は発射した……電に向けて

ドカン！

発射された弾頭は電のVOBに直撃し、ストレイドすら巻き込んだ……

電「き、如月ちゃん？貴女、一体何物なので……す？」

ドーン

ストレイド「あ、あの娘、仲間事私を？」

ストレイド&電 作戦続行不可

クーチャン「如月さん？何をしてるのですか？あれは電ちゃんかと？」

如月「うふふ？そうでしたか？私としては敵を狙ったつもりでしたが……まあ、良いじゃないですかどちらでも

あつちはまだ残っていますし、楽しいじゃないですか？」

クーチャン「嬉しい？どういう意味ですか？」

如月「私たちの可能性ですよよと、もう少しだけ遊びましょうか？」

そうして如月は構える死神の巨砲を

現在の戦力

AMIDAサイド 残り 如月&クーチャン

ラインアークサイド アクアビット&アリーヤ&ヴェールヌイ

ヴェールヌイ「あいつ、仲間事撃ち抜いた！私の妹を！」

アクアビット「ヴェールヌイちゃん落ち着いて！下手に近寄ると彼女の良い的よ！攪乱しなから近づかないと！」

アリーヤ「アクアビット、私達はあつちの黒い娘を狙うよ！ヴェールヌイ！如月の相



手よろしくね！」

ヴェールヌイ「分かっている、あいつは私が倒す！」

ラインアークサイドが決心を固めた直後無線が繋がる

クーチャン「回線繋がりました、如月さんどうぞ。」

如月「あつあー、ラインアークの皆さん聞こえてるかなー？」

ヴェールヌイ「：如月！貴様何故仲間を撃つた！」

如月「いないのですよ、私には敵も味方も……」

ヴェールヌイ「何だって？」

突如始まる如月の独白、それはまるで自分と言う存在を否定するようだった……

如月「そういないのですよ、敵もそして味方もね…… あああいしてるんだああああ

貴女たちをおおおお！ アハハハハハハハ！！」

ヴェールヌイ「貴様！私は貴様を絶対許さない！」

如月「アハハハハハハ！！良いですね！盛り上がってきましたねえええ！！」

そうして、両者は睨み合うどうやら本番はここからのようだ……

如月側……

如月「ウフフフ、楽しみです。見せてください貴女達の力を！」

如月は自分に突っ込んでくるヴェールヌイに向けて照準を向けた……

如月「例えチート野郎でも駆逐艦、このヒュージキャノンには耐えられませんよ。」  
バン!

如月は全力で突っ込んでくるヴェールヌイに着弾させたしかし

ヴェールヌイ「……この程度か？」

如月「?!面白いですね、貴女！」

そう、ヴェールヌイはカンストしてるのだ防御値がガチタンと変わらないのも同然だ  
ヴェールヌイ「……なら、此方からいかせてもらおうよ！」

如月「これだから、面白いのですよ、艦娘は……」

如月は満足したのか、突っ込んでくるヴェールヌイになにもせず仁王立ちをしてい  
た

ヴェールヌイ「妹の仇！」

如月「ですけど……残念です」

ヴェールヌイ「?!まさか!？」

そう、如月は弾切れを起こしたのではない待っていたのだ、自分の有効射程圏内に  
そして

如月「全弾一斉射!沈め!不死鳥!」

残っていたエネルギーを全部使ってヴェールヌイに当てた

ヴェールヌイ「一発当たれば良い！バン！」

ヴェールヌイは如月の背中にあるジエネレータを撃ち抜いた

ヴェールヌイ作戦続行不可

如月「しまった！ジエネレータが?! エネルギーが逆流して!?!」ドーン!!!

如月作戦続行不可

如月「フフ、これだから面白いんですよ艦娘は……」

どうやら、何か吹っ切れたようである。

ヴェールヌイ「…変わってるよ貴女。」

ヴェールヌイも、ヴェールヌイで彼女の目的に気がついたようである。

如月サイド end

## 死神の本気 演習後編

N | W G I X / v クーチャン側：

彼女は自分が何者か分からなかった気が付いたら

この世界にいて、そして自分を見つけてくれた人達に付いていこうと思った。

彼女は考える 如月の事を彼女は何を考えているか分かりにくいしかし最も確かな判断を行っているのが分かる。

そして先程、彼女は自分にたいして最高の舞台を用意してくれた……

敵は自分と同じと思われる存在なら、自分の存在を証明しよう、彼女のように美しく  
……

クーチャン「名前は何？」

クーチャンサイド end

アクアビット & アリーヤ

二人は困惑していた……そうかつて自分達がいた世界でホワイトグリンとと呼ばれたネクストと似たような機体が目の前にいるのだ

アリーヤ「私はアリーヤ」

アクアビット「アクアビットです。」

クーチャン「そう、私は N—W G I X / v 今はクーチャンと呼ばれているは……」

アリーヤ「何故、なにもしないのですか？」

アリーヤの疑問に彼女は答える

クーチャン「何となく、貴女達とお話したくなつたの。」

アクアビット「不思議な人ですね貴女は……」

クーチャン「そうね、さて、始めましょうか……」

「……から、先は言葉など必要ない……」

私には戦いが必要だ。」

「始めようか、来なよ。ラインアークの乙女達！」

直後、クーチャンの機体から緑の粒子が溢れる

アクアビット&アリーヤ「貴女もネクストだったのね……」

そう言うと二人もコジマ粒子を展開する

アリーヤ「勝負は一瞬でつく。」

アクアビット「私達が勝たせてもらいます！」

閃光 そう始まった直後から常識の消えた戦いだった

お互いに、ライフルを撃ち、ミサイルを撃ち合うが

プライマルアーマーにはばまれる直後先に動いたのは  
クーチャンだった

右腕のライフルを捨てブレードに持ち変えたのだ

そして…そのままアリーヤに突撃する！

アリーヤ「プライマルアーマーの前にそんなもの無意味です！」

アクアビット「!?!、アリーヤ逃げて！」

そう、彼女の狙いはブレードによる突撃ではない

直後機体のプライマルアーマーが消えたのだ

アリーヤ「まさか!?!アサルト……」バーン!!!

そう、彼女はアサルトアーマーを発動させ。無理矢理辺りのコジマ粒子を消し飛ばしたのだ……

そして

クーチャン「JACK POD!!! (貫った!)」

アリーヤに斬りかかる!

アリーヤ「しまった……ここまでみたいね……」

AP0 アリーヤ作戦続行不可

こうして、残るはアクアビットとクーチャンの二人

しかし、現在アサルトアーマーを使ったのでクーチャンの方が圧倒的に不利  
アクアビット「チエックメイトです！」

クーチャン「く！やつぱり、あれはやるべきではなかったか…」

そう、アサルトアーマーは高威力を誇るが変わりに一定時間使えなくなるデメリット  
があるのだ……

そうこの状況だとアクアビットが圧倒的に有利なのだが

何故か彼女は笑っていたのだ

クーチャン「フフ、フハハ!!! 良い！最高に良い！これでこそ、戦いだよ！」

直後、ミサイルが着弾しまくりクーチャンは大破した…

アクアビット「やったの？」

傍目から見れば勝ったと言えるだろう

クーチャンは既に装甲の一部にヒビが入り稼働してるのですら不思議なのだ。

クーチャン「フフ、この程度想定範囲内です！オペレーションパターン2!!! ジェネ

レーター出力再上昇！

勘違いしたな！これこそが私の切り札だ！」

アクアビット「?!そんな、再起動なんて……貴女は本当にネクストなの!」

直後、クーチャンからおびただしい量のゴジマ粒子が散布される

既にお互いに立つてるだけでダメージを負うほどだ…

クーチャン「見せてください、貴女の力を!」

アクアビット「良いでしょう!望むところですよ!」

刹那二人は距離を取りミサイルを撃ち合う

クーチャンはジェネレータを限界以上に動かしてるのか、視界に捉えるのですら精一

杯の動きを見せる。

アクアビットは、直線的にミサイルが飛んでくるので引き寄せてから、交わすようにしている。

クーチャン「避けてるだけでは、倒せませんよ?」

そう叫ぶクーチャンだが一つ問題があった

クーチャン（もう、ジェネレータが限界寸前やつぱり無理をしすぎたようです……なら最後にブレードで速度を乗せて斬るのみ!）

一方アクアビットも焦っていた

アクアビット（もう、残弾がない……こうなればあの人の懐に飛び込んで!）

両者は考えていることは同じ……肉を切らせて骨を断つ戦法だ



クーチャン「これで finish！」

アクアビット「やらせません！」

お互い肉薄するそして

アクアビット「貰った！」

アクアビットはアサルトアーマーを発動させた

クーチャン「アハハハハ!! アーハッハー！流石ですよ！貴女！最高です！」バーン  
クーチャンは反動で吹っ飛び海に叩きつけられたそして……

A P O N | W G I X / v 作戦続行不可

勝者 ラインアーク鎮守府

こうして、無事に(?) 演習が終了した……

ラインアーク鎮守府執務室

一樹「どう言うことだ！如月！お前自分が何をしたのか分かってるのか！下手したら電が大怪我を負うところだったんだぞ！」

一樹は如月の行動を問い詰めていた

如月「ごめんなさい、司令官さんけれどあぁしないと電ちゃんがもつと危ないところ

だったの」

如月の発言に一樹は疑問を覚えた。

一樹「どう言うことだ？」

如月「マルチプルパルスの発熱量が凄くてあのままだとVOBの燃料に引火するところだったの、だからヒュージキャノンで狙撃して、燃料を抜いたの……ごめんなさい。」

如月の言葉に一樹は納得した

一樹「俺も悪かった、皆に無理をさせて。後で間宮さんのアイス奢ってやる。」

電「……今回は負けちゃったけど、色々学べることもあったのです♪」

一樹「お前もタフだよな、本当に……」

一樹は溜め息を付きつつ仲間達を見ていた

一樹「それにしても、風見さん本日はありがとうございました。ペコリ。」

風見「いえいえ、家も深海以上のもを見れたので良かったです。ペコリ」

一樹「そう言えば、風見さん貴方ACに乗れるんですでしたっけ？」

風見「……ええ、私もネクストに乗れますが？」

ラインアーク鎮守府提督 風見は物凄く嫌な予感がしたこのあとに続く言葉がヤ

バイと言うことに

一樹「どうでしょうか？彼女達の修復の待ち時間の間に私と手合わせでも？」

そう、A M I D A 鎮守府 提督 四葉一樹からの挑戦だった

風見「ノーマルがネクストに勝てるだけでも？」

一樹「証明してみせますよ、私の可能性を……」

一樹は笑いながら、彼を見つめる。そして彼も静かに微笑んだ

風見「それでは、1500からでどうでしょうか？」

一樹「良いですね……全力で相手をしましょう」

こうして、前代未聞の提督同士の直接対決の火蓋がきつて落とされた……

## 一瞬の時（演習特別編!）

1500 ラインアーク鎮守府 アリーナ

AMIDA鎮守府提督：四葉一樹からの依頼でラインアーク鎮守府提督 風見は自分の機体を持ち出していた……

風見「本当に始めるんだな？」

四葉「ええ、始めましょうか。」

風見が聞く、そう……本来ならf aのネクスト相手ではVの機体は『ただの案山子ですな』状態である。

しかし、四葉は愉しそうにしつつ（全身装甲なので、表情は分からないが何となく愉しそうに見える）

風見（機体は重量二脚か？何故？ここは海上だ……中量や軽量の方がいいはず……普通は機動性をとるはず……）

そう……四葉の機体は本来なら構え武器などを使うときシールドが展開される、重量二脚だ、バランスの良い防御値が得られるがそれでも重さからくる機動性の悪さが仇になるのだ……

風見（その前に……背中のあれ……VOBより不味いよな）  
 そう……現在四葉の装備品はこうなっている。

H07 starlight

CB|209

AB|107D バリープル

Aol mdl. 1

因みにAP41312

KE 2157

CE 1355

TE 3119

右腕 3500ガトリング

左腕 AKライフル

肩 ハイスピミサイル

背中 ヒュージミサイル

風見（どう見ても殺しに来てるね！本当にこれ訓練だよな?!）

風見は目の前の男が訓練で名目で殺しに来てるのではないかと本気で疑った

ここで第二回楽しいオーバードウエポン講座

ヒュージミサイル

その場で弾道ミサイルを組み立てる

ロックオン可能 鬼追尾 威力高

まあ、超高速機動をすれば交わせる

不意うちされたらアウト!

以上第二回楽しいオーバードウエポン講座でした

四葉「さてと……風見さん始めましょうか?」

風見「OK、始めようぜ」

そして、試合開始のブザーが鳴る

閃光 そして爆音

四葉の機体は実弾オンリー武器まさに男のロマンと言いたい所だが実際は違う

四葉「オーバードウエポン使いたい放題だからなちよつとばかし本気でいこうか?

『不明なユニットが接続されましたシステムに深刻な障害が発生しています。直ちに使

用を停止してください。』

そう彼が宣言すると同時に背中に発射台が組み上げられた……

四葉「フハハ!!!とつと沈め!」

そう……ヒュージミサイルはその場で弾道ミサイルを組み立てるそして撃つ

風見「あの野郎!?!初っぱなから全開かよ!なら此方は近づくだけ!」

風見はネクストの速度をもって回避して、彼に近づくしかし…………

四葉「知ってるかな?オーバードウエポンはジェネレータを限界まで駆動させるんだはく…要するに無限ハイブースト可能なんだ…………死んでもらうよ?」

そう…彼からするとあれは困なのだ

そして四葉は重量二脚最大の楽しみをすることにした

それは……

四葉「ブーストチャージで楽しいよね!」ブオン!

風見「アブな!?アイツ本当にノーマルだよな?!」

ギリギリのところでブーストチャージを回避するが…

四葉「ハッハー!!!貰った!」バガガガガ

直後に3500ガトリングをばら蒔き撃ちをした

(本来ならオーバードウエポン使用中は通常武器は使えません。え?何故使えるんだって?フロムマジックてやつですよ。突っ込んだら負け…)

風見「ク!これじゃあじり貧か、なら!」

風見は近づいてアサルトアーマーを起動させるしかし

四葉「チャンス!」

何故か近づいたのだ……

風見「?!何を考えてる!畜生このまま演習場の藻屑にしてやる!」

そう……普通に考えてアサルトアーマーを起動されたらノーマルに勝ち目はないし  
かし……こいつの考えは違った

四葉「ページしますよと……吹き飛ば……」

そう……ヒュージミサイルをページしたのだ

風見「しまつ……ドカーン」

ヒュージミサイルは広範囲を吹き飛ばすのだゼロ距離で喰らったらひとたまりもない。  
い。

四葉「ふー、何とかなつたなけれど……ジエネレータ逝かれたなこりや……?おい  
おい、マジかよ……」

そう……勝つたとばかり思ってたが煙の晴れたさきに風見提督が立ってたのだ

風見「よう、これで終わりか?（アツブナ!アサルトアーマーがミサイル吹き飛ばして  
なかったら負けてたな……）全力でいかせてもらうよ」

直後、四葉を閃光が包む!

風見「今度こそ終わつたな、アイツ結構トリッキーなやつだな」

それにしても、何故まだ試合終了にならないのか?



その答えは四葉の眩きから始まる

四葉「全く、やるもんじゃないな。こう言うのは俺のキャラじゃないしね！」

風見「?!馬鹿な!?!何故動ける」

四葉「ハハ?全く楽しいねー。(AP残り5000か……本当にネクストは強いね。)

そう彼の目に写ったものそれは右腕の装甲は吹き飛び

ヘッドパーツもポロポロで顔の左半分が見えていて

確実にポロポロのはずなのにたっている姿だった……

四葉「ふー、ここまでやられるとお兄さん本気だしちやうぞー。さてと……これで決

めようか……」

直後彼の回りの海の温度が上昇する……そして

四葉「これ、反則かもしれないけどありだよな？」

そう……彼の右腕に塩の柱が出来ていつてるのだ

風見「なるほど、それが切り札か。良いぜ、決着をつけよう!!!」

そして、二人は突撃する!

四葉「貰った!」

風見「甘い!」

両者はお互いを削りあいつづけたそして……

四葉「今度こそ貰った!!」

塩の柱を全力で振り風見を狙う!しかし……

バカン!

四葉「?!しまった!限界だったか!」

柱を防具としても使ってたので壊れたのだ

風見「堕ちろ!」

そして…彼の全弾をくらった

四葉 作戦続行不可

四葉「ふー、負けちゃったか。楽しかったよ風見提督」

風見「俺も楽しかったよ。」

こうして、二人の提督の演習が終了した。

お互いに激戦だったが二人の顔は晴れ晴れしていた。

その一方演習場を見ていた両鎮守府の艦娘達はどうと……

アクアビット「司令官激しかったです。」

アリーヤ「そうね、物凄く激しかったね。」

如月「……………そうなんだ優しそうなのに。」

電「なんの話をしているのですか？」

クーチャン「気にしなくていいのよ電ちゃん、まだ早いは貴女には」  
試合を見るのを放棄して、ガールズトークをしていた

如月「……どうやって、司令と？」

アクアビット「そりゃー、色々あってね ポツ」

完全に提督達を見てないようである

四葉&風見「戻ったぞー」

艦娘&娘空「おかえりなさい。」

こうして、彼等の初めての演習はアークラインの勝利で終了した

# 夜戦!

1900 ラインアーク 鎮守府 食堂

晩御飯を食べ終え一段落していると

如月とアクアビットが前に出てきた

如月&アクアビット「突然ですが!夏だ!暑いよ!肝試し!を行いたいと思います  
!」

ドンドンパフパフ!

宣誓に会わせて何処からともなく楽器を出す両鎮守府の艦娘達

両鎮守府の秘書達がいきなり叫んだところから始まる

四葉「は?肝試し?何故?」

如月「暑いからです!」

風見「疲れたから寝たいんだけど……」

提督達は全力で殺りあつた(誤字じゃないよ?)ので身体中が痛かつたのだ  
ストレイド「マスター遊んでくれるんじゃないの?」ウルウル

風見「ウグ?!」

そう…彼はこの演習の前後で遊んであげると行ってるのだ（コラボ先の方の話です。第21話参照。）

四葉「俺は疲れたか…：クーチャン「やりますよね？」いや…：クーチャンあのね「やりますよね？」あ、はい」

こうして、提督も無理矢理参加することになった。

風見「それにしても、ルールは？」

そう…肝試しをするに当たつてのコースが分からなくては意味がない……。

主任「それなら問題ないぜ、お二人さん！」

キャロル「私達で作つておきました。」

四葉&風見「は？え？ちょ?!」

いきなり現れた主任&キャロリンから地図を渡される

主任「ルールは食堂から執務室に行つて、寮を通りドックを通つて帰るだけの簡単なやつだ！なあと、安全だ！安心しな！ギャハハ!!」

キャロル「一応、脱出路もあるので怖すぎるなら、逃げてOKです。」

どこをどうとつても恐いものしか起こらない気がする

四葉&風見（こいつらが仕掛人か！）

即座に二人は自分の秘書を見るが……：仕掛人は思わないところにいた……

クーチャン「私がやってみたかった…」

四葉「え？ そうなの？」

クーチャン「うん。」

どおやら、クーチャンが仕掛人のようだ

風見「まあ、やることないし良いか…逃げるなよ？ 四葉提督？」

四葉「ハッ！ 上等だテメーだつて足震えてるゾ？」

二人ともビビってるようである

四葉&風見「シヤラツプ！」

ハイハイ

それでは、ここからが肝試しの行くメンバーと脅かし役達である  
メンバー

Aチーム 電、ヴェールヌイ、白露、時雨

bチーム アクアビット、アリーヤ、ストレイド、風見

Cチーム 如月、クーチャン、四葉

脅かし役

主任、キャロル、ジャック、ゲト、ジナイーダ、エヴァンジュ、

それでは、それぞれを見ていこう！

????

まずはAチームから

電「行つてくるのです！」

四葉「気を付けテナー」

ヴェールヌイ「さてと…行きますか。」

カツコツ　夜の鎮守府に足音が響く電気は消されているので支給されたライトを

頼りに歩いている

時雨「それにしても、夜の鎮守府でこんなに怖かつたんだね。」

ヴェールヌイ「けれど、夜戦の時よりはま…ピタア　?!な、なにかいる!」

電「響おねえちゃん? なにもいないのです?」

ヴェールヌイ「いや、絶対なにかいる!。ペペタア

ピヤアアアアア?!パタ。」

突然の恐怖にヴェールヌイが気絶する。

電「ハワワ!」

時雨「ヴェールヌイ大丈夫かい!」

必死に起こそうとするがうわ言を呟くだけで完全に伸びてる、そして…カサカサカサ

カサカサカサ

白露「…ねえ、なにかいる。」

白露がヴェールヌイの落とした懐中電灯を照らした瞬間

??「バア!!」 主任が目の前にドアップできたしかも五人も

時雨&電「イヤアアア!?!」

二人は白露をおいて逃げ出した……………

白露「お、おいてかないでよー!」

白露は気絶したヴェールヌイを背負って全力疾走した

三人「死ぬかと思った」

キャラル「リタイヤですか?」

キャラルが確認をとるために現れるしかし…この場だと逆効果だった

三人「イヤアアア!?!」パタ

キャラル「ア!ちよつと皆さん!凹みますよ……………ジナイーダさん、エヴァンジュさ

ん出番です。」

気絶した彼女達を二人が運ぶ

Aチーム失敗!

続いてBチーム

先程Aチームが全滅したポイントを通る

風見「まあ、簡単なものしかないだろ!ピタア?!なんだこりや!?!あ、蒟蒻かパクパク



旨い！」

そう…先程のはこんにやくだったのだ

アリーヤ「なにしれつと食べてるの！」

確かに食うものではない

主任「……ギャハハ!!!食べられちゃったよ←次いこうかね!。」

寮　ここでは三階まで行き降りてくるだけである

アクアビット「司令、怖いです。ギユ」

アクアビットが右腕に抱きつく

アリーヤ「あ、ずるい!ギユ」

負けじとアリーヤが左腕につく

??「やらないか？」

何か別の声が響く

風見「え?今の声って?まさか……」チラ

ゲト「困ってるようだな尻をか……」

風見「逃げるぞ!これ、肝試しじゃなくて俺の尻試しになる?!。」

こうして、寮内の追いかけてこか始まった

風見「ハーハー、に、逃げ切ったぞ!」

カサカサカサカサカサカサ!!!

ストレイド「マ、マスター? 今なにか変な音が。」

ストレイドがゆっくりとライトを向けるそこには……………

?????

「アミー!!」

A M I D A がい た ……

風見「嘘だろおい!? いないはずじゃ?!」

アクアビット「し、指令!? 後ろにも!」

アリーヤ「窓の外にもいるよー!」

そう気がついたら A M I D A の大群に囲まれていたそして…

A M I D A 「アミー!!!」

A M I D A の大群に飲み込まれた……………

四人「ギャアー?!」

B チーム いろんな意味で全滅

C チーム

意外なことに、ここまでのトラップはほぼ通りすぎて三人はきた。そして彼等は現在ドツクにまできた。

え? A M I D A はどうしたって? あれは対風見さんようです

四葉「それにしてもクーチャンがやりたいとはね。まあいいけどそれにしてもアイツら全滅したいけどよっぽど怖いみたいだな ガクブル」

クーチャン「そう言っただけにしがみつかないでください。」

四葉「怖いものは仕方ない！」

如月「もう提督さんも怖がりなんだから」

四葉「そう言っただけにしがみついているのは誰かな？」

四葉「まあ、このまま何も起こらなければ良いな！」

??「なるほど、貴様もレイブンか……」

四葉「誰だ？」

四葉がライトで目の前を照らした瞬間写ったものそれは

ジャック「好きに掘り、理不尽にいく……」

パンツ一丁の変態だった……

四葉「ハッハッハハ！逃げるぞ！二人とも！」

ジャック「ハメハメ」

腰を振って追ってくるジャックさん

四葉「いやだあああ?!」

Cチーム失敗！

風見「よう四葉氏大丈夫か? ニッコリ」

四葉「何を言う風見さんや、最高ですよニッコリ」

二人は楽しそうに笑ってる

風見「AMIDAはないて言ったのお前だよなく?!」

四葉「なんだよ、あのパンツ一丁の変態は!?!」

どうやら、夜はまだまだ長くなるかと思われたその直後

ジャツク「なるほど、二人もいるのか……良い」

風見&四葉「?!おい、まさか」

ジャツク「二人まとめていかせてやる」

風見&四葉「逃げるぞ!」

こうして、楽しい鬼ごっこ(捕まったらOWでやられる。

二時間後 無事に逃げのびた

四葉「ハーハー、悪いが今日は寝るはおやすみー風見さん」

風見「あ、ああ、おやすみ、四葉氏。」

二人は今日は寝れると思っていたしかし……

クーチャン「あ、あの提督……」

四葉「どうした? クーチャ……ん?」

そう……クーチャンの顔色が少し赤いのだ

風見「おい、まさか何か飲んだ？」

風見は、あの様子に思い当たるものがあるそうだ

クーチャン「主任さんが、コジマドリンクをくれました フラフラ」

四葉「おい?!大丈夫か？」

クーチャン「ひゃ!ピクン」

風見「あー? 四葉氏? 今夜はお楽しみですね？」

四葉「ちよ?!何言ってるの先輩!」

クーチャン「提督……その……来てください」

風見「あついなー?」

ストレイド「提督……?一緒にねよ?」

風見「お、おう」

四葉「貴方もお楽しみだね。」

こうして二人は別れた

客室

クーチャン「提督……その……初めての気持ちなんです。」

四葉「俺でいいんだな……」

四葉はクーをベットに寝かせて確認をとる。それにクーはゆつくりと頷くそして……  
彼女の唇にゆつくりと自分のを合わせた……………

こつからさきは音声だけで一部お楽しみください

クーチャン「はう!て、提督…恥ずかしいです。」

四葉「全く、クーは可愛いな」

クーチャン「ー!ポコポコ」

四葉「ハハ、冗談だよ。」

クーチャン「あ……………」

こうして、二人は夜戦(意味深)を行った

尚、同時刻ストレイドが主任から貰ったジュースの影響により同じようなことになつたそうだ……………

次の日 朝六時

四葉「つ!あれ?俺確か昨日クーと?まさかなムギユ」

クーチャン「はう!提督くムニヤムニヤ」

四葉「……………何やってんだか、俺」

彼は苦笑しながら彼女の髪を撫でる、彼女も幸せそうだ

四葉「フフ、さてと着替えますか。」

クーチャンを起こさないようにゆっくりと起きて

鎮守府の外の防波堤に出る……

四葉「綺麗な朝日だな……」

風見「よう、おはようさん」

四葉「風見さん、おはようございます。早いですね。」

風見「いやなに、お前さんが外に行くのが見えたからな。何してるんだ？」

四葉「なんとなく、外の空気を吸いたくなったのでね。」

風見「そうかい、少し聞いてもいいか？」

急に真面目になる風見提督に四葉はゆっくりと息を吐いた

四葉「俺が答えられるならどうぞ。」

風見「昨日はお楽しみだったか？」

四葉「ええ、まあ………て、何言わせるんですか！」

風見「いやなに、お前もそう言うところあるんだな。」

四葉「こう見えても人間ですよ、私だって。」

風見「そうかい、それにしても……」

四葉「どうかしました？」

風見「如月は何者だ？」

風見の質問に四葉は悩んだ、彼女はただの駆逐艦ではないのは分かるではなにか?と聞かれると答えられないのだ

四葉「分かりませんね、けれど大切な仲間です。」

風見「そうかい、大事にしろよ。」

四葉「わかつてますよ、そろそろ朝御飯です、先、行かせてもらいます。」

四葉はそう言うと、食堂に向けて歩き始めた

風見「AMIDA鎮守府の提督か、やっぱり変わった奴だな。」

風見も彼の見ていた朝日を見て食堂に向かった

朝8時半 AMIDA鎮守府帰還の時間

四葉「風見さん、今回はありがとうございます。」

風見「俺も今回良い経験になったよ。」

四葉「それじゃ、帰るか。」

如月「その事だけ……:VOB壊れたからどうする?」

四葉「え?マジ?」

風見「ステイグロ君貸そうか?」

四葉「ありがとうございます!それではお願いします。」



このあと、帰り道では全員が気絶したそうだがこの件に関して、四葉は「二度とあんなのには乗りたくない。」と答えたそうだ

尚、AMIDAを置いていってしまいラインアーク鎮守府が大騒ぎなるのはまた別の話である

## 帰還 そして日常

四葉「……………死ぬかと思った。」

如月「VOBより早いとかなに？」

N—W G I X / v クーチャン「何ですかあれ……………電ちゃん伸びてますよ…」

電「ふにやー」

現在、四人はラインアーク鎮守府との演習を終えて無事に(?) 帰ってきた。

ただ、ステイグロ君と呼ばれる者のせいで全員が気絶していた

ステイグロ「ハツハツハー！ 提督に伝言あるなら伝えとくぜ？」

四葉「本当に今回はありがとうと伝えといてくれ…それと……………これを持っていくれ。」

彼はそう言うと、チェーンソーの用なものを渡した…………

ステイグロ「これは？」

四葉「家で開発した艦娘用の特殊装備対深海凄艦用規格外六連超振動突撃剣です。」

ステイグロ「……………分かった。アイツに渡しとくよ。」

ヒュゴオオオ！

こうして、あの妖精は帰っていった

そして、彼等は現在憲兵の詰め所にいた

隊長「アハハ、そんなことがあったんだ？」

憲兵Ⅰ「どうでしたか？初めての演習は？」

四葉「まあ、よかったと思うよ初めてのわりにはさ。」

如月「そうね、良い経験になったは」

クーチャン「仲間を見たは………人の中の可能性………良いものだったは。」

電「電は死ぬかと思ったのです」

隊長「良いじゃん、全力でやれたんだろ？」

憲兵Ⅰ「それにしても………そろそろ仕事の時間ですね。」

四葉「そうだな………また滑るのか………嫌だけど………」

提督が立とうとした瞬間

隊長「悪いんだけど………ここから執務室の布団に行けるんだ。」

ポチ！隊長が机の上のボタンを押すと………床が抜けた………

四人「え？」

憲兵Ⅰ「それでは、今日も頑張ってください。」

四葉「ふざけるなあああ  
!!!?」

三人「キヤアアアアー!？」

突然のコントの用なのに落ちていった  
フォン!

四葉「全く、隊長も落とすなら大概に……ドサドサ!

グギャ!？」

そう……四葉が先に落ちたので、如月と電が落ちてきたのだ……尚、クーチャンはA  
Cなので問題なくゆつくりと降下した

如月「イタタ、提督何処ですか？」

電「提督さん? 何処なのですか？」

クーチャン「二人とも………したにいるよ………」

電「ハワワ!、て、提督さん大丈夫なのですか？」

電に心配されるがこの時四葉が考えてたのは………

四葉「ああ、皆に怪我がないなら大丈夫だよ（電の太股すべすべしてるから気持ちいいな!）」

素直だった………

如月「それでは、提督今日は何を？」

取り直すように如月が今日の予定を聞く

四葉「まだ人員が少ないから……建造しようか…」

クーチャン「資材大丈夫？」

四葉「大丈夫、ちよつとしたコネがあるから資源には余裕があるの」  
そう言うが実際は節約して貯めてるだけである

四葉「さてと、ドックに行きますか。」

電「レッツゴーなのです。」

提督達移動中………

ドック

本来なら、修理などに使われるがここでは建造もここで行われる。

妖精「提督さんこんには開発ですか？建造ですか？」

四葉「ああ、建造レシピは軽空母で頼むよ。」

如月「正規空母じゃないの？」

如月からするとか航空戦力は多い方が嬉しいらしい

四葉「運用資材考えるとこれが一番」

それでは、誰が来るかなー？

チャン！2時間50分

四葉「そうかい、そうかい……君が来るのか……」

どうも思い当たるものがあるようです。

四葉「妖精さん……ついでに艦載機の開発を頼む。」

妖精「任された！」

四葉「それじゃ、何かあったら連絡してねー。」

そんなこんなでお昼の時間……

皆でお弁当を作って如月の生産室に行きました

如月「ようこそ！私の生産室兼私室に！」

四葉「ここお前の部屋なのかよ！」

電「通りで、入れないわけです。」

クーちゃん「いや、その前にここが部屋に思える君たちが凄いや。」

そう……見た目は学校の教室二つくらいのかかなりの広さである。しかし……部屋の至るところに試験管やらガラスの円中状の何かがあるのだ。生産室よりは……

実験室にしか見えない……

如月「それでは、狂気とロマンを掛け合わせた、AMIDAを作っていきましょう！  
ドンドンパフパフ！」

如月は右手にカスタネット口に笛をもって宣誓した

四葉「お、おう。それじゃやっていこうか。どうやって増えるの？」

如月「深海凄艦を餌にします。」

三人「え？」

如月から驚くべき言葉がでた……………

## 新たな仲間、そして

現在、如月の生産室にいる全員。

そして、皆でお弁当を食べることにしたが……

四葉「何で俺たちはAMIDAに囲まれてるのかね!？」

如月「私のペットですから。」

四葉「だからってこれは怖いは!」

そう……囲まれてるのだ

クーチャン「アサルトアーマー使っちゃダメ?」

電「やめるのです! 皆のお弁当が吹っ飛んじやうのです!」

どうも個々の面々は少しずつれているようだ……

そして、お昼ご飯を食べ終えて四葉は質問する

四葉「如月、そもそもAMIDAはどうやって作るんだ?」

如月「深海凄艦を餌にします」

三人「え?」

四葉「マジ?」



如月「マジです、毒をもって毒を制するです。」

如月「それではここから私によるAMIDAの作り方講座です。作者さんお願いしま  
す。」

あいよー

まず始めに新鮮な駆逐艦イ級を放り込みますこの円柱状の容器のなかに

イ級「は、はなせー!?だ、出してクレー?!」

次にAMIDAを投入します。あ、ポイ〜と

AMIDA「アミアミ！（餌!!）」

そして、食べます

イ級「ク、クルナー!?ギ、ギャアアア!。」

そして、卵ができます

如月「ここで五分待ちます。」

五分後 パカッ

AMIDA「アミアミ!」

こうして、AMIDAは増えます

電「ま、まさかですが……ここ、このまえの出撃で付いてきた訳って……」

如月「そうよ?増やすためよ?」

如月がしれっと答える……………

電「やっぱりなのですか……………」

クーチャン「まあ、良いじゃない？毒をもつて毒を制するのは」

こうして、この鎮守府の狂気に触れた提督達であつた。

そんなとき……………

ピンポンパンポーン「提督ー建造終わったよー。」

妖精さんから建造が終了したのが伝えられた

四葉「さてと、行きますか。まあ、誰が来るかはわかつてるけど。」

ドック昼3時前

四葉「歓迎しよう！我等AMIDA鎮守府に！」

如月「貴女が次の実験台ですか？」

やっぱり壊れてる

龍驤「軽空母、龍驤や。独特なシルエツトでしょ？でも、艦載機を次々繰り出す、

ちやーんとした空母なんや。期待してや！」

四葉「ああ、期待してるよ。」

こうして、新たな犠牲者……………もとい仲間が増えた

妖精「提督ー、艦載機出来たけど不思議なのが来たー。」

四葉「んー？どんなの見せて？」

提督は少し楽しみにしつつ、出来たのを見たそれは

四葉「こ、これは!?!お、俺のFA-18 ホーネット?!」

そう……彼がアーマードコアと同じくらいやっていた

エースコンバットインフィニティの初期の愛機

FA-18 ホーネットであった

以下説明 てか、彼の機体についてなので、詳しく知りたければ Wikipedia  
先生でも読んでみてください。

FA-18 ホーネット SD

とある新米傭兵が愛用していた機体

見た目以上のカスタムが施されており其処らの中堅所かベテランを狩るほどの実力

魔改造が行われており、ステルス性を持っているなど

元の機体とは思えないほど

とある戦争の時のエース部隊をもしたカラーリングと

エンブレムを持ち常に戦場を見極めて飛び続けた。

その姿はまだまだ無鉄砲さがあるが、そこから来る思いきりの良さなどは目を見張る

ものがある。

最終的に傭兵は別の機体に移り換えたが今でも彼を語る上では必要な機体である。

実際、作作的に中盤までならこの子で充分と思えるほどに安定してる機体。扱いやす

い

特殊装備は

4 A A M

4 G A M

L A G M

それぞれ

対空用マルチロツク（4つまで）

対地用マルチロツク（4つまで）

対艦用ミサイル

である

彼はそれを見て懐かしく思う

（初期の頃に金がないからずっと使い続けていたんだよなこいつ……）

龍驤「それ、艦載機か？家にくれるのか？」

四葉「ああ、君にプレゼントしよう」

四葉は彼女にかけることにした、かつて自分が飛び続けたようにまた、全力で相手を

倒すために……………

如月「お話のところ悪いですが……龍驤さんちよつと来てください。」

龍驤「なんや？家になに……な、なんやそれ!？」

そう……如月が持つてるのAMIDAだった

如月「遺伝子データを登録しないとイケないので、死にたくなければてを出してください。」

龍驤「い、いやや！それ確実に手がガブリされるやつや!」

如月「大丈夫です……手の皮膚片を少し貰うだけです、実際汗を貰うようなものです。」

龍驤「ほ、ほんまやな？大丈夫だよな？」

如月「大丈夫です……おおいなるものが見ています。」

電「この子達こそその証。」

クーチャン「世に平穩のあらんことを」

どうも、のりが良いようである

龍驤「わ、わかった。ならうちものせるは!」

そして、龍驤が手を出した……

如月「騙して悪いですが……本当は血を少し貰います。」

龍驤「き、貴様はかったな！て、イツタアア!?!。」

どうやら、AMIDAに噛まれたようである

龍驤「手が、ヒリヒリする……」

よっぽど痛いようだ

こうして、新たな仲間が出来たAMIDA鎮守府、明日はどうなるかな？

龍驤「その前にうちは生きていけるんやろか？」

こうして、今日も一日無事に？終了した

## 人物紹介

よつよう かずき  
四葉一樹

我等がAMIDA鎮守府の提督。声が聞こえて穴を見つけて滑り落ちると言うギャグのような方法で艦これの世界に来た、陸と空のACをやっていたのである種の化学反応（ロマンを追い求める）しやすいかた。

ぶっちゃけ、常識人に見えて危険人物

敵なら何をしてもよいと思ひ艦娘にオーバードウエポンを使わせるなど演習先には選びたくない奴である。

この世界に来たあと神からオーバードウエポン使いたい放題と自分の機体、かつUNACを貰っているの海が真つ黒になるのは時間の問題。

自身が出撃するのはまずないが後述の N | W G I X / v  
『クーちゃん』の訓練時には自分の機体を持ち出す

身長175 cm 体重65キロ 血液型はB型

コラボ先で、即席で塩の柱を作り上げるが塩と言う関係上すぐに折れる武器を作ってしまった。

でも、すぐに復活する。

電

狂気とロマンを追い求めるAMIDA鎮守府の唯一の秘書もとい狂気の犠牲者1。

初めての四葉をサポートするなど頑張りやさん

しかし、いつもアタフタしやすいのを良いことに

如月の狂気の犠牲者………可哀想に。

プラズマかすることは無い、しかしオーバードウエポンを使えるのを見る限りかなりの実力者

唯一ブーストチャージを行える奴

N—W G I X / v 「クーちゃん」

如月と電の初めての出撃の時に遭遇しそのまま仲間になった。名前の由来は如月が見た目が黒いからと言う理由によりクーちゃんと名付けられた。名前の由来は如月が

自分の名前と他とは違うのを自覚してるが記憶は無い

普段暴走ししやすい彼等を一步離れた所から見ている。

戦闘時は、黒栗のなの通り化け物性能

代わりに消費資材は駆逐艦クラス チートオブチート

武装は実弾ライフル二丁とミサイルそして、プライマルアーマーとアサルトアーマー



2つを使える

一定ダメージを貰うとオペレーションパターン2に変化する。このときはACじゃないと追いつけないレベルで移動する。後、おまけにコジマ粒子をばら蒔く。

なので、味方にもダメージが通る諸刃の剣

如月

我等がAMIDA鎮守府の狂気の代行者

普段は優しいそうに見えるが考えてることの8割いやほぼ全てが狂っている。

戦闘時に主任と同レベルで狂ったように楽しむ

AMIDAの開発責任者

作った当初はまだまだ可愛かったが途中から汚染され始め現在に至る

大本営からは、名指しで危険視されるほど。

提督に関してはよい人と思うと同時にこの人も何処か壊れてると何となく感じてるらしい。

龍驤

ペタンヌ以上

一応ここの空母です

AMIDA

如月のペット兼装備品達、深海凄艦を餌に増える

爆発したり酸を吐いたりなど色々出来る

龍驤に関しては、頑張れ新人と思ってる

何体かは意思疎通が出来る

隊長

ここの二人しかいない憲兵の偉い人

色々となにやってるかは分からない

てか、仕事してるのを見たことがないらしい

(四葉談)

何かと仕掛けを作るのが大好き

憲兵1 通称 キャロル

隊長の部下ぶっちゃけこっちの方が仕事してるらしい

(四葉談)

何かと隊長の悪のりに乗るがやり過ぎないようにしている

AMIDAのフアンの一人

U—511

実をいうと建造ではなく、帰ってきたときにくつついてきた子。

普段から大人しくしており、皆の癒しキャラ

AMIDAを見ても動じず逆に自分から抱き締めに行くほど

ある意味度胸がある……

唯一の潜水艦なので皆からは大事にされている

龍驤よりはあ……（ここから先は黒焦げている）

UNACI PIXY

建造で出来た子。重量二脚右手に3500ガトリング

左手にAKライフル 肩にTEミサイルをもつ

普段はこの子も同じく大人しくしている

クーちゃんとはかつて敵だったが気にしていない

マスターに関しては自分を作った人と考えるが自分のアセンブルを見るたびにブー

ストチャージしたくなるらしい……

得意技は笑いながらの蹴り飛ばし

カラーリングは全体は白いが右腕だけが紅いです

実は妹達がおり、その子は灰色に青色が入った子と

紅と焦げ茶色が混ざった子がいるらしい

## バイト前編

「この鎮守府はそこまで戦力的価値が無いので基本的に暇であるなのでお給料も少ない（……………結果

隊長「ギャハハ！キャロル！どうしよう！今月生活費カツカツだよ！」

キャロル「隊長……………私もなんですから言わないでください……」

四葉「ヤバイな俺も今月ピンチかも……………」

金がないのだ……………

光熱費やら何やら削つてもきついものがあるみたいだ……

四葉「隊長！何か良いバイトない？」

キャロル「提督である貴方がやるほどだからよっぽどですね。」

隊長「そうだねー、そう言えば夜間の警備員のバイトを募集しているところならあったよ？一週間の」

急に隊長が思い出したように、紙を見せる

『急募！夜間の警備員募集！一週間で50万！』

どう見ても怪しい

四葉「なんだよその胡散臭いの、何処をどう見てもヤバイのだから。」

隊長「それがサー、変わったバイトでな？」

隊長がもつたいぶるように言う

キャロル「隊長……早く答えてください我々にはお金がありません」

隊長「ギヤハハ！、そうだったねー。まあ、ここみてよ。」

そう言い、主任が指差したのは応募条件だった

1 四人で申し込むこと、これにより仕事を楽にこなすことが出来ます！

四葉「なにこれ？」

キャロル「今、私たちをいれて三人です。あと一人どうしましょう？」

クーちゃん「何を見てるのですか？提督？」

四葉「嫌ね、ちよつとね。」

そう言いよどむ四葉だったがここで思い立つ。

四葉「クーちゃん、君、今週暇だよな？」

クーちゃん「ええ、予定はないので問題ありませんが？」

隊長「悪いんだけどさ……（事情説明中）、てことなんだよオーケー？」

クーちゃん「分かりました、隊長……提督には恩があるので頑張ります。」

こうして……四人はバイトをすることになったしかし

このアルバイトが地獄になるとは思わなかった。

面接の日

担当「あー？君達がバイトを希望したかた達？」

四葉「ええ、そうです。」

担当「ありがとねー。そうそうバイトは一週間の住み込みだけどOK？」

四葉「服とかシャワーは？」

担当「あるから問題ないよ。」

四葉（割りとマシなバイトだな）

担当「それじゃあ、明日から一週間宜しくね。」

四葉「一つ良いですか？」

担当「何かな？」

四葉「何で一週間何ですか？」

担当「ああ、俺も詳しくは聞いてないんだけどここ改装工事するみたいなんだよねだから昼夜を問わず見ておいてほしいんだよ。」

四葉「なるほどケチツたのですね？」

四葉のストレートな言い方に担当者は

担当「アハハ、そうだよね電気つけっぱなしよりは楽だもんね。それじゃあ今日の夜

からお願いね？後、実際は五日だから安心してね。」

こうして……話を終えた四人は荷物を纏めたりして置いた

四葉「と、言うわけで俺達は金を稼がないといけないのでお留守番頼んだよ？」

電「分かったのです、けれども寂しいのです。」

四葉「安心しろ、新たに二人建造してるから完成したらそいつらと仲良くな？」

如月「アミちゃんいる？」

四葉「嫌、あれは軍事機密だから駄目だよ。」

如月「そう、残念」

龍驤「提督！頑張っていなー」

四葉「おう！龍驤も仲良くしろよ？」

龍驤「任せといてーな、きっちり二人を見守つとくよ！」

四葉「アハハ、頼んだよ？さてと行きますか」

こうして……彼らはバイト先についた見た目は飲食店だと、思っていたが実際は見た目

通りの『ピザ屋だった』

四葉「さてと、どうせいるだけだから問題ないでしょ？」

隊長「そうだねー？大富豪でもやる？キャロりん？」

キャロル「良いですね相手しましょう。」



クーちゃん「私もやります」

四葉「俺もいれてくれ。」

こうして：夜が更けていきこのまま何も無く無事に終わると思つたがその直後、電話がなる

P r r P r r P r r

四葉「もしもし？」

彼が電話に出た瞬間、担当の焦った声が響く

担当「ヤバイ！俺も入ったばかりで今知つたんだが！

この店、10年以上前に人形が人を襲う事件があつて

今回の工事で探す予定だったんだ！つまりお前達は囿のようなもんにされたんだ！

今日一晩だけ耐えてくれ！」

四葉「は?!なんだよそりゃ！」

流石に焦る四葉達

担当「どうやら、人形は12時から6時まで動くみたいだ！何とか生き残つてくれ！

そうすれば、一日で終わりにするから！それじゃあな！生き残れよ！」

四葉「あ、おい！」

四葉「隊長今何時だ？」

隊長「12時だよ？」

隊長が楽しそうに告げた瞬間電話がもう一度なる

P r r P r r P r r

「ヤーヤーコーンばーんはー？かなー？俺が誰かつて？そうだな前任者だよ？実は新しく入る君に忠告をしたくてね♪まあ、俺はこれを六日ループさせてるけど何回聞かれるかは分からないけどな！まあ、良い。

取り敢えず生き残りたいんだろ？環視カメラを見なそして、努力しろ良いな？それは良い夜を………」

こうして…彼らの地獄のような夜が始まった

## バイト 後編

謎の電話の直後四人は武器を持った……

四葉 M1017 (ショットガン 弾はフラグ弾要するに爆発する) & 44マグナム

隊長 SCAR-H (アサルトライフル 弾は7, 62mm)

& M1911A1

(言わずと知れた、ロングセラー品今年で104年目まだまだ現役凄くね?)

キャロル P90 (サブマシンガン? だよな? この辺りは作者もあやふやです。) & M

1911A1

クーちゃん アサルトライフル (ACVDのアレ) & ミサイル

室内用じゃないね……一応、予備にAA-12ショットガン

(知ってる人は知ってるエグイショットガン連射速度は毎分350発とショットガン出はないと言いたい。けどショットガン)

四葉「隊長入り口は?」

四葉は警戒しながら正面を見る

隊長「そうだね? そこと右のドアだね?」

キャロル「いつそのことクーちゃんのミサイルで……………」

四葉「止めなさい、修理費で恐ろしいことになる」

キャロルのせいで危なくなる所であつた……………

そして、警戒すること一時間……………

トトト!!!

何かが走ってくる!

四葉「隊長! ドア閉めろ!」

四葉の命令によりドアが閉じられるそして……………

ドンドン! ドアが叩かれる

隊長「悪い子だねー?」

四葉「死にたいのは貴様か……………」

クーちゃん「提督は渡しません」

キャロル「愚かな存在……………消えなさい」

ドアが開けられフルオート射撃が行われる……………

スプリングが跳び、腕は吹き飛び、パーツが砕けていく……………そして、何かのガラク

タが残った

四葉「これで一つ……………隊長! 今何時だ!」

隊長「まだ、1時だぜ！」

何か敵が可哀想に思えてきた……………

直後電話がなる

四葉「もしもし？」

謎の男「ヤーヤー、まだ生きてるみたいだねー？うーん、今回は生きがイイミタイ  
ダネー？」

四葉「誰だお前？何が目的だ。」

謎の男「んー？目的？俺は前任だからねー？そうだねー？君達が生き残るのを待つて  
るよ？他はみーんな死んじやったんだもん、楽しませてね？」

絶句した……………この男は人が死ぬのを楽しんでるのだ

四葉「お前……………覚えとけよ……………」

謎の男「アハハ？楽しみにしとくよ。まあ、生きてたらの話だけどね。それじゃあま  
たな。」

そこから時間がたち……………

午前五時

部屋の前には残骸が転がっていた……………

四葉「全く何とか生き残ってるな。」

キャロル「ええ、問題ありません。弾は大丈夫ですか？」

隊長「アハハ？問題ないよー？」

クーちゃん「大丈夫です、作戦継続に問題ありません。」

四葉「一応後120発、六マガジン位だな（SCAR—Hは装填数20発でチャンバー+1の21発です）しっかしどうなってるんだか。まあ、あと一時間頑張るか！」

決意を固めた直後電話がなる……………

四葉「もしもし？」

担当の人「ま、まだ生きてるよね？」

四葉「何とかかな？一つ……………良いか？前任ていたのか？」

四葉はもつともらしい質問をする

担当の人「前任？君の前だと記録上は二人いたね」

四葉「その二人は？」

担当の人「君の前は一週間勤めたあと辞めて引越したみたいだね、その彼の前は……………死んでるみたいだ」

四葉「……………一週間生き残ってるのがスゲーけど……………て、ちよつと待て死んでるのか……………？」

担当の人「死んでるのは言い方が悪かったな……………見つかってないんだ。」

担当から告げられる驚愕の事実

キャロル「まさか、あの男は………いいえ、有り得ませんそのようなことが。」

隊長「アハハ？まさかね？」

担当の人「まあ、あと一時間だ！頑張ってくれ！」

四葉「まさかな……Pr r Pr r 死者からの電話か……面白い」

ガチャ

謎の男「ハローハロー？イヤー不味いことになってね、これを録音しといて良かったよ。頼み事がある、何時か奥の部屋にある人形を調べてくれ。誰かが来るのを待つのもいいかもしれない……俺は何時も思ってたんだよ後ろの空っぽのぬいぐるみでなんだったんだろうな

NO!NO!!」

メッセージは以上です

キャロル「何だっただんでしようか結局？」

隊長「何かあつたんかもねー？」

バチバチ！直後謎の音が響く

四葉「ー？そーいや今何時だ？」

隊長「6時だな生き残つた俺ら」

キャロル「あの、皆さん目の前を見てそれ言えますか？」

そう、この建物は古い建物なのだ……それが原因かは分らんが……絶賛、目の前が火の海状態なのである……

四人「?!」

四葉「逃げるぞ！クー、壁をショットガンで吹っ飛ばせ！」

クーちゃん「分かった！」

無理矢理壁に穴があくが……

隊長「?!おい！建物が崩れるぞ！ええい、キャロル！」

そう、建物が限界を迎えたみたいだ

キャロル「え？隊長!？」

そう、隊長はキャロルをお姫様だっこをしたのだ

四葉「クー！逃げるぞ！」

彼はそう言うとかーちゃんを抱き寄せて建物の外に飛び出した直後

ドーン！

建物が吹き飛んだ

四葉「ガハ?!ゲホゴホ!?クー！大丈夫か？」



クーちゃん「はい！大丈夫です。けど、あの……」

四葉「ああ？すまん」

担当の人「大丈夫か！良かったよ生きてて！」

四葉「全くなんつーバイトだ」

こうして、地獄のような夜が終った

四葉「そう言えば？火事の原因は？」

キャロル「どうやら……電気系統が逝かれてたみたいです。それにガスのホースに亀裂があつたみたいです。」

隊長「ここ木造だからね、燃えるのが早かつたみたいだね？」

四葉「そうか、そう言えばアレ覚えてるか？確か奥の部屋だっけ？」

クーちゃん「その事です……」

彼女が言い淀む

四葉「何だ？」

彼が聞いた直後

警察「君達が生き残つた人達だね？」

四葉「ああ、そうだが？」

警察「実は焼けた人形の中に死体が詰まっていたんだ。後で来てもらうよ？」

どうやら……彼は人形に詰められたようだ……

四葉「分かった……けど俺らが只のバイトなのはそこの男に聞いてくれ」

四葉が担当の人を指差す

担当の人「ええ、彼は入ったばかりです。」

警察「そうか、なら気を付けて帰ってくれ。」

後日判明したことだが、その男の死体は軽く20年はたっていたらしい……

そして、もう一つ……死体の入った人形は全部で五つあったらしい、けれども焼け跡からは一つも見つからなかったらしい、そう人形すら……

P r r P r r

「Hello?」

e n d

## 提督の日常

提督の朝は早い

此処での朝では特に早起きを要求される何故なら

四葉「グレネード!!」

提督みずから爆発物を投げつけてくるのだ……

艦娘達は一齐に飛び起きてベッドを盾にする

が……新入り三人は対処できなかった

龍驤「フエ？」

??1「？」

??2「は？」

ドーン!!

仲良く床に叩きつけられる三人

(なお、提督の投げてるグレネードはスタングレネードのようなもので殺傷能力はあり  
ません御安心を)

四葉「朝だ！起床だ！とつとと起きろ、このねぼすけどもが！」

結構鬼な提督である

流石に突然の事だったので龍驤は激怒する

龍驤「アホ！うちらを殺すきか！」

?? 1 「アドミラル……酷い」

?? 2 「マスターの鬼」

四葉「以前いったはずだ、俺は起こすときは爆破を使うとな」

龍驤「聞いてないわああああ!!!」

龍驤が貰ったFA-18を取り出すが……

龍驤「アツツ！?なんやこれ！」

手を火傷したみたいだ……まあ、プロペラ機じゃないから仕方ないよね

そうそう、新入りを紹介しましょう

U-511「ドイツ海軍のUボート、潜水艦U-511……です。頑張つて、ここ

まで来ました。皆と仲良くなれたら……いいなって……この文化に馴染めたらいいなっ

て……思います。」

U1(PIXY)「マスターの相棒UNACC型U-1PIXYです……よろしく。好き

なものはライフル嫌いなものはバトルライフル、実弾には強いのでガンガン敵を蹴り飛ばしたいです」

UNACCの見た目は全身真っ白で右腕が紅いです。え？どこの妖精だつて？気にし  
たらいけない……………後、重2脚です、可愛いよ

そんなことはさておき……………現在皆食堂にいます

四葉「皆いるな？それじゃあいただきます！」

全員「……………いただきます！」

U—511「アドミラル……………美味しい？」

此処ではご飯は当番制で今日はU—511のようだ

四葉「おう、美味しいぞ」

満足そうである

そんななか、クーちゃんが四葉に話しかける

クーちゃん「ねえ、提督……………UNACCとU—511紛らわしくなってきた」

そう此処では名前がにてるやつが多いのである

四葉「そうだな、それじゃあPIXYで良いか？UNACC」

PIXY「良いよ、良い名前だ」

こうして、親睦を深めていき朝の時間が過ぎていく……………

執務室

現在、彼は考え事をしていた……………

四葉（PIXYにはやっぱりマスブレードだよな！）

何時も通りだった

U-511「アドミラル……誰が今日でるの？」

四葉「そうだな……それじゃあ如月と電と龍驤とユ-君が出てくれ。」

U-511「分かった、行つてくるね」

そういつて出ようとする彼女を彼は停めた

四葉「そうそう、ドックに試作兵器あるから如月に渡すよう頼むよ。」

こんども地獄になりそうだ……

U-511「??、分かった伝えとくね」

四葉「おう！頑張つてくれ！……さてと、今日はPIXYとクーちゃんの模擬戦に付き合うか……アセンブルはクーちゃんの苦手分野で良いな……」

こうして、時間がたち如月達は出撃し四葉はアリーナにいた……

アリーナ

四葉「来いよ！二人とも……纏めて相手してやらあ！」

クーちゃん「分かりました……全力でいきましよう」

PIXY「アハハ？お姉さん頑張っちゃうぞー！」

三人はそれぞれ全力で闘い始めた

四葉「おいおい……お前ら動きが甘いぞ！」

そう叫ぶなり、スナイパーライフルとハイスピードミサイルを乱射する

P I X Y「敵A C 四脚スナイパー型！私より、クーちゃん貴方を狙ってます！」

四葉「ハハ!?よく分かったな！けれど……お前を作ったのは俺だけ？お前の弱点もわかってんだよ！」

『不明なユニットが接続されました』

さあ、蹴りをつけてやるよ！」

そう言うなり、彼の腕にガスバーナーのようなものを取り付けられる……

クーちゃん「ちよ?!それ、オーバーキル!？」

彼女が叫ぶのも無理はない……今回取り出したのは

ヒュージブレード A C V Dより追加されたオーバードウエポン

腕にガスバーナーのようなものを取り付け

チャージ後右から風ぎ払うようにふる

まあ、ちよつとばかり弱点があり……

後ろがから空きになるので上手くいけば交わせる

P I X Y「アハハ？流石だねマアアアスタアアアアア！それでこそ私のマスターだよ！けれど忘れてない？貴方が私を作ったのを！『不明なユニットが接続されまし

た

彼女も取り出す……全てを焼き付くす暴力を……

彼女に取り付けられたのはマスブレードそう……柱を取り出したのだ……

四葉「来いよ！相手してやる！」

PIXY「うけてたつよ！」

クーちゃん「私を忘れてない？吹っ飛べ……」

直後、緑の粒子が集まる……

四葉「ハハ!?逃げらんだよー！」

直後、アサルトアーマーが発動される……

クーちゃん「逃げられましたか……」

PIXY「クーちゃん……なにやってるの……私だつて無限にできないんだよー

？」

クーちゃんに軽く愚痴を言いつつ、周囲をスキャンする直後……

PIXY「居ない？何故？」

クーちゃん「そんな？」

そう……二人には見えないのだから彼の姿が

PIXY「何故？マスター？……ここは海……まさか?!」



彼女が気がついた直後二人に極大のレーザーブレードが目の前に現れる！

四葉「海の中の水圧で辛いな、全く！」

そう…彼はダメーヅ覚悟で水中に隠れたのだ………

四葉「もらったー!!」

そして、暴力が振るわれた

二人「きゃああああ!!」

こうして、二人による演習は提督の四葉の勝利によって決着した

## 如月はやっぱりキサラギだった

現在、如月達は海上を進み今日の仕事に出ていた……

如月「これ、面白いですね」

そう言い、如月は手に持った武器を振り回すが他の娘達は気が気ではなかった  
龍驤「なあ？如月はん？あんたそれ振り回すの危ないからやめときや？」

U511「危ない」

電「如月ちゃん危ないのです！」

そう彼女が持つてるものそれは……

特製火炎放射機である……

遡ること出撃前……

妖精「如月さん、提督から預かりものが有ります。」

出撃前に如月は妖精に呼び止められていた

如月「そう？何かしら？」

妖精「弾薬じゃなくて燃料を消費なのでお忘れなく……」

一体此処では何が生産されてるのやら……

ナニカサレタではなく常にナニカシタヨが正解か

如月「ありがたい。提督から他は？」

如月は、右手に持ったのを確認しながら妖精に聞く

妖精「新造を二人作ってるので帰る頃には出来てるかと」

如月「そう、分かったは……如月出撃する」

そして、現在に至る

イ級「な、なあ？ここ本当に大丈夫だよな？」

ワ級「大丈夫でしょ？連中来てないみたいだし……」

イ級「それなら良いけど……」

既にAMIDA鎮守府の名は敵味方問わずに有名だった

ただし……敵味方問わずに畏怖の対象だが……

如月「見つけた」

イ級&ワ級「ヒ?!し、死神……」

如月はゆっくりと近づくとそれこそ、確実に仕留めると決めてるからこそ出きる行動で

ある……

イ級「たかが艦娘がなめるなああ!!」

そこに一体のイ級が突っ込む、ゼロ距離で当てる気のようにだ……だが……

如月「近づいてくれてありがとう♪お陰で手間が減るは」

そして、彼女はトリガーを引いた……

イ級「ア、アツイ?! ホ、炎に包まれて、ギャアアアア?!」

その断末魔はどこぞの逆流王子のようだった……

ワ級「に、逃げなきゃ」

龍驤「逃げれると思ってるの?」

電「仕留めるのです」

クーちゃん「貴様はここで終わりだ」

U-511「フィニッシュ」

そこにいたのは、ゆっくりとたつ死神だった……

ワ級「機関がやられただ?! こんな水没が私の最後か……」

こうして、深海側は敗北した……

通常の戦闘でなんだっけ?

帰還後

彼女を待ち受けていたのは二人だった……

「UNACC2です」

「UNACC3です」

UNACC2は灰色で両腕が青色四脚で見た感じはちよつとのほほんとした子  
UNACC3は焦げ茶色に紅が混じっていており、逆関節のようだ  
如月「歓迎しましょう、私たちの鎮守府に！」

こうして新たな、仲間も増えた、今後どうなるかは  
彼女達次第だろう

UNACC2「お腹すいた」

まずはご飯が先のようにだ……………

## 新入り達の讚美歌

A M I D A 「アミアミアミーダアミアミダ」

(・ω・) ノ始めまして皆のマスコット

A M I D A だよ、忘れられてるかもしれないけど

一応私も……………)

U N A C 2 「邪魔……………(K A R A S A W A フルチャージ)」

A M I D A 「アミ?! (ちよ?!)」

ドーン!

出落ちで悪いがA M I D A は退場です今日はもうでません

A M I D A 「あーんまーりだー!?!」

どうやら、朝から賑やかなようだ……………

時間は前回の彼女達の登場から……………

U N A C 2 「始めまして、U N A C 2 です」

U N A C 3 「妹のU N A C 3 だよー」

PIXY「久し振り、二人とも（……この子は四脚なんだ、それもそうね……レザスピだもんねUNAC2は……UNAC3は私と違って中2だから細かいわね……足……羨ましい……）」

新しい仲間達に如月は少し思う

如月（スナイパーキャノンでものせようかしら？）

こいつも提督と同じようだ………

電「よろしくなのです！」

U-511「よろしく、二人とも……そう言えばそれぞれ名前は？」

ユーちゃんに聞かれてUNAC2が答える

UNAC2「サイファー……マスターはそうつけた……」

UNAC3「シユトリゴンだよー」

彼女達の名前を聞き、ここまでずっと黙ってた龍驤が口を開く

龍驤「なんや、変わった名前やな？」

彼女の疑問にサイファーが答える

サイファー「ゼロで意味みたい……マスターの敵は私が倒す……」

龍驤「え、えらい物騒なんやな」

サイファー「気にしないで、私達UNACはそういうものなの」

そんな姉を見ていたのかシユトリゴンが背中をつつく  
シユトリゴン「サイファーお姉ちゃん……お腹すいた」

どうやらお腹がすいたようである……

サイファー「ピクシー御姉様、食堂どこですか？」

ピクシー「此方よ着いてきて案内するは」

淑女移動中

食堂……

四葉「アイムシンカー トウートウートウー」

そろそろ晚ご飯の時間みたいだ、見る限り今日は提督が調理当番のようだ…

四葉「チャーハンはー、火力が大事ー、あつというまにーアサルターマーでー、フイ  
ニツシュ!!」

電「夢ナラサメテ?!」

直後厨房が緑色の粒子に包まれる……

ドーン!

爆発の直後吹き飛んだドアが龍驤にぶつかる!

そして、胸に当たった……

龍驤「ガハ?! い、嫌や、う、家は巨乳になれるって、頑張ればなれるんだって……」



龍驤が現実逃避を使用した直後……………

如月「残念ですが、貴女は巨乳にはなれません、そうなれないのですよ……………あああき  
らめてください！自分の体を！」

おもいつきし煽る如月であった

四葉「お前らなにしてんだか……………ほれ、飯できたぞー…

新入りか名前は？」

提督は新しい仲間を見る

ちよつと自己紹介……………同じなので略

四葉「久し振りだな……………サイファーそう言えばお前四脚だけどそれどうなってるの  
？」

そう、サイファーはいわゆる四脚機なのだパット見

足が四本なのだ：

サイファー「これ、取り外しが出来るんです『ガコン！』ほらね？」

そう言うと、後ろの二本が外れる

四葉「便利だなそれ」

サイファー「寝るとき以外したくないんです……………」

サイファーはそう言うと少ししよんぼりしながら四葉を見る

四葉「何で？」

サイファア「だって……—四脚になれてるから2本とかスツゴク不安だもん！あとめんどい！」

後者の方がもつともらしい気がする

そうやって、叫ぶ彼女だか一方シユトリゴンはと言うと……

シユトリゴン「Z z z Z z z」

寝てるようです……

ピクシー「シユトリゴン？寝ちやったのかしら、仕方ないわね……提督、私の部屋に運んどきますね」

四葉「おう？頼んだ」

サイファア「そう言う訳でよろしくなマスター！」

四葉「おう！頼んだぞ！」

こうして、また新たな仲間が増え時間も過ぎていく……

一方ドック

妖精「なんだろうー？この新しいのー？艦載機かな？それに変わったエンブレムもついでるー？」

そのエンブレムは死神の書かれたエンブレムだった……

どうやら、また危ないのが出来たようだ……

補完 龍驤さん

龍驤 「アカン?!うち空気や!早くいかんと出番が!」

A M I D A 「アミー! (復活!俺は何度でもよみがえるのだ!)」

ピクシー 「邪魔 (K A R A S A W Aフルチャージ)」

A M I D A 「アミー?!アミアミ!? (ちよ?!またかよ!)」

龍驤 「ちよ?!ピクシー待って!」

ドーン!!!

龍驤 「うちもかいなああ!?」

キラーン 彼女はお星様に为りました

龍驤 「ナンデヤアア!い、嫌や、家は強いんだって死にとうない……キラーン」

ドボーン (浴槽ダイブ)

ピクシー 「今なにか?」

チャレンジ達成

『ダイナミック入隻』

『スピード撃破』

ピクシー 「行かなくては、提督の元へ……」

これが、合流するほんの少し前のことである………

# プランM所謂虫ですね

時間軸は早朝彼女は目を覚ました

「ここは？その前に、何でしょうかこれは？（虫、だよな？）」

彼女の名前は「フラジール」

所謂、逆流である……………

有名な台詞は撃破したときに

「AMSから光が逆流する!?!?!?!ぎやああああ!」

である…一度聞いてみると面白い

AMIDA 「アミ?アミアミ、アミ?」（ん?新入りかい?珍しいねー?）」

フラジール「貴様は?」

意志疎通出来ないと思っていたらおもむろに虫?達は

ホワイトボードを取り出して筆談を始めた

個々からはAMIDAの台詞は全てフラジールが読んでいるだけです。尚AMID

A鎮守府の人間は全員AMIDA語を翻訳できます。

何で出来るかって?そりゃーナニカサレテルからです!



ネクストのもつプライマルアーマーに阻まれて攻撃が当たらない  
龍驤「チ?! クーはんと同じか! なら!」

そう彼女が叫ぶと右腕に変なのがつく

龍驤「如月はんのだから何が起こるか分からんが一撃なのは覚えてる! 『不明なユ  
ニツトが接続されました』

そう龍驤はグラインドブレードを取り付けたのだ

龍驤「家からは逃げられへんて知つとるやろ?」

宣言し、展開をするが彼女には誤算があつたそれは  
相手がネクストであつたことだ

フラジール「遅い………ノーマルより酷いですね吹っ飛べ」

直後、緑色の粒子が展開される!

龍驤「しまった!」

ドーン!!!

龍驤は爆発に巻き込まれて入隻した

『スピード撃破』

『ダイナミック入隻』

『損害軽微』

フラジール「はあはあ、なんとかまりましたね……」

ピクシー「そう思いですか？」

フラジール「誰だ！」

フラジールがライフルを目の前に向けてとそこには四人いた

ピクシー「大いなるものが我らを見ている。」

サイファー「この装備（オーバードウエポン）こそそのあかし」

クーチャン&シュトリゴン「世に平穩の有らんことを」

フラジール「新手？なら相手するのみ！」

そう言つて近づくフラジールだったが……………

クーチャン「残念ね、吹き飛びなさい……………」

アサルトアーマーを展開した……………

ピクシー「K A R A S A W Aに削りあいを挑む？愚かだ」

サイファー「3500ガトリングでロマンよね？」

シュトリゴン「キャハハ?!アーハッハー！（ヒュージキャノンぶっぱなしました）」

なんと言うか、そのあれだ……………オーバークルな光景が繰り広げられた

フラジール「目の前で光が逆流する!?!キャアアアア！」

こうして彼女は気絶してしまった……………

そんななか如月が通りかかった……………



如月「アイムシンカー トゥー トゥー？あれ？侵入者ですか？」

そう言うのと如月は何故かフラジールにVOBをセットしはじめた……

クーチャン「き、如月さん？な、何を？」

ピクシー「流石にそれは不味いのでは？」

如月の突然の行動に驚き止めようとするけれどそんなことはお構い無しにフラジールにVOBをセットするそして

蹴り飛ばして、叩き起こす

フラジール「ガハ?!き、貴様何者だ？」

フラジールの質問に如月は笑いながら答える

如月「騙して悪いんですが……吹っ飛んでください♪」

フラジール「ちょ?!それ答えになってなああ！」

彼女の叫び声をBGMに飛んでいった

そして、振り返り微笑みながら話しかけた

如月「ウフフ?さて皆さん?この件……ドオシテクレマスカ？」

完全にプツンしてるようです。

お忘れの用ですが生産室は如月の私室も兼ねており

自分の部屋を荒らされたのも同然なのだ

AMIDA「落ち着け御主人後、アンタ新入り吹っ飛ばしてる」

如月「大丈夫ですよ、ちよつと反省会といきましようかね？」

『さあ、蹴りをつけようじゃないか……見せてみなお前の力をさ？』

そして、マルチプルパルスが接続された

クーチャン「それ冗談じゃないでしょ?!」

サイファー「俺は面倒が嫌いなんだ！」

逃げようとするがチャージは完了したようだ

如月「私の部屋に何してくれんのー!!」

そして、全て光に包まれた……

四葉「で、結果がこれか……」

そう言う彼の姿は辛そうだったそれもそのはず現在

目の前に恐ろしいほどの請求書の束が出来上がっていた

四葉「それで？フラジールはラインアークに吹っ飛んでったと？」

如月「そうなります」

四葉「如月……ちよつと来い」

彼にしては珍しく、起こりもせず淡々と話を聞いている逆にそれが恐ろしいのだ

如月「何でしょうか……キヤ！」

四葉「お仕置きといこうか？」

如月「て、提督？離してください」

四葉「たまには、良いかもな……」

暫くお待ちください出来れば皆さんのフロム脳で補完してください。

四葉「さてと……そう言えばクーチャンは？」

そう、先程からUNAC三人娘はいるが

隊長格のクーチャンがいないのだ

如月「ハウ、ハア ハア……そ、そこにかみがヒヤン！」

まだまだおたのしみの中ようです

四葉「えーと何々？『水没と蹴りをつけてきます明後日には帰るマスブレード借りて

きます クー』

はあああ?!彼奴勝手にいったの?!まあいいけど……

風見さんに連絡しとくか……」

こうして、新入り登場かと思いきやまさかの一話だけの出演になったフラジールで

あつた

フラジール「プランS 所謂速すぎです!？」

キイイン!

尚このあと、フラジールはラインアークに到着するが

一悶着起こるのは彼方のお話し

クーチャン「見つけた、カードランク1 オッツダルヴァ……………姉さんの敵とらせ  
てもらおうよ?」ガコン!

何かヤバイことが起こりそうだ……………

オマケ 本日のU-511

AMIDAを抱き締めて鎮守府ウロウロ

キャロル「何をなさってるのですか?」

U-511「散歩」

キャロル「そうですか、チェスでもしませんか?」

U-511「いいよ」

キャロルの圧勝だそうです。大人げない

## 武力偵察と言う名の殺戮

0800 執務室

現在執務室の空気はいつも以上に重かった……

「クーちゃんがいらない今、我々の戦力は大幅に下がる……主に電ちゃんの」

そう現在、AMIDA鎮守府主力『NWGX/V』クーちゃんがいらないのだ。

なぜいけないのか、それは、前日のフラジールが飛ばされるまでさかのぼる

如月「そう言えば、あの方角だとラインアークに飛んでくはね」

クー「ラインアークですか？よろしいので？」

彼方に迷惑がかかるのではと思ひ心配になるクー

如月「大丈夫よ、それにあつちには彼女の相方もいますし……うーん、楽しみです」

如月の勿体ぶる言い方にクーは疑問を持ちつつ質問する

クー「相方？いたんですか？」

如月「ランクー オツツダルヴァ以前見たでしょ？」

クー「あの、私たちが伺ったときは六人でしたが？その前にオツツダルヴァ？水没？」

……ああ、トランプの弱いあの人ですか。」

如月「弱いかどうかはさておきランク1だからね強いはずだよ」

クー「そう……少し出掛けるは」

そう言うのと彼女は背中にロケット？のようなものを取り付けた

如月「クーちゃん？いったい何を？」

クー「少し、模擬戦をしてくる、明日には帰る提督には水没を沈めてくると言つて。後、マスブレード借りてくから。」

そう言うのと背中にVOBその上にマスブレードをドッキングして飛び立った

これが起きたことである

そして現在

電「クーちゃんいないから寂しいのです……モウヤケクソデス！この気分を変えるために出撃します！」

四葉「お、おう。気をつけて行ってくれ（ヤ、ヤバーコレ完全にアカンやつや）」

電の態度に不安を覚えつつも出撃させる提督であった

そしてその不安は的中するのであった……

主に良いほうとして……





四葉「ま、まあみんな気を付けてくれ！」

こうして、地獄の蓋は開けられる。

尚、このあと起きた惨劇についてはダイジェストでどうぞ

ル級「死ニタガリノ艦娘メ貴様らはこ……………ドグシャ！」

電「潰す」

そういきなり、戦艦ル級の顔面に主砲をゼロ距離で

ぶっぱなしたのだ……………

如月「うーん、面白いですねー？」

龍驤「んなわけあるか！あれじゃ電ちゃん大破しちゃう！」

如月「大丈夫です、あの娘はこの古参兵です……………あの程度何の問題もありません」

如月がそう言うのと電はゆっくりと敵陣に向かって歩いていく

口級「何としても潰せ！ここを抜けられたら終わりだ！」

ハ級「それよりもここは一度退くべきだ！じゃないとこつちが殺られちゃう！鴨狩の

はずが一瞬でこつちが殺られかけてんだ退くのはこつちだ！」

どうやら、深海側にも冷静なやつはいるようだ……………だが

U—511「あんなどころで停まっているとか、ただの案山子ですね」

サイファア「くたばるが良い、お前が記念すべき一人目だ」

ピクシー「吹っ飛べ……………」

よく言うだろ？戦場で立ち止まるなど、結果は撃たれまくって終了です。

口級&ハ級「ギャアア!？」

龍驤「ふむ、やつぱり艦載機はええのう。」

又級「アンナトコロデタチドマルトハマ、……………?上になにか?？」

龍驤「残念やったな……………家の艦載機は、ようけ飛んでられるんや。残念やったな

……………終わりや」

直後又級にLAGMが直撃する

そして又級は海の藻屑となった

電「はわわ、電は何をしたのですか？」

全員「「「覚えてないんだ」」」

如月「まあ、いいわ。帰りましょうか。」

こうして、武力偵察と言う名の殲滅戦がまくを下ろした

この戦いに意味はあるのか？それがわかるのはまだ先のことになるだろう。

世に如月とAMIDAの有らんことを……………

## 番外編 深海側の話し合い

とある海域の奥深くそこではある話が行われていたそれは

「やっぱりさー、ドーナツはチョコのオールドフアツションだよね。」

「……………開幕なにいつてるのあなた、違うでしょ。新興勢力についてでしょ？」

「そう言われても、キサラギと呼ばれる奴と馬鹿みたいにでかい柱振り回しているて言う情報だけじゃな、てか何者だよそいつ。レ級の嬢ちゃんを一撃で葬るとか……………」

現在、ここに居るのは所謂『姫級』と呼ばれる方々である

「実際マトモに見て帰ってこれたのいるの？ただの噂でしょ？」

「ならよかつただけ……………実際に私一度見たことがあるのよ……………」

「……………?!!!」

突然の発言に騒然となる一同

「以前、私が散歩してるときに見ただけだ。笑いながらこつちに向かってきて、そのまま全てを殺し尽くしていったは……………」

「化け物め……………」

「それで？これからどうするの？順調にいったら次は北方海域でしょ？大丈夫なの？」

港湾凄姫の言葉に他の面々は渋い顔をする

「モン〇ンやりたい。」

「寝てたい。」

「もう放棄してもよくね？」

「……………真面目にやれえええ!!!」

流星にイラついて叫ぶ港湾凄姫

「そんじゃー、北方海域だし北方のところからだしやよくねー？」

そういうのは飛行場凄姫

「分かった、ゼロおいてけ！」

「ハイハイ、今度烈風あげるから我慢な、それで？どいつにいかせるんだ？」

「ここは、イ級でいいだろ。おーい、イ級ー！」

「お呼びでしようか？」

「偵察に逝つて欲しい。」

「字が違う気がします？」

「気にするな、作戦概要を説明する。場所は新興勢力の海域、キサラギの存在を確認できればそれで良い、なあに安心しろ、見て帰るだけだ問題ない。我々は君に期待している、

頼んだよ」

そう言われ、不安を覚えつつも向かうイ級であつた

「大丈夫だつてーヲ級やレ級もいる気楽にやつてこい」

「それでも不安なものは不安なんですがね、まあ、仕事だからいきますよーと」

こうして、イ級は出た尚、その後、方角を間違え

目標のキサラギのまえに出してしまったのが彼の誤算だつた

イ級「お、俺がこんなところで！化け物が……」

如月「アハハ？愉しかつたですよさようなら……」

これが、鎮守府海域にレ級やヲ級がいたわけである

その後

「……………私は以前そんなのは嘘だと思つた……………だが実際はどうだ？なにもせずによられてるではないか……………我々はどうすれば良いのだろうか？」

「そう言われても……………物量で押すしか……………」

「それに、ここ以外にも勢力はある今は奴等が疲れるのを待つだけだ……………我々が持てばの話だが……………」

「……………世に平穩の有らんことを！……………」

「諸君頑張ろう。」

こうして、深海側の話し合いが終わった……………

今後どうなるかは誰にもわからない。

ただひとつだけ言えるのは

「キサラギはマズイ……………」

ただそれだけである

# 狂喜と狂気と狂笑

AMIDA 鎮守府地下五階

ここは、誰にも知られていない如月だけの実験室

ここで如月はいつもAMIDAの改良などを行っている。

だが、今回だけは状況が違った……………

如月「クーちゃんも負けた、それは事実……………なら私は新しい人形を作ろう、ネクストにも負けない人形を……………妖精さん準備は良い？」

如月の声は恐ろしく平坦だった……………

流石に妖精さんたちも今回ばかりは一番ヤバイと思っただらしく、必死に止める

妖精「いくらなんでも無茶苦茶です！『魂を機械に入れるなんて！』」

そう、今行われようとしているのは命の創造のようなもの

如月「ゴーストインザマシン、私達だって似たようなものそうでしょ？人間に近い体を持ち、嘗ての記憶と言う靈魂をもつ」

艦娘は、嘗ての戦いの記憶を持ち生きている

そこで如月は考えた……………

『自分達が：『機械と幽霊』で成り立っているなら……その逆もあり得るのではないか？  
そう、機械と言う体を作りそのなかに幽霊を入れればそれは人間に近いものではないか？』

端から考えると可笑しいのかもしれない、頭のなかを疑われるだろう……しかし、彼女は止まらない止まれない

如月「彼のためなら私はどこまでも狂いましょう。それが例え死ぬようなことでも……始めましょう、もう体は出ています。後は妖精さん貴方たち次第ですお願いします。」

妖精「わかりました、しかし、何が起きても知りませんよ？」

如月「協力に感謝します。それでは始めてください。」

そう言うと、足元に書かれていた魔方陣がゆっくりと紅く輝き始めた、そしてそこにおかれていた機械人形のようなのがゆっくりと動き始める

??「此処は？その前に貴女は？」

そう言うとソレは如月に質問する。

如月「AMIDA鎮守府の睦月型二番艦如月です初めまして『レディインヴォーテックス』」

そう呼ばれたソレは無機質なようなものだった……



体は如月と同じくらい細く、髪は雪のように白く、体の回りには四枚のシールドがある

顔色は白いので一瞬人形? と思えてしまうほどの怪しさがある

?? 「初めまして、貴女が私のマスターですね?」

如月 「いいえ、貴方のマスターはこの提督、四葉一樹です。歓迎しましょうLiv。

いえ、私の妹……………」

Liv 「そう……………なら合わせて私のマスターに」

そう言うのと彼女はゆっくりと浮かび上がりエレベーターに向かう

そして、彼女は彼に会いにいった……………」

如月 「ウフフフ……………アハハハハハ!!! キヤハハ! ついに出来ました、私の最高傑作です

……………まさか拾ったデータがここで役に立つとは。提督、見ていますか? 貴方のために

最高の戦力が出来ました。さあ、始めましょう本当の戦争を、いえ、地獄を」

そして部屋には彼女の狂笑がこだまし続けた……………」

## L i v という少女

時間軸は、前回のクーちゃんが帰還したところから始まる

「すいません、提督、今回は負けてしまいました……………」

弱々しく言う彼女だが、彼はそこまで気にする様子はなかった。

寧ろ、彼女に近より頭を撫でた

「無理はない、そもそも相手はネクスト五機に、イレギュラーもいたんだ無理はない。ソレよりもどうだった？彼女等は？」

彼にとつてはクーちゃんが負けた事実よりも相手の戦力が気になるようだ。

「はい、やはり相手の連携が強みを出していると思われませう。」

「なるほどね……………そうそう後で電に会いに行けよ？お前がいなくて寂しがっていたから、お前は昔一人だったかも知れないが今は仲間がいるんだ大切にしろよ？」

四葉はそれだけ言うのと彼女に退出の許可を出した。

「……………ネクストか……………やっぱイレギュラーもある。彼奴の所には、今はまだ勝てないようだな……………」

言葉では、悔しがるが、その顔は新しいおもちゃを見つけた子供のように楽しそう

だった。

クーちゃんと電

「ただいま……………」

「クーちゃん！お帰りなのです！」

そう言うと、電はクーちゃんに抱きついた。

それに対して周囲の面々がそれぞれ言葉をかける

「なんやクーはんやと帰ってきたんかいな。遅かったな。」

「遅かったじゃない。まあ、見つけれるものがあつたなら良いんじゃない？」

「クーさんおかえりなさい。」

口々に彼女の帰還を歓迎する。

(確かに提督の言う通りかもしれない、私は一人だったけど今は皆がいる。良いのかも  
しれないわねこう言うのは……………)

そんな中如月がないのに気がつく。

「アレ？如月さんは？」

クーちゃんの質問にそれぞれが渋い顔をする

「それが一昨日から部屋から出てこないのです。」

「しかも部屋からは狂笑が響いてるは変な音がするはで誰も近づけないんや。」

そう口々にいつてた直後

ドーン!!!

部屋の扉が吹き飛ぶ。

「?!」

「敵?!」

「チ?!めんどいのは嫌いやが………全機発艦!爆撃してな!」

「メインシステム戦闘モードを起動!」

それぞれが武器を展開して目の前の煙を確認する。

先程から火花が弾ける音となにかが回る音が響く、動くべきかどうか考えてるあいだに如月の間延びした声が響く

「駄目ですよLivier、ドアはきちんと開けるものと教えたでしょう?」

「すみません、お姉さま。押ししても開かず引いても駄目だったのでつい………」

その声は余りにもその場には会わない声だった。

彼女らの目の前に現れたのは………

如月にそっくりな人物だった………

違うところは髪が白いのと、四枚のシールドが浮いているところだった

そして、少女は彼女らの目の前で敬礼した

「皆さん御免なさいね、心配をかけて。でも安心してこの子は新しい仲間、『L i v』よ、ほら挨拶して。」

「初めまして、レディーインヴォータックスです。愛称はL i vです。よろしくお願いします。」

そう自己紹介を行うが、全員の警戒度はマックスだった

「如月はん……………あんたなに考えてるんや?」

龍驤が如月に質問すると笑いながら答えた

「アハハ? 私達には戦力が足りません……………そのための支援機です。」

そう答える如月だったがその顔は狂喜に歪んでいた

「……………何があつたんだ?」

そんな場所に四葉が到着する。

彼は一度辺りを見渡した後目の前の少女に疑問を持つ

「……………まあいい、ようこそA M I D A 鎮守府にここの提督の四葉一樹だ。君は? 見たところ艦娘でもないしネクスト……………でもないな? また新しい種類かな?」

そう言う彼の言い方に如月以外が驚きつつもやっぱりこの人は変わらないと思つていた。

「提督、彼女は私の最高の作品です名前はレディーインヴオーテックス。愛称はL i v  
です。」

その彼女の言い方に四葉は冷や汗をかく

(おいおい!? L i v かよ?! こいつは今までのなかで一番ヤバイかもしれない……いや、これは俺たちにとっての切り札になる。世の中にフェアなことなんてない。

アンフェアなのがこの世界だそれがヤバイかヤバくないかの二つだけ……)

「初めましてL i v………歓迎する。ようこそ我々の所に」

「こちらこそお願いします。マスター」

そう言うとお互いに手を出した

これが悪魔と死神が手を組んだ瞬間だった

こうして邂逅が終わった直後、艦娘たちを見渡して彼はゆっくりと、口を開く

「早速で悪いんだが………久し振りに模擬戦といこう。相手はラインアーク鎮守府の  
ネクストとイレギュラーだ

どうせなら派手にいこう。今回は負けたが………今回はみんなの練度も高い。楽し  
いことになりそうだ………ハハハ!!」

その声にクーちゃんと電は提督が楽しんでいるのの気づく

そう、まるで………戦争を楽しんでいるかのように。

「さてと、連絡を取りますか……………」

そう言うなり彼は先輩である風見提督に連絡を取った：

風見「ん？電話？誰からだ？」

四葉「久し振りですね、風見先輩？少し用件があるのですが良いでしょうか？」

風見「謝罪以外に何かあるのか？」

四葉「いえいえ、実は模擬戦を頼みたくて。こちらとしても対等に戦えるのはそちらだけですので……………時間は来週で大丈夫ですか？」

いきなり掛かってきた電話に驚きつつも彼は了承した

風見「まあ、良いけど……………この前みたいにはならんよな？」

そう、彼にとつて一番の不安は前回の如月のようなことが起きないかどうかだ

四葉「それは、そちら次第ですね。逃げるのですか？」

風見「アア?! 負けた側が何言ってるんだ！」

四葉「それでは来週、お願いしますね……………」

風見「覚えておけ、次も家が勝たせてもらおうよ」

四葉「ハハハ、そうだと良いですね、では」

彼の一言の後に電話が切られる

風見「アレ？俺、もしかしてのせられた？」

風見の一言に秘書のバルバロイが呆れながら

「完全に挑発にのせられましたね」

風見「……………来週か……………彼奴、何を考えてんだ？」

こうして、地獄の二回戦が始まるうとしていた……………

四葉「ハハハ、次も勝つ……………か、今回は一番のチートでいきましょうかね？そうだろう？皆」

彼がそう言うと、シュトリゴン、サイファー、ピクシー、L i v、クーちゃん、如月の六人が整列していた。

そして彼女らを見ながら彼は話始める

「諸君、私は戦争が好きだ……………」

諸君、私は戦争が好きだ

諸君、私は戦争が大好きだ！



この地上で行われるありとあらゆるのがな……

今度の敵は因縁のあるラインアーク……

奴等に教えてやれ……我々の狂気をそして、実力を。」

そう言うなり彼は、腰からM1911A1を取りだし上に向けるそして、彼女らもそれぞれ武器を上に向ける

「LADY MOVE standby!!」

「「「「ヤッハー!!!」」」」

こうして、新しい仲間を迎えた彼等、次の相手は姫級より手強い連中、どうなるかは誰も知らない。

もしかしたら、これは悪夢になるのかもしれない

## ペイバックタイム!

0800 ラインアーク鎮守府 執務室

二人の男がそこにはいた

「久しぶりですね、風見先輩前は、家のクーちゃんに迷惑をかけたみたいで、後始末大変だったのでは？」

けしかけた本人が楽しそうに言うので風見は若干の苛立ちを持ちつつ答える

「何、問題はないよ。それにしてもそちらの戦力は？」

落ち着き払って答える彼に四葉はいつも通りに苦笑を浮かべつつ説明する

「まあ、今日は ノーマル三人にクーちゃん、如月に新入りの六人だな。そっちは？」

変わらない彼の言い方に疑問を持ちつつも答える

「フラジールにステイシス、ヴェーノローク、ホワイトグリントだろ後は白露に旗艦のシュープリスだ」

自信満々に答える風見に四葉は楽しそうに微笑みながら

「これは厳しそうですね。まあいいです、それではお願いしますね。……………Livを艦娘と思ってるなら好都合だ、今回こそ勝たせてもらおうよ」

「?何か言ったか?」

「いえいえおきになさらず。それではアリーナで会いましょう。」

片手をあげて控え室に向かっていく彼の姿を見て風見は寒いものを感じた

(何だこのかんじは嫌な予感がする……………まあいい如月とクーちゃんは脅威だがたかがノーマルじゃ敵ではないな

さてとあいつらに激励の言葉でもかけにいこうかね?)

そうして、彼もまた彼女らのもとに向かう

A M I D A 鎮守府 s i d e

秘書艦の電が作戦を説明する

「作戦概要を説明するのです!」

今回の依頼主は司令官さんの四葉一樹氏

依頼内容はラインアーク鎮守府との模擬戦なのです

尚、対戦相手はネクスト五機にイレギュラーの白露です

後模擬戦ですので弾薬は大本営持ちです。

今作戦の目的は二つ

敵の殲滅とL i v の戦力判断です

尚、こちらの戦力は低いので依頼主からはオーバードウエポンの使用が許可されてお

ります。

それでは、頑張ってください。

此方の戦力はシュトリゴン、サイファア、ピクシー、N—W G I X / v、L i v、如月です。

それでは頑張ってください。

我々はあなたを信じています。成功を祈っているのです!」  
そう良い終えると彼女等はアリーナに向かっていく。

そんな彼女等に彼は声をかける。

「わかってると思うが模擬戦だからといって手を抜くなよ?」

そんな彼の言い方に、如月は楽しそうに答えた

「分かっています、少し楽しんでくるだけです」

そういって、控え室から出ていった

A M I D A 鎮守府 e n d

ラインアーク鎮守府

風見が内容を説明する

「今回は以前うちと演習をしたAMIDA鎮守府だ。特に注意点は如月とクーちゃんの二人だ。」

皆は以前クーちゃんとやりあつてゐるからわかると思うがあいつの装備はホワイトグリントのと似ている。

距離をうまくとれ。

後はノーマルの三人だが……オーバードウエポンを使うかもしれん、うまく避けるよ?」

そう注意を促し、アリーナに向かわせる。

そんな中、ステイシスが彼に指を突きつけて宣言する

「見ているんだな、私達の実力を!」

そんな彼女に微笑みを向けながら彼は見送った。

ラインアーク鎮守府 side end

1000 ラインアーク鎮守府 アリーナ

「さてと、始めましょうかね?」

「始めるのは良いんだが……お前何を企んでいる?」

そう、以前演習をした時も何を考えているかわからない顔をしており今回もそうだつ

たのだ。

「何も?ただ無事にやりとげるのを見守るだけです。そうでしょ?」

「なんか引つ掛かるが、まあいいや始めようか」

「演習始め!」

そして、演習のブザーが鳴り響き始まった。

ラインアーク side

「演習が始まったな、各員距離を一定に保って散会!できる限り互いをカバーしろ!良いな!」

シュープリスがそう言うところ人はある一定距離を保ちつつ離れた

そんな中フラジールが白露に近づくと

そう、先程から白露が少し震えているのだ

「パートナー、大丈夫ですか?一応フラジール単機でも問題ありませんが」

「大丈夫だけど、前回の演習でのトラウマがあるから……ダメダメ!頑張らないと!」

そういつて、気合いを入れ直すが直後全員のリーダーに反応が映る。

「数は4?この感じVOB?つまりあいつか!けど残りは何?」

そう、クーちゃんのデータは入っているので分かるが残りの数の意味がわからないデコ

イかもしれないが。

「全員武器を構えろ、正面から削り取る！」

「ふん、政治屋気取りが貴様らには水底がお似合いだ」

「アレ？なんかおかしくない？」

「おかしい………：V O Bなのに速度が遅い………？」

そして交差する直前、全員が啞然とした………なぜなら

「不明な、ユニットが接続されました」

「「「「「?!」」」」」

そう？クーちゃんのV O Bにぶら下がるように三人がいたからだ………そしてそれぞ

れおよそ武器と呼べるようなものを持ってなかった

両腕が赤い子は柱？のようなものを持ち

青いのはチェンソーを

そして、焦げ茶色の子はよくわからないフジツボのようなものを持っていたのだ

「散れ?!」

シュープリスが叫んだ直後にいつせいで一斉に散るがフラジールとヴェーノロークが遅れる直後に

『全てを焼き付くす暴力が振るわれた』

ドクシャアア!

そう、ノーマルと思っていた連中がもうスピードで突っ込んで来たのだフラジールは柱で殴られて一発KO、空に舞い上がる。

ヴェーノロークもプライマルアーマーで巨大なレーザーブレードは耐えられるが直後のチェーンソーにやられた

「目の前にお星さまが!? キャアア!?」

「フラジール!!!」

「ここまでのようですね……………」

「ヴェーノロークさがれ……………敵は打つ」

「ク、機体損傷増大私たちも駄目なようです、シュトリゴン、サイファー撤退するはよ……………」

「仕方ないはね、シュトリゴン撤退します」

「ここまでか……………AMIDA鎮守府万歳! 我らの栄光を!」

突撃した三人は、プライマルアーマーにより装甲にダメージが入り、オーバードウエボンにより作戦続行が不可能だった……………

アリーナ観戦席



「四葉………貴様アアア！何を考えてるんだ！」

直後に彼の首を掴み上げるがアクアビットに止められる

そして、掴みあげられた彼も笑いながら喋る

「悪いが、あれは俺たちの切り札じゃない………最後の切り札は如月だ」

まるで楽しんで言う四葉に風見は背筋が凍った……

「まだ有るのか？化け物め………」

そう、言う風見に四葉は笑い始めた

「アハハハハハ！！化け物？上等だ！我等AMIDA鎮守府！勝つためなら手段は選ばん

！例えL i vを使ってでもな！」

そう言った四葉に風見は最後の言葉が気になった

「L i vだと?!お前………まさか?!」

風見の驚きの顔にたいして四葉は肩をすくめて

「そうだよ？新入りは『彼女』だ、俺が普通の子をつれてくるとでも？」

「だから、余裕綽々立ったのか………！」

「ま、そう言うこと。それでもまだ実戦はおろか、演習すらやったことがないんだ………」

どうなるかはあの子次第さ？」

そう言うのと彼は何処からかドーナツを取り出した

「まあ、ゆっくりしようじゃないか、時間はまだあるお茶を飲むくらいのこと……な？」

そして、四葉は紅茶を飲み始めた……

アリーナ end

ラインアーク side

「残存兵力を確認する彼方は三人こちらは四人だ。行けるか？」

シュープリスが確認をとり作戦を練り始めた頃、いきなり無線が繋がる

「ホワイトグリント……一対一で勝負をしましょう……」

そう言うと、向こうから両手を下におろしたクーちゃんがゆっくりと向かってくる

「ジョシユア………良いよ相手をしよう。」

そういつていこうとするがシュープリスに止められる

「何故一人でいこうとする？ ホワイトグリント……」

彼女のもっともな質問にホワイトグリントは答える

「彼女は私との戦いを望んでいる………ならわたしも答えるだけ、これは演習………問題ない。」

はつきりと言うホワイトグリントにシュープリスは呆れつつも、彼女を見送った直後にもう一度無線が繋がる

それは、狂気の代行者如月からだった……

「ありがとうございます、そちらの旗艦のかた……さてと、3体2ですが問題ないです、ここで仕留めるだけです。アハハ！」

そう言うなり、沖合いから光が突っ込んでくる

「目標確認………排除します………見ていてくださいマスター、私は成し遂げます」  
突っ込んできたのは……フロムからの死神だった……

「貴様………名前は？」

ステイシスが若干の挑発を込めて言うとそのなその少女は御辞儀をしてから答えた

「AMIDA鎮守府所属『レディーインヴォータックス』

愛称はLivです。始めましょうか？」

そう言うなり、4枚のシールドが彼女から展開される。

「ふん、たかがガラクタがスクラップにして………」

ステイシスが言い切る前に彼女を極太のレーザーが包む……

「ガハ?!き、貴様何者だ？」

「私は亡霊………排除するだけ………如月援護お願いします。」

「チ、白露一度下がって体制を建て直す掴まれ！」

そういつて、一度下がる二人

お互いの戦力は残り半分誰が最後に笑うかはまだわからない

「ペイバックタイム……さあ、派手にいきましょ? ウッフ、アハハ!!!」

## 黒対白　そして動き出す最狂の狂気

海上に二人の少女が向かい合う……………

「ありがとう、ホワイトグリント……………私のわがままに付き合つて貰つて」

「……………私は私自身の考えで動くから」

そう言いきる、ホワイトグリントだがクーちゃんN—W G I X / v に視線がいく

白い彼女にとって黒い彼女はかつての仲間と似ているもの

もしかしたら覚えているかもしれないと思つている

「さてと……………前回は邪魔が入つたけど……………今回は邪魔はない、始めましょうか？　ホワイトグリント……………今度こそ落とす。」

淡々としかしはつきりと言い、戦闘モードにはいる

N—W G I X / v

「そうね、戦いこそが私達の可能性だからね。」

そんな、彼女の言い方に礼儀をもって答える

ホワイトグリント

ピーン!!

そんな中、N—W G I X / vはコインを投げる

宙を舞っていくコイン

「落ちたらスタートよ」

そして、海にコインが落ちる。直後！

「good—bye！」

クーちゃんの本気モードが発動される。

ありつただけの弾幕が展開されるが

「遅すぎる！」

それを全て交わして分裂ミサイルを展開するも此方も交わされる

「…フ、フフ良いわね。これでこそ闘いよ！」

そして、両者一步も引かずに戦い続ける

が、純正ネクスト相手に、タワーによる技術からのサルベージ機体。

少しずつ押されていく

「やはり、私はこの程度………けれどだからこそ私は証明するだけ！」

そう言い、ホワイトグリントに近づいて………蹴り飛ばした。

「グ?!」

「ネクストは知らないでしょうね? ブーストチャージを」

そう言う、クーちゃんだが一つ問題があつた……………

(固?!これは足首が折れる!)

プライマルアーマーもあるネクストは恐ろしく固いのだ

しかしそんな中でも余裕を見せる

「アハハハハ!!!! ホワイトグリント!!!!それが貴女の力なの?」

「なめるなああ!」

そう言い、肉薄してタツクルをかますホワイトグリント

「そんなこうげ……………?!」

行きなり近づいてきたホワイトグリントにもう一発蹴りあげようとするが問題が起

きるそれは……………

水平線から光が飛んできたのだ

「ツ?!危ない!」

そう言うところクーちゃんはホワイトグリントを蹴り飛ばして回避させる直後、着弾した

バチバチ

「チ、如月のヒュージキヤノン! 如月! どう言うことだ!」

そう叫ぶクーちゃんだが、如月からも焦った声が聞こえる。

「すみません！此方も大変なんで、照準合わせられないんですよ！チツ！沈めイレギュラー！」

直後、如月からの無線が途絶える

「……………何で私を庇ったの？」

ホワイトグリントはあの行動に疑問を持つ本来なら

あの場合、そのまま立ってればクーちゃんの勝ちは確定していた

そんな質問にこう答える。

「言っただでしょ？私は貴女との一対一で勝負をしたいと言った。だから、例え流れ弾でも後ろからの攻撃は私の考えに背く。だから庇った、おかしい？」

そうはつきりと答えたのでホワイトグリントは確信した

(この人は例え敵でも助けられる強い人だ)

そして、ホワイトグリントに手を振って退却した。

一方そのころ如月&Liv

二人は苦戦していたイレギュラーに

「私が一番なんだよー！」

「チツ！イレギュラーが、沈めええ!!」



「そう言いヒュージキャノンを撃ちまくるが既に砲身の冷却が追い付かなくなってきた  
ているほどだ

「ほらほらー？ 私だけに構っていいのかな？」

「?!ステイシス?! 貴様沈んだはずでは!」

そう白露の後ろにステイシスがいたのだ

「最高戦力をなめるな!」

そう言い、ライフルと魚雷が如月に命中した

「クーまだです。L i v さえいれば……い」

そう気がついたら、L i v のダメージが大破寸前の中破だったのだ

「やはりここまでのようですね。お姉さま申し訳ありません。」

そう言い、何とか距離をとりつつも弾幕を張るL i v

終わるのも時間の問題かと思われる

そして、シュープリスのライフルが命中した

アリーナ観客席

「今回もうちの勝ちだな四葉?」

そういつて、挑発する風見

「……こんなことが、あり得ない。Livが俺達の最高傑作と如月が……」  
悔しがる四葉だが、アクアビットはそこで気がつく……

『彼の顔がとても楽しそうに笑っている』のだ

直後、アリーナに無線が繋がる。それは、如月だった

「私が……こんなところまで？あり得ない……」

勝ちを確信した風見は言う

「終わりだな、今度こそ。」

だが、アクアビットがそこで言う

「何で楽しそうなんですか？」

そんな質問に彼と彼女の声が重なる

「負けた……」

「ここまでのようですね……」

「とでもいうとおもったかい!? この程度想定範囲さー! アハハハハハ!!!」

「とでいうとおもいましたか?! この程度の損害計算の範囲内ですよ! キヤハハハハハハハハハハ!!!」

二人の狂笑が響く

「オペレーションパターン3!!! L・i・v始めますよー!」

そう言うと、L・i・v本体が消えて如月に装備品がくつつく

アリーナ

そう目の前で起きた、事象に風見は理解が追い付かなかった

「ハアアアア?! なんだよそれ!？」

「ハハハ!!! L・i・vは如月を元に行っているんだ……この位できて当たり前なんだよ! ギヤハハハ!!! さあ、今度こそ終わらせてやるよ……」

アリーナend

「なんなのよそれ?!」

「そんなことをして喜ぶか! 変態め!」

「狂ってるのは貴様だったか」

「……………異常者め」

ラインアークの残りがそう言うが今の如月はある種の恐怖だった

右手にはヒュージキャノンを持ち

左手にはL i vの使っていたレーザーライフルを

そして回りはシールドが飛び回る

「アハハハハ!! さあ、始めましょうか? ペイバックタイム!」

こうして、A M I D A 鎮守府の最後の狂気が動き出す。

## 悪魔と手をとったもの

「アハハハハハ!! さあ、始めましょう！ 私達の戦いを！」

如月……いや、今は不明機は笑いながら突撃してくる

「ク、化け物が……あれは本当に艦娘なのか？」

シュープリスが、攻撃を交わしながら当てようとするが今の彼女はそんなものではなかった

まず、第一にヒュージキャノンをアサルトライフルのように連射させてくるのだ。この時点でもおかしいが一番の問題はシールドである。

「バカな!! あのシールドは壊れたはずだろ?!」

そう、一度ステイシスが近づいて、アサルトアーマーを発動させて粉々にしたはずがいつのまにか復活しており、彼女の回りを飛んで弾を防いでいるのだ

「アハハ! そんな程度ですか? 動かないなら私から動きますよー? 『不明なユニットが接続されました。エネルギーが不足しています。ジェネレーターリミッターカット。オーバードウエポントリプルスタンバイ』」

彼女はそう叫ぶと背中と左腕の装備が変更される。

左腕にはまるでガスバーナーのようなものが取り付けられ、背中にはミサイルのプラットフォームが完成する

「キャハハハハハハ!!! ジェネレーター二つのリミッターをカットすることで出来るオーバードウエポントリプル!!! さあ! 交わせるなら交わしてみな!」

そう叫ぶなり、白露に突撃する。

「そんな重そうなの背負ってるなら動きは鈍いよねー! 当たらないよー!」

白露はヒュージキャノンを交わしヒュージミサイルすら交わすがここで左腕を使わないのに気づく

そして、彼女が笑っていることにも

「流石ですね、イレギュラー………けれどそこは、『私の攻撃範囲内』」

そう、彼女にとって、ヒュージキャノンもミサイルも困る程度油断させる罠でしかない。

「私の『正面』にたったのが運のつきでしたね♪」

そうして、左腕が降り下ろされる。

「そんなアホな?! 光が目の前に!?! キャアー!」

白露脱落!

ここで、アリーナの様子を一度見てみよう

「ク、アハハ、アーハッハー!?! 最高だ如月いいい!」

四葉が腹のそこから笑っているなかラインアーク鎮守府はそれぞれ同じことを思った。それはただ一つこの男の狂気だ。

勝つためなら、どこまでも墜ちる。例え、味方から罵られ蔑まれようが。

「狂人め、お前らはやっぱりいかれてやがる……!」

風見がそう言うが、そんなことは気にせず四葉は両手を広げて楽しそうに言う

「狂人? ありがとう、誉め言葉だよ。そもそも艦娘はネクストには勝てないなら全力でナニカスルシカナイ。それが我々だ、嫌、俺達の存在理由だ。」

楽しそうに笑い続けた後急に真面目な顔になる

「そう、俺たちなんてそんなものなのさ……歪んでいるのさ、全てな……」

風見にはこの男が壊れてるのかただの演技か解らなかった。以前の演習の時もそうだった。

本気で仲間を心配するときもあるし、その後の個人戦でも無理とわかっていてもやってみる感覚がわからないのだ

(掴み所が無いのは主任と同じなんだけどな)

そう思いつつ、自分の仲間たちの勝利を祈った……

アリーナ side end

戦いは激戦になってきた

そう……ネクスト三機それもその内の二機は化物とランク1位、普通なら勝ち目はないだが……

「クソ!?メインブースターがいかれそうだ!」

「ク……もう弾が!」

「こんなところで私が!」

完全におされていた

「アラアラ?その程度ですか……なら貴女からです……ホワイトグリント……」  
そうして彼女はホワイトグリントに狙いを定めて……

圧倒的火力で殺りに来た

「さあ!交わしきれますか!!」

「なめるなあああ!!」

そう叫び、圧倒的弾幕を交わし続けるが、少しずつ被弾する。

直後、ヒュージキヤノンの最大出力が発射された……

そして、当たったのはシュープリスだった……



「隊長!」

ステイシスが近づくと威力が強かったのか気絶しているようだ

「ホワイトグリント………援護しろ、アイツを落とす!」

ステイシスは仲間をやられたので激怒し突撃する

「水没が………仕方ない援護します!」

そう言い、ホワイトグリントも援護攻撃を始める

「チ!分裂ミサイルは驚異ですね………まあ、良いです………ファイナルリミッターカット

……クワトロスタンバイ……」

そう言うのと正面に変なのが付けられた………

「150門のパルス砲………マルチプルパルスの餌食になりなさい!」

そして、彼女は無理矢理全てを使用した

「吹き飛びなさい!」

「アサルトアーマー起動!」

「全弾斉射アア!!沈め化け物!」

直後、アリーナを閃光が包み込んだ

バチバチ………

「………引き分けですか………ガハ!」

そう言うのと、如月はアリーナに膝をつく、どうやら体に相当な負担が掛かっていたようだ……

そして、彼女の目の前にはボロボロの二人が立っていた

「引き分け……いや我々の負けだな……彼処まで勝ちたいと思う気持ちは始めてみた、立てるか？」

そう言うのと、ステイシスは如月に手を差し向ける

「すいませんね……私たちはそういうものなので」

何とか立ち上がるが動くのは辛そうだ

「ゴフ！ ジェネレーター全部ヤっちゃったみたいですね……これは不味いですね……」

そんな如月に近づくと一人

「お姉さま大丈夫ですか？」

そう、Livである

「フフ、大丈夫と言いたい所だけど無理そうね。おんぶしてくれる？」

「分かりました、お姉さま（イイヤツホオオ!!、お姉さまの太もも、ほどよい発育の体全て最高です！）」

そうして、如月を背負い彼女らは控え室に戻った

アリーナ 観客席

想定通りの終わりなのか四葉はパソコンの画面を見て楽しそうにしてから風見に礼をする

「ありがとうございます、先輩。良いデータが取れました」

そう言う四葉に風見は少し戸惑いつつ

「まあ、そつちが満足したならそれでいいけど……」

そう言うと、彼は立ち上がり出口に向かって歩き始めた

「クワトロか……まだまだ改良が必要だな」

そんな彼の眩きが聞こえなかったのか変える直前の彼に風見は言う

「お前らは何者だ？」

もつともな質問に一度振り返り英語で答えた

「I s t o p p e d a h u m a n b e i n g . . . . .  
I t i s t h e p o o r t h i n g s w h i c h

そう答えて、彼らは去っていった……

（俺たち？人間をやめたあわれなものたちさ……か、相変わらず分からん）

こうして、二度目の演習は痛み分けて終わった

## 珍しい来訪者

「えっと、あの、その、初めまして」

我等が提督、四葉は現在人生最大のピンチを迎えていた、え？今までの方がピンチ？  
気にするな。

それはさておき、なぜそうなったかを知るために時間を少しだけ戻そう

時間は演習から帰ってきた後の如月の実験室

如月が何か実験をしているようだ

「物体を転移できないかな？」

どうやら物体の転移について調べてるようだ

「転移さえできたら提督の部屋に………フッフ」

少しかだけ顔を赤らめているので考えていることはましなことではないのは確かだ

「さてと、理論は出来ました。後は実際に動かしてみるだけです。あ、ぽちっとな！」

そんなこんなで起動させるがここで気がつく

「アレ？私、座標指定しましたっけ？」

そうなんの考えもなしに、スイッチを押したのだ

そして、執務室が閃光に包まれた

「ゲホコホ!! 全く何なんだ? 敵襲か? ……誰だ!」

四葉は煙の中に誰かいると思ひ拳銃を向けるがそこで気づく、3人はいることに  
「悪いが銃を下ろして貰えると助かる」

そう言う男はACの様なものを纏っており、ガトリングを持っていた

「オウオウ、分かったよ分かりましたよ! だから責めてそれ下ろさない?」

そうして、お互いに銃をおろしたあと自己紹介をする

「この提督を勤める、四葉一樹だ。初めまして、そしてようこそ In the place that I left most in the world (この世で一番墮ちた場所に)」

そう言うのと、3人のうちまず、スキンヘッドの男が話す

「初めまして、ハインツガーランドだ。一つ聞きたいことがあるがまずは自己紹介だったな、俺の右にいるのが

UNACCのヘルムート、左がマギーだ」

そう言うのと、スキンヘッドの男の隣の人(?) が話す

「UNACCのヘルムートです。よろしく」

そしてそのあと、左のきれいな女性が話す

「マグノリア・カーチス、マギーと呼んで。よろしくね」

そして、自己紹介を終わらせたあと四葉が口を開く

「いきなりで悪いんだが……俺の予測通りなら……多分君達はこの世界の人ではないね。」

そう言うと、驚くだろうと思っていた彼にたいしてハインツは驚きもせずと言う

「以前も似たようなことがあったんだ、今さらもう一度おきても驚かない。」

「サイデスカ。まあ、良い。原因と思うやつに連絡する。如月いいい！今すぐ説明を要求するから執務室に来るように！」

そういつて、如月を待つ間にハインツが何かを思い出すように言う

「そう言えば、あと二人来てるんだが。」

「??施設内には反応が無かったんだが……まあ、取り敢えず担当が来たようだ話を聞こうかね?」

そういつた直後に如月が入室する

「提督！実験は成功しました！あれ？御客様ですか、初めまして私、睦月型 駆逐艦の如月です。」

「そうか、ん？駆逐艦の名前？貴女方は？」

ヘルムートが聞いた直後に何人か入室する。

「マスター！怪しいのが二人ほどいたからボコって縛り上げといたー！」

「すいません、マスター私は止めたのですが彼女が勝手に」

L i vとクーちゃんを男二人を簀巻きにして持つてきた

「アー、そいつらだ、残りの二人は。」

何やってんだかと呆れつつ気絶してる二人を紹介する

「ギウンター・ベッケンバウアーと 悠翔・エクスイステンツだ……おい二人とも大

丈夫か？」

そう言うが二人はうわ言のように、似たようなことを呟く

「ビュージキヤノン連射とか主任かよ………」

「二つ持ちとか聞いてないよ………」

全然大丈夫じゃないようだ

そんな様子に見かねたのたか四葉が指示を出す

「医務室に放り込んでくれ。」

頭を押さえつつハインツに話をしようとするが、クーの目線がハインツに向いている

のに気づき、質問する。

「どうした？」

「いえ……マスター何でもありません。」

「そうか、ならいい。さてと、ハインツさんドタバタしたみたいなので彼女たちについて詳しく話しましょう。」

そう言うのと、四葉はこの世界について話を始めた。

艦娘のことそして深海凄艦のことを

そして、自分のことを

「そうなのか、それで帰れるのか？」

「……でもっともな質問に四葉は如月を見る

「ええ、もう少し後3日ほど待っててくれれば。」

「……そうか」

そう言われ、少し困惑する

そんな彼を見て四葉が提案する

「暫くここで過ごせばいい、そうだな報酬は身の安全と衣食住。提案としては模擬戦をしてもらいたい、どうだい？『黒い鳥』」

彼からの提案は破格的ともとれる。

だが、最後の言い方に疑問を持つ



「貴様何者だ？俺は黒い鳥と名乗ってないぞ？」

そう言うのと、彼はまるで財団のようにおどけてから喋る

「おっと、これは失礼、まあ、私も色々あるんでね。調べようと思えばある程度は知れる（ヤ、ヤベー本物の気迫怖ー!?）」

そんな言い方をする彼にハインツは警戒しつつも頼る当てがないので渋々承諾した  
「まあ、こんな所だが歓迎するよ。」

そして、それぞれが互いについて話終えた後、ギウンターと 悠翔の二人が起きる  
「ツ?!あれ?ここは?」

「ギウンター大丈夫か?」

「ああ、だがここはどこだ?」

そう聞く彼にハインツは説明する

「なるほどね、それにしても……主任と同じ存在を見た。」

「ヒュージキヤノンとヒュージミサイルを同時に使ってくるなんて……………」

そう言う彼らに当の本人が近づくと

「お兄ちゃんたち強かったよー!普通は5分ももたないもん!」

「!!」

すぐに武装を展開するが何処からか四葉の楽しそうな声が聞こえる

「Livダメじゃないか御客さんに武器を向けちゃー、ほら謝りなさい、悪いがそのお二人さん銃を下ろして貰えると助かる」

そう言うのと彼女はごめんなさいと謝り退出した

「悪いね、あの娘ああ見えていい娘なんだけどね。さてと、自己紹介といこうか？」

おんなじなので省略

「そうか、まあよろしく。」

「おう、暫くだがゆっくりしてくれ明日は地獄だから」

そう言うのと、四葉は医務室から出ていった。

#### 四葉 side

「ふーんISねえー？面白そうだ。如月ー？どう思う彼？」

彼の声はいつも以上に弾んでいた、次のデータは本物が相手だからだ

そんな彼に如月も楽しそうに答える

「It is the best for perfect new data.

(完璧です、新しいデータとしては最高です)」

そうこの二人はテンションが上がると英語を話す

「それに彼はオーバードウェポンを使えるみたいですし……フフフ、我々の科学力を

御披露目出来そうです」

そんな彼女を見て、四葉は一度立ち止まり彼女を抱き締める。

「て、提督？あの、その、やるならベツトで………」

「勝てるよな？」

そう、彼が確認をしたのはまだ見ぬ相手に対して恐怖してないかの確認だった

「大丈夫です、私はいつも通りです。」

「そうか、ならいい。」

そう言うのと彼はたまった書類を片付けるために執務室に歩き始めた

ヘルムート side

AMIDA 鎮守府 食堂

ヘルムートは案内された食堂でハインツと過ごしていた。

どうやら、ドイツ出身の娘がいてドイツ料理を出してくれたらしい

だが先程から3人ほどの視線を感じる

「誰かいるのですか？」

そう言うのと、右腕が赤い娘が現れる

「アラ？気がつかれましたか。初めまして、UNACI ピクシーです。ああ、その影

に妹のサイファアとシユトリゴンがいるは二人とも、バレてるから出ても良いわよ。」

彼女が言うのと、壁の影と机のしたからそれぞれ出てくる

「やっぱり分かるもんなんですかね？」

「お姉ちゃん疲れたー！」

「こら！文句言わないの！」

そんな彼女らだが、即座に気がつく…………

「UNAC? 私と同じ存在ですか？」

「ええ、まあ……………貴方のようにアセンブル変更は出来ませんは」

そして、それぞれが話を始める、だが途中で気がつく

「貴女達はまともに戦えるのですか？」

そう、装備品が見当たらないのだそれが引き金になるとも知らず

カチャカチャ

「上等じゃないか……………野郎確実に明日にでもぶち壊してやる」

ヘルムートは気がつく、いつの間にか3人はそれぞれオーバードウエポンを展開して

いた

サイファアはヒュージブレードを

ピクシーはマスブレード

シュトリゴンはヒュージキャノンを構える

「悪いけど、即時展開はお手のもの」

「姉さんには劣るけど速いよ？私」

「アハハ？お人形さんもつかない？」

そう、完全にそれぞれチャージすら終わっている

「言葉が過ぎたな、悪かった。」

すぐに謝るが、確実に一触即発だがそこで、手を差しのべる者がいた

「全く3人とも何をやってるのですか……………」

そう言うと、高速で動き3人を気絶させるのが1名

「初めまして？かしらね？ヘルムート、いえ『黒い鳥』の仲間」

そう、現れたのは死神だった

「Hello、ハインツ、N—W G I X / v 今の名をクーちゃんです。私の妹達が御迷惑を……………」

「貴女は…………Jなのですか？」

そんな質問に対して彼女は笑いながら答える

「んー？そうだったとしか言えませんね。記憶にはありませんが記録にはありませんね

……さてと、ヘルムートさん？流石に私もこの場で事を荒くする予定はありませんが……売られた喧嘩は買います。明日覚えておいてくださいいね？」

そう言うのと彼女は部屋から3人を引き摺りながら出ていった。

尚途中で外からごめんなさいお姉さま?!とか、待つてクーちゃんその顔はヤバイの!?や、待つてゴメンナサアアイ?!など聞こえたが気のせいだろう

まあ、そんなこんなで次の日

「さてと？始めましょうかMr. ハイנטツお願いしますよ？全力でね。」

黒い鳥と死神の本気の勝負がスタートした

## 一回戦！

ハインツ達に来て2日目

予定通りの模擬戦が行われることになった

「さてと、本日はお願いしますよ？ハインツさん？」

四葉はパソコンにデータを打ち込みながら準備をする

「ああ、確認だが此方は俺を含め四人でそちらの人数は？」

ハインツが確認をとる

「最初に家のUNAC3人とクーちゃんをそれが撃破されたらLivと如月と俺の3人の合計7人だ。まあ、俺としては分けても良いんだが実践形式を取らせて貰う。増援として考えて貰って構わない。」

そう言うと彼は自分の機体を出す。

「君のよりは劣るかもしれないけどね、私は自分で動く方が好きなんだけどね………実践は久しぶりだから見劣りするかもしれないんが宜しくね。」

そして、自分の控え室に歩いていった

「足は重2か、それにKE CEをそれぞれ上げて重そうだな、俺も人の事は言えない

が……………」

ハインツも指定された場所にて、開始を待つことにした

AMIDA鎮守府

龍驤とU-511が作戦を説明する

「ミツシヨンは今来てる御客さんの、ハインツガーランド並びにその仲間の撃破や。

まあ、UNAC部隊でヘルムートを他はクーはんが何とかしてくれるやろ」

そう言うのと、龍驤はその後のプランをU-511に任せる

「尚、もし四人がやられた場合は、提督、Liv、如月さんが出ますがほぼでないと思います。ある意味これは無駄になるのでは？」

U-511が疑問を持つがそれに対して四葉は……………」

「おいおい？何言ってるんだか、相手は黒い鳥だぞ？これでもどうなるかは分からん……………まあ、やるだけやってみよう」

それだけ言うと、続けて彼は楽しそうに言う。

Well, shall we go with show time? I go

loudly! (さあ、シヨウタイムの時間だ、派手にいこうか?)」

こうして、演習がスタートする



「さてと？彼奴等はよく分からんが警戒するか、悠翔、

ヘルムートは右を、俺とギウンターで左を見る。」

ハインツははじめての相手なので変なのと戦ったのを思い出す

(あの時は、動きが分からなかったから様子を見た今回もそれでいくか。)

そうして、作戦を決めた直後。目の前の異変に気がつく

「ん？なんか光が？」

ギウンターが遠くからの光に気がつく

「ハインツ……………まさか……………あれ」

悠翔が何かに気がつく

「ああ、俺の予測があつてれば……………」

二人同時に飛んできた存在に気がつく

「死神か！」

そう、Jと呼ばれたものと同じ登場の仕方だったのだ

ドツシヤアアア!!!

海に大質量の物体が落ちる

「ツ！散れ！」

そう言うとハイインツはガトリングを撃ちながら後退した

「見つけたロボット野郎!!」

3人の声が響くとヘルムートを光が包んだ!

「ガハ!」

ヘルムート行動不能

「おいおい……なんなんだよあいつら」

そう目の前に写ったのは昨日の三人だった

「さてと? 演習だからと言って手は抜きません!」

「私は私を突き通す」

「お兄ちゃん遊ぼー!」

だがどう見ても殺しにかかっていた

「グラインドブレードにマスブレードにヒュージブレード? なんつーブレードパー

ティー?」

悠翔が呆れているがすでに戦闘体制だった

しかしそんな彼らを笑うようにピクシーが話す

「リミッターカットしてますからね♪いくらでも使えますよ?」

そう言うと、サイファーが、視界から消える勢いで動き始めた

「確かに動きは速い………けれど………動きが単純！」

そう言うとかトリングですぐに落とされる

「ヤツパリカアア!!」

サイファー脱落

「サイファー………何やってんだか………シユトリゴン行けるわね？」

「うん！シユトリゴン単機でも問題な………」

シユトリゴンが言い終わる前に後ろから高速で何かがぶつかる

「私終わりにいい!!」

そう蹴り飛ばしたのはギユンターだった

「戦場で突っ立ってるとか間抜けだろ」

そう言い、ピクシーを探すが見当たらないのだ

「さっきの間に距離をとられたか………悠翔！ハインツ！………？無線が通じない………」

ジャミングか中々やるな」

そう言うとか背後からの殺気を感じ、横に逃げる

「アラ？意外と素早いのですね？」

「柱振り回すとかお嬢さんもかなりのじやじや馬だな？」

「フフ? 誉め言葉として受け取っておくは、それと一言……とつと落ちなさい!」  
演習であるのを忘れて殺しにかかるピクシー、だが相手は『初代黒い鳥』。そう簡単にはやられなかった。

「おいおい……動きが簡単じゃないか?」

突っ込んでくるのにあわせて、交わし、撃つ。

やっっているのは簡単なことだが難しい。

「ツ!? ダメージ増大……ここまでね……さすがね黒い鳥。私の負けよ。」

それだけ言うと、ピクシーは撤退した

「………彼奴、自分がKE弱いから諦めたんだな。」

最初からギョウターは気付いていた。ピクシーはCE装甲の値が高いがそれ以外は低い機体。貫通ダメージが多かったのだ。

だがそれでも、スキヤンの時点で『まだ75%残っていたのだ』

「あえて弾を使わせなかった? 何を考えている……。おつと、ハインツ達の援護に行かないとな。」

そう言うと、ハインツがいると思われる方角に移動を始めた。

ハインツ side

今二人の目の前にいるのは漆黒の少女だった

「初めまして、いえ、お久し振りです。黒い鳥。」

声は少女の物だが、言い方や声の感じはかつてのJに似たものがある

「ほー？君が彼の切り札か。確かに。強そうだが……………」

ハイイツも、悠翔もスキヤンの時点で気がつく

（俺らの方が有利！）

そう彼女の今の装備は全部実弾、しかし彼女のKE装甲はここだけ1000を切っているのだ

「さてと、始めましょ……………!?」ドオン！

そういきなり、クーちゃんが後ろから撃たれたのだ

「これは……………マ、マスター？いったいどうして？」

そう……………そこにいたのはフルTEのACだった

「悪いけど……………今回君はお休みだ……………てか、今気がついたんだがクー、お前疲労が残っていたの隠してるだろ。」

そんなんじや、全力も出せないし、何より相手に失礼だ。わかつたら下がれ、良いな？」

四葉はクーちゃんに撤退命令を出し下がらせた

「わかりました、N—W G I X / V 撤退します。」

そして入れ違いに、ギョントーが到着する

「すまん、ハインツ大丈夫か? 主任!? 嫌、別人?」

そう、今の彼の機体はかつて主任と呼ばれたものの機体そんな彼に楽しむように四葉は話す

「アハハハハハ!? やるんなら本気でやろうか!? その方が楽しいだろ! ギヤハハハハハ!!!」

こうして、二回戦が始まった

どうなるかは分からないただひとつだけ言えるのは……

この場にいるのは全員真つ黒なやつしかいないただそれだけ

L a u g h ; l a u g h ! L a u g h ! !

「さてと？お兄さん少しだけ本気でいこうか！その方が楽しいだろ!!」

そう言うのと四葉は肩の装備品を使用し始める

それはミサイルの様なものだが中身が分裂した

中身の不気味さに思わず身構える三人

「おいおい？何をたくらんでいや……………!?!」

「ウソだろ?!」

「気持ち悪!?!」

そう中身から出てきたのは……………蟲だった

「家が何でAMIDA鎮守府と呼ばれるかて説明してなかったな……………この蟲AMIDAを大量に使うからだ！避けれるもんなら避けてみな！10万匹全て!」

叫んだ直後にミサイルから大量に出てくる。

「弾の無駄だ！近づいて蹴り飛ばす!」

ハインツが自分から飛び込みブーストチャージを仕掛けようとするが

「アミー！（AMIDA鎮守府バンザイー!）」ドーン!

いきなり爆発し、ハインツの機体にダメージが入る

「クソ！こいつら自爆型かよ！ギユンター、悠翔！距離をとって撃つしかない！」  
そう言つて距離をとるが

「おいおい？俺を忘れちゃー困るな？」

四葉がレザライを撃ちながら近づく

「チツ！とつとと沈めこの紙装甲！」

ハインツがガトリングを撃ちまくるが

「パターン2行け！AMIDAよ一斉発破だ！」

「アミ！（提督バンザイ！）」

「アミアミー！（息子よ！これが父の生きざまだ！）」

「アミアミアミー！（如月様バンザイ！）」

ドーン！ ドーン！！ ドーン！！

叫んだ直後に辺り一体で爆発が起きる

「ク！こいつ爆発すら煙幕に使つてるのか！なら！」

ハインツはそう言うのとあえて自分から突つ込んだ

「馬鹿め！……………あ、」

そう四葉は気がついた今ここで起爆されると自分も巻き込まれることに



「やるねー？けどさーお兄さんちよーつとおこっちゃうよー？」

そう言うのと四葉の右腕のKARASAWAが変化する

「全くこれを使わせるとか君たちは本当に素晴らしいよ。」

そこに現れたのはヒュージキヤノンだった

しかし違うのは砲身が二つになっていることだ

「来なよ、黒い鳥それがお前の可能性なら。まあ、ここで殺られちゃうかもしれないけどな、アハハ」

それだけを言うのと連射し始め周りすら爆発させていく

「Hey, brag, what happened? I die when it

does not work! Ha—ha!!!（ほらほら、どうした！動かないと死

ぬぞー！ハッハー！）」

そしてさらに撃破されたぶんのAMIDAを増やしていく

「まだまだあるぜー!!速くしないとそっちは弾切れちゃうんじゃないか!」

そう叫ぶが一つだけ誤算があった

「動きが少し単調なんだよ!」

いきなり悠翔が飛び出し攻撃を交わしつつ近づくそして……

「終わりだ!」 ガアン!

ブーストチャージをくらい四葉の機体が大破する

「アハハ、アーハツハー！最高だお前！」

直後に彼の機体を閃光が包んだ。ギンターがミサイルを当てたのだ

「悠翔やったか？」

ギンターが確認をとる、それもそのはずまるで主任のように動くから再起動もあり得るのだ

「大丈夫だつて、確実に蹴り飛ばした、動けないはずさ。」

そう言うが、煙幕が晴れた先にいたのは

奴だった

「おいおい？誰が死んだだつて？この程度想定の………」

ガアン！

再起動した四葉を後ろからハインツが蹴り飛ばす

「やられたなら堕ちてろ狂人」

それだけ言うと、悠翔とギンターをカバ―する

「酷くね？折角、フラグたててくれたんだから回収してあげたのに。まあ、良いけど。俺もやられちまったかー。如月ー後は頼んだー最初から全快で良いよー。」

それだけを言うと、四葉は控え室にフラフラと飛んでいった。

「さてと？後は如月？だっけか？まあ、この調子で行くか。弾はまだあるし。」  
悠翔はそう言うのと、目の前に近づくと光に気づく

そして一番の狂気が登場する

「初めまして、黒い鳥の皆様、私、如月&Livともうします。」

如月の説明にハインツが質問する

「二人で一人か？」

そんな質問に彼女は笑いながら答える

「アハハ、まあそんなところです。始めましょうか？」

そう言うのと彼女の左手にはヒュージキヤノンが右手にはKARASAWAが装着される。

「貴方達はどこまでもつてくれますか！キャハハハ！」

そして戦いの火蓋が切って落とされた。

最後に笑うのは誰だろうか？それはまだ分からない。

## 笑うものは人ではない（よくあること）

AMIDA 鎮守府 控え室

時間は演習の始まる一時間ほど前

今回の如月の装備で龍驤は気になるのがあった

「なあ？液体窒素でなんや？始めて聞くから分からんのやが」

そう今回如月は背中に液体窒素の入ったボンベを積んでいるのだ。

「液体窒素は凄く低温の液体です。彼女の武装は熱を凄くもつので冷やすためにはあれが一番いいんです。まあ、別の使い方もありますが。」

帰還した、クーちゃんが分かりやすく説明する。

しかし最後の言い方に疑問をもつ

「なるほどな、別の使い方？」

「ええ、わざと銃を冷やしてバレルの精度を高める荒業です。けどその分ダメージも大きいので無理はできません。」

そう言いつつ、如月に目を向けるクー。

「まさかですが投げる気ですか？」

彼女ならやりかねないと思うが別の答えが出てくる。

「やらないわよ、だって面白くないもの」

彼女にとって今日の演習の目的はデータの収集無駄なことではない、それが今日の彼女の考えだ。

(そう思っていた時期が私にもありました！)

時間は戻って、現在3対1

3人は押していた、何故なら

「ほらほら！どうした！多数には慣れてないのか！」

動きが早い上にそれぞれの連携が上手いので押されているのだ

「仕方ないですね。セカンドで止める予定でしたが………やつぱりやるんなら本気で行きましょうか！その方が楽しいですしね！アハハハハハ！！『クワトロ ready!!』」

直後如月の背中と左腕それに肩のパーツが変更される

「まだ隠し玉があるのかよ！変態め！」

悠翔が叫ぶが叫びたくなる気持ちも仕方がない何故ならば

『これ本当に勝てるのか？てか、そもそも動けるの？』

としか言い様のないものだったのだ。

まず右手はヒュージキヤノン

左手はヒュージブレードに

背中にヒュージミサイルとこの時点で動けないのが確定なのに肩につけられたのが問題のある品だった

「最新鋭の多弾頭AMIDAミサイル………ウフフ？全部交わしてね？」

前回、四葉が使っていたAMIDA散布装置は肩に一つずつだった。だが今の如月は………

「片方五個ずつです！さあ、全力でいきますよ！」

5倍のAMIDAを展開した。

「だあー!?見た目のわりにえぐいなお嬢さん!？」

「っ?!なんだあれ!？」

そうAMIDAを一斉射出した直後に如月がなにかを投げる

「凍りなさい!？」

そう、それは液体窒素のボンベだった

「いったい何を考えている!？」

如月がボンベを撃ち抜き周りのAMIDAを一斉に凍らせる。

「こいつ自分の武器を使えなくした何故?まあいい!今がチャンスだ!？」

ギョントーがトリガーを引くがあることに気がつく

「?!銃が凍つていやがる!ここいつ最初からそれが狙いか!」

一度引こうとするが目の前にはもうチャージの完了した彼女がいた

「die!」

そして……目の前で撃破された

「ギョントー大丈夫か?」

ハインツがすぐに確認をとると

「ああ、演習だから。ダメージ計算は通るようにしていたみたいだ。無事だよ、だが戦闘は不可能だ撤退する。」

「わかった、気をつけて下がってくれ。」

ハインツがギョントーに撤退を指示する。

そして一度距離をとり悠翔に繋ぐ

「行けると思うか?」

「俺に考えがある。囿になるから、グラインドブレードで突撃してくれ。」

そう、いくら彼女でも『すべてを焼き尽くす暴力』には

耐えれないはずだ

「分かった、なら援護頼むぞ」

「任せな、確実なチャンスを作るから。」

ハインツは悠翔を信じまた、悠翔もそれに答えるために全力をだす「さてと！全力でいこうかお嬢さん！」

悠翔は右から回り込むようにして、如月に攻撃を始める

「アツハハー？その程度ですか？秘技AMIDA wall！」

如月が叫ぶと一齐にAMIDAが盾になり攻撃を防ぐ。

だが所詮AMIDA、少しずつ削れていく。

「もう一押し！」

悠翔はもう少しだけ削ろとするが直ぐにハインツから

指示が飛ぶ

「下がれ！」

直後にハインツがグラインドブレードで突撃した

「カハ！こ、ここまでのようですね。」

如月が海面に膝をつく。

「チツ、タフな奴だよお嬢さん。」

そう言い如月に手を伸ばす。

「ありがとうございます。さてと！ここで終わりと思いませんか？」



如月の言い方に疑問をもつ

「何？お前何をいつて……………」

そう、目の前に大量のAMIDAがいた

その数およそ100万匹ほど

「アハハハハハ!!引つ掛かりましたね吹き飛びなさい！」

如月が叫ぶと一斉にAMIDAが自爆する

「しまっ?!」

ドーン！

AMIDA鎮守府 勝利

こうして波乱の演習はAMIDAの自爆による勝利と言う、何ともあつけない終わりがたをした

## 君の信じるもの

1900 AMIDA 鎮守府 食堂

現在、慰労とお別れ会を兼ねて盛大なパーティーが開かれていた

「それでは、今回ご協力してくださった3人に向けて……………乾杯！」

四葉が音頭をとり皆楽しそうに食事を行う

「いやー、それにしても流石ですねハインツさん。まさかうちの如月を倒すとは……………」

四葉が誉め言葉を送るが、ハインツはそれに対して自嘲ぎみに

「なに、彼奴等のおかげで勝てたのさ。」

と言う。だが、それを気にすることなく何処からかドイツ産の黒ビールを渡す

「どうぞ、御礼として飲んでください。そこのお嬢さんと。」

四葉はそれだけ言うと、自分の艦娘達のところに行き労いの言葉をかける。

そんな様子を見ながら彼はギョんターの所に行く

「楽しんでるか？」

「まあまあな、それにしても彼奴、結構いい奴だな。見ず知らずの俺たちを匿ってくれたんだ。」

「その代わりにひどい目に遭ったがな……………」

そう言いきるハインツだが悠翔がいないことに気がつく

「アレ？悠翔の奴は？」

そう聞くとヘルムートが、彼なら海風に辺りにいったと言う。

まあ、馴れてないから仕方ないかと思いつつ、ハインツは楽しむことにした。

静かに食堂から出ていった四葉に気が付かずに

A M I D A 鎮守府 防波堤

「いい海だな、初めて見た。」

悠翔は静かな海を見ていた。思い出すのは演習の時、四葉の行動まるで自分になにかを考えさせているようだった

(分らないな……………あの人)

そう思う悠翔だったが後ろからの気配に気が付き振り替える。そこには四葉がペツトボトルを2本持っていた

「炭酸で良いかな？悠翔君」

それだけ言うとう悠翔の近くに座り、飲み物を渡す

「せっかくのパーティーなのに楽しめなかったかい？」

そう聞く四葉に悠翔は首を横に振りつつ

「ああ言う空気が苦手なだけです。」

そんな答えに四葉は笑いつつ

「俺も苦手だね、そうそう君を誘いに来た。軽くドライブでも行かないか？」

それだけ言うと、彼は楽しそうに歩き始める。

少し疑問を持ったが気になったので悠翔は着いていくことにした。

しばらく歩いてると、そこには車庫があつた

「休日にならぬで直していたんだ。まだ俺の艦娘たちも知らない。どうだ？テストドライブに付き合うかい？」

楽しそうに言う四葉だが悠翔はドン引きしていた

(これ、ポルシェだよな?!良いの!?!こんな高いのに乗つていいの?)

そう彼の車はポルシェだったのだ

「解体屋に転がっていてな、こんなご時世だから一台50万程で買えた。やつぱりさ戦争だからさ、こう言うものの値段は下がっちゃうわけだよ。一応言つとくが新車だと軽く2000万は下らない。まあ、気にするな。パーツのほとんどをカーボンにしてあるぶつけたところで200万程で済む。」

そう楽しそうにいい、エンジンをかける

水平対向6気筒の良い音がする

「乗りなよ、近くの山までいこうか」

そして悠翔がビクビクしながら乗り、シートベルトをしたのを確認するとゆっくりと走り始めた

20分後、その山の頂上について

そこは満点の星空だった

「鎮守府で見るのもいいがこう言うところの方が良い。」

楽しそうに話をしているが悠翔は一つだけ驚いたことがあった

「激しいワインディングロードなのに横Gの変化が全く無かった………」

そここまであまりにも安定して上ってきたのだ

おかげで眠りそうなのだ

「さてと！悠翔君君に一つ質問だ！」

いきなりの質問に悠翔は身構えた。

「君は一体何のためにそれを使い戦うのか、君自信の言葉で答えてほしい。」

さつきまでの人の良さそうな雰囲気は消え、歴戦の人物のような感じになる。

悠翔はしばらく考えたあと、真っ直ぐに見つめ

「俺は、おれ自身のために戦う。」

そう言いきる悠翔に四葉は楽しそうにしつつ

「フフ、良いねその目、真っ直ぐに素直だ。変なことを聞いて悪かったな。」

聞くだけ聞いて、車に向かって歩き始める

そんな彼に悠翔も聞く

「質問を返すように悪いけど、じゃあ何で貴方は戦う?」

その質問に対して一度立ち止まり、星空を見てから振り返り

「んー?何でだろ、俺は戦いのなかでしか自分を探せない。見つけたいんだろ。自分の存在理由を案外簡単なのもかもしれんがな。」

それだけ言うと、車に乗り帰るよ?とだけ言い鎮守府に向けてまた走り始めた

そんな帰り道

「そう言えば俺、テストドライブに来たんだった。悪いけどシートベルトきちんとしてるよね?かなり揺れるから。」

それだけ言うと、ギアを二速に叩き込む。

さつきまでの安らかなイメージは消え一気に速度が上がる

「ちよ?!崖が!崖がああ!」

悠翔は目の前で起きることに恐怖を感じた、今までの人生のなかでもかなりの恐怖が襲ってきた

「落ち着きなつてくまだ4速だよ。おっとコーナーかそんなじゃ攻めますか!」

そう言うのと、四葉はブレーキを思いつきり踏み、シフトダウンをしつつコーナーに飛び込む

そして車が思いつきり横を向く

「ぶつかる!絶対ぶつかる!」

悠翔が騒ぐがそんなことも気にせずに

「安心しろ、まだ半分のペースだから」

とだけ言い加速していく

そんな中でも悠翔は少しずつ落ち着けるようになってきた。

この人なら大丈夫とだがその幻想も一瞬で壊れる

左への緩やかなカーブの最中、侵入直後に

「喉乾いた」

とだけ言いハンドルから手を離しペットボトルをを飲み始めたのだ

「ちよつとおおお!?!ハンドルに手戻してええ!」

そう叫ぶがそれを気にせずに飲み終えたのかペットボトルをホルダーに戻す

その間にも車は崖の方のガードレールに近づく

そして、ギリギリのところまで抜けたのだ

「ふーん、まあこんなものかおとと本気で攻めますか。」

「嫌だああ!!おろしてえええ!!?」

悠翔の悲鳴が山にこだました……………

2100 AMIDA 鎮守府 憲兵詰所

悠翔は派手に爆睡していた

「ギャハハ、それは派手にやったみたいだな！提督さんよ！」

思いつき隊長に怒られていました

「全く貴方にそんな趣味があるとは思っていませんでした。」

そう怒ってるのは門限を過ぎたからだ

「仕方ないでしょ、下道混んでたんだし。」

それだけ言うと悠翔を背負い運んでいく

「なあ、提督……………お前は満足したのか？」

隊長の質問に彼は一言 ああ とだけ答え彼を運んでいく

「主任楽しそうですね。」

キャロルが聞く

「ああ、これだから面白いんだよ人間てやつは、さてと提督の差し入れのお酒でも飲みま



すか？」

こうして、楽しいパーティーの時間は過ぎていった

次の日

A M I D A 鎮守府 執務室

「お世話になった、ありがとう。」

ハインツが礼を言う

「何言ってるの困ったときはお互い様だよ。また会おう。」

四葉はそう言うが

「人間次に会えるのなんて分からないわよ。」

マギーが微笑みながら答える

それに対して四葉はそうだなと答えSDカードを渡す

「演習の戦闘データだ、役立つかもしれん、追加報酬のようなもんだ受け取ってくれ。」

「提督……準備ができました。」

如月が装置を起動させる

「そんじゃ元気でな。」

四葉が手をふる。

そして彼らは元の世界に帰っていった……………

「ハインツ ガーランド、良い男だったな。」

「そうですね、さてと提督！今日も一日頑張りましょう！」

如月に連れられるように四葉も歩き始める

( Do not become another person ; it is  
n v i r o n m e n t t o c h a n g e . I t i s g o o d l u c k  
t h a t f o r t h e m 『 人は変わらない変わるのは環境だ。彼等に幸あれ』 )

四葉は彼等の幸せを祈りつつ。仕事に戻った

## チューニング

ある日の土曜日

四葉は自分の車をいじっていた

(それにしてもこれ……………かなりいじってあるよな確かノーマルの時点だと1400kgほど。そこに、カーボンパーツもある。前のオーナーが、売ってから何人もの間を渡り歩いたみたいだが……………ん?)

ここで四葉があることに気がつく。

それは後ろのブレーキランプとヘッドライトを交換するときのだ

(パイプフレーム?アレ?ポルシェはてか、普通の車はパイプフレームなんてしないぞ……………)

そう、ノーマルの車はモノコックボディと言われるものだイメージ的には……………作者には無理なので調べてください。

一方でパイプフレームはその名の通りパイプをベースにして組み立てられる。

(おいおい……………こいつは……………まさかな。)

そう今の彼には1つだけ思い当たる節がある。

そう彼がこの世界に来る前によく読んでいた

『湾岸ミッドナイト』その中の一台。

ブラックバードの車と同じ仕様なのだ

(てなると………ア、アハハ。マジかよータービンまで入ってる。てなると………パ  
ワーは600馬力程度。)

少しだけ興奮を覚えつつ、四葉は決める

「俺はこいつを長く走れる車にする。」

そうとだけ決めると、また少しずついじり始めた。

自分の楽しみのために。

その一方 クーちゃん

自分の部屋で楽器の調整をしていた

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

どうやらバイオリンを弾いているようだ

コンコン

「どろどろ…」

突然の来客に驚くクー

そして入ってきたのは

「楽器の音がして気になった」

U—511だった

「そう、今お茶を用意するは」

「そう言い、部屋のポットから紅茶を入れ始める

「そのバイオリン……音が少しずれてる。」

突然の指摘に驚くクー

「そうなの？変ね？さっき確認したときにはあつてると思ってたけど。」

「そう言いもう一度弾き始める

「♪♪♪♪♪♪」

「確かにずれてるはね……仕方ないはまた治しましょうかね」

「そういつて始めようとするがU—511が袖を引っ張る

「私も一緒に演奏したい。」

「そうして、自室からチェロを持ってくる

「良いわよ、一緒にやりましょうか。」

「そして、二人は楽しそうに演奏会を始めた。」

同時刻 如月 研究室

L i v の調整を行っていた。

「うーん? まだジェネレーター出力にブースターが耐えられませんねこれ……………」  
「どうやら機動性の調整をしているようだ。」

「アン! あの……………お、お姉さま…ヒヤン! そ、そんなにさわると!」  
「一体何処を触ってるんだか……………」

「せ、背中はやめてえええ!!」

くすぐつたいようである。

「こーら! 動かないの……………全く龍驤さん! お願いします」

そう言うのと部屋の端っこで A M I D A と戯れていた龍驤が L i v の前に現れる

「動くんやないで〜」

「イ、イヤアアアア!!??」

尚このあと、無茶苦茶お花畑になった。

1500 食堂

「イヤーそれにしても電ちゃんは大変だねー!」

「隊長……………それ以上はセクハラです。」

「どうやら、隊長と電、キャロルがいるようだ」

「隊長さんいつもお仕事お疲れ様なのです!」

電からのあどけない笑顔により二人は轟沈した

「これが人間の可能性………」

「言つたるキャラルこれがそうなのさ………」

大の大人が二人も鼻血を出している様は何とも滑稽だ

「ハワワー！大丈夫なのです?！」

電が心配するが余計に出血をよぶ

「これは良いものかもしれない（わね）」ガク

「え、衛生兵さん?！」

そして、今日も平和な時間は過ぎていく………

とある海域      とある場所

「大いなる存在 イレギュラー プログラム修正……排除します」

どうやら不味いのも動き始めた………

その少女は真つ赤だった………

「ん?ブースト圧が下がってる?気のせいか………さてと執務室に戻って書類でもしま  
すか。」

## イレギュラー

火曜日 一枚の報告書から話は始まる

「北海鎮守府？」

それは、新しい人物の詳細だった。

「ええ、何でも新しい人は身長2メートルの筋肉もりもりマッチョマンだそうです。」

どうみても某大佐としか思えん紹介に頭を抱える

「おいおい……………まあ良いけど……………さてと？もう一枚は……………未確認機？何々？北方海域にて紅い機体の艦娘と遭遇、潜水艦が話しかけようとするがいきなり射たれたので急速潜航を行い脱出、大本営はこれをイレギュラーとして即座に撃滅を求むか……………」

その資料を読んでいる間にひとつの考えが思い浮かぶ

「鹵獲したら面白そうだな。」

そう、指令書には撃滅としかないのでその場から消えればOKなのだ。

「如月……………今回は俺が出る。」

そう言うのと四葉は装備品の確認を始める



「提督一人でですか？」

如月が確認をとる

「嫌、L i vとクーちゃんを連れてく。流石に一人だといくらブレードがあるからと言つても行動しにくいしね。」

いつも以上に真面目に言う提督に如月も真剣になる

「分かりました。御武運を。」

「ああ、わかった。四葉一樹 出る」

それだけ言い、二人を引き連れて出撃した

北方海域 09 57

何時もならウジャウジャいる深海凄艦が見当たらない

あるのは焼け付くような火薬の臭いと、油の感じだ

「おいおい………これあちらさん全滅してないか？」

そういつて探索を始めるがそれといった収穫はない。

「クー！L i v！何かいたか！」

そう言い、確認をとろうとすることがあることに気がつく

二人がいないのだ

「つ!? 罨かよ……………出てきなよ。いるんだろ?」

そう言うのと水平線から何かが飛んでくる

「目標確認、修正、排除する。」

それは、紅い戦闘機のようなものだった。

だが目の前で変形して中から少女が出てくる

「ほー? 君は? 見たところ艦娘でも深海凄艦でもないみたいだが?」

余裕と礼儀をもつて話をするが冷や汗が止まらなくなっていた

(おいおい……………ナインボールかよ!? どうする? 感覚的には俺の方に分があるが……………)

仕方ない、やるしかないか。

考えていると、謎の少女が答える。

「名前なんてない……………私の目的は唯一つ、イレギュラーの排除、それだけ。」

そう答えるといきなり攻撃を始めた

だが、簡単に当たるとこの男も柔ではない

「遅いんだよ!」

そう言い全て交わしきり、左手の3500ガトリングを射つ

バガガガガ!

全て当たり損傷を与える

「私がこんなところで!？」

「ハハハ！沈めイレギュラー！貴様はやり過ぎたんだよ！」

「そう言い武器を変更、暴徒専用ゴム弾ショットガン（AMIDA特製品）を撃ち込むが

「甘い！」

ズシヤアアア！

四葉の機体にレーザーブレードが当たる

「ガハア?!こ、ここままでかよ……………仕方ない……………増援が着いたんだ。良しとするか

……………」 バタ！

それだけ言うとは海面に倒れる

「マスター!?!貴様が!?!貴様アア!!！」

Li v が突撃しようとするがクーに押さえ込まれる

「離せ!クー!!マスターの敵!」

「落ち着け!今はあの人の回収が優先よ!」

「そう言い煙幕を張りつつ四葉を回収する

だが既に出血とダメージにより意識も低下しかけている

「すまん……………ガハ！油断したよ……………」

「提督！動かないでください！」

そう言うが、四葉は無理矢理彼女を振り払い、立ち上がる

「こいよ、イレギュラー!!相手してやる！」

それだけ言うのと機体のリミッターをカットする

「フン、今度こそ消してやる。」

それだけ言い、さっきの倍の火力を出し始める

「グツ！骨数本やったかもな……………」

先程から自分のイメージ通りに体が動かないのだ。

だがそれでも無理を承知で機体进行操作する。

「今度こそ貰った！」

そう言い、レーザーブレードで斬りかかる！

「チャンス！」

それだけ言うと、彼女に近づく

「貴様何を！」

ガキン!!

直後、四葉のブーストチャージが決まり。不名機は倒れる

「ハーハー、ノーマル舐めんな！」

だが、体が限界だったのかそこで倒れこむ

「提督！ご無事ですか！」

クーが近づき、確認をとる

「ああ、なんとか無事だよ。まあかなり派手にやられたがね。悪いがクー、鎮守府まで頼むよ。L i v、彼女を回収しろ……………」

それだけ言うと、そのまま気絶する

「提督？分かりました……………L i v、目標を回収。回収後、独房にぶちこんどいて。」

こうして、謎のイレギュラーとの戦いが終わった

「こいつは、私と同じかもしれない……………」

連れ去られる瞬間、紅い少女は呟くがその声は誰にも聞かれなかった

A M I D A 鎮守府 如月研究室

如月は、回収された未確認機の情報と偶然手に入れた

情報を見て、薄く笑う

「これは……………フ、フフフ。面白くなりそうです。」

如月はそこに写し出されたデータを見て楽しそうに微笑んだ

そこには1つの英文と幾つかの図面があった

「新しい、これはよいかもしれない。」

液晶にはこう写されていた

『ACER nine ball Ruse rough repair  
NEXT  
plan』

ナインボールセラフ 改修 ネクストプランと

「まずは、どうやって仲間にしましょうかしら？」

それだけ言うと、パソコンの電源を落として。執務室に歩き始める。

その姿を無数のAMIDAが見つめていた。

## 交渉

あの戦闘から一週間後

「っ……………あー、そういえば俺ボッコボコにされたんだな」

医務室のベットの上で彼は目覚める。

四葉は自分の体の現状を知り苦笑する。

そう、ほとんど傷がないのだ

そして近くにいたAMIDAが彼にカルテを渡す

「内臓は無事と……………骨は肋が2本に、腕にヒビと……………結構軽めにすんだんだな。何々

? 如月が治療機械を作ってその中に放り込まれたので体は完治しております。」

相変わらずの科学力に頭を抱えたくなるが最期の手書きの部分を見て啞然とする

書類残ってるので運ばせておきます。

お仕事サボらないでくださいね♪

「……………AMIDAよ仕事手伝ってくれる?」

そう言い、AMIDA12号(医療型)を見つめるが

「頑張れよ、提督」

そう書いた紙を渡して退出された。

「さてと？仕事しますか……………」

仕方ないので入れ替わりに来た妖精さん達から束のような書類を貰い仕事に励む提督であった。

そして暫くしたのち一人の見舞いが来る

「提督さん大丈夫なのですか？」

電だ

「まあな、動けるようにはなつた。それで？何か報告かい？」

そう言うと電が真面目に報告する。

内容は四葉が寝ていた間、変わりはなかったことと、

もう一つ

『捕らえた敵の扱いについてだ』

「あの人は一言も話しません。此方としても手荒にはしたくないのです。」

悩みながら言う電に四葉は頭を撫でてから

「良いよ、俺が説得する。」

「仲間にするのですか？」

電は四葉の考えに驚いた。



「フーフーフ、俺はこの戦争を勝ちたい。その為ならどこまでも足を踏み外すよ？」  
それだけ言うとう立ち上がり軍服に着替え、地下の独房に向かい歩き始めた

AMIDA 鎮守府 地下 独房

紅い少女は考えていた。あの男の事を、イレギュラーと言うよりは自分に近い排除する側の立場それでいて本人もイレギュラーであること。

（分からない、何故あの場で殺さなかつた？）

そう考えていると足音が響く

「よー、お嬢さん？自己紹介がまだだつたな。ここで提督を勤める四葉一樹だ、今日は相談に来た。」

突然の話に少しだけ驚く

「なに？何故敵である私を勧誘する貴様の目的はなんだ？」

その質問にたいして四葉は笑いながら

「俺は戦争が好きだからさ、そしてそのなかでありとあらゆるイレギュラーとの戦いが俺を楽しませてくれる。そしてその排除もな？」

「どうだい？俺と手を組まないか？この戦争が終わるまでは一時休戦、終わったあとは君の考え次第に動いても構わん。」

「どうだ？一緒に滅茶苦茶にしないか？」

「それだけ言うと、その場から退出しようとするが

「待て！」

直後呼び止められる。

「気に入ったよ、貴方の元なら楽しめそうだ。」

「そんな彼女の言い方に彼も笑いつつ

「そうかい、それは嬉しいよ。それじゃ君名前無かったよね？」

「ああ、このエンブレムとこの体だけが私の全てだ……」

「そうかい、なら。『セラフ』ナインボールセラフでどうだい？」

「そして今まで無名だった少女はセラフと言う名前を付けられた

「良いだろう、宜しくな。提督」

「こうしてAMIDA鎮守府に新しい仲間が加わった。

「さてと？セラフいきなりで悪いが君には行って貰うところがある。ついてきな」

「それだけ言うと、独房の鍵を開け着いてくるように指示する。

「そして歩いてついたさきはみんな大好き如月の実験室だった。

「如月ーつれてきたぞー。」

「それだけ言うと、扉を開けて中にはいる

「あら？提督……初めまして、AMIDA鎮守府第一秘書の如月です。」  
「よろしく頼む……ナインボールセラフだ。セラフで良い。」

互いに軽い自己紹介をかわせた後、如月が口を開く。

「それではセラフさん、歓迎の印にこの機械に入ってください。」

それは円筒状のガラスケースだった。

「貴女のデータを取るためです。御心配無く。」

それだけ言うと如月はパソコンを起動させる

「さ？！どうぞ」

セラフは少しだけ悩むが、諦めてはいる。

「騙して悪いですが、少し眠って貰います。」

それだけ言うと、筒の中にガスが入れられる。

「貴様?!っ!!」 ドサ

そのまま眠ってしまうセラフ

「如月、お前何を考えている?」

四葉は怒ることなく質問する。

「少し改良するだけですよ……明日には完了します。」

「そうか、程々にな。」

それだけ言うと、彼は部屋から退出した

「うふふ？ さあ、始めましょうか？ ACEプロジェクトをアハハ」

部屋には彼女の声が響く

とある場所

ある部屋にて二人の男がいた

「しっかし彼等かなり派手にやっているようすな。そちらの利益減ったのでは？」

「なに、すぐに消えてもらうさ。」

「彼をこちらに呼ぶ手はずはついてる。明日にでも来て貰い、死んでもらおう。」

「フフ、分かりましたよ『大将』どの？」

「君も悪だな？ 『中将』」

そして、部屋には『新兵器についての質疑応答』と書かれた書類があつた……………

午後2時 AMIDA鎮守府 執務室

「えつと？ 大将からか、何々？ 新兵器についての質疑応答があるので明日来るように？」

まあ、一度いきますか、狸どもの腹の中を見るにはちようど良い。」

また一波乱起きそうだ。

## 部屋の片隅でガタガタ震える準備はOK?

22 45 横須賀 とある倉庫

「全く、俺がはめられるなんてな……………」

四葉は現在の状況を恨めしく思った。

何故こうなったかは今朝にまで遡る

0800 AMIDA 鎮守府

「そう言うわけで3日ほど鎮守府を留守にする。その間の業務頼んだよ?」

四葉が、皆にそれだけ言うのと。

横須賀に行くために車を運転していった。

「大丈夫でしょうか?」

クーちゃんが疑問を持つが

「大丈夫よ、手はうってあるから。さあ、皆!仕事よ仕事!」

如月が落ち着き払っているのでもいつも通りの仕事をする事になった。

「そう言えば如月?セラフは?」

「改良中です、今日の昼にはコジマ粒子が使えるようになります。」  
「ネクストなのか？」

「いいえ、ノーマルがベースのイレギュラーです。それよりもクーちゃん貴女今日は炊事担当でしょ？早くご飯の用意を」

それだけを言うと如月は実験室に戻った

1030 横須賀 大本営

「AMIDA鎮守府所属！四葉一樹少佐です！失礼します！」

四葉は人生で一番緊張していた。

何故なら今いるのは下は少将、上は、元帥までいる。

ここでぼろを出すのは死を意味する。

「入りました、早速で悪いが………今回聞くのは1つだけだ。」

中央にいる元帥が質問する

「何故あの未確認機を鹵獲したかだ………」

それにたいして四葉は

「今後の発展などに役立つと思いましたが。しかし、家以外では扱えないイレギュラーと思いい家にて保管しております。」

その言い方に元帥は納得し、

「なるほど……では今後の貴君の活躍を祈ろう。」

「ハ！」

そういつて、彼は退出した。

（プヒュー！死ぬかと思つたぜ。それにしても左の二人俺を殺そうと考へてる奴だな。他の奴が興味を持つてるのにあの二人だけ違つたな……さてと？帰りますか。）

そう思い、駐車場に向かつてあるいていくが……

「あの一！落としましたよ！」 ガツン！

「ガツ?!」

後ろから殴られて気絶させられた。

「目標を確保、撤退する。」

そう言い、その男は四葉を回収した

気絶される瞬間を捕らえたものが天井から見ていたと知らずに……

そして現在……

「起きろー！」

四葉は尋問を受けていた。



「吐け！この売国奴が！」

そう今回彼が疑われたのは予算の横領。

もちろん彼には預かり知らないことだ

「全く、何度言えればわかる？俺はそんなことはしてないしそもそもするほど貧乏じゃない」

「嘘をつくな！ここに証拠だつてある！良いだろう、明日になれば令状も届く。そのときにとつぷり聞かせてもらおう！」

また何度も殴られる。

しかし四葉には1つ考えがあった。

(救援信号は出してある。あとはそれまでに俺が持つか……………)

1500 AMIDA 鎮守府

「アミー！アミー！アミー！」

如月は一匹のAMIDAの声を聞き慌てる。

「提督が誘拐された!？」

それを聞いた瞬間……………如月は最高の笑みを浮かべた

そして……………

「クーちゃんとしーヴすぐに来ててください。話があります。」

そしてすぐに二人が到着する

「如月どうかしたのか？夕飯はカレーだが？」

「お姉さま？私、書類の整理で忙しいのですが……………」

二人が思わず愚痴を言うが如月の目がマジなのに気がつき、口を紡ぐ。

「提督が誘拐されました、どこのバカかは分かりませんがこれは私たちへの宣戦布告と  
とります。緊急ミツシヨンです。」

作戦は提督の回収、並びに誘拐犯の排除です。」

突然のことだが二人は冷静だった

そして、彼女も目覚める

「あいつが誘拐された？アイツは私の獲物だ何処のアホかは知らんが後悔させてやる。」

セラフが筒から出てきて、自分も行くという

「お願いします。場所は分かっております。横須賀の倉庫です。良いですか？必ず目標

以外は殲滅ですそれが例え……………」

艦娘でもです。」

それだけ言うそれぞれが出発する。

確実に殺すために死神が今、出撃する。

## 同時刻 倉庫

「全く、口の割らん男だ！」

尋問していた男が覆面を取り外す。

それは中将だった

そう彼等は自分達の横領が発覚するのを恐れて、  
押し付けることにしたのだ。

「まあ、落ち着きたまえ、明日には死んでもらおう。」

「分かりました。それではそのとうりに……おい！お前ら周りを見張っておけ！こいつの仲間が来るかもしれん！」

中将はそれだけ言うと自分の部屋にかえっていった……

それから三十分後……

二人の見張りが外にいた

「全く、あいつも人使いが悪いぜ……」

「そう言うな、アレのお陰で俺たちは旨い蜜が吸えてんだ文句な……ガツ?!」

いきなり倒れる見張り

「おいどうした!?!」

そうさつきまで隣にいた仲間の首から上がなかった……

「ど、どうなつてやがる……ツ!誰……」「動くな……」

後ろから押さえ込まれ、喉にナイフを突きつけられる。

そう……セラフだ

「貴様、何者だ……」

「黙れ、四葉の場所を答えろ……さもなければここで死んでもらう。」

そう言いゆつくりとナイフを突き立てていく

「わ、わかった!や、奴はこの先の倉庫の一番奥にいったそこからは知らん!頼む!助け  
てくれ!」

必死に抵抗するが内容を話したとたん……

「そうか、ありがとう。死ね」

「な?!貴様、話した……」ブシヤア!

セラフに返り血がつく

「私は話せといたが、誰が解放するといった? K L

正面はクリアだ。突入するぞ。」

そう言い、扉をゆっくりと開ける

中には五人ほど見張りがいた

「私に任せて！」

L i v がプラズマライフルを充填する。

「奥の二人は私がやるから！クーちゃんは手前のを！セラフは真ん中の偉そうなのを捕まえて！」

それだけ言うと最大出力で撃つ

一瞬で人が炭になった

「敵襲!?!ギヤアアアアア!?!?!」

躍り出たクーちゃんにレーザーブレードでまっふたつにされる。

「グレネード！」

残っていた片方が手榴弾を投げつけるが届く前に消滅する。

「プライマルアーマーの前には無意味よ？」

それだけを言うと、その男をショットガンでミンチにした……………

「糞?!は、早く中将に知らせないと……………つ?!で、電話が繋がらない!?!」

そう、電話が県外になっているのだ。

「残念ね……………強力なジャミングをしているの……………提督はどこ？」

セラフが隊長の口にコジマキャノンを突っ込み質問する

「モガ?!モガモガ！」

さすがに話せないようだ……………だが

「あつそう……………サヨナラ」

直後にトリガーを引き、男の上半身を消した。

「セラフ……………場所わかったの？」

クーちゃんが質問するが

「地下にあるときいた……………離れていて」

それだけ言うと、セラフの回りにコジマ粒子が充填される

「アサルトアーマー?!何故貴様が！」

ドーン！

直後、倉庫の床が抜け落ちた。

「て、提督死んだんじゃ……………」

Livが心配するが、

「大丈夫、彼なら目の前にいるは」

そういうと、鉄格子の向こうに四葉が足を組んでいた

「来てくれると思っていたよ。」

「無事なようね。」

セラフが楽しそうに言う。

「まあな、あの糞野郎の場所は分かった……………今からお礼参りにいこうと思う。付き合  
うか？」

それだけ言うと四葉は潰れた死体の何人からか銃を取る

「俺に喧嘩を売ったんだ……………どうなるかきっちり教えてやる……………」

その中のひとつ、M1911A1を取りだし、腰のホルスターに納める

「レッツ パーティー 派手にいこう。」

そして、歩き始める。向かうは中将の元





そして鳴り響く銃声。悲鳴

「ん!? くそ! こうなったら艦娘をけしかけるしかない……………金剛!」

中将は自分の秘書の金剛を呼ぶ

「ヘーイ提督! 侵入者だね、私がやつつけちやうからね!」

この金剛、提督の命令なら何でも聞くように洗脳されていた。だが中将がもつとも信頼を置いていた。

そう言い金剛は部屋から出ていった。

「これでなんとか、あとは大将に報告せねば…」

部屋の電話を取りかけようとするが気がつく。

県外になっている。さらに電話線が切られているのだ。

「いいよ……………相手してやる。」

そういつて、中将は迎え撃つことにした。狂気の死神を

同時刻

「さてと? 派手にいきますか。」

四葉は中将のいる。鎮守府の近くに来ていた。

「提督……………数六。恐らく増援かと。」

「ここまで派手に殺してきたので警備が嚴重になつていたのだ。

「まあ、任せときな。兵士諸君、任務ご苦労。さようなら」

四葉はそう言うのと後ろに回り込むようにし一人ずつ暗殺していった。

そして、最後の一人になつたとき

「よう兄ちゃん調子はどうだ？」

いきなり話しかけ振り向いた瞬間に相手を射殺した。

「そうか、体調不良かゆつくりおやすみ。」

セラフたちはそんな四葉を見て驚くしかなかった。

普段あまり動かないように見えて俊敏に動くのだ

そして、執務室に続く廊下に侵入したとき

「へーい！提督の敵はみんな殺すねー！」

金剛が発砲してきたのだ。

「チツ！40 cm砲クラスなんて撃たれたら此方が危ない。

奴に逃げられる恐れもある。セラフ、Livやつを探して捕まえる。殺すなよ？まだ

聞くことがある。クー、援護しろ。」

四葉は廊下の壁を蹴りながら金剛に突撃する。

「アハ！モラッタネー！」

金剛が四葉を撃とうとするが直後に手に衝撃がはしる

そう、クーちゃんにてを撃たれたのだ。そのときに照準がずれ、彼を掠める

「アバヨ！」

それだけ言うのと四葉は金剛に膝蹴りを食らわせて気絶させた。

「クソ！くそっ！どいつもこいつも役立たずめ！」

中将は金剛がやられたのを監視カメラで知ると直ぐに逃げ出そうとした、だが

.....

「h e l l o o !」 ドカ！

直後にドアを蹴破ったセラフに顔面からゴム弾をくらい気絶する。

深夜2時 四葉が連れ去られた倉庫 地下室

中将は目をさます、今中将は、両手両足を縛られている。そして、目の前には血まみれの金剛がいた

「金剛!!大丈夫か!クソ!ほどけん!」

必死にほごこうとするが、手には4つほど手錠がされており抜け出せないのだ

「おー、やっと目が覚めましたか。」機嫌いかが?」

そこには注射器を持った四葉がいた

「貴様！この私にこんなことをして只ですむと思ってるのか！」

罵倒されるがそんなことを気にせず、中將ではなく目の前の金剛に注射器を打ち込む。

直後

「ガアアア!!」

金剛の声にならない悲鳴が響く。

「生理用食塩水で知ってるか？アレ、出血したりしたときには便利だが濃度が高いと猛毒になるんだよ……………」

さあ、答えてもらおうか？大將の居場所を。」

それだけ言うと、もう一度注射器を打ち込む

「提督！助け……………イヤアアア!!」

「き、貴様あ!!」

中將は抜け出そうとするが右足にナイフが刺さる

「おいおい、動かないでくれよ……………ほら、答えてくれないと貴方の大切な恋人が死んじゃうよ?」

そして、そのまま左足にも同じように刺したあと

上から食塩水をかけた

「ぎゃあー!!!」

そんな様子を見ながら四葉は呟く

「悲鳴以外話せないのか!とつとと答えたら解放してやる!ほら早く答えろ!」

そう言うとき中将は観念したのか口を開く

「あの人は大本營の資料室にいる。そこでいつも会合を行っている。」

「なるほどね?そこで取引などを?」

「あ、ああそうだ。おい話しただろ!解放しろ!」

中将の独白を聞いて、彼は笑いながら。

「なるほどね、資料室か。実は俺の仲間を今、大本營に向かわせていてね。もう後少しで誘拐してきてくれると思う。つまり何が言いたいかというかね……………」

お前の告白は無意味なんだよ。」

そして、既に何度も注射器を打ち込まれ。廃人寸前になっていた金剛を椅子に座らせる。

「それではお疲れ様でした。die」

金剛の胸を撃った

「カハ！提督……愛……してる……で……す……」 ガクリ

「こ、金剛!!」

「ほー？最後まで愛を誓うとはね、よいねーそういう信頼関係もまあ喜べ、旦那も直ぐにあの世に送ってやるよ。じゃあな。」

それだけを言うと、中将の頭を撃ち抜いた後、

M1911の装填数7発のうち残弾の5発を胸に撃ち込み、  
まるで強盗の仕業のようにした。

「提督……ターゲットを確認。確保しました。」

セラフから目標の確保を伝えられる。

「分かった連れてこい……急がないと夜が明ける。それまでには終わらせる。」

四葉は二人の死体を見てから一言だけ呟く

「御幸せに。」

カツコツ

そして、四葉は二人の死体を中将の執務室に運び込み

部屋中を荒らしておいた。

「後は大将だけ……さあ、ファイナールといこうか。」

その顔は楽しそうに笑っていた。

## 拷問

0230 横須賀 倉庫

大将は現在の状況が把握できなかつた……

回想

大将は四葉の始末を頼んだあと、資料室にて何人かと話をしていた

内容は今後の分け前などだ、部谷には大将以外に

六人いる秘書の大和、そして、大将の息子で今年海軍学校を主席卒業、不正相手の役員二人と、司法局の役人二人だ

「しっかしまあ彼も災難でしたね。」

「ふん、私に譲らんからそうなるのだ。」

大将は既に彼が死んだと考えていた。

そんな中

「た、大変です！中将どのが誘拐されました！」

最悪の知らせが届く

「何?!直ぐに探し出せ!大和!本部に連絡しろ!少佐私についてこい!」



そう言い大将は部屋から出るが直ぐに異変に気がつく血の臭いがするのだ  
「父さん！あそこに誰がいる！」

少佐が気がつき近づく。

「待て！罾かも……………」

そう言い終える前に気絶する大将そして、

「さあ、楽しいゲームを始めよう。」

あの男の声がした

現在

大将は椅子に縛られており、身動きがとれない状態だった。

（クソ！他の奴は無事なのか？）

そんな中に四葉が現れる

「よー！大将さんよ、あんたは今こう思ってるはずだ！

何で俺がこんな目に遭ってるんだと？」

俺が答えてやるよ、俺に喧嘩を売ったからだ。」

それだけ言うと、何かのスイッチを押す。

そこには一緒にいた六人がいた。

「取引といこう、あんたが全部話せば痛い目をみずに帰れるだろう。まあ、話したくないなら………そうだな。」

S! その男つれてきて!

そういうと紅い少女が司法局長官をつれてきて椅子に座らせる。

そして………

「まあ、こうする。」ポチッ!

四葉がボタンを押した瞬間に、男は下に落ちる

その落下先には液体があった。

「ギヤアアアアア?!?!?! 体が! 体があ?!」

さつきから落ちた男の体が少しづつ溶けていく。

「フツ化水素で、知ってるか? 猛毒みたいでな、人間なんて一瞬でスープだ。」

そう言い、指差した先には人間だったものの液体が浮かんでいた。

「どうする? 今ならまだ軽くですむぞ?」

大将はこの時点である取引を持ち掛けることにした

「わかった、答えよう。だが、息子と大和は解放してほしい。」

その言い方に四葉は

「OK、OK。なら条件はあんたも拷問を受ける。二人の人を救いたいんだろ? そのく

らしい覚悟は欲しいね。」

それだけを言うのと腰から拳銃を取りだし、

「腕出して?」

と言ひ、出した直後に大将の腕をいたに固定する。

「動くなよー。」

人、一人殺したのになんの躊躇いもなくしていられる男に恐怖を抱きつつ、言われた通りにする。

そして、

「そんじゃ残りの3人殺してもらおうか?」

それだけ言うと、無理矢理引き金を引かせる。

バン! バン! バン!

乾いた音が響き、3人の人が死ぬ。

「ほい、取引終了!それじゃー!ここからが本番、その前に俺は約束は守る。」

そう言うと、大和と少佐に近づく

「悪いが君達には目隠しをしてもらう。」

二人に目隠しをしたあと、一人ずつ別の部屋に移動させた。

そしてそれを終えたあと、また戻ってくる。

「そんじゃ、始めようか。最初の質問だ……横領はどうやっていた？」

大将は最初口を閉ざそうと考えていたが……

「おいおい、話してもらわんと困るなー？」グシヤ

大将の右腕にナイフを突き立てる

「が?!」

そしてそこから肉を抉るようにナイフを前後させる。

グチャメチャ

「オイオイ? まだ始まったばかりだぜ? 死んでもらうと困るな?」

そう言うのと、何処からか注射器を取り出して首元に刺す

「な、何をした貴様!」

「あーそれ? 特注のナノマシンどんな傷も一瞬で癒す。スゲー優れた万能品。舌噛んで

死のうなんて考えるなよ? それすら治るから。」

その直後、ナイフで刺された傷が少しずつ治っていく。

「楽ませてくれよ? 壊れない人形さん?」

そう言うのと、おも一気しフツ化水素をぶちまける

「ガアア?!」

皮膚が溶けるがその直後から傷が治る。

「わ、わかった！答える！横領は私が動きマネーロンダリングは中将がやった！」  
「なるほどね、それじゃあ次の質問だ。なぜ俺を狙った？」

四葉は次の質問をいった直後に、両足に拳銃を撃つ

「アアア?!」

「もしもし聞こえてますかー？ダメだこりや意識飛んでる。」

大將は人生のなかでそこまで喰らわれない。嫌、味わうことのない痛みに耐えれなかった。

「話は終わってないぞー」

そう言うと、中将の時と同じように食塩水の入ったのを

首に打ち込む

「ツル!!!」

打ち込まれた直後に暴れだし、床をのたうち回る。

ここで、何故塩が激痛になるかの説明をしよう。

それは浸透圧の関係からだ。

塩は体液より濃度が濃く、また水はその逆に薄いから、体液が出たり入ったりしようとする。

分かりやすい例だとナメクジに塩を振ったり、青菜に塩を揉んだりしたときに水分が出るのと同じこと。

それが刺激となって痛みが生じるのです。

一方、つばは？と思うかもしれないが元々体液であるため、濃度は同じであり刺激とはなりません。

以上のことから、体液に近い塩分濃度なら問題ないがそれ以上は痛みになる。

(作者自ら昔バツゲームでやられたけど想像を絶する痛みでした。)

以上説明終わり

「ア、ガ!?わ、わかった!そ、それはお前が新人だったからだ!」

大将によると過去にもばれそうになったときに適当に新人に押し付けていたらしい。

それで今回は彼が狙われたと

「なるほどね?そんなじゃ、最後だ。俺の実験に付き合ってもらおうよ?」

パチン

彼が指をならした直後に彼の後ろで何かが蠢く

「家の実験品だ、実験内容は人間生きたまま食べられたときに再生するかどうか。それじゃスタート!」

直後大将に20匹ほどのAMIDAがまとわりつく

「やめろ！やめてくれえええ!!」

ムシャムシャバキツ！メキツ！

四葉はそれを見ながら記録をとる

「なるほどね？傷を癒すのではなく細胞を促進させると………て、これ老化が進むじゃん。使えないな。」

まあ良い、アミちゃん達好きなら食べられるんだよー。」

「「アミーー！」」

それだけ言うと暫く放置しておいた。

30分後

A M I D A 達が食べ飽きたようだ

「満腹かい？それはよかった。さてと？おースグースグー、完全に回復してる」

そこには完全に無傷だが虚ろになっている。人間がいた

「さてと、そろそろ時間だし場所を変えますか。」

そう言うとお大将を持ち上げて、運び始める

## 0325 中將の執務室

「おい、起きろよ。」

大將は揺さぶられて起きる。そこには四葉が立っていた

「貴様！ついな、なんだこれは！」

そう、今大將は椅子に縛り付けられている。

それだけならまだだろう……足を三等分するかのよう拳銃が配置されているのを覗けば……

一つは足首を

二つ目は膝を

三つ目は太ももを狙うように固定されていた。

「イヤー、俺昔から工作が好きでさ？こう言うのも直ぐに作れちゃうんだよねー。」

まあ、俺に喧嘩を売ったんだ。

それ相応の代償を払ってもらおうか？」

そして四葉は立ち上がり、時計のネジを巻く

「3分だそれがお前のリミットだ……時間が経つと楽しいアラームがなるから、それじゃー！」

それだけ言うと四葉は部屋から出ていく



「待て！貴様ー！殺してやる！絶対に殺してやるー！四葉一樹イイイイ！！！！」

大将の声を聞きながら部屋から出ていこうとするが、そこで何か思い出したのか引き返ってきて、首に注射器を打ち込む。

「な、何をした貴様！」

「嫌なに、ナノマシンの無力化。」

そう言うと、また出ていくために歩き始めドアを出る直後

「三分で言ったけどさ………銃の発砲は………30秒後なんだよな。あばよ、糞野郎、ゲムオーバー」

パッポー バン！

「ギヤアアアア！！」

鳩時計の音に合わさるように銃が発砲され。悲鳴が響き続ける

「お？良い声で泣くじゃん！ファイナーレには完璧だ。さ、帰るぞお前ら。」

「提督？あれで良かったのですか？」

「俺が満足したから良いんだよ。」

そして、四葉は楽しそうに帰ることにしたのだ。

この時3人が思ったのはただひとつ、提督を敵に回したら死ぬ。

ただそれだけだった。

だが、彼の車に乗った瞬間にはそんなことを忘れて晩御飯の事などそれぞれが思い思いのかんがえをした。

結局、この鎮守府の者たちは少しずれているのだ。

次の日 AMIDA 鎮守府 執務室

四葉は新聞を読んでいた。

その見出しは『海軍大将与中将、暗殺される！反体制派がか？』

1面トップでこれだったそして、

犠牲者は全員男性

艦娘の被害『ゼロ』で、あると報じられた。

「まさか、金剛を殺さなかったとはな？」

事情を知るクーが笑う

「俺は女には手を出さん。」

そういつて新聞を片付ける四葉

時間は中将を殺したときにまで遡る

「提督？それは？」

そう、クーは気がついた四葉の拳銃から音はしたが弾が出てないことに「空砲だよ。なあに一芝居うったただけだ。」

四葉は金剛を気絶させた時に少量の火薬とビニール袋そして他のやつを血を使い、映画で使われるような血糊を作ったのだ。

「本物だからわからんし、まず艦娘の血液型を調べようなんて思うやつもいない。」  
それだけ言うと、金剛の足に手錠をしておく。

「逃げられると困る、彼女は証人になつてもらう。この惨劇の」  
歩き始めた四葉にクーは質問する。

「なぜ殺さなかった？」

その問いに彼は少し立ち止まって答える

「あんな美人、殺しちゃまずいだろ？夢見が悪くなる、行くぞ。」

そして、大将のところに向かい歩き始める

回想終了

その事を思い出すが、直後四葉が読んでた新聞の端を指差し

「だが、彼女酷いPTSDになったそうだが？」

クーがそういうが

「まあ、大和よりはましだろ？あいつ確か、少佐の元になったが大將と重なって見えち

「まっつて戦線復帰不可能だろ？」

「そう、大将の体は限界まで負担をかけていたので発見されたときには既にグチャグチャになっており

「あれが人間とは思いたくなかった」

「夢なら醒めてほしい。」

と、当局が答えたのだ。

そんなことは気にせず立ち上がりAMIDAを撫でる

「ま、今回の件は結局闇に消える。ちようど良いじゃないか、あちらとしても横領犯が消えるしこつちも平和になるwin-winの関係だちようど良いんだよ。」

暫くAMIDAを撫でたあと執務室からでる。

「提督？どちらに？」

「お腹減ったから飯にする。食ったら仕事と行こうか。」

そう言った後、食堂に向かい歩いていく。

今日もこの鎮守府ではAMIDAが駆け回る。

変わる日もあれば変わらない日もあるのだ。

## 来訪者

色々あった日の次の日

四葉は冷や汗をかくなぜなら

「ほう、これがAMIDAか。面白い蟲だな。」

元帥が目の前にいるからだ。

(どうしてこうなったー!?)

遡ること0800

U—511が書類を渡す。

「アドミラル、大本営から手紙が届いた。」

「は？またなんかめんどくさいのか？勘弁してくれソルディオス砲とかアンサラーとか  
だったらあつちに押し付ける。」

そういつて、書類に目を通すが通した直後に冷や汗をかく

「ユー、無線貸せ」

ユーは疑問を持ちつつ提督にマイクを渡す。

すると四葉は行きを吸い込み

「今から2時間後に元帥殿が到着される！セラフ！Liv、サイファー、ピクシー、シュトリゴン、クーちゃんは直ぐに来るように！」

いった直後に6人が到着する

「作戦概要を説明する、君達のこととは最高機密だ。つまり元帥殿にもまだ見せるわけにはいかない！と言うわけで！少しばかり散歩してきて！」

それだけ言うと6人は直ぐに出撃したことにするために

戦場に躍り出る。

お弁当をもって。

「如月！電と龍驤と一緒に食堂の清掃！綺麗にしといて！ユーは俺とこの書類の整理！何とかするぞ！」

そういつて何とか片付けて、お出迎えする。

「は、はじめまして！AMIDA鎮守府提督四葉一樹少佐です！」

「まあまあ、そう気負わずに今日は話がしたくて来たんだ。」

「では、こんなところでは何ですので執務室で。」

そう言い、四葉は元帥を執務室に移動させる。

そしてその直後………

「アミー？」

元帥どのの目の前にAMIDAが落ちてきたのだ

(お、終わったろ!?俺の人生詰んだ!?)

慌てる四葉だが、元帥は落ち着いて抱えあげた

「よしよし可愛いのを。」 ナデナデ

(どう言うことだ?!)

パニックになる四葉に元帥が、

「私は蟲が好きでな。こう言うのは平気なんだよ。」

「は、はあ?それで用件とは?」

そう聞くと、姿勢を直して書類を渡す

「君は北海鎮守府を知ってるかね?」

四葉はそこで思い出す。新しい提督のことを

「情報では一応……」

「その彼を君のところに見学するようにさせた。」

「ハイ!?!」

「到着は来週だ、色々新人同士相談できるように話し合うように。」

元帥からの無茶ぶりに驚く四葉

「わかりました。精一杯頑張ります。」

そして、話が終わった直後に元帥からお願いを言われる

「一匹くれないか？」

もう半分早くかえってほしい彼からするとそれくらい問題はなかった。

「お気に召したならどうぞ、今、飼育マニュアルを持ってきます。」

そして、話が終わり帰ったあと四葉は防波堤にいた

「北海鎮守府………どんなやつか楽しみだ。」

そう言う、彼の顔は楽しそうだった。

尚、この後………元帥を通じて大本営にAMIDA患者が増えたらしい。



## 視察 AMIDAワシヤワシヤ

そんなこんなで一週間が経ち五百蔵さん達が来る日になった

「さてと、北海鎮守府の 五百蔵さんだっけ？ 気楽に待ちますか。」

そう言うのと、四葉は久しぶりに外に出て憲兵の詰め所というなの小屋に行く

「よー提督さんよ!? 派手にやったみたいだねえ!!」

隊長に問い詰められる。

「隊長、あの方達は我々が始末する予定でしたが。ありがとうございます。」

どうやら二人は知っているようだ

「聞きたいこともあるでしょうが、きましたよ?」

そう言うのと、キャロルが言った通り向こうから長身の大男とそれのとなりを歩く少女二人がいた

五百蔵 side

「提督ーまだつかないんですか？ 駅から一時間近く歩いていると思うんですが。」

雪吹くんが隣で文句を垂れるがそんなこと私に言われても困る、そもそもこの発端

は先週のこと

「提督、お手紙が届きました。」

一枚の手紙が届くそこには、

「AMIDA鎮守府 視察の命令?てか、AMIDAの時点で嫌な予感しかしない  
何処をどうとつても嫌な予感しかしない

だがそんな状況ではしゃぐのが1名

「AMIDA鎮守府ですか!是非いきましよう!」

新米神様はしゃぐ

「AMIDA鎮守府は一番のAMIDA飼育数を誇るスゴいところですよ!あそこでしか  
やってないけど!」

「なんだよそれ!?オッサンいきたくないよ?!」

行った瞬間に囲まれて爆発の落ちしかないよ!

「大丈夫ですよ!あそこのAMIDAは無害ですから!多分!」

「何処をどうとつても嫌な予感しかないじゃないか!」

そんな五百歳をいかせる原因になる魔法の言葉?

「提督!」飯食べ放題ですよ!行きましよう!」

雪吹くんが下から2番目の文を見てはしゃぐ、それは

『食費、交通費は全てAMIDA鎮守府が負担します。』

「君ご飯が食べただけだよね?!」

突っ込むのに疲れてくるオッサン。

「多数決で勝ちました!行きましよう!」

結局、最後は多数決になり行くことになる。

そして、現在に至る。

「おー、あれがAMIDA鎮守府……?」

そう目の前に写ったのは、何処をどう見ても普通の小屋

(これ、下手したら家より貧乏なんじゃ……)

そう思っていると、目の前から提督と思われる男が来る

四葉 side

四葉は目の前の男を見てひとつ思った

(デカ?!)

四葉自身は身長178なので充分ある方だが目の前の男は二メートルはあるのだ。

(取り敢えず、一度落ち着いて話しかけますか。)

「やあ!貴方が北海鎮守府の 五百蔵さんでよろしかったですか?」

何とか平常を保ち喋る四葉

「ああ、貴方がここの提督の?」

「ええ、AMIDA鎮守府の四葉一樹です。階級は少佐です以後よろしく。」

そう言い、お互いに話すがそれぞれの第一印象は

(ふむ、なかなかの青年。しっかりしてるな。) 五百蔵

(案外良い人?) 四葉

であつた。

「まあ、立ち話も何ですし案内しましょう!」

そういつて小屋に入らずに歩いていく

「え?あの、この小屋じゃないんですか?」

吹雪が思わず突つ込むが

「そこ、憲兵の詰め所。家はここ←」

そういつて示したのは穴である直径5メートル程はある

「いやいや!?何処をどう見ても穴だよ!」

そういつて、別の場所はないか探そうとするが……

「降りますよー!」 ヒュン!

三人の脚をまとめてロープで束ねて引く

そして仲良く穴のなかに

「おま?!」「キヤー!」「ワーイ!」

「すぐつくから対シヨック姿勢ねー!」

そう言うが、四葉自身はACを展開して吹雪と神様を抱える。

ドボン!

残念ながらオッサンだけは着水

「寒?!てか、痛い!」

寒がるオッサンを見ながらゆっくりと降りてくる。

「そんじやいきますよー。」

そうして、何事もなく執務室に到着するが

「あの、四葉さん?へ、部屋になんか一杯反応が……」

吹雪がなにかに気がつくの部屋にはいるのを躊躇う

「あー、まあ、怖いかもな。せいれーつ!」パチン!

そう言い指をならずと、排気管から大量のAMIDAが出てきて。

一斉に並ぶ

「「アミー!」」

その数およそ500匹ほど執務室に所狭しと並んでいる。

「みんなー御客さんだからご迷惑の内容にー。解散！」

そして、一斉にダクトに入っていくAMIDA達

「どうですか！これが家の特徴です！」

両手を広げてたのしそうにするが吹雪は既にビビっているが神様だけは楽しそうだった

「スゴいです！やっぱりここは別格です！」

神様が楽しそうに言うので四葉は

「如月！彼女を案内するように！」

近くにいた彼女に案内するように指示を出す。

「わかりました、それでは行きましょうか。」

そう言うのと、如月は神様をつれて実験室に行った。

「さてと、今回視察だそうですが。家、見るところありましたっけ？」

四葉は疑問に思うが。

「嫌、本部の命令だから。」

五百蔵もそう答えて紙を見せる。

「んー？はいはい、わかりました。ならついてきてください！」

それだけ言うのと立ち上がり、執務室の外に出る

こうして楽しい視察が始まった。

## 提督として、人として

1030 AMIDA 鎮守府 食堂

「なるほど、そちらも苦労なさっているんですね。」

四葉が五百蔵の生活状況を聞いて気の毒に思う。

「いえいえ、毎日頑張ってるんで楽しいですよ?」

そんなことなどあまり気にしてない様子で答えられるが……

「提督!—このお菓子美味しいです!緑色だけど!」

ケーキを頬張っている吹雪のせいで台無しである。

「雪吹くん……幾ら彼の奢りだからって……」

「お気になさらず、食べるのが幸せならそれはそれで良いことですよ。」

見てるのを楽しそうにしつつ、自分はドーナツを食べる。そんな中、セラフが近づいてきた。

「提督? パルスマシニングンの発射レートについて相談が……御客様ですか。すいません。」

五百蔵は、目の前の紅い少女に疑問を持つ。



艦娘にこんな子いたっけ?と、

そんな疑問を知ってか、四葉が艦娘以外の子達を全員呼ぶ

「いい忘れてましたね、私も転生者なのですよ。その時の特典で貰ったのですが左からピクシー、サイファー、シュトリゴン、N—W G I X / v、L i v、ニンボールセラフです。どいつも大切な俺の家族だ。」

楽しそうに爆弾発言をするが、一番の突っ込み所は後半だ

「ちよつと待って?!セラフ?!セラフで言ったよね!」

もう既に頭の中がデストロイ状態になりかける………が、四葉の追加の言葉で意識を失いかける。

「まあ、家のはセラフはプライマルアーマーにアサルトアーマー使えるんですけどね。」

「もうそれニンボールの皮を被った何かだよね!」

大抵の事には驚かないと思っていた五百蔵だが、ここに来る前神様が言っていたのを思い出す

『そんな鎮守府有るわけないと出撃したヲ級エリート部隊が帰ってこずにもう二週間とか。』

『彼処の戦闘スタイルは二種類ある。動く。殺す。』

『偉大な慈善行為で、A M I D A 鎮守府は大本営に寛大な寄与をした。彼は科学的検査

用検体として10,000体もの遺体を寄贈した』

『ある神様が言っていた、私の聞いたところでは、深海凄艦を一番手っ取り早く射止める方法は、AMIDA鎮守府の進撃だ』

『AMIDA鎮守府の海域で死亡する確率は300%。遭遇して殺されるのが100%。帰りに撃たれるのが50%。その途中で狙撃されるのも50%。AMIDAに喰われるのが50%。そして残りがそこを訪れる前に殺される確率が50%だからだ。』

最初聞いたときは何をいつているんだかと思つたが今なら納得できると五百蔵は思う。

彼等ならやりかねないからだ。

しかしそんなのを気にさせようと思うことなく。

一つの問題が起こる

「提督!!レーダーに反応あり!AFです!!」

警備担当のサイファーからの緊急連絡に四葉は苛立ちを見せるが直ぐに冷静になり、五百蔵をみて

「すいませんね、こんなときに……」

(風見先輩私に恨みを持つてるのは分かりますが何もこんなときに……仕方ないですね。ブチノメシマスカ)

警備体制をシフト2に変更！ありったけの弾幕を撃ち込め！ここにケンカを売ったのを後悔させてやる！」

それだけを言うのと四葉は危ないからここにいるようにと言うのが五百蔵は引き下げらずに

「あんたらだけにやらせるかよ。手伝うよ。」

と言われるが、四葉は苦笑しつつ

「そこまでして貰わなくても大丈夫ですよ。逆に下手にいると危ないんで……」

そう言い、タブレット端末を取り出して一言叫ぶ

「SB2 ready! Is it dangerous? I do not mind it! I take the responsibility! Because you are good, bust me!

(衝撃弾用意！危険すぎる？構わん！責任は俺が取る！良いからとつとぶちかませ！)」

それだけ叫ぶと五百蔵と吹雪を伏せさせる。

「5 4 3 2 1 impact!」

妖精さんからの報告の直後………

食堂の窓が全て吹き飛んだ

「ハッハー!!さすがにやるもんじゃないねえ!」

四葉が笑い続けるが五百蔵はそんなことよりも耳がキーンとなるのに苦戦していた。

「幾らなんでもオーバークルじゃないかね?」

大声で叫ぶがそんなのお構いなしに

「サイファー!次弾装填!次こそ仕留めるぞ!」

一二発目を用意させるが……

「提督、ターゲットは撤退を開始。問題ありません。」

どうやら撤退したようだ。

「さてと、邪魔者は消えたことでしたし……次は貴方について教えてもらいましょうか

?」

そう言う彼の目は子供の様に純粹だった。

その純粹さに負けて語り始める

自分のこととこれからのことを

「そうですねか……それは大切なことです。自分を見失わない、ずっと大切にしないと  
いけないとです。」

四葉は先輩提督として、アドバイスをした。

そして、お昼まで他愛のない話をした。因みに内容は

「チエルノアルファでしたっけ？格好いいんですか？」

「何を言う！あれにはロマンが溢れているんだ！」

等の五百蔵本人についてや

「雪吹ちゃん食べるねー？」

「美味しいです！良く分からないけどこの緑色のケーキ美味しいです！もうワンホール

！」

「雪吹くん?!君もう5号ホールで四個目だよね!?!」

「まあ、良いじゃないですか。此方としても作り概があります」

雪吹の食い意地に驚いたりしていた。

そんなこんなで時間を過ごしていった

一方その頃

如月&神様はというと……………

「スゴイ！おつきいAMIDAに小さいAMIDA！空をとんでいるのもいるー！」

「楽しんでもらえて何よりだわ♪」

AMIDAと戯れていた

## AMIDA AMIDA AMIDA

提督達が話し合うために食堂に移動したあと、如月と神様は実験室に移動していた。

「神様………貴女がAMIDA好きと言う話を聞きましたが。本当ですか？」

如月は確認をとる

「ハイ！あの丸みとかワシヤワシヤ感が好きです！」

屈託のない笑顔で答えて、期待の眼を向ける、そこには宝物を見つけようとする子供の用な目だった……

その目に如月は安心し、実験室の最終セイフティを解除した

「フッフ、ここが我がAMIDA鎮守府最高の場所！」

『AMIDAROOM』

です!!」

そこにはいろんな種類のAMIDAがいた。

手に乗る位のサイズからジンベイザメかよと思うほどのもの。空を飛ぶAMIDA物を運ぶAMIDA 水を出すAMIDA

高速で動くAMIDA光合成をするAMIDA消えるAMIDA

燃えるAMIDA溶けるAMIDA光るAMIDA

AMIDA AMIDA AMIDA AMIDA AMIDA AMIDA AMIDA

あれもAMIDAでこれもAMIDAでそれもAMIDAだろ？

(作者の頭がゲシュタルト崩壊しました。)

つまるところたくさんさんのAMIDAがいたのだ

「ウワー！スゴいです！やっぱりここはAMIDAのテーマパークです！」

神様は興奮して駆け寄ろうとするが如月に止められる

「走ると危ないですよ。」

如月が神様を止めた後、一匹のAMIDAが近づく

「アミー！（乗りな！）」

そう言うと、背中に乗るように誘う

それに神様は大興奮して、ゆっくりと背中に乗る

「初めてです！AMIDAに乗れるなんて！」

その状態は本人達には天国かもしれないが、見てると恐怖としか思えない。

想像してみてほしい。

体長一メートル程のAMIDAの上に幼女が乗っており、その周りを無数のAMIDA

Aが囲んでいるのだ……………

(なんだ普通じゃないかと思つたかた。あなたも立派になりましたね。)

(頭大丈夫か?と思つたかた。君も新しい実験台になるかい?)

(こいつら終わつてやがると思つたかた。地下工場に行きましようね♪セラフが待つて  
るよ!)

そんなこんなのでAMIDA探索を続ける神様。

「ここからはそんな彼女の様子をダイジエストでお送りしよう

「スゴいです!この子背中にもものをおけます!」

「AMIDA3型ね、厨房で物を運ぶのを手伝つて貰つてるは」

「オー!この子ちっちゃい!掌に乗せます!」

「AMIDA8号ね、小さい者は正義よ。」

「なんですかこれ?AMIDA25号?見えないですよ?」

「この子は透明になれるの。」

もうこの科学力おかしくね?と思うほどいろんなAMIDAがいたのだ。

そんな中神様が1匹の変わつたのを見つける

「如月さん、あれなんですか?」

そこには緑色に輝くAMIDAがいた



そのAMIDAは体の至るところから粒子がこぼれていたのだ

「あー、あれは実験の副産物ね。私はゼロ型と呼んでは。警備用で、すつごく優秀な子よっ。」

それだけ言うとう如月は的を投げた

直後

「アミーー！」 ドーン！

部屋が吹っ飛んだ

「ちよつと?!あれどうみてもコジマ………」 シュトン

神様がいい終える前に手刀を当てて気絶させる。

「何も見なかった、それで良いのです。ウフフフ?」

その笑みは最高に楽しそうだった。

1時間後、神様は眼をさました。そのときに周りを見渡すがあのAMIDAはいなかった。

「あ、あれは何だったんでしようか………AMIDAだから色んなのがいても問題ないよね!」

直ぐに忘れて、またAMIDA達と遊び始める。

そんな神様を見つめる二人、龍驤と電だ。

「なあ、電はん？世の中には変態がおるんやなあ」

そう言うが彼女もAMIDAを撫でていた

「可愛いは正義なのです！」

電も何時のまにかAMIDAとボール遊びをしていた。

結局の所AMIDAの役割は生物兵器ではない、人々の心を癒すことにあるのだ。

講して、神様達もお昼前までAMIDAと戯れ続けた。

終わると思ったかい!?おまけもあるよおおお!!

前回の吹雪へのケーキ作りの様子

厨房……今そこは戦場となっていた

「急げ！客人を待たせるわけにはいかない！」

調理担当の妖精とAMIDAが駆け巡る

「第八ブロックにて材料切れ！」

「第三ブロックもです！」

「急いで買い出しに行け！何としても作るのだ！」

あまりにも食べ続けるので調理が間に合わなくなる。

「こうなったらパンケーキでも焼いとけ！なんでもいい作るんだ！」

そう叫び続けるが問題が発生する

「第6ブロックのオーブンが壊れました!!」

「第四ブロックもダメです！」

「ボイラー室からです!!熱量不可限界突破?!総員退避!退避しろ!厨房が吹っ飛ぶぞ  
!」

直後………厨房が吹っ飛んだ。

AMIDA鎮守府 食堂

ドーン!!!!

突然の大爆発に、四葉が慌てる

「おい!?何があった!調理妖精!報告を!」

四葉が無線を飛ばした直後にボイラー室からの連絡が飛ぶ

「も、申し訳ありません……カハ……熱暴走による爆発事故です。ゲホコホ……御安心を……ひ……が……い……さ……い……げ……です。」

直後無線が切れる。

「すまない、雪吹ちゃん。少しだけ待っていてくれ……」

そう言うと、彼は鎮守府を駆ける。

かつて、考案した。最速の調理法のために

そんな彼を見て、五百蔵は

「雪吹くんまだ入るの?」

「まだまだいけます!おかわりいいいい!!!」

「まだ入るの?!」

驚いていた彼女の底無し食欲に……

AMIDA鎮守府 厨房

現在、厨房は大騒ぎになっていた。

材料は無事なのだが、火が使えないのだ。

「どうする?!このままではお客様に迷惑がかかる!」

悩んでいたところに四葉が到着する。

「お前ら、アレを行うぞ………」

「提督?!幾らなんでもアレは不味いです!」

四葉がやろうとしていることそれは

『コジマ粒子を使い、そのエネルギーで最速クッキングを行う』

「お前ら!今あの子は食べることに幸せを覚えている!なら我々ができることは何か?

それは作ることだ!」

その一言で、皆納得し直ぐに行動に移る。

あるものは、発電機を取りに行きまたあるAMIDAはフライパンを取りに行く

そして、準備が整う。

この間、わずか5分。

日頃の訓練の成果でもある

「さあつくるぞ!」

そう言い、大量のお菓子を作る。

だが、作り方が恐ろしい。

「材料投入完了!」

「アミーー！（コジマ粒子圧縮完了ー！）」

「着火ああー！」 ドーン！

厨房が閃光に包まれるごとに、色取り採りのパンケーキが出来上がる。

「さあ次の材料急げ！」

こうして、無事にたくさんのお菓子などが吹雪の元に届けられた。

その頃、雪吹ちゃん。

「提督ー！これすっごく美味しいです！緑色だけどー！」

特製のパンケーキを幸せそうに食べていた。

その映像を見て、厨房の面々はやってよかったと安堵していた。

## バケツ対戦車

「この発端はお昼のこと……………」

「ここ、AMIDA鎮守府ではカレーは甘口と辛口があるのだが……………」

「カレーは辛口に決まってるだろ!」

「甘口の方が食べやすくっていいんだよ!」

「ああん?!何だと甘党!やんのか!?!」

「上等だ表に出やがれ!」

カレーの味の決裂により、なぜかいきなり戦うことになる。

五百蔵 side

「提督……………幾らなんでも大人げないかと……………」

吹雪にツツコミを貰うがそんなのを気にせずにチエルノアルファを起動させる  
「男には譲れないものがあるんだよ。」

格好いいことを言うがもめた内容がカレーなので酷いっただらありやしない。

AMIDA鎮守府 side

「提督……人には好みと言うものがあつて……」

「結局は排除するしかないんだよ。」

如月の話をガン無視しつつ、機体を用意する今回用意したのはガツチガチのガチタンである。

尚、アセンブルは

head h02 scarlet リンネ

core CB-209

Arms AB-107D バリール

Legs Let-A-D14 法界坊

FCS Fe-L-E28

Recon Ra-103

GENARATOR GE-AR41

右腕 AM/GGA-206

左腕 ISONOKAMI mdl. 1

右腕ハンガー X-000 KARRASAWA

左腕ハンガー Au-R-F19



AP 49498

KE 2408

CE 1781

TE 3556

となつている。

「提督…その機体は？」

彼女が疑問を持つのも無理はない、そうこれはかつて彼が一度だけ作ったはよいものやっぱり俺は重2が好きだ！となり、お蔵入りとなつた機体なのだ。

（因みに作者はV VDでは重2 中二 四脚がメインでf aだと中二 逆関節 タンクになります。え？軽二？私はアレは使いこなせませんでした。）

「ふ、たかがバケツに私の機体を用意する程でもない。四葉一樹 ガーディアン出撃する。全て燃やし尽くす、それしか出来ないのぞな。」

それだけ言うと言指定されたアリーナに向かう

1300 AMIDA鎮守府 アリーナ

今回のルールはいたって簡単

時間無制限で相手をぶちのめした方が勝ちだ。

「見せてあげよう！私の実力を！」

「調子に乗るな若造が！」

五百蔵が近づいて拳を振り上げ全体重を乗せる！

ガアアアアン!!!

金属のぶつかる音が響くだが……………

「ガチタンを舐めないでくれたまえ。」

「クッソ！やつぱり固ええ!!」

が、内心冷や汗をかく四葉

(ヤッベエエ!?あの人電撃使うて聞いたからTE3000以上にしたから動けねえ!!その前に電撃イテエ!!てか、どうしようこれ!?)

内心まあ、勝てるだろと思いきそのままだったのだが作った本人ですら、黒歴史と認定した法界坊さんレベルの機体だつまり言いたいことはただひとつ

動けないのだ……………

(畜生おおお!!!ネクストじゃないから動き悪いし、ここ、海上だから浮けるだけのen有るけど……………動けねえ!!何これ!?固定砲台か?!ACと言う名の砲台か?!)

尚、今の攻撃で彼の機体のAPは20000ほど削られている。

だが、そんな状態でも煽り続ける

「おいおい、そんな程度かよ!! あんたの実力はよおお!!」

そう言い、右腕のガトリングを使い弾幕を張る

「その程度! 交わせるんだよ!」

動けないのを察して近づいてのラッシュに切り替えようとするが……………

「だー!!! メンドクセエ!! とつとと死ねえ!!」

エネルギー切れ覚悟で動きまくる

「動くな固定砲台!」

五百蔵も気がつき止めを刺そうとするが……………

ミサイルにより、近づくのが困難だった。

いやそもそも、装備の差が酷いのだ

四葉の機体は、射撃武器だ

五百蔵は殴る機体だ

だが、戦争とは火力で決まるものではない……………

「貰ったー!!!」

EN切れを起こした隙をつき

五百蔵が四葉を押さえつけてフルチャージで殴ろうとした直後

四葉は薄く笑っていた……………

「残念だったな……………俺の勝ちだ」

バカン!!!

ガン!

それぞれ全力で殴る!

「ガ?!!」

大きな音がした直後、五百蔵の意識は遠のいていった。

そして四葉の左手には射出されたパイルがあった……………

「ハンガーで変えるのを忘れていた6万パイル……………こんなところで役に立つとはな。」

そう、実は四葉がこの機体を作ったとき軽量二脚を元に作っていたのでパイルを載せていた。

だが、何となく外さずに載せていたので今回助かったのだ。

「まさか役に立つとはな……………ふふ、これだから面白いんだよ戦いは……………ガハ!」

しかしガチタンと言っても中身は人間……………

高電圧には耐えれずにそのまま気絶する……………

こうして、カレーを巡った男の戦いは……………取り敢えず、四葉の勝ちで決まった……………

その頃、食堂

「あゝつと!?!ここでピクシーダウン!」

吹雪の大食いに対抗した者がほぼ全て敗北した……………

「まだまだいけます!カレー特盛!福神漬けも!」

(このままでは、家の予算が消し飛ぶ……………!!仕方ありません……………アレやりますか。)

おかわりを使用とする吹雪に一同驚くが、如月にはひとつだけ手段があった。

「雪吹さん、少しよろしいかしら?」

「何でしょうか!如月さん!」

「そろそろカレーにも飽きたでしょう?特製のマカロンをどうぞ」

そう言うと、吹雪の目の前に緑色に輝くマカロンを置く

そして如月が左手に装備を見られないようにはめる

「うわー!美味しそうです!いただ『ガン!』……………パタン」

直後、吹雪を緑色の閃光が包んだ

「コジマブレード……………偉大ね」

それだけ言うと如月は吹雪を医務室に運ぶことにした、ごめんなさいと思いつつ

……………

## パーティー

1735 AMIDA 鎮守府

四葉と五百蔵は正座させられていた

「提督（四葉）、そもそも食べ物好みは人それぞれなのです。」

「提督、確かに私も辛いのは苦手ですが話し合えばなんとかなるものなんですよ？」

現在二人は絶賛怒られていた。余りにも大人気なかつたからだ……

そんな二人を見つつ、神様と如月はある紙を見つける。

「最近、秋刀魚が取れるようになりました……か。」

「あ！良いこと思いました！」

それは最近海域で秋刀魚が豊漁だと言う資料だった

それを知った神様は二人に近づいた。

「まあまあ、雪吹ちゃんにセラフさんもその辺にしてあげてください。人間には譲れないものがあるんですから。」

説教を続ける二人に助け船を出したかと思われたが……

「それでも、争う理由が酷すぎです。罰として……雪吹ちゃんが満足するだけの秋刀

魚を取ってきなさい。」

この一言に二人は驚愕した……そうこれは今からノンストップで行われるバツゲム。

だが、そんな状況でも四葉は笑う

「OK、オオオケエエエ!! 良いだろう! 彼女が満足するだけの秋刀魚を取ってきてやらあ!」

それだけを言うと彼は勢いよく出撃しようとして

ドンガラガツシャーーン! ドカーーン!!!

滑ってこけて、鎮守府の壁を破壊した。

「何やってるんだか……」

呆れていたがそんな彼を後ろから見る神様

「貴方も行きなさい!」

「わかりましたよ!」

忠告されて、渋々出る五百蔵だった

A M I D A 鎮守府 鎮守府前海域

今ここは戦場になった

「ドオオオラアアア!!!」

「だっしやあああ!!!」

男二人がそれぞれの機体を使い漁を行うが……

「ヤツパリカアアアアア!!!」

釣れなかったようだ……

いやそもそも、ACで漁をおこな……

「畜生おおお!!!何で浮いてこないんだ!」

いやそもそも、ダイナマイト漁はアカ……

「電撃でなぜ来ない!」

だからお前らは網でとれよ!

「ウルセエ!」 ダン! バン! ビリビリ!

おいまじかよ、夢なら醒め!!!

「よし!邪魔者は居なくなつた!」

「狩りの時間だああ!!!」

この後、物凄い勢いで秋刀魚を取る二人を見て深海凄艦達は恐怖した、人間の食い物



に対する意地にだ

1800 AMIDA鎮守府 食堂

そこには今、大量の料理があつた

「どうぞ雪吹ちゃん好きだけ食べな。」

「安心しろ材料はたくさんある。」

あの後、四葉がちよつとした荒業（AMIDA総動員で網を引っ張つてきた。）を行い何とか回収した

尚、半分のサンマは養殖し海に返す予定だ。

自然に対する礼儀と感謝を忘れないようにするのがこの男だ。

そんな苦労を知つてか知らずか幸せそうに食べ続ける吹雪

それを驚きながら見るAMIDA鎮守府の面々

神様と戯れるAMIDA

満身創痍で倒れる提督二人。

こうして、楽しいパーティーの時間は過ぎていった。

次の日

「お世話になりました。」

「いえいえ、こちらも何かと良い話が聞けました。」

北海鎮守府の面々が帰る時間になり、お別れの挨拶をする。

「また何かあったら、連絡をどうぞ。」

「ハハ、そうさせて貰うよ。さあ、みんな帰ろうか。」

「提督！帰りましょうよ！」

「アハハ、わかつたよ。それでは四葉さんありがとうございます。」

五百歳と吹雪が帰ろうとするが神様が見当たらない。その頃神様はAMIDAとお別れのハグをしている

「バイバイ、アミちゃん。また来るからね。グス」

「アミー（また会えるよー）。」

そんな彼女を見て如月が思い付く

「神様、大切に育ててくれるなら。1匹つれていつでも良いですよ。」

「本当ですか!?!ありがとうございます！」

それを聞いて、箱に1匹入れて貰い。帰っていく……

「如月さん、アレでよかつたのですか？」

クーが疑問を持つが、いっこうに答えない如月を不審に思い顔を見ると泣いていたの

だ。

「あの？如月さん？」

クーちゃんに疑問を持たれるが、一度涙を拭いまっすぐ見つめる

「これが、親から巣立っていくて奴なんでしょうね少し寂しいですけど、誇らしいことです。……………AMIDA25号〜！元気でねー!!!」

そう目一杯叫ぶと彼の元に今日の仕事のために戻る。

その途中でクーに一言だけ言う

「出会いがあるから別れもある、それを楽しむのもまた良いものですよ？」

尚、この後このAMIDAの頭が良くなりすぎて相対性理論すら理解するほどになるのはまたどこかのお話。

それと、お土産の秋刀魚寿司（三重県熊野市の郷土料理、美味しいですよ。私は正月のたびに食ってますがアレはお勧めです。）が、帰り道の電車で食べられたので、おっさんのツマミのために輸送したそうだ。

?????

???

???

???

「例ノ準備ハデキタカ？」

「アア、カナリノ部隊を集メタ。コレナラサイアク奴ダケデモ始末デキル。」

「ソウカ、ゴクロウダッタ。ケツコウは来週ダ。ソウ伝エテオイテクレ。」  
「ワカリマシタ、飛行場凄姫殿。」

そしてまた、ここでは平和に緩やかな日々が続くと思われていた……  
あの日になるまで……

「後退しろ！装填急げ！敵さんわんさか撃つてくるぞ！」

「ダメです！第2防衛ライン突破されました！」

「悪いな、如月………渡せそうにないや………」

「提督……!!!」

## Death of four leaves 表

ある日の事 大本営から2枚の書類が届く

「ケツコンカツコカリ？あー、まあ、届いたのか……………」

それは艦娘との絆をより強くする儀式の様なものである。

「それにしても家で贈れる奴誰だっけ？」

そう思い考えるが現状は3人だ

如月と電とクールの3人だ。

「1個しかないからな……………ここは如月だな。」

予てより決めていたことなので今さらのようなものだが

そんなことを思いつつも一枚の書類を見る。

そこには敵が大規模で集結しているのだ、それを撃滅するのが今回の仕事だ。

0830 AMIDA鎮守府 執務室

現在、全員が集合しており。四葉から作戦の内容を聞かされていた。

「まあ、そんな訳でだ……………今回は資源は大本営持ちだ派手に暴れても問題ない！防衛は俺と妖精さん達で行う！第一艦隊は如月、LIV、クール、セラフ、龍驤、電で行って

貰う！残りは第2艦隊として！第一の援護に回ってくれ！それじゃあ、1000集合で解散！」

それぞれが装備の確認のために部屋を出る

その後、四葉はパソコンを起動する、そこには現在想定されるなかで一番最悪の考えを予想していた

（雨が降るかもしれないし、弾が少なくなってきたときを狙われるかもしれない、そして何より）

敵の本隊が此処に来たときだ……………

今回の作戦は四葉にとっては賭けである。

何故なら成功すれば敵の戦力を大幅に削ることが出来るだが、もしそれが罠でここが襲撃された場合……………

（何考えてんだか……………仕方ない。書類は用意しとくか。）

そう思い書類を作り、何かあったときのための用意をする、何かあったとしても戦い続けるために。彼女達の幸せのために

1000 AMIDA 鎮守府 港

「N—W G I X / v 出撃する、戦いは良い私にはそれが必要だわ。」

「アハハ？ L I V 出撃するね、派手にいきましよう！」

「セラフ出るぞ、大きすぎる、修正が必要だ。」

「如月出るは、次の目標は誰かしら？」

「電、出撃するのです！」

「空母機動艦隊、出撃するでー！」

六人が今回のイベント海域に出撃した。

それを窓から見つめる四葉

そして近づくキャロル

「四葉殿何をお考えで？」

そんな彼女の疑問に彼は答える。

「彼女らは無事に成し遂げるさ俺の自慢の娘達だからな。」

それだけ言うとお外を見つめる。

空は彼女等を祝福するように青空だった。

## 1130 海域

今この場は地獄絵図となった。

「ほら、パイ（ルバンカー）食べなよ。」バカン！

セラフが如月から貰った五万パイルを口に入れさせ爆発させてるは

「電の本気を見るのです!」

「ナメルナ駆逐艦ガア!ギャア?!アンカー!?貴様弾を撃てタマヲオオオオ  
!!!???

電はアンカーでレ級と殴り愛を繰り広げていた

「まったく、何やってるんやか。ホーネット!全力で相手してやりな!」

呆れつつも龍驤は空爆でサポートする

「全くいつもの事なんですから。」

そう言いつつも、如月はトリプルを発動ヒュージキャノン二丁持ちにヒュージミサイルの火力パーティーを行っていた。

圧倒的、そう圧倒的火力によりAMIDA艦隊は殲滅していた。だが、クーだけは疑問があった

(フラグシップ所かエリートがいない?おかしい敵の新戦力もない……まさか?)

ここが囷だと勘づいた時には全て終わっていた。

「作戦行動を完了。第2艦隊のみんな大丈夫かな?」

セラフが確認をとろうと思うがどうやら彼女達も無事だったようだ

「如月さん、仕事は終わりました!早く報告して帰るのです!」

電が如月に報告するように頼むが如月は怪訝な顔をしていた……

「如月、どうかしたの?」



クーは嫌な予感がしたがそれは的中する

「提督と通信が繋がらないの。こんなことなかったのに。通信機器の故障かしら？  
クー、第2艦隊と連絡とれる？」

そういうわれ第2艦隊旗艦のピクシーに繋ぐ

「あれ？どうしたのクーちゃん？何かあったの？」

だが、普通に繋がる

「如月……………」

クーは冷や汗が止まらなくなる。

そうこれは全て囷だったのではないかと？

「わかってます……………全員急いで鎮守府に帰還します！嫌な予感がします！」

それだけ言う就先にセラフとクー、それにしがみつくように如月と電がくつつく

「全速で行く！落ちるなよ！」

「こんなこと当たってほしくないけど……………」

全速で鎮守府に近づけた四人そこに写ったのは……………

深海凄艦の死体だった

その数凡そ千は越すだろう

「クソ！やっぱり本命は提督の命だったか！」

クーがブラスターの出力をあげて接近し、執務室の窓が見えるようになった直後  
ドン!!!

執務室の窓が吹き飛んだ……………

そしてその窓の近くに白い軍服を着る彼の姿が見えた

「クー!このまま突撃!彼を助ける!」

「分かった!落ちないでよ!」

そう言いなんとか近づくだがその直後無線が入る

「如月、皆、すまん。」

「提督?」

窓まで後三メートルとなった直後……………

執務室を閃光が包んだ

ドーン!!!

爆発の衝撃で海に落ちる二人

「て、提督?」

「マスター?」

そんな彼女等の元に落ちる彼愛用の黒いハンカチ、それは皆でプレゼントした彼の誕生日プレゼントだった

「う、嘘ですよね？嘘といつてくださいいよ……………」

「そんな……………嫌よ、こんなの絶対に……………」

「イヤアアアアアア!!?!」

彼女等の悲鳴が海に木霊した……………

そして遅れて到着した二人。

「何があつた！おい！クー！如月！クソ！意識を失つていやがる！」

「せ、セラフさん……………あれ……………」

電も悲鳴の理由を理解する。

「フザケルナ！あのバカは簡単には死なない！」

セラフはそう言う執務室に飛び込むだがそこにあつたのは

彼愛用のライフルとハンドガンだけだった……………

### 作戦報告

本日、敵の大規模戦力を叩くものもこれが囿で、警備が薄くなっていたAMIDA鎮守府が襲撃された。

四葉一樹少佐が迎撃したものの最終的には爆発により行方不明。

大本営は搜索に乗り出す、近くの海底から彼の右腕とドツクタグが発見され彼の死

亡は疑いのないものになった。

この事を受けAMIDA鎮守府の解体の話も浮上するが、同鎮守府の艦娘達が彼の生存を信じているのと、彼の残した引き継ぎ書類から警備隊長に権限を移行。

生存は絶望的だが彼の帰還を待つことにする。

尚、本作戦最大の疑問は何故エリートが居なかつたかである。

可能性としては彼にやられたかもしれないがそれにしても少なすぎる、まるで………いや、これ以上書くのはよそう。

この戦争がいつ終わるのかは分からない、だが貴重な戦力が減るのは痛手である。

書類作成者 大本営 書記

## Death of four leaves 裏

時間は彼女達が出撃した後のこと……………

「フン、フンフン、フフーン？」

四葉は鼻唄を歌いながら仕事をしていた。

そんな時、ふと窓の外を見る

「全くゴミ虫どもが……………相手してやるよ！」

写ったのは深海凄艦の大軍

(て……………嘘だろ？殆どエリート級じゃないですかヤダー!?)

そう目の前にいるのはほぼエリートクラスお陰でまだ昼なのに目の前が真っ赤なのだ……………

「俺だ！敵襲！防衛ラインを構築！隊長！キャロルさん！避難してください！」

それだけ言うのと対物ライフルのAW50を取り出して。

机の上に寝転がり構える。

そのまま無線機を繋ぎ妖精に指示を出す

「12次の方向にSB2弾を打ち込め！その後、ヒュージキャノン水平にありったけ

撃ち込んでやれ！出し惜しみするなよ！」

全員に指示を出した後、一発目を装填。

ヲ級の頭に狙いをつける

「悪くおもうなよ、これは戦争なんだ。」

ダン！

12.7mmの独特の射撃音の後、秒速980メートルで進み

頭を吹き飛ばした。

カラン

徘徊しました別のを狙う

だが敵はドンドン増えていく、そしてそれに少しずつ押されていく

「提督！第2砲塔がやられました!？」

「基地内に侵入！ダメです！押さえ込めません!？」

そしてついに鎮守府内に侵入を許してしまう

「チツ!!仕方がない！第三から第八までは全員廊下を固めろ！如月達が戻ってくるまで

の勝負だ！」

全員を必死に激励するが、最悪の事態が起きる

「飛行場凄姫!?!提督!逃げ?!」

ドーン!!

妖精からの報告が一齐に途絶える

「おい！アルファ！ブラボー！チャーリー！デルタ！応答しろ！っ！」

カメラに映る飛行場凄姫、その顔が語るのはただひとつ

お前を殺しに行く

それだけだった

「フ、フフフ、アハハ？アーハッハー!!良いねえこの状況最高だよ！」

叫ぶだけ叫んだ直後部屋のドアが吹き飛ぶ

直後入ってきたレ級の頭をM1911A1で撃ち抜く

四葉は呆れつつ空になった拳銃をリロードしながら

「おいおい？ドアは三回ノックした後入室許可を貰うのが礼儀だろ？」

と話すか

「残念だけど私はそういうのは教わらなかつたわね？」

と答えつつ入ってくる飛行場凄姫

「はじめまして？ここの提督さん？悪いんだけど死んで貰うは」

言い終えるや否や四葉に向かって撃ち始めるだが

「おいおい、この程度かよ」

A Cを起動してK Eシールドを取り出して全て防ぐ。

だが……………

(盾ぶつ壊れたか次はないな……………)

そう完全に壊れてしまったのだ

「やるはね人間、でもこれはどうかしら！」

そう言い、近くに砲撃する

「当たりたくな……………ガッ?!」

撃ってきたのは散弾だった……………そしてその爆風で吹き飛ぶ

そんな彼を見つつ

「あららー? 貴方の右腕飛んじやったみたいね?」

吹き飛んだ彼を踏み抜き、右腕を引きちぎり蹴り飛ばす

「ガア?! クソツタレ……………」

朦朧とする意識の中で無線が繋がる

「提督? 作戦が終了しました。これより帰投します。あれ? 無線が繋がらない?」

如月の声を聞き何とか立ち直すが首が捕まれる

「フフ? 良い部下を持ったみたいね? なら彼女に絶望を与えないとね?」

そのまま彼を壁に叩きつける



意識を殆ど持ってかれるが四葉は最後の賭けに出る

(あそこにある消火器、あれを撃ち抜いてやつの中当てる。後は……………運次第だ)

ゆつくりと笑い始める四葉に飛行場凄姫は疑問を持つ

「何で貴様この状況で笑っていられる？」

その質問に四葉は左手ですでに弾の切れた拳銃を握り

「テメーを葬る準備が出来ただけだ！」

バン！

叫んだ直後に右足で近くに落ちていたマガジンを蹴りあげ装填し消火器を撃ち抜く

そして撃ち抜かれた消火器は姫の後頭部に当たる

「イタ?!人間風情がああ!!!」

激怒した飛行場凄姫が彼をつかんだ直後四葉が笑いつつ

「テメーも仲良くあの世に道連れだ！」

ヒュージキヤノンを装着。

ジエネレーターオーバーロード

機体が限界です！

「?!離せ貴様?!」

彼のやろうとしていることに気がつき

必死に逃げようとするがそのままゼ口距離でヒュージキヤノンを発射  
(悪いな如月……指輪渡せそうにないや。)

最後に彼が見たもの、それはここに向かって飛んできた  
クーと如月の二人だった。

そのまま彼を閃光が包んだ……………

## 彼と私

0500 AMIDA 鎮守府 如月実験室

「……………提督……………」

如月は机の上においてある写真と箱を見る。

その箱の中には思いでの品があったそれは至つて普通の腕時計だった

「提督……………」

それを見ながら思い出す。彼がまだここに来たばかりの時の事……………

四葉がAMIDA 鎮守府に来て1週間目

「まあ、そんなわけでよろしくな。」

そう最初あったときは、何か普通な感じの人だった

仕事は真面目にこなすし、ある一定の距離を保つからお互いに仕事がしやすい。

そして何より、AMIDAを愛しているのが一番だった。

「(こちら)こ(そ)よろしくね? 提督さん♪」

最初の頃は色々あったな

「ヒュージキャノンでの狙撃か。」

「出力あげたのでそのテストも兼ねてます！」

「大丈夫か？」

「大丈夫です。問題ありません！」カチ！

「…………アレ？ジェネレータの故障かしら？」カチン

ドーン!!

あの時は爆発の衝撃で壁が吹き飛んだりしたっけ…………

それに…………

二週間目の事

「AMIDAにヒュージブレード使わせてみよう！」

「持てませんよ……………」

「なら、小型化しよう！」

「出来たー！よし実験だ！」ドカーン！

あの時は爆発して天井が吹き飛んで、あとがたいへんだっけ…………アレ？爆発ばかり？

でもやっぱり皆でわいわいしてたな…………

「この時計だつて……」

「なあ如月、お前誕生日はいつだ？」

「誕生日？そんなもの無かったはね……」

「そうか、じゃあいつも頑張ってるから俺からプレゼントだ」

そのとき渡されたのがこの腕時計だつて

たしか渡されたときに……

「御守りとして持つときなさい。些細なことでも信じておく、ジnkクスは自分から作るもの。」

よく分からなかったけど今ならわかる。

きちんと帰ってきてきてほしかったんだと思う私達に。

私にとって初めてAMIDA以外で心を開けたんだつて

あの時からかな？提督の事を意識し出したのは……だから

「提督………寂しいよ……」

彼女の泣き声が部屋の中に静かに響き続けた

???  
???  
??????

一人の男がベッドの上で寝かされていた……………

そしてその男の近くでデータをとる髪の毛の長い女性

そんな中眼を覚ます

「……………おや？起きたようだね。君話せるかい？」

「まあな……………あんた誰だ？」

「私？そうね、元海軍の人間よ。それにしてもあんた自分の名前言える？」

そう聞かれその男は

「すまんな思い出せそうにない……………」

悲しみもせずに冷静に答えた

「そうかい、それにしても不思議だね。普通右腕と右目に内蔵をやられたらもう少しパニックになるはずなのに」

そう言われて自分の状況を見る

「……………悪いがこう見えてタフなんでなこれくらい大丈夫だ。生きてるからな。」

そしてなにかを思い出したように女性を見る

「悪いが貴女の名前は？まだ聞いてなかつけど。」

その質問に女性は少しだけ微笑んだ後

「名前？そうね今は無いはでも昔はこう呼ばれていたは

マッドサイエンティスト 明石とね。明石で良いわよ。」

軽く流すように言った後、ひとつの提案をする

「悪いけど貴方には付き合って貰うは私の実験」

人間と艦娘と深海凄艦の移植とネクスト技術の進化のためにね……

明石は微笑み続ける目の前の新しい実験台に

それにたいして彼も笑いながら

「良いよ命の恩人だ、それくらいなら載ってやるよ。」

と答えた。

## それぞれの思い

0600 AMIDA 鎮守府 N | W G I X / v クーちゃんの部屋

「マスター……………」

クーは何気なく外を見る。思い出すはあの爆発の時の事

あの時もっと早く気がついていれば……………

もっと早く動ければ……………

コンコン

そう考えていると部屋に誰かが訪れる

「ハイ？」

「U—511だけど入って良い？」

どうやらユーちゃんが遊びに来たみたいだ

「良いわよ、ちよつと待って」

そう言うのと、涙を拭い部屋に招き入れる。

「どうしたの？何かあったかしら？」

「ちよつとお話があつて来た。」



U—511はそう言うとかーの隣に来るそして……

「提督は必ず帰ってくるよ。大丈夫あの人が約束破ったこと無かったよね？きつと帰ってくるよ。」

自信をもって答えたあとクーの頭を撫でる

「だから今は泣いていいんだよ。」

「でも、私は皆のリーダーだから……」

「それでも辛いときは泣いていいんだよ。」

その言葉にクーは静かに泣き始めた。

今だけはこの子に甘えよう。この優しさの前に……

同時刻 AMIDA鎮守府 港

「ここにいたんやな、電はん。」

龍驤はそう言うのと、防波堤の上に腰掛けていた電の隣に腰かける

「龍驤さん……」

「ここであいつが帰ってくるのを待つとるんか」

悲しそうに聞く龍驤に電は答える

「だって司令官さんが帰ってきたときにお迎えがいなければ可哀想なのです。」

「せやけどな、それで電はんが倒れたら元も子もないやろ？ほれ、朝御飯や。一緒にたべ

「ようやないか。」

毎日のように防波堤に行くのを知っていた龍驤は少しでも負担を減らすために毎日様子を見ていたのだ。

「ありがたいのです、やっぱり何かあったら司令官さんも哀しむのです。」

そう言うのと泣きながらおにぎりを食べる。

その味はほんのりとしよっぱかったみたいだ

（全くどこにいるんやほんま、提督はんはよー帰ってこんとうちが爆撃するでほんまに。）

朝日を見つつ、龍驤はまだ帰らぬ提督に思いを馳せた。

???  
??  
???

「どうやら成功したみたいだね。どうだい動けるかい?」

明石にそういわれ立ち上がる

「本当に不思議なもんだなここまで出来るなんて。」

彼はそう言うのと右腕を開いたり閉じたりする

カシヤカシヤ

「ちよーとばかり危ない橋を渡らせてもらったけどそれも問題ないね。」

カラカラと笑う明石に少し苦笑しつつ答える

「義手はまだ分かるがまさか『深海凄艦の体の一部』を使うとはね」

そういう彼の右目は金色になっていた

「イヤー私もまさか成功するとは思ってなかったんだよ。でも十分機能するよ。それと貴方の持ってたSDカードのデータと本部のデータベースからちよるまかしたのを元に作ったネクスト？だっけ？あれもあとで使って欲しいんだよ。データが欲しいから。」

そう言う明石がいい終えたあとに

「まあ、今の君の義手はコジマ粒子だっけ？あれを使ったブレードとキャノンだから無くて問題ないと思うけどね♪」

言いたいことを言う朝御飯作ってくるね！とだけ言い部屋から立ち去る明石

そんな彼女を見送りつつ右腕を見る。

さつきからずっと緑の粒子が溢れてるがこれは大丈夫なのだろうかと思いつつまあ、問題ないかと判断し

明石が置いていった自分の情報を確認していく

「フムフム、AMIDA鎮守府の四葉一樹てのが俺の名前かそんで秘書艦は如月と………ッ？」

ほんの少し頭に痛みが入り横になる

（全く記憶をなくして取り戻そうと思ってるがこれじゃあまともに動けそうにないや。）  
少し横になろうと考えるが明石が飯を作ってるのを思いだし、食べてからにしようと考え行動しようとした直後

ズル！ビターン！

落ちていた紙で足を滑らせて転倒し頭を打つ

「イツツ………ッ！やっと思いついたぜ。」

どうやら衝撃で記憶を取り戻したみたいだ

「大丈夫ー？もうまた頭打って記憶なくしたら困るよー？」

明石がサンドイツチを持ってくるがそこに写ったのは最初あったときは違うクルな彼だった

「心配かけたな、記憶は元に戻った。なあ家に来ないか？お前の技術力を認めてスカウトしたいどうだ？」

「嬉しいけど、その前にお願ひがあるんだけど？」

明石は誘いに乗る前にやっておきたいことがあると言う  
「敵が来てるみたいだから殲滅してきて。」

あまりにも唐突に言われたので少し止まってから

「分かったよ、四葉一樹『ノスフェラト』出るぞ！」

こうして彼は復活した。

狂気の元に、ここからどうなるかは彼次第

「コジマ技術、存在しない力、イレギュラー面白くなってきたはね♪それにしても  
……………データ取れるほどの時間あるかな？まあいいや。」

明石が何か企んでいるようだが……………気にしないでおこう

## ネクストステージ!

「全く……どんな機体か気になっていたがまさかこいつとはな。」

四葉が見せられた機体それはかつて彼がもつとも愛用した機体だった

「普通に組んだらまず積載量で痛い目を見たから。限界まで積載量上げたんだよな……フフ懐かしいね。さてと明石! 敵の数は!」

明石に敵の数を確認する、直後明石から間延びした声が返ってくる

「ん、軽く百はいるかな? 弾足りるの?」

そう言われるがカタパルトに乗りつつ

「百しかないのか、30分で蹴りをつける。さてと四葉一樹ノスフェラト出る!」

宣言したあとに繰り出すが……

「ツ! Gが凄い! 良いねえこの感じ楽しめそうだ。」

両腕の050ANSRを握り直し目の前の敵を見つめる

「さてと、いっちょよいきますか!」

ダンダン!

右目に写される情報から敵の位置を確認ロックオン

「ヲ?!ナンダコイツ!?アンナ遠距離カラ?!艦載機ヲツカウシカ……………テオトサレタ!」  
「ヲキユウ!テメエハニゲロ!コイツハワタシガ!」

そう言つて前に出るレ級を仕留める。

そのあと近づいて……

「ほらコジマ食べなよ!」 ドグシヤア!!!

義手のコジマブレードを叩き込み大規模コジマ爆発を発生させその場からヲ級を消す

「弾が半分を切つたか……………仕方ない駆逐艦相手に撃ちますかね。」

残弾が少なくなってきたから撃ちきつてしまおうと考え

近くにいた駆逐艦に全部撃ち込む

カチン!カチン!

「弾切れか……………予備兵装のハンドガン使いますかね。」

格納されていたアルゼブラ社製ハンドガンを取りだし、

リロードが終わつてるのを確認し。

肩のミサイルと連動ミサイルを起動させる

「ハッハー!!!まだまだ行けるぜ!俺はよおお!!!」

楽しそうに叫ぶとありつたけのミサイルをばら蒔く

ドーン!!ドカーン!!バラバラ!!

ありつたけ撃ちまくった後に残ったのは火薬と重油の臭いだった

「明石ー終わったぞー?.....明石?」

明石からの返信がないのに気がつき目の前を見ると

「ヒサシブリネ? シンダカトオモツテイタハ?」

飛行場凄姫が明石を人質にして立っていた

「アハハ、ゴメンね捕まっちゃった!」

首を絞められながらも笑いながら答える明石

チャキ

そんな彼女事撃ちかねない程の気迫をもって銃を構える四葉

「オ、オイ!? コイツガドウナツテモヨイノカ!?!」

慌てる飛行場凄姫に四葉が笑いながら一言

「悪いが人の体を変に弄くる奴は嫌いでね♪」

バラバラ!!!

明石ごと飛行場凄姫を蜂の巣にする

「カハ?!キサ.....ッ!?!」

撃ち抜かれてバランスを崩した直後.....



「最大出力の実験台だオラア!!」

ゴジマブレードを全力で顔面に叩き込んだ

ズドン!!!

そのまま飛行場凄姫を消した後に明石に駆け寄る

「すまん、やり過ぎたか?」

そんな彼の質問に明石は血を吐きつつ

「ゴフ、やりすぎですよ。」

なんとか答えるがちよつと位置が悪かったみたいだ

出血量が多いのだ

「安心しろ、一度お前の家まで戻って応急処置したらこつちまで連れて行ってやる。」

そのまま明石の家に駆け込み治療する

「脈拍、血圧ともに問題なしと………??ウソダロ!」

四葉が何気なく外に繋がるカメラを見たとき目撃したものそれは………

海一杯にいる深海凄艦達だった

「ゴホ?!:派手にやり過ぎてばれたみたいね………どうするの?」

明石が質問するがそんな彼女の質問に四葉はお姫様だっこをして答える

「オーバードブーストで振りきるだけ!」

シユオオオオン!!

明石を抱えたまま飛び出しそのまま一気に急加速をして敵をすべて振りきる。

「このままAMIDA鎮守府まで一気に行く!目え回すなよ!!」

四葉が明石に言うが既に明石は気絶しているので意味はない

ヒユオオオオン!!!

そしてそのまま彼は自分の家に向かって飛んでいった。

1130 AMIDA鎮守府 執務室

「四葉君まったく仕事溜めてなかったんだねえ?」

「隊長……………このままでは昼には業務が終わってしまいます。一度休憩しましょう。」

警備隊の二人が楽しく仕事をしているときに電が訪れる

「お掃除の時間なのです!」

そういわれ二人は休憩も兼ねて一度退室する

「フンフーン、今日は何か良いことが起こるかもしれないのです!」

掃除を始めるがふと外を見たとき気になるものが見える

「光がこつちに来てるのです?」

そう思った直後執務室を光が包み込んだ

ドンガラガツシャーーン!!!

そして飛び込んできたのは……………

「ただいま? すまんが怪我人がいるんでなすぐに頼むよ♪」

司令官だった……………

「司令官?! お、おがえりなさいなのです!」

電が泣きながら四葉に抱きつく

そして爆音を聞き付けて他の面々も集まる。

「提督?! おかえりなさい!」

龍驤は明るく答え

「マスター!!! 寂しかったよ!」

クーは飛び付いて二人ごと押し倒し

「先駆けずるいですクーさん! マスター! 私達もです!」

UNAC三人娘がそんな二人を見て羨ましがる

「ここまではまだよかった……………」

「提督……………本当に心配したんですよ!!!」

如月がヒュージキヤノンを展開

「帰ってきたと思ったら女連れ込んでくるとは修正してやる！そこに直れ！」

セラフがレーザーブレードを展開

帰ってきたと思つたら、そのまま鬼ごっこ開始となると思われた…………

だが…………

「二人とも落ち着いて、寂しかったのはわかるけどネ？」

U-511に諭されて追いかけるのをやめる

「ほら、アドミラル言うことがあるでしょ？」

「すまん皆、帰還が遅くなった。それと……………ただいま。」

「……………おかえりなさい！……………」

こうしてAMIDA鎮守府提督、四葉一樹が無事に帰還した

「ねえ、キャロリン？」

「なんででしょうか隊長……………」

「彼、帰ってきた直後に始末書作るとか相当だね。」

「そうですね……………壁をぶち抜きますか普通？」

そう現在執務室の壁は大穴が空いているのだ……………

まあ、それを楽しむのもこの個性だけだね。

## コジマ搭載型

四葉が帰ってきて皆でお昼を食べたあと……………

1400 AMIDA鎮守府 医務室

如月は明石の元を訪れていた……………

明石も珍しい来客に驚きつつも体を起こす

「久しぶりね、マッドサイエンティスト明石。提督に撃たれたみたいだけどその分だと無事そうね？」

「ふふ、当たり所が良かっただけよ。此方も久しぶりねAMIDAの如月さん？」

「どうやら二人は知り合いのようだ。再開の言葉もそこそこにお互い懐かしみあう

「最後にあつたのは2年前かしら？」

「あの時はお互い軍法会議にかけられたときだったね。」

明石がベットの上で笑っているが如月は呆れつつ

「死んだとばかり思っていたは」

「と言うそんな如月にたいして明石は疑問に答える

「実験がしにくかったからね♪自分の家を吹き飛ばして実験体の死体を置いておいたか

ら気づかれなかったのよ。貴女だって大本営から睨まれてこんなところに送られたのでしょ？そりゃー実験でちよつとバイオハザード起こせばそうなるでしょうけど。」

明石が如月の過去を少し話すが如月もそれを返すように

「貴女だって、実験のために何人犠牲にしてるのやら……それで、一つ聞きたいのだけど。」

明石を睨んでから紙を渡す

その紙にはこう記されていた

『コジマ粒子砲による駆逐艦の火力増強』

「何よこの面白そうなの！私も混ぜなさい！」

如月が明石を揺さぶりながら懇願する

「分かったわよ!?離して！傷に痛むから！」

明石が自分だけでやりたかったけど仕方ないと諦めるが

如月がそのまま追求する

「それにしても……ありがとね。提督のこと。」

そう如月にとって彼女は実験のためなら対象を殺すことも構わないのだ……その彼女が提督を助けてくれたのだ

「気にしないで、何となく気に入ったから助けただけだし。で、如月……貴女コレをや

れる駆逐艦いるの？」

そのまま明石は返すように如月に聞くが当の如月も思い付くのがいるようだ。

「電ね……………彼女なら使いこなせると思うわ。」

そう答えると如月は電を探しにいった……………

1600 AMIDA 鎮守府 執務室

四葉は久しぶりの書類仕事をしていた。

今日の秘書艦はクーちゃんのようなだ

「プハ、マスターもつとしてください。」

「クー……………人の上に座るのはやめなさい、書類が読みにくい。後、寂しかったからといきなりキスをしないでくれ星が見えたぞ真面目に。」

仕事してないようだ。

そんな彼らに來客が訪れる

「司令官さん、お茶を持ってきたのです。」

電がお茶を持ってきたようだ。

それを飲みつつ次の書類を読む

「ありがとね、さてと？ンー？紅い未確認機？セラフはうちにいるとして……………本家の

方か……………」

四葉はちよつと気になったが一枚の紙を見て諦める

(悪いがセラフは俺がもらおう! by 風見)

(風見さん……………いやまあ家のセラフはプライマルアーマーにアサルトまで使えるのでぶつちやけ要りません。まあ死なないことを祈ろう南無南無。)

そんなことを思いながら明日の出撃のメンバーを考えていると廊下から話し声がする

「電ちゃんちよつと手伝ってもらえる?」

「離してください如月さん!?絶対ましなことじゃないのです?!」

どうやら如月と電が揉めてるようだ。

四葉は少しばかり放っておこうと思うが会話の内容を聞きちよつと焦る。

その内容は……………」

「肩にコジマキャノンを載せるだけよ!問題ないは!」

「問題しかないのです?!なんなのですかこの緑色は?!」

さすがに止めないとここが汚染されると思い部屋を出ようとした直後……………」

「提督……………まだ仕事が残っています。」

クーちゃんに腕を引つ張られ止められた



「いや、クー……………今日の分は終わっているはずだが？」

四葉が机の上の書類を指差し離れようとするがクーはそのまま四葉に体を預ける。

「クー？」

「まだ私との夜戦があります。」

「……………ハツハツハーナイスジョーク。」

四葉がクーをどこかそうとしたときクーがまた四葉にキスをする……

「マスター……………寂しかったんです。だから、コレは罰だと思つて受けてください。」

「……………クー」

そしてお互いゆっくりと近づいていった

そのままズルズルと過ぎこしていく二人だった。

その頃……………電

「離すのです?!助けて司令官さーん!!」

「大丈夫よ電ちゃん、すぐに終わるからね♪」

「如月……………早くしないと体への負担が大きくなる。あと私がやるのが大変になる。」

「分かつてるわよ明石、変わらないわね仕事の時の催促の多さは。」

「分かつてるなら急いでちょうだい、彼女怯えているわよ?」

「イヤダーシニタクナイノデスー!!!」

電が必死に逃げようとするがベルトで固定されているので動けない。

明石からの催促に如月が呆れつつも電に装備を追加していく

そして……………

「ついにできました！コジマ搭載型二足歩行駆逐艦電です！我々はついに成し遂げました！」

今ここに新しい変態が誕生した。

今後どうなるかは分からないがまた一つ危ないものが完成したことだけが言える

「それにしても、コジマキャノンを四つも載せるとかロマンよねえ？」

「良いですよねえー。」

## コジマ搭載型二足歩行駆逐艦だと！ふつくしい！

0600 AMIDA 鎮守府 執務室

四葉が執務室隣の仮眠室のベットで目を覚ます

「イツツ……………そういや昨日クーと寝たんだけ。」

そう言う彼の隣には安らかに寝るクーちゃんがいた

「相変わらず……………何やってんだか俺も……………おい、クー起きろ……………まったく……………」

クーを揺さぶって起こそうとするが

「フフ、マスターさんもつと激しく。」

幸せそうに寝てるので起こしにくいのだ、だが起きなくては仕事に支障が出る。仕方ないので四葉はちよつとした手を使う

「仕方ないな……………もう少し寝かせてやると思ってたか！そいやー！」

威勢の良い掛け声と共に右手の義手からコジマ粒子をぶっぱなす

ドカーン！

「アベシ?! マスター！酷いですよ！折角マスターが上に来てくれたので楽しみにしていたのに！」

「起きてたならとつとと布団から出る。今日も仕事だ。」

そのまま布団から出ようとするが止められる

「うー、せめておはようのキスクらい……………」

上目使いで彼を見つめるがそれにたいして四葉は微笑を浮かべつつ

「仕方ないな……………出力最大でコジマとkissさせてやる。」

カチャン

義手をキャノンモードにしてチャージを始める

「もう……………マスター冷たい。」

寂しそうに見つめたあと布団から出て朝御飯を食べに行く。

0630 AMIDA鎮守府 食堂

U-511と龍驤が今日の食事当番のようだ

何でわかつたかって?

だって味噌汁の隣にザワークラウトがあるんだぞ?

因にだが、サイファー&ピクシー&シュトリゴンだとサンドイッチなどの軽いもの

セラフ&クーだとシチューなどの体を温める系

如月&Livだと色々つつても彼奴等作らずにAMIDAに作らせてるからな……………

料理しているところは見たことない。

まあ、そんなことはさておき今日も新聞を読みながら朝御飯にする

新聞といつてもこここの辺りの情報とかそんなのばかりだが……………

「何々？無人島で釣りをしている空母ヲ級がいたと……………えーと？海が緑に輝いて見えた。セントエルモの火かな？まったく違うけど。」

何時も通り関わると面倒くさいのが多くあるが今日も平和だと感じつつ四葉は紅茶を飲んで朝の時間を過ごしていった

その頃他の娘たちはと言うと

「何時もながら提督はんカツコイイのう？」

「そうね、でも顔の表情から見てまともなことがなかったみたいね。」

一緒に朝御飯を食べつつ会話をしていた。

そんな中ピクシーがクーにフォークを向けつつ

「そう言えばクー、アンタ又マスターと寝ていたんだって？」

といった直後

カチャリ ガチャリ カチン

「クーさん……………またですか。」

「私達だつて一緒にいたいんですよ？」

「アハハ? 所詮この世は弱肉強食! 先に布団に飛び込んだものが勝ちよ!」

クーが叫ぶなり机を蹴り飛ばそうとした直後

ダン!

壁に1発撃ち込まれていた

それをやったのは右手にデザートイーグルを持ったユーちゃんだった

「朝御飯をきちんと食べて、じゃないとみんな吹き飛ばすよ?」

今にも本気で吹き飛ばそうとしているが何よりも……

どこから取り出したのか大型のグレネードキャノンを床において発射できるようにしていたのだ。

「「ゴ、ゴメンナサイ。」」

「わかれば良いよ。ニッコリ」

この時食堂にいる全員が思った、

この鎮守府で一番怒らせてはいけないのはU-511だと

尚、今日はセラフに決まりました。

0800 執務室

朝御飯を食べ終えたあと執務室に戻り今日の予定をたてようとしていた頃来客が訪れる

「如月入ります！」

入室してきた如月が書類を持ってきたので今日の担当は如月だったかと思いつつ、一枚目を見て紅茶を吹く

「なんだこりゃあ?!」

そこにはこう書かれていた

『電の近未来化改修が終了これより彼女はコジマ搭載型二足歩行駆逐艦電に成りました』

この時点で四葉には突っ込みたい事がたくさんあったが装備を見て啞然とする

右手は今までと変わらないが

肩にトールラス社のコジマ兵器代表作 ARSENIKONを

左手に ARSENIKON なのだ

コレに突っ込まないほうが可笑しい。

「如月……………」

四葉は如月を恨めしそうにみてから一言いった

「よくやった！コレで彼女は最強の嫌、ロマン溢れる駆逐艦になった！早速出撃だ！」  
皆さんお忘れのようだがこいつはロマン大好き人間だ、だからどんなにやばくてもロマンを追い続けるのだ

「分かりました提督…ではどの海域へ？」

如月からの質問に笑いながら

「南にいこうかね？面子は如月、龍驤、U-511、電、そうだな後はクーとセラフで行って貰う。頼んだよ？」

それだけ言うのと書類仕事に戻る四葉だが2枚目を見て頭を抱えた後思い出したように答える。

「弾薬費は出来る限り押さえてくれよ？」

「分かっています、開発にも資材があるので。」

如月は冷静に答えた後退出する、実は提督に教えてないのがあるがそんなことは気にせずに人を呼びに行くことにした。

因にだが2枚目の内容は、無人島で釣りをしている空母ヲ級の目的を調べてほしいので頑張つてね！相手はフラグシップだけどね！平和的によろしく！と言う内容だった（全く、この辺りも平和になったものだ。）

そう思いつつ外を見る、今日の天気は綺麗な秋空だった……

1000 鎮守府 港

出撃メンバーが揃いブリーフィングに入る

『作戦概要を説明する。今回の目標は電の装備のテストを兼ねた出撃だ、データが欲し



いだけだから追撃はしなくて良い。お前らなら平気だと思う。それと最近怪しいのを見たという報告があった。もし何かあったら逃げるように、説明は以上だ。お前らならやりとげると信じている。良い結果を期待する。』

ブリーフィングが終わりそれぞれが装備を確認しに行く頃、龍驤は不安で仕方なかった。

（電はん何時のまにか全身から緑の粒子を出すようになったし、ユーちゃんもなんか右手に怪しいの持つとるし家しか普通のはおらんのか!?)

セラフとクー、如月がよくわからない粒子を使ってるのは分かっていたが電とユーちゃんまで使い始めてるのだから先が不安で仕方ない龍驤だった……………

???  
side

「サクセンノガイヨウヲセツメイスル、ターゲットはAMIDA鎮守府の第一チーム、目標は多いがオマエナラヤレルトキイテイル、ファンデシタラ支援機をヨウイシマス、マア、最終的にはソチラノハンダンダガナ、返事マツテルゼ。『チャンピオンチャップス』」

依頼を聞いたあと、渡された紙から相方を選択する

そいつらの名は……

『セレブリティアッシュ  
ノーカウント』

と書かれていた

## ただのダンモロですな

AMIDA 鎮守府 side

「それにしても……今日は良い天気だな。」

セラフが空を見つめながら進行する、既に多くの敵を倒した後だったので、索敵をしていたのだ。

初めて訪れる場所だったので敵の数が気になるがそこまで多いという訳でもないよ  
うだ

「暇だな、まあそれがいちば……??？」

そんなとき、何となく水平線を見ていると、遠くから3つほど来ているようだ

「チツ、面倒なのが来た、全員迎撃体制、とつとと沈めて帰るよ。」

「了解、N—W G I X / v 迎撃を始める。」

「コジーマ コジーマ コジマアアアニナルノデス!!!」

「艦爆隊！ 派手に殺ってな！」

「さてと？ 派手にいきますか！」

「戦闘開始」

一人ぶち壊れている駆逐艦がいるがそれぞれ迎撃体制を取りぶっばなすが………  
バシユン!!

全弾回避されたのだそしてその内の一機が龍驤に突撃し

「ドオオオラアアアア!!」

叫びながら龍驤に攻撃してきた

「チツ!!?そんな攻撃当たらないで!」

だがこれでもAMIDA鎮守府所属その場で倒れて攻撃を回避する。

「おいおい!簡単な仕事じゃなかったのかよ!援護しろよ!グッドラック!」

よくわからん青い機体が必要に攻撃してくるが的はずれなところに撃ちまくっているお陰で余裕で回避出来ると言うかまずこっちに飛んできてすらいないのでこいつ大丈夫かとすら思うAMIDA鎮守府の面々

そして………先に動いたのはU-511だった………

「皆コジマになああれええ!!」

「ダツシャアアアア!!」

二人が同時に自分の手の武器をぶつけ合う

直後大規模な爆発が起きた

ドツカーン!!!

「グー！」

「ヤッパリカアアアア!!」

お互いに膝をつくのが先に当てたのはU-511でギルドーザーはそのまま爆発した  
 ……

「クソ！俺は逃げるぞ！死ぬだけはゴメンだ！」

そう叫んだセレブリティアッシュだが……

「逃がさん、ゴミが」

「ターゲット確認、修正、排除」

「テストのデータにすらなりませんか………使えない」

鎮守府の狂気の的にされたが………

「ウ、ウワア!?フワア?!」

バシューー!バララ!!!

ライフルとヒュージキヤノンを避けさらにミサイルも迎撃する

「なるほど、流石ネクスト動きは速い………だが………死ぬ」

バシューン!!

エネルギーが切れたところをセラフに一刀両断される……

「ウ、ウワアアアアアア?!?!?!?!」

そして彼も爆発し残るのは一人になった直後……

「ま、待ってくれ！降参！降参だ！俺は指示されただけなんだ！それにアンタ達は生きている！ノーカウントだ！ノーカウント!!!」

まさかの必死の命乞いに思わず呆れる一同

「こいつ大物だ。」

「殺す気も失せた、電………お前の判断に任せる。」

「なんつー間抜けなやつや。」

「は、はわわ」

「電ちゃんあなたの好きにしてください。」

一同から言われてノーカウントの前に立つ電。

「お、お嬢ちゃん。お、お互い生きて帰れるから問題ないだろ！助けてくれ！」

必死に言われるので電はフルチャージの終えたコジマライフルを下ろした

(た、助かった。)

そう思った直後

「やっぱり撃つのです！」

ドッシャー!!!

両肩のコジマキャノンを撃った

「おいマジかよ、夢ならさめ」

そのまま彼は緑光に呑み込まれて跡形もなく消えた。

「派手にやったね。」

「実験は終了、まあちようど良いくらいですかね?」

それぞれ互いの無事を祝い鎮守府に帰投する。

その頃、AMIDA鎮守府 執務室

四葉がいつぞやの箱を見ながらあることに気がつく

「……………?これそう言えば行って帰っての分は有るのか……………時間まで指定出来ると……………」

何か考えが浮かんだのかサイファーを呼び出す

「なんでしようかマスター?」

「5分だけ休憩を貰う、少し出掛ける。」

「マ、マスター!?!」

それだけ言うと言いついでサイファーが反論するよりも先に装置を起動させる。

その後、キャロルが来た

「四葉さん、頼まれていた弾薬の購入の申請……………居ないのですか?サイファーさん彼

見ました？」

ジト目で見つめられて顔が真っ青になるサイファー

「えっと5分ほどで帰るそうです。」

そう言われ、なら待ちましようとして二人で待つことにする。

5分後

ドーン！

突然執務室を閃光と爆音が包む

「プハー！最高だったよ！あれ？キャロルさん来てたんですか？」

戻ってきた四葉は全身ボロボロで尚且つ、右腕の義手が無くなっていた。

「マスター!?何があったんですかその怪我！それよりも腕！」

慌てるサイファーに笑いつつ

「イヤー、飛んだ先で面白い奴にあつてなちよつと遊んできたならこの様だよ。やっぱり相手するもんじやないね。」

人類種の天敵 黒い鳥の一人 悠翔・ エクスイステンツ

「やっぱり彼はイレギュラーだよ………最高にカッコイイね♪ゴフ」



それだけ言うと口から血を吐きつつ立ち上がる。

「さてと？ 話したいところだけど皆帰ってくるしね、シャワー浴びてくるよ話はその後、そうそう明石に義手を頼んどいてくれ大至急。」

「分かりました、替えの服も用意しておきます。（やった提督の匂い独り占め!）」  
「頼んだよ?」

ふらふらとシャワー室に行くために彼は出ていく、その顔は満足そうだった。

「あの、判子」

「キャロルさん……一番上に置いてください、そうすれば読んでもらえるので。」  
「分かったは、お願いします。」

そのまま彼女は片手に持っていた書類を机の上に置いて退出していった。

## 激闘! 不死者対首輪付き

「よつとー……どこだ?」

四葉が着地したのは何処かの天井裏のようだ

そんな状況でも彼は何の躊躇いもなく近くのパイプにロープを巻き付けて逆さになる

どうやら下で何か行われているようだ

「おりよー? あれは確かーえーつと? IS? だっけ? 俺や風見の旦那が使ってるのと似てるのだっけ? よー分からんが。」

そこでは四人が戦っていた。

「んー? 顔が見えないからよく分からんが……あれはマギーさんの機体かな? で隣のおレンジのは……知らんな」

平気そうに喋っているが現在彼はパイプに脚を引つ搔けて逆さまの状態なのだ、変態だ。

そんな中黒い機体に変化をしていく

「ほー? リミッターカット的なものかねー?」

そう言いつつ、機体からスナイパーライフル050ANSRを取りだし40倍率のスコープを付けて確認する。

「おう、人がどろどろの液体の中に取り込まれてえーら……ん？」

助けにいかうかと考えるがもう一人の機体が変わ化したのを確認し口元に薄く笑みが浮かぶ

「ネクスト……フフフ。良いねえ？面白そうだ。少しばかり彼が何者か確認させて貰おうかな？」

それだけ言うと言いフルを構えてはれないと思われる背中の装甲の継ぎ目にGPSを組み込んだ特殊弾頭を撃ち込む

そのまま、そこから動かずに暫く様子を見ていたが黒い機体が勝ったのでこのまま帰ろうかと思うが……

パイロットの声を聞き予定を変更する

(悠翔君の声じゃないか……ハハハ、今の彼は首輪付きと言うより、人類種の天敵帰ろうかと思ったが予定変更だ。以前はノーマル同士として闘った。なら今回はネクスト同士の派手な試合といこう……俺自身彼との戦闘を望んでいるしな。)

考えを変えていざ行動！と思ったは良いが……脚を滑らせて空中に舞ってしま……

(あれ?手が届かない!?チクシヨウ!届いて!お願いだから、ウーン!チェストー!)

そうやって三時間ほど掛かってやっと脱出したがすでに彼の姿は見えなかった

(まあ、GPSあるから探せるんだけどねえ?)

そう思った頃には辺りは真つ暗動きたいけど動けない状態になっていた。

そんなわけで今日はもう寝よう!と決めてとつと眠る四葉、え?どこで寝てるのかって?

もちろん屋上で寝袋に入らずAMIDAが織ってくれた暖かい毛布を着て眠りました。

次の日

グー

お腹が減って目が覚める

「うーんいい天気だ!よし!せつかくだし行動開始!」

そのまま昨日メーカーをセットしたポイントまで静かに行動する。

そんな中四葉が懸念していることが1つ合ったそれは……

(監視カメラが多いな………仕方ない。慎重に動きますか。)

監視カメラの死角を縫うように行動しつつ目的の悠翔の部屋に到着する。

因みに現在

1430

遅くね?!と思うかもしれないがこうなった原因は……

彼は魚が好きなのだ、なので釣りをすることにしたのだが釣竿が無かったからライフルを代わりに使い見つかからないようにしつつお昼を回収していたのだ。

そんなこんなで悠翔を見つけたが……

(おう……見るからに財団と思われる怪しい男とこれまた主任と思える人がいるよ……今行ったら死ぬな、間違いなく。仕方ない、行動は夜にしましょう。)

そう考えるとやる事がなくなったので昼寝にはいる。

「AMIDAが1匹、AMIDAが2匹……(中略)AMIDAが63314匹……  
グー……」

ちよつと時間飛ばしますよー

2000

四葉side

まあ、あのあと悠翔君がお見舞いに行ったりしてたりしてるから行動できなくて2日目だよ

!

意外とチャンスは来ないものだねえ？

え？今何処にいるのかって？

寮の屋根裏さ！

なんでそこにいるの?!とかベタなのは聞かないでくれ隠れるためには一番よかつたんだ。

おつと家主が帰ってきたみたいだ行動開始といきますか。

四葉 side end

カチャリ

「あー、疲れた……………誰だー」

悠翔が部屋に入って電気をつけた直後目の前に仮面（シンプルな白色）を被った人が立っていてこつちに御辞儀をした

「久し振り……………嫌、君はまた別の悠翔 エクスイステンツ君だったね。」

「アンタ何者だ？」

突然現れて訳の分からないことを言う男に疑問を持つ

「フフ、そんなことは些細なとき、用件はただ1つこの前の戦闘を見て少し思ったんだよ。あんな戦いで満足か？黒い鳥？嫌、首輪付きか人類種の天敵と呼んだ方が良く

な？」

「っ!!!」

あの戦いを見ていたのも驚きだが自分の過去を言われて動揺する

「用件は何だ？ 貴様……………!!」

完全に敵対心を露にした悠翔に四葉は笑いつつ

「簡単さ今夜12時 第一アリーナで待つてる。君が戦いを望むなら来たまえ、そして証明しようじゃないか君の強さと私の強さどちらが上か答えあわせをしようじやいやい」

それだけ言うとナイフを取り出して悠翔に投げつける

シュトン

「その程度……………?!」

直後ナイフからフラッシュが焚かれる

悠翔が閃光から目が慣れた頃にはもう何処にもいなかった。ただ壁に刺さってあったナイフには紙が張り付けてあり

「If think as your heart thinks, and it proves you…………… (君の思うように考えたまえ、それが君の証明になるなら……)」

それをじっと見つめる悠翔だった、だがその顔は獰猛な笑みを浮かべていた。

1150 アリーナ

四葉は箱を準備していた

「時間でセットしておきますか。時間は1230……これでよし。」

準備を整え終えた頃、彼が訪れる。

「来てやったぞ仮面野郎。何処にいる?」

そう聞いた直後アリーナのスポットライトが真ん中の机と椅子を照らす

そしてスピーカーから声が響く

「来てくれてありがとう、歓迎しよう盛大にな!取り敢えずまずはお茶にしようその机までどうぞ。」

言われた通り机に向かい椅子に座った直後……

「悪いが邪魔はされたくないんでね。」

ピー!!!

アリーナのドアが全て封鎖され……

バシユン!!

配電盤も吹き飛ばされた



「最高の舞台を用意した始めようか？」

声の人物がいい終えた直後上から人が降ってきた

「さつきもあつたが自己紹介がまだだつたな四葉一樹だ」

悠翔は突然のことに驚きつつ自分の機体を出す

「ほー？いい機体だ………」

（なんだこいつの機体？分裂ミサイルとスナイパーライフル……さらに連動ミサイルもあるから下手したらすぐにやられるな。）by悠翔

（一度見てるが改めてみると感心するよ……その機体で……）by四葉

「ルールは30分先に倒れた方の負けシンプルだろ？さあ、始めようか」

そして二人の対決が始まる。

「吹っ飛びな！」

開始直後から分裂ミサイルと連動ミサイルでカーニバル状態な四葉

それを迎撃しつつ迎え撃つ悠翔

攻撃をしたらそれをいなしつつ反撃するそんな感じに

お互いが牽制しあうなか先に動いたのは四葉だつた

「良いねえ!!その動き!ならお兄さんも本気で行こうか!?その方が楽しいだろ!」

それだけ言うとう機体の速度が倍に跳ね上がる

「何?!なんだその機体!」

一瞬で後ろに回り込む所か自分の撃ったミサイルを途中で射撃で爆発を起こしダメージを与える

「ハッハー!まだまだ行けるぜ!首輪付きいい!」

あまりの動きに驚く悠翔だが背中の装備に気がつく

(ボンベ?それも4本ほど……スタビかと思つたがあれは違うVOBの燃料タンクのようなのか?ならあれを撃てば遅くなるはず!)

「堕ちろ!」

バン!

悠翔が背中中のボンベを撃つた直後大爆発が起きる

「つ!?やっぱりナイトロを使うのはナンセンスだったか!」

爆炎の中から現れたら紅い機体はボロボロだった

「敗けを認めてくれると楽なんだが?」

悠翔が挑発するが……

「良いねえ?そういうのも確かに後5分しかないし俺のAPも3000を切ってる終わつてると言えば終わってるがまだ終わってないんだよね?」

そういうと全ての武装をパージし左手にハンドガンをもつ

バシユン!!

その後右腕が変化する

「アハハ? トーラスのコジマキャノンを中心にした特製コジマキャノン……………吹き飛ばす!」

ズドオオオオン!!

直後辺り一体がコジマ粒子に包まれる

「閉鎖空間だからってここままでやるか?!」

直撃は免れたもののかすっただけでAPが半分持つてかかっているのだ……………

「オラオラどうしたあ! その程度かよ首輪付きいい!」

「ナメルナアアア!!!」

お互いが肉薄した直後

ドーン!!!

アリーナのドアが全て同時に吹き飛ば

それを確認した四葉はとっさに回避行動を取るが大量に飛んできたミサイルに落と

される

「ガハ!?!」

そのままアリーナのゆかを転がり終えた後……………

「悠翔!大丈夫か!」

増援が来てしまったようだ……………

「貴様……………覚悟はできているな?」

セレン達の殺気に四葉は笑いつつ

「全く折角のチャンスがこんなのでおしまいですか。なんともあつけない。」

そのままフラフラと立ち上がった直後

「これで終わりと思つてねえよなあ!?ハハハ、ギャハハハ!!!」

キャノンから緑の粒子が一気に放出され

「これで終わりだ!!首輪付きiiiiiii!!!」

「させるかあ!!」

四葉が撃つより先に悠翔が彼を撃つ

その反動でキャノンが撃てなくなる四葉

勝負は完全に決まった。

「チツ!……ここまでか!また会おう!ギャハハハ!!!それとこれはおまけだ!」

それだけ言うとキャノンを自爆させて即席の特大アサルトアーマーを発動し全員に

中破レベルのダメージを与えて光の中に消えていった……………

「あの男……………結局なんだったんだ?」

光が消えた後に残ったのは派手に壊れたキャノンと辺りを漂うコジマ粒子だけだった……………

時間軸的に前回の話の時の5分後の後……………

四葉は無事に帰還し明石に怒られていた

「ナニシテクレテルンデスカー!?あれ作るの大変だったんですよ!」

〈提督事情説明中〉

「なるほど、そう言うことがあったのですか……………それにしても派手にやってくれましたね。右目潰れてませんか?」

「そうか?ゴフすまん下手したら色々やったかもしれない。」

明石にそう言われ確認すると確かに右目がかなり純血しており血の涙が出ているほどだ

その様子に明石は呆れつつ、棚から瓶を取り出す

「折角、ヲ級エリートのを入れたのに……………提督少しグシユツとしますよー。」

「ん?あーまあ良いが……………グツ!」

躊躇いもなしに四葉の目玉を抉り取り新しいのを入れる

「今度はレ級のですからね?無くしたら自分で何とかしてくださいね。それと予備の義

手帰るまえに受け取っておいてください。」

それだけ伝えるとどこから来たのか……多分配管からだろうがAMIDAを抱えて研究室に戻る明石。

四葉は苦笑しつつ礼を言うと言った皆のお迎えに行つた……

その日はいつも以上に青空が綺麗だったそう。

オマケ

四葉が消えた後……

「アミー? (どこどこ?)? 分かる1号?」

「アミアミー! (知らねえよ! てか俺が聞きたいよ!)」

どうやら一緒に飛ばされてきたようだ。

「わー、何か可愛いのがいる。」

「アミ?!」

何処からか狐の着ぐるみを着た少女が現れる

「近くで見ると脚がワシヤワシヤしてて面白い……お姉ちゃんにも見せてあげよう。」

そのまま2匹を連れていってしまおう。

この後この少女の姉もAMIDAが好きになり日々の癒しになったそうさ。

# 疾走! 激走!! ダウンヒル!!!

鎮守府近くの峠

何でこんなところに来ていいのか遡ること昨日のこと

AMIDA 鎮守府 執務室

「サイファー、ドライブに行こう。」

いきなり言われて動揺するサイファー

「マ、マスター??え?ドライブですか?(え?ええ?!これデート!?だよね!絶対そうだよね!やりました!私はお姉さま(ピクシー&シュトリゴンのこと)に勝ちました!)分かりました、是非いかせてもらいます。」

「そうそう、足回りも変えたしちよつとだけな?この時期だと紅葉も綺麗だし気分転換にどうだ?(まあ、本音を言うと32GTRを運転したいだけなんだが………まあいつか、たまには山で760馬力を振り回すのも)」

そう言うわけで、今日は1日御休みを貰い二人で出掛けている。

「マスター!紅葉が綺麗です。」



はしやぐサイファアをカメラで撮りつつ、父親のように後を追う

「サイファアあまり先に行くなよ皆へのおみやげを買わないといけないから。」

そう言われるがサイファアはその発言に対して

「嫌、マスター……あんな軽量化されているんじゃないや荷物載らないのでは？」

サイファアが言うのは最もだなぜなら彼の車は

内装が取り外されておりシートもバケットシートになっており中がスツカラカンになってるのだ。

さらにクロモリ鋼製の六点式ロールゲージが入れられており入りにくいのだ

「これ、荷物載せたら危ないのでは？その前に載せれるのですか？」

「紐で縛ればへーきへーき。」

そんなわけでベタなお土産を買ったりしたり

途中でソフトクリームを食べたりなど

色々楽しんでいきいざ帰る時間となった

帰り道では、ずっと安定した走りをしていった。

「マスター……眠たくなってきました。」

運転が丁寧だからかサイファアはウトウトし始めた。

そんな彼女に笑いつつ

「寝てても良いよ?着いたら起こすから……ゴメンその予定キャンセルになった。」  
いきなりの発言にサイファーが戸惑っていると……後ろの車がパッシングをしてきたのだ

「車種はランエボの9型、上等だ足回りの確認には丁度良い、相手してやるよ。」

それだけ言うとギアを2足に叩き込む

入れた直後から直列6気筒の音が体に響く

「ここは走りやすいからな……っ!!ここで抜きに来るか!?!」

そう抜かれたのは入り口が緩やかだが途中が急になっている右コーナー

曲がりやすいが外に膨らみやすいのだ

実際四葉はここでは左足ブレーキを使いながら曲げている。

だからここでは飛ばしたくてもある程度インに寄せておかないとズルズルと外に膨らんでいって自爆する

ましてや2台並んでなど狂気の沙汰だ

なのにそのドライバーはそれを難なくクリアしパスされる

「上等じゃないか……ブースト2.0……760馬力で相手してやるよ。」

カーン!

カーン!

シフトを三速に入れスイッチを押す。

「ここからは100%の全開モード……………」

「マ、マスター!? 壁えええ!? イヤダアアア!? オロシテエエ!!」

サイファーが隣で悲鳴をあげるがそんなことは気にせずにペースをあげる

(アハハ?! 今一体なんキロだして……………)

サイファーがチラリと彼のスピードメーターを見ると

さつきまで法定速度で走っていたのに軽く四倍は越える速度で走る

(アハハ、夢よこれは夢だわ。)

現実逃避を始めるサイファー……………

そしてコーナーが近づけば…

ムギユツ!!

ブレーキを思いっきり踏み

ブウォン!! ウォン!

そのまま踵でアクセルを煽り回転数を保ったままシフトダウン

車が斜めにスライドしていくのに合わせてアクセルを踏んでいく

そんな感じに無事に追い付いたが……………

(後一步が届かないんだよなー?)

ブレーキングで若干負けるのだ

確かに四葉のGTRはオールカーボンにしてあるのでノーマルからおよそ1000キロの軽量化をしているのだが相手のランエボも同じレベルで弄られていると思われるそんな状況で四葉は嫌な予感がした……

「水温油温度問題ない……けどこのエンジンはブローする……」  
よく分からないが感覚的に分かる、それでも

「諦めたくないんでな!」

そのまま2台は駆け降りていき、ラスト1キロになった直後……

四葉が前に出てゴールするだが……

「?!」

パギユ!!

思いつきりクラッチを踏んだ直後

ブワアアア!!

四葉の車がブローした

「ノッキングじゃない……デトネーションかついてない……」

どうやらブローしてしまったようだ幸いここから鎮守府までは下り坂そのまま降りれるようだ。

「悪いなサイファー……」

「いえ、楽しかったです。」

「そうか……………」

こうして、四葉は仲間の意外な一面を見ることが出来たようだ。

AMIDA鎮守府 四葉のガレージ

あの後キャリアカーでガレージに移動させた後四葉はずっとガレージに籠っていた  
そんな彼をサイファーが訪れる

「それにしても提督……………これ大丈夫ですかエンジン？」

鎮守府到着したときにサイファーに聞かれるが首を横に振りつつ

「ダメだ、バルブとカムが逝ってる。中もボロボロ元々2・6リッターのこいつを3・1  
リッターにまでボアアップこれじゃあ壊れるわけだよ。」

少し苦笑しつつエンジンを触るその顔は少し寂しそうだ

「マスター今日は寝ましよう。疲れていても上手くは出来ませんよ。」

サイファーに言われ部屋を出る。

外は星が綺麗だったそうだ。

尚この後サイファーは四葉が美味しく頂きました。」

## 人物紹介2！

サイファー

UNAC三姉妹の長女レザスピ機体

三人の中では最も冷静で常に退路を用意する慎重な性格

普段は事務仕事を請け負っており多忙な四葉をサポートしている。

戦闘時は引き撃ちをメインとしている。

趣味は読書。本の形をしているものなら何でも読む。

子供向けの絵本をU-511や電に読み聞かせているのかたまに目撃されている。  
末っ子のシュトリゴンの用に明るく振る舞いたいと思っている。

シュトリゴン

UNAC三姉妹の末っ子

フルKEのある意味鎮守府最強の中量二脚

見た目は髪は黒髪で球磨に近い感じ

一番の元気娘、戦闘時は一番に突撃してライフルを撃ちまくる。

上二人の姉のように大人の女性のようになりたいと思っている。  
見た目は川内の髪を結ばずに茶髪にした感じ。

趣味 皆で遊ぶこと。非番の日は誰かを誘って遊ぶ。この前も缶けり（缶はドラム缶で壊したものが勝ち、耐久度はガチタンクラス）をして楽しんでいたらしい。

L i v

如月の実験のひとつ

『自分達が：『機械と幽霊』で成り立っているなら……その逆もあり得るのではないか？  
そう、機械と言う体を作りそのなかに幽霊を入れればそれは人間に近いものではないか？』

と言う謎のぶつ飛び理論により作られた

武器はフルTEとたちが悪い

一応これでも扱いは駆逐艦

見た目はまんま如月

違うのは髪が真っ白なのとペタンヌ

性格はいつもニコニコ元気に明る

戦闘時は笑いながら連射攻撃を仕掛ける

如月と同化することも可能でその場合一時的に権限は如月に移る

解除後は、中破になるので資材が吹き飛ぶ。

皆の役にたちたいと思っている。

趣味 特になし。だが最近セラフからお菓子作りを教わっており料理の楽しさを知ったらしい。

ナインボールⅡセラフ

何時からか海域に現れるようになった所属不明機

イレギュラーである四葉を殺そうとするが逆に捕まる。

その時の彼の考えを聞き、一時休戦の考えを示し、AMIDA鎮守府に迎え入れられる。

料理は得意な方でよくLivにお菓子作りを教えている。

AMIDA鎮守府に配属直後、如月により魔改造が行われ、コジマ粒子が使えるようになる。

その恩恵かレーザーブレードがコジマブレードになっている。

また、プライマルアーマーも展開できるので現在の所

AMIDA鎮守府最強戦力



本来はイレギュラーのはずの彼女のことを如月はデータだけは出所不明の所から知っていたみたいだが……………

見た目は真つ赤

鳥海と同じくらしいの髪を持つ

趣味は釣り 暇なときに出掛けているみたいだが、良くわからないものを釣ったりするので本人はそれを楽しんでいる。

良く釣るのは深海凄艦だったり妖精さんだったり、魚が釣れるのは希との事

明石

元海軍所属

工作艦だったが中央の技術局に所属していた。

艦娘の肉体欠損を深海凄艦のからだの一部で補うという外道的な研究を行っており、実験が原因で亡くなった艦娘の数は不明。

それが原因でマッドサイエンティストと呼ばれるようになる。

如月とは同じ食堂で一緒に飯を食べる中だったみたいでAMIDAのことも初期から知っている。

海軍を追われた理由は、後少し、後一步を追究しすぎで人間にまで手を出し始めたた

め事態と自分の身の安全を確保しようとした上層部に連合艦隊を差し向けられるが研究室の実験台の中に別の明石がおりそれを身代わりにした。

今では海軍に怨みはないが機会があれば実験台にしたいらしい。

四葉の魔改造を施した張本人

実はハッキング能力も高く、得意技は侵入したことすら気付かせないこと。

軍を追われた後、自分の力で研究を続けており気になる鎮守府にハッキングを仕掛けて情報を抜き取りそれを元に新しい発想の起爆剤としている。

四葉を助けた理由は何となくだそうだが、実際は新しい実験台が欲しかったからである。

おまけ 現在の四葉の欠損部位並びに変更箇所について

AMIDA 鎮守府提督 四葉一樹

以前の戦闘で飛行場凄姫を人間の身でありながら撃破するという偉業を成し遂げている。

だが代償に右腕と右肺、右目、また、左足の膝から下を失っている。また、内臓にも多少ダメージが入っている。

明石に救助された直後に手術が行われ一命をとりとめるが人間を半分辞める。

明石が撃破された深海凄艦の死体から使える部位を探し移植したからだ。

よって現在の彼は人間であり人間ではない。

右腕の義手はコジマ技術を使用しており。

ブレードと腕部キャノンとして使える。

また、右目を義眼ではなく深海凄艦の眼球を移植しており視力が大幅に上がっている。

戦闘時はエリート型のように全身から紅いオーラが出る。

どのような影響が出るかまだ不明なので今後も経過観察が必要である。

執筆者

A M I D A 鎮守府 第一秘書艦 如月

## セラフによるセラフのためのセラフの時間

0800 AMIDA 鎮守府 港

そこには紅い少女が立っていた

その少女は右手に釣竿、左手にバケツを持っていた。

「よい天気だ、釣りには絶好の日和……さあ、出掛けよう。」

そのまま鎮守府から少し離れた無人島に行く

着いた後は馴れた手付きで昇る分けもなく上昇しふわふわと飛んで今日の釣り場を

探す

（こんなところに丁度良い浜がある。）

そこは見た感じ普通の浜辺だが……釣りにハマり、センサーを魚群探知機にしてい

る彼女は気がつく

そう、沢山の何かがあるのだ

（今日はここで釣りをしよう。）

セラフは鎮守府から持ってきた折り畳みイス（四葉の）を拡げて置き、鎮守府から持ってきた魚肉ソーセージ（明石から釣り餌に使えると聞き、ピクシーのつまみからくすね

てきたもの。)を釣り針につけて釣りを始める

(こんなので釣れたら驚きだが釣れなくても普通の練り餌を持ってきてるからそつちにすれば良い。)

そう思いつつ、釣糸を垂らしながら今日の晩御飯等についてぼんやりと考えていると

……

ツンツン!!

何か懸かったようだそれを確認した直後リールを思いつきり巻いて釣り上げる!

クルクル

「イー」

イ級が釣れたようだ……

イ級が悲しそうにこちらを見つめている

『離してあげますか?』

『逃がしますか?』

この二択にセラフは……

「さよなら、つられた不幸を呪うことね。」

ピーピーピーポポポ

『生きることから解放してあげた』

「おいまじかよ?! 夢なら覚め!」

そのまま黒こげになった何かを砂浜に埋めて

（本日の犠牲艦1と砂浜に書き釣りを続ける

ツンツン!!

一時間経過後したときにまた反応がある

「次は何かな?」

軽いものと思いい釣り上げたら

「おねえさん艦娘なんですか?」

妖精さんが釣れたようだ……

「違うわね……似ているけど違うわよ。」

（それだけ答えると妖精さんをクーラーボックスの上に置き、お菓子を与える。

そのままだらだらと時間を過ごしていると……

（フ? 釣りきち三平ちゃんがいる珍しい。）

セラフの近くに白い少女が腰掛け自分の釣竿を取り出す。

（だれかきた? ……?! 深海凄艦!? 何故ここに!?)

（艦娘か………）

お互いに緊張が走るが……

(釣りの邪魔をしたら殺す。)

(なにもしてこない、なるはどこいつも釣り人か)

釣りの事しか考えていないようだ

そのままお互いに相手を見るが敵対する気はないと確認すると座ったまま話し合う

「今日は何か釣れてるかい？」

「今日はアイナメが好調だよ。」

「ココニハヨククルノカ？」

「いいや、初めてだ。」

「ソウカ、ココハイロイロツレル。」

それだけというとヲ級は釣り道具を片付ける

「帰るのか？」

「ああ、今日は釣りをするにはちよつとタイミングが悪かったようだ。」

また会おうとだけ告げるとそのまま帰ろうとする彼女にセラフが声をかける

「また、来てくれないか？ 貴女となら良い話ができそうだ。」

そんな言葉にたいして一度止まり上を見たあと笑いながら

「ソウダナマタアオウ。」

そういうと彼女は海に沈んでいった……………

(面白い奴だな……お？何か来たか?)

かなり重たいから大物だろうと期待したら

「またあつたな。」

釣り上げられた空母ヲ級がいた……………

どうやら帽子の口の部分に引つ掛かったようだ。

「……………そうだな。」

釣り針をはずしてあげて二人で磯の上に座る

「ひとつ聞いていいか？」

「ドウシタ？」

セラフが隣に座るヲ級と釣ったアイナメを焼いているときに質問する

「何故私たちは闘うんだろうか……………私はイレギュラーの排除のために戦ってきた……………だが今のところそれに値するものがない……………教えてくれ、何故貴女は闘う？」

その質問に対してヲ級は焼いていた魚を引っくり返したあと海を見ながら

「ナンデダロウナ？ワタシニモワカラン、ソレガシリタイカアラワタシハタタカツテイル。」

「そういうものなのか？」

「ソウイウモノサ、タシカニウラミヲモツテフクシユウノタメニイキテイルヤツモイル



ガホトンドハムカシノコトナドワスレテシマツテイル……………ワタシダツテソウサ。」  
海を見つめるヲ級の姿は寂しそうだつた

「ケレド世界ハ広い、探スノモ楽シイモノダ。」

それだけ答えるとじゃあといい海に帰るヲ級

セラフはそれを見ながら生き方を考えることにした

(彼女のいう通りだな、世界は広い、探してみるか……………本物を……………)  
決意を胸にセラフは釣つた魚を持つて鎮守府に帰ることにした……………

同時刻 AMIDA 鎮守府 執務室

「だぁー!??!書類が終わらん!? 如月!!なんとならない?!」

ここんところ起きているある事案のせいで四葉は書類がとんでもないことになつていたのだ。

それは……………『弾薬費の高騰』である。

今までかなりギリギリのラインを通してきた四葉だがネクストになつてからは予算を圧迫しているのだ……………

「提督……………文句垂れる前に仕事してくださいね?」

如月が天使の微笑みで拳銃を突きつけるので四葉は諦めて仕事をする、そんな中一本

の電話がかかる

P r r P r r

如月が電話に出る

「はいもしもし如月です。」

「あ！もしもし如月さんですか？お久し振りです！神様です！」

「どうやら相手は以前鎮守府見学に来た北海鎮守府の神様のようだ

「あれ？お久し振りです。どうかされたしたか？」

「いえいえ、最近お疲れと聞きましたのでバカンスはどうでしょうか！」

四葉は如月の電話の内容が気になるが仕事もあるため後で聞こうと思っていたら、如

月が電話をスピーカーモードにして聞こえるようにする

「美味しいものを食べて羽休めはどうでしょうか！」

「いいね、いかせてもらうか。」

「それでは来てくださいね！」

まるで暴風のように喋るだけ喋った後すぐに電話を切られる。

「相変わらず元気だねえ？」

「それが彼女の良いところです。で？提督いついきますか？」

「そうだな、書類が終わったら行こうか。」

そう決めると書類を終わらせるために続きを始めた。

次の日

「と言うわけでだ、ちよつと出掛けてくるからお留守番な？」  
そんなこんなで二人は仲良くハネムーンに出掛けた……………

## 一方その頃

「と言うわけでした！暫く鎮守府を留守にする！皆留守番よろしくな！」

四葉と如月が出掛けると聞き、役割分担などを考える一同、以前もこういうことがあったのでその時の経験をいかすことになった。

まあ、ここんところ出撃もなく訓練だけだったので空いた時間に部屋の掃除などをすることにした。

そして時間は四葉達が出掛けて1時間程たった頃

「ねえ、電これ何？」

U—511が有るものを持ってきたところから始まる

「麻雀なのです。提督さんの持ち物でしょうか？」

「遊べるの？」

U—511が質問すると首を縦に振り

「ハイなのです。でも後二人、人がいるのです……」

そう思っているとキャロルと隊長の二人が通る

「どうかしたのですか二人とも？」

「あ、隊長さん実は……………」

電が事情を説明する

「なるほどね……………キヤローリン、やれるよね？」

隣にいるキヤローリンに話し掛けるが……………

いつの間にか伸ばしていた髪をポニーテールにしていた

「隊長……………私に挑むとは……………見せてあげましょう。全国鎮守府憲兵麻雀大会優勝者の実力を！」

「ギャハハハハ！良いぜ俺だって昔は名の知れた打ち手だ叩きのめしてやるよ。」

と言うわけで始まるわけだが……………

電から提案が出る

「知り合いのお爺さんと呼んでも大丈夫ですか？」

電からの提案に二人は笑いながら

「地域の人たちの交流は大切だしね！」

「大丈夫です、問題はありません。」

そう言っただけで待っていると、その男は現れた

「電ちゃんの頼みだ、受けてやらないとな。」

そいつの髪は真っ白で見た目は幾つもの修羅場を潜ってきたとしか見えなかった。

「アカギだ、アカギシゲル。よろしく。」

「!?!」

そう伝説の打ち手、死神とまで恐れられた博徒。

その男がそこにいた。

「それじゃ始めましょうか、博打を。」

(終わった〜!?)

この後隊長とキャロルはポツコポコにされて給料が消し飛び、食パンの耳になったのは言うまでもない。

尚、終わった後、電とアカギの様子は孫と戯れるお爺ちゃんのようなだったと、セラフとクーが答えていた。

え? U—511? 一局めで点数スツカラカンにされて放置されました。

その頃、北海鎮守府に出掛けている二人は、相手先の吹雪の食欲に驚いたりしていたが……この二人が特に驚いたのは

「AMIDA神とAMIDA王の御尊顔を拝啓出来る日が来るなんて嬉しいです！」

横須賀にてAMIDAを繁殖しているのと出会ったり。

宿泊先が見事なプレハブだった。

10メートルもある巨大生物を捕まえてきたのを貰ったりしていたが………一番は

………

「ギャハハハハ！お嬢さんその程度かよ!？」

「キャアー!？」

横須賀の提督をフルボッコにしていたことだ………

## AMIDA対天使

AMIDA鎮守府でちよつとばかりザワザワやら、ヤメロー！シニタクナイ！や、爺その牌だとなり、キャロルたちが莫大な敗けをくらつてるころ……

北海鎮守府を訪れていた二人は横須賀でAMIDAがたくさんいると聞かされ訪れたが……

「初めまして！AMIDA鎮守府の四葉提督とAMIDA神！私は横須賀所属の明石です！」

「同じく夕張です！」

「二人に会えるのを楽しみにしてきました！」

「「「「アミアミアミー!!!（お嬢様!!!）」」」」

盛大なお出迎えが来た……四葉と如月は感極まって泣いているが別の意味で泣いているのが1名

「ビエエエエン!!!こわいよおお!!」

吹雪である。どうやら以前何かあったようだ。

そんな吹雪を宥める五百蔵



「相変わらず思うけど……何処にこんなだけ居るんだろうね？」

そんな五百蔵の言葉に夕張と明石から

「鎮守府全体です！」

と身も蓋も無いことを言う。

そんな彼らに近づく女性が一人見た目は学生と言われてもそう思えるほど若く見えるが白い軍服から海軍の人間だとわかる。

「お久しぶりです！五百蔵さん！それと初めまして！AMIDA鎮守府の四葉一樹さん

！私はここ横須賀で提督を勤めています磯谷 穂波です！」

「初めまして、磯谷 穂波さん。本日は視察の件ありがとうございます。」

四葉が深々と礼をするがそれを止める 磯谷嬢

「固いのは抜きにしましょう！」

そう言った後暫く談笑をしている時如月の質問から状況が変わる

「そう言えば、ストライカーエウレカで強いんですか？」

「当然よ！……腕さえあれば！」

最後の一言で台無しになりかけるがそれを聞いた四葉の顔を見た五百蔵は嫌な予感がした。

そうこの人のことだ何かするに違いないと。

そしてそれは起こる。

「なら私が相手しましょうか？ AC 使いですので、ちょっとは楽しめると思いますよ？」

四葉の言葉に磯谷は首を横に降りつつ

「嫌々無理ですよ!?! 絶対負けますって!」

そんなとき五百蔵は有ることを思い出す

「四葉さん、ガチタン乗りでしたよね?。」

「ええ、だから彼女には有利だと思いますよ? だって動き鈍くなりますし。海上だから不利だし。」

それを聞いて 磯谷はしぶしぶ了承する。

四葉が機体を確認したいと言い先に港に向かう。

そのとき歌を口ずさんでいたがそれを聞いた五百蔵は心配する。その歌は

「燃えあがれー×3 ガチタン〜 君を〜守れ〜、まだ痛みにも耐〜える〜、AP あるなら〜、巨大なく敵を討てよ〜討てよ〜討てよ〜……………」

棒有名ロボットアニメの初代のOPを変えているのだ

(四葉さん……………選曲ふるくないかい?)

彼は本当は幾つなのかと気になる五百蔵であった。

「そう言えば、五百蔵さんは彼と闘ったこと有るのですか?」

磯谷の質問に五百蔵は苦笑しながらアドバイスもする。

「まあね、あのときは相討ちだったよ（パイルバンカー使うとは思ってもなかった。）距離をある程度取れば勝機はある、頑張ってくれ。」

「ハイ！」

そういつて元気よく出撃する彼女を見守る五百蔵だった

その頃四葉

港にて電話を掛ける

「セラフ？俺だ少し模擬戦をすることになった頼みがある、大至急V O Bでアレを運んでくれ。そうアレだ座標は指示する。え？使うのかって？まあな、勝たないといけないんでな。ああ、頼んだぞ。」

その顔は最高に笑っていた。

そして時間は過ぎ、模擬戦の時間になる。

先に海に出ていた四葉が磯谷に連絡をする。

「そんじゃーよろしくねー。」

「ハイ！全力でお願いますー！」

「OK、そんじやー始め!」

開始と同時にガチタンを使う四葉に接近する

「速!! やっぱり新型は違うねえ!」

即座に弾幕を張るが交わされる

「その程度! 私には当たりません!」

交わしながらミサイルを撃ちダメージを与える

「やっぱり海上だとむりか!」

『AP90%減少』

少しずつ減っていくAP少なくなる弾薬勝敗は決した

「これで終わりです!」

ガキイイイン!!!

ガチタンを思いつきり殴り飛ばす磯谷

『ブレイクダウン!!!』

直後ACから火が上がる。

「やりました! やっぱり機動性が大切です!」

喜ぶ磯谷だが直後無線が繋がる。

「やるねーお嬢さん、だけどD A M A S I T E W A L U I G Aそれは囃  
本命はこつちなんだよ！」

バカン！

何処からか発砲音がした後磯谷は空中を舞う

「ガハ?!」

そのまま海面に叩きつけられる

バシャーン！

体勢を立て直すができなく近くの海面に着弾する。

「馬鹿な!?!狙撃・何処から!」

直ぐに確認すると遠くに一機のACがいた。

その機体はAMIDAに近いカラーリングを持ち

右手にスナイパーキャノン左手に盾を持っていた

「どういうトリックですか!?!」

慌てる磯谷を笑いながら四葉は話す

「アハハ!?!俺が答えると思う? まあ遊びすぎたね。全力でいこう。『不明なユニット  
が接続されました、システムに深刻な影響が出ています、直ちに使用を停止してください。』」

い。』」

「ハイ?!なんでですかそれえ!？」

そのACに展開された武器は一見するとヒュージキャノンに見えるだが……………

両腕で構えているのだそれも銃身が6本のガトリング式だ

「ハッハー!!五百蔵さんから聞いたとき思ったんだよ!核を使っても倒せないやつを敵にしている?ならそいつは核に耐えられるかってなおああ!!喰らいな!ヒュージキャノンmark3!ガトリングキャノンをなあ!」

ブウウウウウ!!!

直後海を閃光が包んだ……………

「キヤアアアア!!!」

そのまま彼女は切りもみしながら撃破された

バキン!

その直後砲身が熱に耐えきれずに自壊する

「ふむ、まだ冷却に難ありと……………ま、終わったから良いけどねえ……………五百蔵さんになにか言われそうだ。」

四葉は磯谷を肩で担ぐと鎮守府に向けて移動を始めた。

ついた直後

「やりすぎだ!」

案の定五百蔵に怒られていた

「ほとんどボロボロじゃないか！てか、もう一度言うやりすぎだ！」

「イヤー！ついやり過ぎてしま………すいません。」

本気で怒られそうになったので黙る四葉

反省するので許すことにした彼は気になっていたことを聞く

「てか、どうやってたのあれ？」

「あー？アレですか？セラフに頼んでVOBで輸送してもらって中身UNACにしといたんで自立行動出来るようにしてただけですよ。」

あまりにも簡単な手なのでバレるか心配でしたがねと、笑う四葉

「……………シンプルだな」

「ええ、シンプルです。それにしても彼女どうしましょうか？」

まだ気絶しているのでどうしようかと悩んでいると……………

「提督ならもうすぐで起きると思います。それよりも！話聞かせてください！」

夕張が話を聞きに来たのでAMIDAに関する話を一時間ほどする。

そして起きた後四葉が謝罪し今度データを贈ることにして話し合いが終わる。

時間は過ぎて帰る時間になったとき……………

「また来てくださいねえー！」

「AMIDA神様ー!」

「アミーー!」

横須賀の人達+αに見おくられて帰っていく

「面白い人達でしたねー。」

「そうだな、さてと行きますか。」

両手を降り去っていく。

次の日

「お世話になりました。」

「休暇になったなら此方としても嬉しいよ。」

四葉と如月は五百歳に別れを告げて帰っていく、懐かしの我が家へと……………

その頃AMIDA鎮守府

「ツモ……………大三元……………終わりだな……………」

「ギイイイヤアアアア!」



二人が強化人間になれるほど負けておりましたとさ……

## クリスマス1

カチャカチャ

AMIDA鎮守府の食堂で四葉が妖精達と何かを作っている。

「提督さん、ここで良いですか」

「ああ、そこに置いといて。」

「ケーキ作り楽しいです。でも多くないですか？」

「仕方ないじゃん、お世話になった方が多いんだから、特にラインアークは大所帯だし、北海鎮守府は食べる量が多いし……さてと口よりも先に手を動かしますか。」

そういうと用意しておいた砂糖菓子を使ってデコレーションを作る、完成したのはいたって普通のサンタとトナカイとAMIDAだった。

そこにセラフが通りかかり、ケーキを見る。

パット見50近くあるのだ。

「四葉？何やってるんですか？そんなにたくさん？」

「んー？セラフか、クリスマス用の意だけど？」

「クリスマス？なんだそれは？」

首を傾げるセラフに四葉は驚く

「なん………だと!? 一年でもっとも楽しい日を知らないのか?!」

「嫌、全くわからん」

その一言に膝をつく……セラフの肩に手を当てた…………

「いいか、クリスマスとは皆で楽しく過ごすものだ」

「日頃から楽しんでる貴方に言われても……………」

「もっとも楽しむ日なんだよ!」

あまりの気迫に狼狽えるセラフ

そうこうしていると、電話がなる。

「あれー? 久し振りの電話だ、隊長か? 五百蔵さん? まさか風見先輩だったりしてなあーと!!」

意気揚々と電話をとる

「もしもし? AMIDA 鎮守府提督四葉一樹だ、用があるなら御早めに、ないなら逆探知してヒュージミサイル撃ち込むぞ?」

物騒なことを言っつて相手の返答を待つと

「相変わらずだな。久し振り、死んだと言う噂を聞いていたが声の様子からだともまだま

だ死ぬ予定は無さそうだな。」

風見提督だった……………

「ええ、まあ、まだ死ぬ予定は無いですけど。いや、あったら困る。そんでー？いきなりなんです？現在立て込んでるから本気と書いてマジな頼み以外は受け付けないが？」

冗談を言うのと帰ってきたのは四葉にとって想定外だった……………

「AMIDAを一匹譲ってくれないか？」

「……………はい？今なんて？（あの、風見さんがAMIDAを寄越せだと？

ハッハーナイスジョーク」

「聴こえてるぞ。」

風見の一言に狼狽えつつも続ける

「分かりました、一匹位なんとも有りません。すぐにお届けします。」

「以外だな、お前がすんなりと決めるなんて。変なのでも食ったか？」

「冬の味覚を楽しんだくらいです。」

「あ、そう。なら頼んだは」

いい終えた後電話が切られる。

その後四葉は作られたケーキとセラフとクーを見てゆつくりと笑った。

「ちようど良いところに、サンタクロースにぴったりな子達がいるじゃないか……………」

12月25日 0100

世間はクリスマス一色だがここは違った……………

今AMIDA鎮守府の全員が集合している。

そして四葉が壇上に上がり話始める。

「諸君、私はクリスマスが好きだ……………」。

諸君、私はクリスマスが好きだ。

諸君!!私はクリスマスが好きだ!

平原で町中で田舎で鎮守府でこの世界で行われる有りとあらゆるクリスマス行事が

大好きだ!

「子供達が平和に家族と過ごしているのを見るのが好きだ。」

「恋人同士が久し振りの再会をしたのを見たときなど感動する!」

あらかた話終えた後本題を話始める。

「と言うわけで……………お世話になった方々にクリスマスプレゼントを私にいく。」

四葉の言葉に質問が出る

「提督はん?誰に渡すんや?」

「取り敢えず、五百歳さんのところと、箱がまだ機能するからMR、ハインツ。それも世話になっているラインアークだな。」

「輸送プランは？」

「北海鎮守府へは、如月を旗艦として。龍驤、電、U-511、サイファー、シュトリゴン、ピクシーで行って貰う。」

その言葉にセラフとクーが首を傾げる。

「マスター「四葉」何を考えている」

「なあに少しばかり最速のプレゼントを届けるだけさ？」

そういうとプレゼントをもらった子供のような笑顔を見せた。

## クリスマスマス2

「作戦の概要を説明する。今回の目標はラインアークにケーキとプレゼントをVOBで運ぶ。」

四葉がプロジェクターを使いセラフとクーに説明をする。

「目標としては世界最速のサンタさんだ！と言う訳で！サンタ役をセラフ！トナカイをクーに俺が直接プレゼントを届ける」

あまりの作戦に啞然とする二人

それでもクーが落ち着きを取り戻して話す

「マ、マスター？何でVOB何ですか？普通にいけば今日中につきますが」

「いやいやーサンタさんは子供達に見つかってはいけない!!」

完全に頭のネジが全部飛んでいるようだ。

そんな中セラフが質問をする。

「まあ、援護はするが騒音と対空レーダーはどうする？引つ掛かるぞ？」

「高度5メートルキープで行けば引つ掛からない。音？そんなもん気にしなない気にしない。」

あまりにも普段と違う四葉に二人は心配する。

「マスター？本当にやるのですか？」

「一年に一度だ派手にいこう。」

それだけ言うのと籠を背負って出撃準備をする。

二人はそんな彼を見て首を横に振ると自分達の準備をする、目指すはラインアーク鎮守府目標はプレゼントを届ける。

ブリーフィングから30分後海上

ヒュオオオオオン!!!

クーのVOBに乗るように二人がいた

「提督ー!?暗くてよく見えなーい！」

「だから暗視ゴーグル渡してるだろ！後レーダーに頼れ！セラフー！なにか動きは!?」

「今のところは！だけど後五分で連中の海域だ行けるのか!?」

「任せときな策はある」

そういうと四葉はクーのVOBにブースターをつけていく

「マ、マスター!?何してるんですか!?!」

「悪いけど静かにしてくれ電話かけるから。」

騒ぐクーを静かにさせた後電話をかける



ラインアーク side

クリスマスパークティーを楽しんだ後執務室に行くと電話がなっている  
心当たりのあつたので、電話に出ると……………

P r r P r r ガチャリ

「あー？四葉か？もしかしてプレゼントの件か？」

「ええ、実は丁度良い AMIDA が居りましてね、初めての娘には丁度良いんですよ。」

「へー？それにしても一つ聞いていいか？」

「何でしょう？」

風見が窓の外を見ると白い光が此方に向かって飛んできている

「何か遠くから光が見えるんだが……………お前何を考えている？」

「あちゃー？分かります？実はクーとセラフの二人に運ばせてるんですよ。それともう

一つコブラで知ってますか？」

「蛇か？」

四葉は風見のもつともらしい答えに笑いつつ

「戦闘機の機動の1つでしてねロシアの Su-27 が行ったことにより有名となった  
奴ですまあ、要するに高度をそのままに機首だけあげる高等技術ですね。」

「何が言いたい?」

風見の質問に答える前に四葉はV O Bを『垂直』に向けた  
そしてそのまま執務室に突撃する。

「メリイイイイ! クリイイイイスマアアス!!」

ガツシャーン!

直後四葉が窓から飛び込んできた

ガチャチャ!!!

そしてお約束のように全員に武器を向けられる

「四葉……………お前サプライズにしては派手すぎないか?」

「ハッハー! 子供達に夢と希望を与えるのが俺の楽しみだ!」

「……………悪夢と絶望をありがとうくそ野郎」

一触即発の空気の中四葉は薄く笑うと……………

「まあ、サンタさんは子供達にプレゼントを届け終えたらお仕事は終わりだ……………」

「何をいつている?」

「マスター?! 大規模コジマ濃度! この人の右腕から!」

「はあ!?! お前の体どうなってるんだ?!」

言われた直後床に拳を当てて爆発を起こす。

その爆発はちよつとしたアサルトアーマーだった……………

「悪いな風見先輩!!それではメリイイイイ!クリイイイイスマアアアス!!アアアアン  
ドオオオオ!良いお年をおおお!」

そういうと窓から飛び下りてクーのVOBにしがみつく

「待て変態!」

風見達がバズーカやらアサルトキャノンやらミサイルを撃ちまくるが……………

「この程度、簡単だな」

セラフが全て撃ち落とし、避けれるように調節する

そして逃げ切る

それを見た風見は暫く睨み続けた後椅子に座り愚痴をこぼす

「ちーやっぱりあの変態に頼んだが失敗だったか!それにしても箱の中身は何だろうな

……………まあ、あの変態のことだまともじゃあないな……………AMIDAは確定として」

苛つく風見がおいてかれた二つの箱を開けると……………

片方はAMIDAだったがもう片方は

「……………フフ、彼奴にしては面白いじゃないか。」

そこに入っていたケーキはラインアークの皆をデフォルメした砂糖菓子が飾られて

いた

「メリークリスマスマステか？全くとんだサンタさんだ。」

その顔は楽しそうに笑っていた……………

一方その頃三人はというと……………

「マスター？大丈夫ですか？」

「んーまあなーそれにしても早く帰ろうぜ。寒くて仕方ない」

「冬の夜風を浴びたんだ仕方ないだろ……………」

セラフが皮肉を言うが笑いながら

「面白いわれてもなセラフ……………楽しかったろ？」

「まあな……………現状は最悪だがな」

そう三人は現在鎮守府に向けて泳いでいた

「仕方ないだろ！アサルトキャノンが当たるとは思わなかったんだよ！チクショー！鎮守府まであと百メートル！一番最初についたやつにはご褒美……………てお前らー！」

ご褒美目当てでセラフは戦闘機に変化しクーがそれに乗り……………

「ならマスターとの添い寝でええ!!!」

二人の声に四葉は仕方ないと思いつつ泳いで辿り着いた……………

尚、その晩四葉の部屋からは3人の楽しそうな声が響いたそうだ……

## クリスマス3

どうもです！皆さん北海鎮守府所属の吹雪です！

今日は朝からレナちゃんの様子がおかしいと港湾凄姫さんが言っていたので訪れると…

「レッキキュー！フブキレレレレ!!!」

何かレナちゃんが浜辺ではしゃいでいました……………

それもAMIDAを大量に引き連れて……………

「えっとレナちゃん？何をしているのかな？」

「レレ！フブキ！レレレ!!」

何かを話そうとしているようですが私にはわかりません……………

取り敢えず分かるのはレナちゃんのジエスチャーから、海からなにか来ると言うことだけです。

「なにかくるの……………てなんか来たー!?!」

目の前から大きな箱を持った艦娘達が7人こちらに向かってゆっくりと歩いてきます!!

正直怖いです！

「て、提督に知らせないと……………あれ？」

よく見るとそれはAMIDA鎮守府の如月さんでした。

道理でレナチャンが喜ぶ訳です、後AMIDAも

そして如月さん達は此方に気づくと……………手を振っています、此方も振り返すと近づいてきました。

「お久しぶりです、吹雪ちゃん、メリークリスマスです！」

いきなり箱を渡されました！もうどこから突っ込めば良いかすらわかりません！けど貰います！

「ありがとうございます！それにしても何でうちに？」

この前も来たのにと思っている

「提督がお世話になった方々にだそうです。五百蔵さん見ました？」

「提督ですか？」

確か今日は……………執務室（プレハブ小屋）にいるはず！

「ついてきてください！」

吹雪はそういうと彼女たちを連れていった……………

因みにだが北海鎮守府を訪れた六人の感想は……………

龍驤（これほんまに鎮守府か？）

電（小屋なのです）

U—511（小屋……………）

サイファー（……………プレハブ？）

ピクシー（……………プレハブだよね？）

シユトリゴン（……………小屋だ、入れるの？）

全員同じ考えだった……………

北海鎮守府 セコムも兼ねてる万能な司令官さん s i d e

今日も書類（無駄ばかり&お手紙）との格闘を終えると外が騒がしい

そう思っていると吹雪が帰ってきた……………

「提督！お客さんです！」

「え？誰？」

「AMIDA鎮守府の如月さんとその仲間の皆さんです！」

「はい？」

四葉さんじゃないの？





如月が彼女のことを聞くと二人は視線をそらして……………

「え、えーと、洋さんは教育しに横須賀に行ったそうです」

「……………そうですか……………フフフ」

二人が如月を見ると愉しそうに笑っていた

「……………えつとー？如月さん？」

「一度でいいから彼女の実力を知りたかったのです。皆さん？明日は横須賀に襲撃です……………」

「き、如月さん?!なに考えてるのですか?!」

吹雪が慌てるがそんなことを気にせず全員が武器を確認する

「最近暴れてないのよねえ」

「暇だったからねえ」

「狩だー」

「……………たかが空母……………墜す……………」

「先輩に教わらんなあー？」

「パーティー……………フフフ……………アハハ？」

それを見た五百蔵と吹雪は思う、この鎮守府やっぱイカれてると

「取り敢えず今は楽しみましょう……………」

そう言うとビンゴを取り出して皆で楽しんだり  
如月によるAMIDA講座などで時間が過ぎていった……

その頃四葉とクーとLivの三人はと言うと……

「畜生!?!どんだけいるんだ!」

「チ!弾が足りん!」

「PAが削られる!」

何処かの学園の近くの海上で派手に戦闘をしていた……

## クリスマス4

時間は四葉達が帰ってきてきて仮眠をとった後……………

「そう言えばハインツさんにもケーキを贈らないと……………」

四葉が起き上がろうとするがセラフとクーに止められる。

「逃げるの禁止……………」

「駄目ですよマスター？」

「全く……………すぐに帰ってくるから」

そう言つて二人を振り払うとケーキを用意する

（そう言えばあの二人結婚するのかな？まだ早いかもしれないけどウエディングケーキを用意しましょうかね？）

そうして出来上がったのは五段式のケーキだ。

一番上にはハインツとマギーを模した砂糖菓子を取りを機体を模したのにしている。

そして完成したケーキを眺めて満足するとそれを如月特製の保存箱に入れて準備を整えるとなぜか二人が装備を整えて来てるのだ

「なあ、二人ともついてこなくても良いんだが？」

四葉が疲れてるから寝なよと言っても二人は聞かず逆に

「マスター一人だどろくなことになりません。」

「絶対何かある」

「心配してくれてるのかどうかよく分からんぞお前ら……………」

首を横に振りつつも箱を起動させる……

「さてと？レッツパアアアライイイ!!!派手にいこう!」

そう言つて到着したのはIS学園から100 km程離れた海上だった

ドボン!

「寒!?!?てか、冷たい!それよりもまた海上かよ!会場じゃないのか!」

四葉がギャグを言うが二人は冷めた目で見つめる

そんな中セラフがあることに気づき話す

「四葉取り敢えず前方に何かいる……………無人機のようにどうする?」

その目が語るのは無視かそれとも……………

それに四葉は機体を展開して、無言で目配せをする

その行動の意味するのはただ一つ

『敵を撃滅しろ』だ

「そうだな、それでこそお前だ。」

「おやつ前に丁度良い運動になります。」

二人もそれぞれの獲物を持ち、目の前めに向ける  
そして発砲された直後……………

「Ok!?!相手が撃ってきた!ならば此方がやることはただ1つ!全員潰せ!そんでその  
まま突撃だ!」

3人对1000の無人機の戦闘が始まる

「甘い!そんなくらい家の電でも交わせる!」

四葉が弾幕を回転して避けつつ3機落とす

「この程度……………邪魔だ」

そしてセラフは左手のブレードでまとめて切り払う

「虫が……………邪魔よ」

クーは二人から離れるとアサルトアーマーを起動して吹き飛ばす

そうやって100機全て落とした

それを見てるものがないとは知らずに……………

IS学園 結婚式会場 とある天災

「うーん？何か侵入者がいるね！今日は東さんの大切な人たちの大切な日。邪魔なんてさせないよ！東さんにかかれればちよちよいのちよいだよ！」

などと意気揚々と叫んだのが15分前、そして現在

「ムキー!?こうなったら桁1つ増やして物量！それとプログラムを変更と！これで勝つる！」

そして増援を出撃させる。全て落とされるとも知らずに……

一方全て撃墜した3人は前方の増援に呆れていた

「全く……どこにいたんだアレ？」

「そう言うなよセラフ考えがあるから」

提督の考えに不安を覚えたクーが何を考えてるか聞こうとした直後

『不明なユニットが接続されました。システムに深刻なエラーが発生しています。』

右腕にガスバーナーを装着した

「!?ま、マスタアアア!?一体なに考えてるんですかああ!?」

その叫びに笑いながら

「アハハ？なーに少しだけ薙ぎ払うだけだよ」

ズシャアアアア!!!

そのまま薙ぎ払われた

残ったのは真つ二つにされた無人機の残骸だけだった。

それに満足すると四葉はIS学園に向けて進んでいった。

因みにその後頭を抱えて転げ回る頭に兔耳をつけた人物が目撃されたようだ。

30分後 IS学園

「ここか、よつと……………」

四葉達が侵入して暫く進んでいくと……………

「あれ？久し振りですね。四葉さん。」

ヘルムートと遭遇した

「おー、ヘルムートか久し振りに、ハインツさん知らない？」

「今、マジーとの結婚式の最中です。」

「そっかー……………え？マジ？」

「マジです」

驚く3人だが直ぐに落ち着きを取り戻して

「それなら、祝電とケーキをプレゼントするよ」

そう言うとうちからケーキを取り出して台の上に置く



「ありがとうございます。会われないのですか？」

そんな質問に肩を竦めて

「突然現れたら驚くだろう？」

と言つてその場を後にしようとしたら

「見つけたよ！」

いきなり兎耳を付けた変人が飛びかかってくる

四葉はそれを交わすと機体を展開ヒュージキヤノン式のカトリングを突き付ける

「たれだあんた？」

「この束さんを知らないの!?!」

「悪いが……知らない!セラフ!スタン！」

彼の言葉に合わせるようにセラフかスタングレネードを爆発させる

「逃げるんだよおおお!!!」

そのまま3人は逃亡する

「目があ!めがあ!!!」

暫くして帰つてこない姉を心配した妹が廊下で転げ回る姉を発見し見なかったことにしたそうだ。

逃亡しようかと考えた四葉だが彼がどんなのを着るか気になり式場の天井に侵入

「マスター何で天井？」

「ロマンだからさ……………」

そう言つて暫く二人を見る

「……………結婚ですか……………」

クーが隣にいる四葉を見る、自分は駒だけどこの人と何時まで一緒にいれるのかと思  
いっつ

「そろそろ顔だけでも出しますかね……………」

「はい？」

四葉の一言に二人が驚いているとそのまましたに向かつて飛び降りる

「お久しぶりです、ハインツさんケーキは気に入ってもら……………」

「どこから現れた！」

「どこつて……………天井？」

お気楽に答えるが既に会場の人間全員は警戒している

ガチャチャ!!

おかげで何処かにケーキを渡したときと同じ囲まれた  
る

状態にな

「これはひどい……………まあ『パチン』セラフ&クー!援護!」

直後上から大量の煙幕がばら蒔かれる

「なに?!」

「悪いが捕まる気はない!それでは皆さんサヨウナラ。それと新郎新婦の御二人は御幸  
せにー!!」

そのまま式場のドアをショットガンで吹き飛ばして逃走しようとするが……………

「逃がさん!」

「待てこのくそ野郎!」

独身と思われる男性二人に追い詰められるが

「邪魔……………」

セラフに回し蹴りを喰らいノックダウンする。

「流石だセラフ」

「礼は後だ敵がわんさか来るぞ?」

「マスター、急がないとまずいですよ?」

「そうだな、それじゃ帰りますか?」

そう言ううと箱を起動させ、座標を指定させ直ぐに転移する

因みに、四葉のプレゼントしたケーキは美味しかったそうだ。

AMIDA 鎮守府 執務室

帰ってきた3人は有ることに気がつく

そう、北海鎮守府に行かせた如月達はまだ帰ってきてないのだ

「あれ?何かあったのかな?五百蔵さんに聞いてみるか」

四葉が電話すると直ぐに出てくる

「もしもし?AMIDA 鎮守府の四葉ですが五百蔵さんいますか?」

「あ!四葉さん!?!丁度よかった!直ぐに横須賀に来てくれ!」

電話越しから聞こえる五百蔵の声には焦りがあった

「一体何があったんです?如月がまたトラブルでも?」

冷静に聞いてみると予想外の答えが帰ってきた。

「それが如月嬢と洋さんが模擬戦して重傷を負った!早く来てくれ!」

その一言に彼は目の前が真っ白になった……………

## クリスマス5

五百蔵からの電話に急いで横須賀に向かった四葉、そこにはズタボロになった如月達がベッドの上にあった

全員が大破しているが如月に至っては右腕を複雑骨折していたのだ

それを見た四葉は横須賀の提督である磯谷 穂波の襟首をつかみ拳銃を突き付ける、既に初弾を徘徊してあり引き金を引けば何時でも撃てる状態だった

「取り敢えず事情を説明してもらおう……………」

静かに聞いてくる四葉に磯谷も慌てて答える

「ま、待つてください?!今すぐ説明しますから!」

あまりの気迫に磯谷が泣きそうになり、それを比叡が止める

「お、落ち着いてください。取り敢えず話をしますから。ね?」

比叡が涙目になりながら言うので四葉はゆっくりと下ろすと

「すまない、頭に血が昇りすぎた……………それで何があつた?」

冷静さを取り戻した四葉が聞くとこの発端は二日前のこと……………

横須賀に鬼が来た……………

「この程度ですか！早く動け！動けないなら近づいて殺せ！出来ないなら今すぐ死ね！」

横須賀の空母がフルボッコにされていた……

それを見ていた磯谷は舞われ右をしたくなるが客が来て返れなくなる

「お久しぶりです。磯谷さん、メリークリスマスです。」

「あら？如月さん？久しぶり……」

「何かあったのですか？」

落ち込んでいる磯谷を心配すると双眼鏡を渡して

「悪夢をみただけよ……」

如月がそれを受け取り地獄をみる

「噂には聞いていましたが……実に面白い。あれが伝説の……アハ、アハハハ？アハハハハ!!」

「え？」

いきなり笑い始めた如月に二人がドン引きしつつも他の子達をみると

「……………強そうなのです。」

「なるほどアレがイレギュラーてやつちやな」

「アハハハ？面白そうです。」

「派手にいかないとね」

「カチャリ……………（無言でスナイパーカノンを構えて確認しています）」

「震えが止まらない、嬉しいのかな？」

完全に戦闘体制だった

それをみて必死に止める磯谷

「ま、まっつてください!!今の見てなかったのですか!!死んじやいますよ!」

それを承知なのか如月は笑うと……………

「私達の力とあの人の力のどちらが上か証明するだけ……………私達は亡霊だから」

7人は装備を整えると海に向かう

どっちが強いかを確認するために……………

一方横須賀の空母を叩きのめした洋さんかというと……………

「この程度ですか、何て嘆かわしい……………あら？」

此方に来る如月達に気がつく

「何をなさるのでしようか？」

少し考えていると6人が止まり如月だけが近づいてきて敬礼をする

それに面喰らっていると如月が

「洋さん……………貴女と模擬戦をしたいです。貴女のその強さ……………私達の強さと何が違うかそれを見つけたいから。」

そう言うのと洋も静かに笑い

「良いですよ。全力でかかってらっしゃい。見せてくださいAMIDA鎮守府の実力を

……………」

そう言うのと弓を構える彼女であった……………

「龍驤さん、新型を試します。発艦させてください。」

「任しときー！て、重!？」

「新兵器です、急いでください。」

「分かってるけど……………ソイヤー！白鯨 ギュゲス コットス行ってな！」

龍驤が出したのは艦載機ではない、そう3つの航空戦艦だ



「提督のアドバイスを元に作り上げた機体達………先に吹き飛ばしてもらいましょう。ニンバス用意！」

如月の叫びに呼応するように妖精達がミサイルを準備する

『ニンバス発射準備！ニンバスランチ！』

『吹っ飛ばせー！』

発射されたミサイルは

鳳の真上で爆発する

爆炎はまるで核弾頭のように大きかった

「おいおい?!アレあかんとちやうか?!」

龍驤が慌てるが如月は逆に青ざめる

「そんな馬鹿な?!全員弾薬を確認!来ます!」

如月の言葉に疑問を覚えていると龍驤が宙を舞う

「ガハっ!?!」

バシヤーン!

「「「「「!??!」」」」」

急いでそれぞれの武器を構えるとそこには

「なるほど………さすが狂気の如月の名前に恥じぬ火力ですねでもまだ精度が甘いです

よっ。」

傷ひとつついてないびしよ濡れになった彼女がいた

「チ！大戦時の亡霊が……沈め！全員発砲を許可する！」

如月の掛け声に合わせてるように撃ち始める、そんな中電が接敵する

「コオオオオジイイイマアアアアアア!!!なのです!!!」

直後4門のコジマ砲が発射される

エリートだろうがフラグシップだろうが関係なしに沈める高火力これで沈まないなら本当の化け物だと思っていると……

「……その程度ですか？筋は良いですが。」

同じようにたっておりいつの間にか電の目の前にいた

「ボケツと立ってたら的ですよ？」

バカン!!

上からの爆撃に耐えられず大破する電

あまりの衝撃に声すらあげれなかった。

全員が唾然としてしていると有ることに気がつく、それは洋の周りになにかいるのだ

「艦娘か？……いや違う!?なんだアレは!!」

「……数だところちが上かと思っただが……」

そう目の前に大勢の英霊達がいたのだ

「クソ！白鯨！援護を！あいつらを吹き飛ばせ！」

サイファーが援護を求めろが

『無理です！！敵の攻撃が激しくて耐えきれません！』

『こちらコットス！！駄目だ！被弾が多くてこれ以上は持たない！！メーデーメーデー！！』

コットスダウン！コットスダウン！』

『コットスが落とされたぞ！敵機こつちに来るぞ！砲手弾幕急げ！』

『こちらギュゲス！左舷エンジンロスト！』

『白鯨右舷第2銃座被弾！』

『左舷第4！変わりはいいの！』

『おい！ギュゲスが落とされたぞ！クソ！こうなったら出し惜しみは無しだ！砲手！展

開急げ！』

『馬鹿な！？あの敵機落ちたはずだろ！？』

『畜生！左舷第六エンジン被弾！防火シャッター急げ！』

『射撃管制官からの応答がないぞ！どうしたんだ！』

『ミサイルハッチ破損！！ニンバス使用できません！』

『こうなったらあいつにぶつけて残ったニンバスで吹っ飛ばしてやるぞ！』

『ムリです！右舷エンジン半数をロスト!!ダメコン急げ!』

『駄目です!?!エンジン80%lost!これ以上は持ちません!!』

『総員退避!?!退避ー!!白鯨が落ちるぞ!!』

上空でプロペラ機に叩き落とされていた

「如月!!制空権は取られた!どうするんだ!」

サイファアがスナイパーカノンを撃ちまくるがダメージを与えていない、謎の軍勢が彼女を守るようにいるのだ

それを見た如月は真剣に見つめて

「仕方ありません、全員OW使用を許可します。こつからは訓練何て関係ありません!

あの人を倒します!Liv全力でいきますよ!」

「ハイ!!」

その言葉と同時にそれぞれが装備を構える

サイファアとピクシーがマスブレード

シュトリゴンがヒュージブレード

如月がグラインドブレードだ

「3人とも合図で突撃してください。」

如月の言葉に三人は頷くとチャージを始める

「ふう、横須賀の空母よりは腕はありますね。けれどまだ甘いですね……………おや？」  
洋がふと前をみると巨大な光の束が襲い掛かった

「流石にこれは想定外ですね。」

眩くと楽しそうに笑った

ズシャアアアア!!!

「やった!？」

シュトリゴンが先に攻撃するがあることに気がつく

「いない?」

「敵に背を向けるのは死を意味しますよ?」

「……………え?」

その時シュトリゴンが見たのは……………

(36 cm 砲? え?)

バン!!

砲撃に耐えきれず大破する

崩れ落ちるシュトリゴンと入れ代わるようにサイファーとピクシーが突撃する

「マアアスブレエエドオオ!!」

二人が同時に洋に殴りかかるが

ガキン!!

柱が洋に当たる直前でまるで白羽取りのように軍勢が受け止める

「なに!?!」

「ば、化け物が!?!」

二人が慌ててパージしようとするより先に……………

「……………攻撃力は高いですね。でも動きが遅いですよ?」

さっきの倍近い爆撃が行われた。

「ガアアア!?!」

二人がやられて残り一人となった如月は薄く笑うと

「3人もやられましたか……………仕方ありません……………全システムリミッター解除

……………クワトログラインドブレード起動……………さあ、蹴りを着けましょう」

そう言う就先程まで装着していたグラインドブレードが消えさらに大きいグライン

ドブレードが装着される

「刃の数を4倍にして作り上げたクワトログラインドブレード……………初起動ですが構い

ません、当たれば良いんです!」

メキメキイイイ!!!

装着と同時に如月の右腕が悲鳴をあげる

『マスター!? 右腕が重量に耐えられません! このままでは圧壊してしまいます!』

Li v が悲鳴をあげるが

「構わない! このままぶち当てるだけ!! あつちが数ならこつちは全て焼き尽くすだけ! つけえええ!!」

それに構わず洋に向けて突撃する

グシャシャシャシャ!!!

洋の軍勢をなぎ倒しつつそのまま綺麗に洋に決まり100メートルほど滑走する

メキヤ!!!

直後如月の右腕が圧壊する

「グツ……………」

痛みで気絶しそうになるなか如月が見たのは…………

『無傷のまま立っていた彼女だった』

「ぼう……………れ……………い……………め……………」

そのまま如月は意識を手放した

「……………久し振りに一度死ぬ感覚を味わいましたね……………彼女等も不思議なものです

「……………」

『洋さまゴブジデスカ?』

「ええ、皆様も有り難う。」

『ワレラ洋さまとトモニアリ!』

それだけ言うとその軍勢は洋の影の中に溶けていった

「さてと……………如月さん? 如月さん!?!」

目を覚まさない如月に洋が話しかけるが少しずつ沈み始めてるのだ

「急がないと…………」

そう呟くと如月を背負って横須賀に急ぐ洋だった…………

そして時間は流れ現在

磯谷の話の聞き四葉は如月の髪を撫でた後

「なるほどな……………それでか……………ハ、ハハハ。良いねえ……………最高だよまったく。」

苦笑しているように見えるがその目は語っていた

『機会があれば俺が蹴りをつけると』

その顔を見た二人はただ震えることしかできなかつた…………

そんな中比較的軽傷だったサイファーが目をさます



「……………つ。……………カヒュー……………てい…とく?」

「サイファー大丈夫か?」

そう聞くと首を縦に振り自分は大丈夫とアピールするが稼働は今のところ無理なようだ

「そうか、今はゆっくり休め」

四葉のその言葉にサイファーは目に涙を浮かべた後そのままもう一度眠りについた  
「……………磯谷さん、悪いがあいつらのこと頼んだよ?」

それだけ言うのと軍帽を被り直す

「わかりました、完治したらまた報告します」

「ああ、頼んだよ?」

「帰るのですか?」

比叡に聞かれると四葉は寂しそうに笑い

「……………ああ、仕事が残ってるからな。残りたいのが本音だが、そんなことを言う暇ほどこの世界は優しくない。」

四葉は自分の考えを言うと病室から出ていく、部屋から出る直前に花を置いていったのに榛名が気がつく

(アザミ? 確か花言葉は 独立 独り立ち 満足 安心 でしたっけ? 多分安心です

ね。)

そう思っていた様名だがこのとき知らなかったのだ、アザミのもうひとつの花言葉を  
……………それは

『復讐』

(全く彼処まで派手にやられるとはね？覚えておけ……………次は勝たせてもらおうよ?)

ドックから出て歩く四葉の背中にはゆっくりと紅いオーラが揺れていた……………

(我等狂人、失うものなし……………)

カツコツ

彼の歩く音が静まり返った横須賀の港に響いていった

## 横須賀編&amp;次のプロローグ

「……………っ」

パリーン！

手を滑らせてグラスを落とす

「如月、無理はするな……………まだ腕上がらないだろ？」

サイファーが動こうとする如月を止める

「……………うん。」

横須賀で洋との模擬戦を行い完膚なきまで叩きのめされたAMIDA鎮守府第1艦隊の面々

サイファー達AC組は持ち前の装甲でなんとかなるものの……………

艦娘の三人は体がボロボロになっていた

治療に当たった夕張と明石によると……………

『電と龍驤はただの大破だが如月に至っては腕の形が残っているのが奇跡的』

と言われたほど右腕が複雑骨折していたのだ、いや、骨折ならまだ柔らかい言い方だろう。

部品を解体した者達が見たのはグラインドブレードの破片が如月の腕に刺さっていたのだ。

特に身体に一番近い左下の刃の半分が腕に刺さっており

破片も含め全て取り除けたものの肉は裂け骨もボロボロだった。

そんな中で洋にたいして最後の一撃を当てたのだ

執念かもしれないと言う者もいれば、もしくは………ただ、意地を張ったのかもしれない自分達の可能性を証明するために。

如月が上がらない右腕を見つめていると

「如月さん、診察の時間ですよー」

比叡がやって来て、如月の腕を見る

「怪我は………やっぱりあまりよくないですね。」

そう言う言葉と薬を渡す

「安静にしていってくださいいね?」

それを伝えると比叡は退出していった。

「さてと?リハビリ行ってくるよ如月、安静にするんだぞ?」

「分かっているわよ。」

そっけなく答えるがサイファーは少し笑うと

部屋から出ていった

ポフン

サイファアが出たのを確認するとベッドで横になり窓から空を見る。

空はカモメが飛んでいていつも道理だった。

(……………早く腕治さないとね。)

そう考えると薬を飲んで寝ることにした

同時刻 AMIDA 鎮守府

カタカタ

四葉が書類の確認等をしていた、内容は磯谷からそれぞれの経過報告等だ

「取り敢えず皆だいぶましになったみたいだな、如月は……………やっぱりな」

紅茶を片手に苦笑していると隣から書類を持ってかれる

どうやら、セラフが持っていったようだ

「セラフ……………書類返してくれないか?」

「お前(こ)んと(こ)働きすぎだろ?少しは休め」

セラフに言われたように(こ)こ(こ)3日ほど寝ていないのだ

「大丈夫だ、と言いたいところだがそろそろ頭が痛くなってきた……………悪いが少し寝て

くる……………」

「わかった、クーには私から伝えておくよ」

「すまん……………」

四葉は椅子から立ち上がると隣の仮眠室に歩いていったが……………」

パターン!!!

倒れる音がする

「……………四葉!?!」

慌ててセラフが扉を蹴破ると……………」

「Zzzzz Zzzzz Zzzzz」

床に突っ伏して寝ている

「おい、流星にここで寝るな……………」  
「マスター!何があつたんですか!」……………クー静かにしろ」

部屋に飛び込んできたクーを取り押さえて邪魔を防ぐ

そして取り敢えず事情を説明する

「そう……………確かにマスター!ここ最近寝てないもんね。」

「ああ、こいつはこうやって無理にでも寝かさないと何日でも無茶をするからな……………」  
困ったものだよ」

二人はそう言うのと四葉をベットまで運び投げる  
ポフン

布団に落下したが四葉は起きる気配もなくそのまま眠り続けた……………  
その様子を見て二人は溜め息をついた後

「……………セラフお茶にしませんか？」

「良いな、私も少し喉が渴いたんだ」

そう言うのと二人は部屋から出ていった。

「……………来てるんだろ？」

彼女等の気配が無くなった直後四葉が喋る

『気づいていたのかい？』

「まあな……………それでなんのようだい？『神様？』」

ベットから身体を起ここして壁を見るとそこには紙が張り付けてあった

『……………何、少しばかり元気にしてるか見に来ただけだよ』

「……………嘘だな、あんたの事だ面倒事でもあつたのかい？」

からかうように言うと言外との予想外の答えが帰ってくる

『そうなんだよねえ……………実は有るものが逃げたみたいだね。僕だと干渉が出来ないから君に頼みたいんだ』

「ほーう?…どんなの?」

四葉は嫌な予感がしていたが出てきた文に唾然とした

『ヴェイクセンと呼ばれた男が逃げた、早急に始末してくれ』

それは新たなる戦いの火蓋が落とされる宣誓となった………



## 作戦概要

「ちよつと待て?!? どういうことだよー」

四葉が慌てて問い詰めると別の紙が現れるそこには……………

『あいつは特殊な奴だね……………此方としても把握しきれていないところがあつたんだ……………』

その言葉に疑問を覚えると次の文が浮かび上がってくる

『人間てのは肉体と魂があるだがあいつは特殊な奴と言つたな、簡単だよあいつには肉体がない』

「すまん……………訳がわからん……………」

首を横に振つてると紙が全て壁から剥がれ落ちる

『頼むよ理解して!?!? これでも分かりやすい方だと思ふよ!』

適当に拾つた紙に書いてあるのを見て苦笑を浮かべて

「……………いや、その何で逃げたかが分からないんだ」

一番の疑問をぶつけると返信が届く

『だからいったら? 肉体がないから簡単に逃げられたんだよ。』

「……………」

『あの……………何か言ってくれない?』

「……………バカだろ」

四葉の言葉に暫く無言になる……………

『まあ、取り敢えず頼んだよ?』

それだけを残すと神は帰っていった……………

暫くどうしようかと考えるがここんところ寝ていなかったので寝ることにした

……………

その頃 セラフ&クー

二人は執務室でお茶の準備をしていた

「それにしてもマスターは紅茶派の人なんですな。」

クーが棚におかれたたぐさんの銘柄に驚きつつも缶の1つを取る

そして机の上にある紅茶を入れるための道具を使おうと考えているとセラフが何かを探しているのに気がつく

「セラフ? 探し物ですか?」

「ああ、砂糖が見つからなくてな……………そう言えばあいつ普段砂糖使わなかったな

「……………角砂糖が見つからない……………」

「セラフ……………紅茶は香りを楽しむものですよ?」

クーが呆れているとセラフは少しだけ顔を向けると重い口調で言う

「悪いが私は苦いのは苦手だ……………」

「……………そうですか、なら食堂から砂糖を探してきます」

そう言うくとクーは部屋を出る

彼女が部屋を出た後残されたセラフは隣の部屋で寝る四葉の部屋に入る

カチャリ

そしてゆっくりと四葉に向けてパルスマシングンを構える

「相も変わらずよく寝るな貴様は……………」

シュトン

「……………!?!」

引き金を引けないのに気がつき慌てて確認をすると……………

『トリガーの裏に爪楊枝が刺さっていた』

「甘いな……………全く……………何を考えている?」

四葉がベッドから身体を起こす

「やはり気がつくか……………」

セラフはそう言うのと部屋から出る。

「まったく、なにしに來たんだ？」

四葉が聞くと出る直前に一度振り返ると

「警戒心が残つてるとはなやはり貴様もイレギュラーだ。」

そう言い残して部屋から出た……………

???  
???  
??????

あるものが一人いた

そいつは机の上に広げた地図を見て考えている

(なるほど……………この世界にはあいつはいないのか……………ク、ククク。なら派手に動け  
そうだ……………)

そう考えると近くにあつたものを起動させる

(囹は起動した、俺は面倒が嫌いなんだ……………確実に殺せるのを狙おう……………さて?  
誰を使おうかな?)

そのまま近くにあるパソコンでデータを取る

(AMIDA鎮守府のU-511?こいつは使えるな……………)

画面を見つめると愉しそうに彼は笑った

## 誘拐

AMIDA 鎮守府 執務室

「さてと？そろそろ起きますかねえ？」

仮眠を取り疲れを癒した四葉はベッドから起きると執務室に戻る

P r r P r r

部屋にはいった直後電話がなっているのに気がつく

その電話を右手で取る

「もしもし？四葉ですが？」

「四葉サマデスカ？」

「!？」

全身から来る震えに四葉が驚いていると電話の相手が続ける

「如月様ノ体調は問題アリマセン、来週には退院します。」

「……………え？あ、ハイ」

あまりの事に驚くが如月達が無事になったのをしり安堵する

「ソレデハ……………」

「あつと、ありがとうございます。」

カチャリ

(なんだったんだ?今の………まさかな?)

四葉が考えたことを忘れるために頭を振り思考を戻す

(如月達が帰ってくるのが1週間後つまりそれまでに蹴りをつけないと不味いな………さてと?俺が出撃しますか………たまには動かないとな)

そう考えると四葉はセラフとクーとU—511の三人を呼んだ

暫く待っていると三人が部屋を訪れる

「アドミラルなにかよう?」

一番に入ってきたU—511が質問する

「まあ、用があるから呼んだ。実は最近変なのがいるみたいでなそいつが此方に来てな  
いかの確認だ。行くのは俺も含めた四人だ出発は30分後だ。準備ができれば執務室  
に来るように。質問は?」

四葉の質問にセラフが手を挙げて聞いてくる

「お前が私たちまで出すんだそんなにヤバイ奴が出るところに彼女を連れていくのか  
?」

セラフの疑問は最もだがそれにたいして彼の答えは簡単だった

「彼女は家のN.O. 3だ、それにレーダーを装備させてバックアップに回す」

四葉の言葉にセラフは不安を少し覚えるが命令だから従う

「さてと？ 派手にいきますか……」

この時四葉は思わなかったまさかあんなことになるとは……

30分後 鎮守府海域

「アトミラル、敵の反応は今の所なしです。」

「そうか………ならいいが警戒は怠るな」

四人が滑るように海域を進んでいくとあるものを見つける

「……………ヲ級の死体？ それも体を真ん中から半分に？」

そう深海凄艦の死体がたくさん浮かんでいたのだ

「ちっ、面倒なことになりそうだ……………」

四葉が呟いた直後異変が起きる

「マスター、霧が出てきました。それもジャミング付きの……………」

クーからの報告の通り霧が出てきたのだ

「ちっ、本格的に面倒なことになったな。全員敵が出たら撃て、後フレンドリーファイヤ

はするなよ？」

四葉の言葉を聞き終えたと3人は散開した

???

「フッフ、海上にようこそ、幼女は俺のものだ、俺だけのものだ！」  
変態が怪しいことを考えながら海中からU-511を見つめていた

セラフ&クー

「セラフ……大丈夫ですか？」

「ああ、だがここまで視界が悪いと……邪魔だ！」

視界が半径10メートル程度しかないが二人は何とか戦っている。

「全くプライマルアーマーがあるから良いものを……」

「しかし数が多いですね……」

クーの呟きにセラフも苦い顔をして頷く

「全くだ、U-511に何かあつたら如月に殺されるぞ……」

「ですよねえ……ハア……」

二人が溜め息をついた直後……最悪の報告が飛んでくる

「ゴホっ……すまん、二人とも……」



「マスター!? どうかしたのですか!？」

「襲撃されて、ユーがさらわれた……………ガハッ!」

二人は即座にオーバードブースを展開して四葉のもとに駆けつける

駆けつけた二人が見たのは装備を破壊され辛うじて立っている四葉の姿だった

「マスター?!」「四葉!!」

二人に抱えられるが既に意識が飛びかけている

「一度撤退するぞ、体制をたて…なお……………」

それだけ言うのと四葉は意識を手放した……………

「マスター?! 大丈夫ですか?! マスター!!」

「ちっ! 出血が多い、クー急いで撤退するぞ!」

セラフは直ぐに明石に連絡を取る

「明石! 提督が重傷だ! 直ぐに手術が出来るようにしといてくれ!」

「わかった! 此方も急ぐからそつちもお願いな!」

二人が撤退する時に思ったことはただひとつ

『なぜやられたかだ』

???

「ハハ！やったぞ！ついに俺は幼女を手に入れたぞ！この子は私のだ！私だけの幼女だ！」

変態が気絶しているU—511を前に立ち笑い続けた……………

## ブリーフィング

「マスター!!もうすぐ鎮守府です!マスター!!」

「……グッ……」

「おい!四葉!!しっかりしろ!!」

クーとセラフが必死に四葉に声を掛けるが既に意識が朦朧としている。

そして何とか敵を撃破しつつ鎮守府に帰還する

帰還した直後、明石が駆け寄り容態を見る

「クー!!四葉の容態は!」

「脈拍低下、意識レベルも下がっています!取り敢えず強心剤を射ちましたけれど急いでください!」

クーからの報告を聞いた後明石は直ぐに手術室に四葉を運んだ  
そして残された二人は、自分達の治療のためにドックに戻った

AMIDA 鎮守府 手術室

「提督の義手そろそろこれにしようかしらねえ?」

そう言うのと薄く笑って四葉の義手に細工を施した

同時刻 ドック

「……………クー少しいいか？」

「どうしたの？」

クーは隣でぼんやりと浮かんでいたセラフに呼ばれて身構える。普段入隻しても話し掛けてこないセラフが話し掛けてきたため何だろうと思っっていると……………

「四葉の件だ……………」

「マスターがどうかしたのですか？」

「おかしくないか？私やお前を軽く鼻唄混じりに倒せる彼奴がやられた。U—511を見捨てたのは有り得ないとすると、彼奴はもう体がボロボロじゃないのか？」

セラフの疑問にクーも少しだけ思っていた、普段の演習の時でも軽く手を抜いているのに異常なほど強いのだ

そんな彼が撃破されたのに疑問を持つ

「そう言えば最近動きにキレがないような……………」

「ま、私の気のせいかもしれないがな」

「だと良いのですが」

「まあ、今は体を治すのに集中しよう」

セラフはそう言うのと頭まで湯船に沈み思考を切り替えることにした。

(マスター……………何を隠してるんですか?)

そしてクーは静かに彼の事を心配した

## 2 時間後 医務室

手術は無事に終わり、明石は四葉の精密検査を行った。

そして明石は手に持ったカルテを持ち苦い顔をしていた

そこには予想していたことだか当たってほしくないことだった。

それを認めつつ、目を覚ました四葉に報告する。

「提督、肉体の所々がGによる負荷に耐えきれない……………これ以上の出撃は死にますよ」

明石の報告に四葉は薄く笑うと…………

「耐えきれない部位は？」

「義手じゃない左腕、内臓は問題ないけど外骨格がダメ。下手すると折れちゃう。」

「ハハ！こりゃそろそろ引退も考えものかねえ？」

首を横に振るが、狂気に満ちた言葉を言う

「なら人間やめれば良いだけだ……明石、ナノマシンの量を増やす。倍以上は入れるぞ」

その一言に明石は四葉を押しさえつける

「何言ってるの?! そんなことをしたら何が起こるかわからないし、何よりもそんなことをする理由があるの!?!」

明石の言葉に四葉は明るく答える

「あいつらはまだ成長途中だ、だから何かあつた時に俺が守つてやらないといけないからな……ハハ。それで? 準備してくれないのかい?」

四葉の態度に完全に明石が折れるとそのまま注射器を用意する。

「副作用が出るかもしれませんが、何が起こるかも分かりません。それでも良いですね?」

「問題ない、どうせもう普通の人間には戻れないんだ。ならこのまま全力で駆けるだけさ。だろう?」

「………分かりました。」

そう一言言うと四葉に追加のナノマシンを注入していく

「………グッ………カハッ!!!」

直後、吐血した

「やっぱり！だから言ったのですよ!!!」

慌てて人を呼ぼうとする明石を止める

「大丈夫だ、そのまま全部やれ！」

「治ったところで寿命が縮みます!!」

「いいからやれ!!!」

そのまま全部入れ終わると同時に四葉の意識は遠くなりそのまま仮眠に入った

ここで少し四葉に注入した物の特徴を説明しよう。

今回使用したナノマシンは伝達速度を上げることが目的としている。ただそれだけだとソフトが先行しすぎてハード（肉体）が追い付かなくなる。

そのためそれより多目の肉体強化用を入れる

しかし弱点がある、それは簡単

『体が耐えきれなくなる可能性もある』

分かりやすく言うなら柱を考えてみてほしい。

中身がスカスカだとすぐにおれてしまう。

そして中身が詰まるとある一定までは耐えられる

かといって固くしすぎると今度は折れてしまう。

それと同じように強化していったとしても最後には体が耐えきれなくなるため、明石は安全性を取っていた。

だが四葉はそれを無視して入れた。皆を見守り続けるために……………

さらに時間がたち、2100 執務室

治療の終わった四葉が二人を招集しU—511奪還のためのブリーフィングが行われることになる。

二人に現在分かっていることをホワイトボードに貼っていく

「ユーには発信器を取り付けてあるから、場所は特定した。ポイントはここから200km離れた無人島だ。上空からの偵察を行ったが、森が鬱蒼としており詳しく見えない。

おまけに強力なECMが展開されていて内部もわからない。

そこでVOBによる強襲、まあアレだ見敵必殺!!

冗談はさておきマジで内部がわからないだから常に退路を確保するように、少しでも危険を感じた退避しろ。

それと妖精さんによる弾薬補給もあるから弾薬が少なくなっても退避するように。

作戦開始は2時間後、それまでに装備を整えるように、質問は？」



二人が首を横に振るのを確認すると解散させる

ブリーフィング終了後 執務室

「ゲホ!!コホ!!……………クソ、やっぱり馴染んでないな。」

四葉はふらつきながら椅子に座り、痛み止を取り出す

「水……………」

フラフラと冷蔵庫まで歩き中からペットボトルを取りだしコップに移し薬を飲む。

飲み終えると視線をドアに移す

そこにはセラフがいた

「……………どうしたんだ、セラフ」

「隠すな、お前体がもう限界なんだろう！明石に聞いたぞ!!」

その手には四葉の検査報告の紙が握られていた

「明石の奴黙つとけて言ったのに。」

「そんなことはどうでも良い、作戦は私とクーでも問題ない。だからお前は休め！嫌、休んでくれ……………お願いだから……………お前に何かあったら如月が悲しむ……………」

目に涙を浮かべるセラフの肩に手を置くと首を横に振り少し笑う

「安心しろ、俺はバックアップだ。無理はしないさ。」

「それでもだ！」

「悪いがまだ死ぬ予定はないよ、安心しな。」

そのままセラフの説得に応じることなく四葉は整備庫に向かう

（お前らの事は信じてるさ、けれどな。彼奴は俺が殺す。必ずな）

胸に黒いものを持ったまま

同時刻 明石 研究室

「本当ですか、明石さん。」

「ええ、彼の体はもう限界。だから見守って何が起こるか分からないから……」

「分かった、あの人の恩人だもの。それくらいは何とかやるは、それとこの書類、如月には見せないで」

クーの頼みに明石は頷き目の前で燃やす

「これで知ってるのは私とクー、それとセラフだけだ。墓場まで持ってきなよ？」

その言葉にクーは寂しそうに笑うと部屋を退出した

その頃U—511

「ハハ！やっぱり！この娘は可愛い、そう幼女こそ思考だ！」

(アトミラル早く助けて!!)

変態に監禁されずっと監視されていた……………

## 回想

AMIDA 鎮守府 整備庫

四葉が機体の整備を行っていた。

いつもと変わらない装備だがあることに気がつくそれは腕の違和感だ

(……………少し重い?気のせいかな?)

そう思い腕を振っていると……………

カシャン!!

腕にマシンガンが装着される

(……………手甲typeか。えっと、なんだこれ?)

分からないので近くの妖精さんに頼んで資料を持ってきてもらう、そのまま明石の報

告書を読み意識が遠のく

(WA—Finger……………指かよ!?!まあ、あいつを殺すにはちようど良いな……………

あの糞野郎必ず殺す……………)

武器を見つめつつ四葉は思い出す。

あの時の事を……………

「U!!俺から離れるなよ!!」

「わかってる!!沈め!!」

霧が立ち込めてきたため構えていると案の定敵が襲ってきた

「甘いんだよ!!」

バン!!

体を右に倒しつつライフフルを撃ちそのまま引き下がりながらミサイルを撃つ

「アトミラル後ろ!!」

「っ!?!」

水面から現れた不明機に不意打ちをされる

「アトミラル!!」

U-511が近づいて確認するのを四葉が制止する

「近づくな!纏めて殺られちまうぞ!!」

そういつてユーを離すが内心で舌打ちする

(ブースターにダメージが入ってやがる。これは長くは持たんな)

現状を判断し撤退することを決めた直後後ろから攻撃される

「またかよ!?!めんどくせえ!沈め!!」

そういつて弾をばら蒔いた直後、突然の発作に体が硬直する

「が!?(こんなときに!?)」

そのまま不明機に攻撃され続ける、そして

「アトミラル!!」

「ハハハ!!これは俺のものだ!俺だけのものだ!」

目の前で誘拐されたのだ

「……………ギリ」

自分の情けなさを思い出した四葉は少しだけ苛つくど整備を続ける、作戦開始まで残りわずか、敵を全て殺し尽くすための準備を彼は続けた。

一方その頃 横須賀にいるAMIDA鎮守府第一艦隊の面々

如月の病室にそれぞれが集まり話し合っていた

「それで?彼女についてわかったのは?」

ベッドに座る如月を中心にそれぞれが報告する

「取り敢えず第一次から生きてるてくらいやな……………横須賀のAMIDAに調べさせたけど核心をついたのは皆殺されたそうや。」

龍驤の報告に眉を潜めた後、ハッキングを頼んだ電を見る

それに対して首を横に振りつつ

「駄目です、軍部の後ろ暗い話か上層部の汚職のデータしかなかったのです。恐らく尻尾切りに使われたかと？」

龍驤と大差のない報告にため息をつくが見えていたためそこまで落ち込まなかった

「しかし、彼女何者だ？艦娘の皮を被った何かか？」

「オーバードウエポンを喰らって立ってるとか異常だしな。」

「これ以上の詮索は我々のリスクが高まります。どうしますかリーダー？」

サイファー、ピクシー、シュトリゴンの言葉を聞きつつ、今後の予定を考えるが残り少ない日数と自身が動けないことを考慮した結果、如月はある結論に達する

それはなにもしないことだった。

そして、取り敢えずこのお話は終わりとした後もうひとつの話を始めるそれは  
.....

「どうやって榛名さんと五百蔵さんをくつつけるか」

情報収集のついでに知ったことだが、お互い気になってると判断した面子はどうする

か考えるが……………

「サイファーふざけてるのか？二人を激戦地に放り込むとか吊り橋効果ウンヌンの前に死ぬぞ」

「ピクシーこそ何考えてるのよ、満点の星空とか榛名さんには似合うかもしれないけどあの人には釣り合わないわよ！」

「ここはコジマで吹き飛ばして……………」「黙ってるー！コジマ」なのです……………

そうやって揉めていると最初から聞いていた洋の部下が一言。

「普通に食事に連れていけば宜しいのでは？」

暫し訪れる沈黙、そして

「！！」「それだ！！」「！！」

どうもAMIDA鎮守府の艦娘は常識のネジが飛んでるようだった……………



## 作戦開始

AMIDA 鎮守府 カタパルト

いつもより慌ただしく妖精たちが行動する

「N—W G I X / V の燃料補給と弾薬の再確認終わった!？」

「プラズマの扱いには気を付けて!!」

「ナインボールセラフの追加マガジン急いで!!」

「提督の武器のリストは!?! ありがとう、後はこっちで何とかするから!」

妖精と明石が作戦前の武器の確認を行う

そんな彼女達を見ながらセラフがクーの隣に立つ

「クー、四葉は?」

「先程、何か確認があると……………」

「そうか……………」

クーの返事にセラフは首を横に振り武器の確認を行う。

それを見てクーもライフルの調子を見る

作戦開始10分前

A M I D A 鎮守府 医務室

「三時間です、それがこの痛み止のリミット。それを過ぎたら、いくら貴方と言えどもにも動けなくなるは」

明石が四葉に注射を打ちながら忠告する

「分かってる。一時間で終わらせる。意地でもな。その後は生命維持装置にでも何でも放り込むんだな。」

パチン!!!

自虐的に笑う四葉に明石が平手をする

「そんなこと言わないでよ！貴方に何かあったら……それを分かってるの!？」

「分かってるよ。だからこそだ。」

「だったら……!!」

明石の説得を無視して、四葉は立ち上がる

「俺は大事な物、盗られたからな。」

「U—511のこと？」

明石の質問に振り返ってから笑うと

「夢だよ、ちっほけだけだな。だから取り返すだけさ、理由なんてのは後からいくらでも

言える。だがなこいつだけはなくしちやいけないんだよ。」

そこまで言うとう一度深呼吸をして機体を確認する

「四葉一樹、ノスフェラト出るぞ………さあ、シヨウタイムだ。」

楽しそうに告げるとカタパルトまで駆けていった

### 作戦開始時刻

一番最初にセラフがカタパルトに足をのせる。

「ナインボールセラフ出撃準備完了、管制室そちらは？」

セラフからの疑問に明石が答える

「問題はない。それと今回、管制官を務める明石よ。知ってるから問題ないと思うけど。それじゃ始めるは」

そう言うと同時にセラフの視界に多くのウィンドウが現れていく

『機体信号確認………認証終了』

『VOBスタンバイ』

『カタパルト準備完了』

『ナインボールセラフ発進準備完了』

カタパルトの準備が出来、妖精から発進OKが出る

「出撃10秒前……御武運を！」

明石の言葉に冷静に返す

「分かってるよ。ナインボールセラフ出撃する。大きすぎる修正が必要だ」

バシユン!!

妖精が一齐に伏せると同時にセラフが空に舞い上がる

「次！N—WGIX/vよ!!準備急いで!!」

そして、そのまま10秒と間をおかずにクーと四葉が出撃した。

(四葉、無理をしないでくれ……!!)

飛び立つ彼らを見て明石は無事を祈った

海上

ひたすら真つ直ぐ矢のように飛び、作戦領域に入ると同時に四葉が指示を出す

「作戦領域だ。クー派手にやってくれ。セラフ制空権の確保よろしく」

「ラジャー、火器管制スタンバイ。リニアキャノンlady

」

「了解、ミサイルロック解除。fox4!!」

そういつて二人が島の上を通りすぎた直後

『島の自然が全て吹き飛んだ』

「相変わらず、お前のそれオーバーキルだろ。」

「地下空間があるのは知ってる、これで対空兵装はなくなった、後は降りるだけよ」

「OK、クーはそのまま援護を継続。俺とセラフが侵入する。」

「ラジャー、VOBパージ!!」

四葉が呆れるがこの二人の実力なら朝飯前なのを知っているため、そのまま残党狩りを始める

「オオオオケエエイ!!レツツパアアアリイイ!!」

四葉が叫ぶと同時に両腕のガトリングを撃ちまくる

そして、入り口と思われるものを、『入り口だったもの』に変える。

それをみたセラフが頭に手を当てて溜め息をつく

「全く、単純バカが。まあ、そこが彼奴らしいかもな。邪魔だ。」

出てきたガードロボをムーンライトで一刀両断する。

(私の知ってるのに近い? 雑魚だな。これならすぐ終わりそうだな)

そう思うとそのまま敵を切り刻んでいった

ロリコンside

「……………ば、バカな?!警備部隊が二十秒足らずで!?くそ!こうなったら俺自ら殺しに  
いってやる!!俺は面倒が嫌いなんだ!!」

そう言うのと男は自分の機体を取りに行った……………

N | W G I X / v   s i d e

「取り敢えず、殲滅したかな?」

島の上空を行ったり来たりしながら目に映る敵を殲滅する。

「あ……………燃料が無い……………ページと。」

ページして、島に上陸するが目立ったところに敵は居ない

「さてと?どうしましょうかね?……………誰!」

武器を構えると目の前にACがいた

「殺してやる……………貴様ら殺してやる!!」

「上等よ、遊んであげるは」

そう言うのと二人は互いの獲物を持った……………

## フアンタズマ

「……………雑魚が死になさい。」

クーが下がりながらミサイルを撃つ

「ふんそんなもの……………グワアアア!!」

ヴィクセンはそれを交わそうとするがノーマルと、デッドコピーといえどネクスト動きの差により攻撃をもろに直弾する

「……………ゴミが」

それだけ言うとクーはアサルトアーマーを起動して吹き飛ばした

「ち、俺は面倒が嫌いなんだ!!」

それだけを言うとヴィクセンは煙幕を張り逃走した

「ち！仕留め損なつたか……………セラフ聞こえる？そつちにACが一人逃げた、多分遭遇すると思うから確実に殺して。」

「了解、確実に殺しておく。四葉に伝えるか？」

「伝えて、多分彼奴が誘拐犯だから。」

クーの殺気籠った声にセラフは無線越しに笑う、久し振りに骨のある相手とやりあえ

るからだ。

四葉 side

「フーンフーンフーンフーン」

愉しそうに鼻唄を吟いながらガードロボを破壊していく

そんな中セラフから無線が繋がる

「四葉、どうやらクーが誘拐犯を見つけたようだ。私の方で殺しておいても問題ないな？」

「……俺が止めを差す、殺さない程度で良い。」

「それは無理だな」

「ああ？」

「目の前に敵がいるのに手加減をしるとか私には無理だな。」

そう言うとセラフは無線を切る

ヴィクセン side

何とかクーの猛攻を逃げ切り新しい機体に乗り換える

「糞が役にもたたない警備ロボめ！誰だ！！俺は面倒が嫌いなんだ！！」



そして、目の前に映るのは悪夢のエンブレム

「な、ニンボール?! バカな!! アリーナのトップがなぜ!？」

そこには正体不明とされたアリーナのトップがいた

セラフ side

(なるほどな、あれがターゲットか……)

目標を見つけたセラフは気持ちを切り替えていく

「プログラム変更……ターゲット確認。排除開始。大きすぎる修正が必要だ」

「じよ、冗談じゃ!？」

急いでその場から離脱を計ろうとするが……

「逃げるな……」

ピーピーピー

セラフのパルスマシンガンが命中していく

「糞が!?! 幼女は俺のものだ!?! 俺だけのものだ!?!」

そう言うの変態は爆発した

A Cが炎上しているのを確認したセラフは四葉に無線を繋げる

「四葉、敵の殲滅を確認。これよりユーの探索にはいる」

「俺の手で殺してやりたかったが仕方ない。よくやったセラフ、とつととユーを見つけ  
てホットワインと洒落こむぞ。」

「そうだな」

そういつて無線を切るセラフだがあることに気がつく

『残骸がないのだ』

(まさか……………!?)

急いでレーダーを起動すると…………その場から逃げるのを確認した。

ヴァイクセン side

セラフの攻撃を盾で何とか防ぎきった彼はU—511の監禁場所まで駆け込む  
「クソ、これじゃあ逃げ切れない……………こうなったら……………」

残っていた紅い機体を見るとヴァイクセンは笑みを浮かべる。

生き残るための最適な方法を……………

四葉 side

「……………でもないな……………なんだこれ?」

探し回って既に1時間、途中でカードロック式の扉を見つける

「こう言うのは、何かあるって決まってるからな。よつとお!!」  
バカン!!

扉を蹴破り中にはいるそこはアリーナのようだ

中に入った四葉は咄嗟に横に逃げる

通り過ぎた後にレーザーが飛ぶ

「全くまだなにか残ってるのか?」

装備を構えるとそこには紅い機体があった

『アビスへようこそ』

「おいおい、俺も大概だか貴様も終わってやがるな。」

四葉のからかいにヴィクセンは笑いつつ

『ふん、そんなことはどうでも良い私は幼女と一体になったもう誰も俺を止めることは

出来ない。死ねえ!!!』

そう言うのと攻撃を仕掛けてくる

「甘いんだよ!!」

左に交わしつつショットガンを近距離で当てる

『フハハハハハ!!!私を殺しても良いのかね!?!』

「何?.....この外道がああ!!!」

吹き飛ばした装甲の隙間を見て四葉は驚く

そうファンタズマのコックピットにはUー51ー1が入っているのだ

『彼女はこれと一体になっている。君に私を倒せるかな!』

そう言うのとヴィクセンは高らかに笑った……………

「上等だ……………てめえを殺してユーを返して貰うぞ……………」

四葉は静かにライフルを構える……………

そして、互いに激突する

## ファイナルカウントダウン

『フハハハハハ!!! 幼女と一体になった私に隙など存在しない!! 死ねえ!!!』

開幕と同時にレーザーを乱射してくるがそれを左右にブーストを吹かしてかわす

(どうする? 下手に攻撃したらユーにあたる! けどこのままじゃ……ナノマシンのリミットかきちまう!!)

コンソールに表示された1文に舌打ちする

その表示は……

『ナノマシンリミット30:25』

身体強化用のナノマシンの限界が近いのだ

(下手すると助ける前にこっちが死んじゃう……仕方ねえアレやるか)

四葉は1つ作戦を思い付くと……

防御を考えずにファンタズマの上に飛び乗る

『(。D。)!! 何を考えてる!?!』

振り払おうする直前に右腕を先程開けたコックピットの隙間に挿じ込む!!

「ちよっとばかり派手にやらせてもらおうぜ!!」

バガキ!!

鈍い音がした後コックピットを無理矢理抉じ開ける

「返して貰うぞ、俺の家族を！」

U-511をコックピットから引きずり下ろす

『逃がすか！幼女は私のだ!!ワタノシダ!!』

振り払おうとするファンタズマに痺れを切らした四葉は

『自身の両腕』をコックピットに突っ込み笑う

「これは冥土の土産だ!!死ねよ変態があ!!」

バラバラ!!

左腕でコックピットを開けつつ右腕の W A | F i n g e r を撃ちまくる

『グワアアア!!』

撃ちきって弾が無くなった武器をパージして逃げようとするが……………

『貴様!!貴様だけでも道連れにしてやる!!』

グシヤ!!!

四葉の左腕がコックピットに挟まれる

「グ!?!」

『フハハ、燃える！燃えてしまう。私のファンタズマ……………だが、貴様もだ!!』

「甘いんだよ!!」

グチャ!!

ショットガンを左肩に当てて引き金を引き飛び降りると同時にコジマキャノンをチャージする

「人間なめんな!!」

ズドン!!!

「消える!?消えてしまう?!私のファンタ……………」

そのままファンタズマは緑の光に包まれて消滅した

「ふう……………何とか……………ガハ、なった……………みたいだな……………」

「アトミラル?怖かったよー!!!」

意識を取り戻したUー511を見つめて柔らかく笑う

「無事でよかったよ、本当に……………」

それだけ伝えると四葉は意識を手離した

（今日はもう疲れた……………少しやすま……………ない……………とな）

「アトミラル?アトミラル?!!」

（ユー……………悪いな今返事出来そうに……………ないや……………）

「四葉!!!」「マスター!!!」

セラフとクローの二人が突入し彼に気がつく

「おい!? 四葉しつかりしろ!」

「セラフ出血が酷い、急がないと!」

「分かっている! クロー、四葉を運べユー! 掴まれ!!」

セラフに言われた通りU-511が掴まるのを確認すると二人はすぐに離脱する

「……………どこだ?」

四葉が気がつくところこそは何もない世界だった

「死んだかねえ? 俺」

そう思うのはグシャグシャになった左腕があるのと無くした肉体が有るからだ

「嫌だねえ、まだやり残したことの多いのに」

「嫌々、君死んでないよ?」

「誰?」

四葉が声のした方に振り向くと此方に手を振る男がいた

「えつと……………」

「神様だよ?」



「あ、どうも。」

あまりの展開に驚いている四葉を置いてきぼりに話始める

「君はまだ死なないよ。てか、そこまで人間止めてるんだから簡単には死なないよ」

「あ、そう……で何のよう？」

「なーに、協力的に感謝を言いだね」

カラカラと笑いながら言う神を冷めた目で見つめる

「まあ、頼まれたからやったただそれだけ？あいつはどうなった」

四葉からの質問に満足そうに頷き

「んー？完全に消滅して魂は永久保管。もう二度と外には出られないね」

「なら良い。それじゃあ帰りたいんだけど。」

「ふふ、そうだね。お別れだまた何かあったら会いに行くよ。」

「2度と来んな!!」

「これは酷い。それにしても左腕治すかい？」

神様の提案に首を横に振り

「俺自身の油断からこうなった。だから治さなくても良いよ。」

「そうかい、まあ君がそれで良いなら良いよ。」

樂しそうに答える四葉を見て神様は彼を元の世界に返した……

「……………っ。んんんは？」

次に四葉が目を覚ますとそこは医務室だった

「起きたみたいね。まったく無茶しすぎよ。」

「はは、つい……………な」

「まったく運が良いわよ。出血でナノマシンが流出したからね。変な言い方だけどこれで安全になったは。」

明石の報告を楽しそうに聞きつつ起き上がる

「それじゃあ出掛けましょうかねえ？」

「何処へ？」

明石が怪訝な顔をしていると笑い

「横須賀。如月達を迎えに行かないとな。」

それだけ答えると四葉は部屋の外に出た。

「おいまて怪我人!？」

明石が何か喚いているがそれを無視して四葉は……………

(えーと、ここから横須賀へは……………車……………ギヤチェンジ出来ないしなあ。電車……………他の人が驚く……………)

色々と考えてあることを思い付く

(……格納庫にあるACC—130でHALO降下。これだな。)  
そう思い付くと妖精に相談するために格納庫に向かった

## 横須賀 Part 3 前編

AMIDA 鎮守府 大型航空機格納庫

艦娘達にはあまり知られてないがドックの裏には四葉が開発したものの使えないため只置いてあるだけの航空機の格納庫がある。

四葉はそこに今訪れている

「まあ、そういうわけでやれる?」

「出来ませうよー」

「あら、意外。案外出来ないかと。」

「大きな艦載機になるのでー」

「こいつを艦載機で言いきるのかよ。」

四葉が呆れるがそれも仕方ない。何しろ今目の前に有るのはAC-130だからだ。大型輸送機のC-130を元に戦場に死をばら蒔く航空支援機、使うには護衛機による制空権確保が絶対必要とアメリカらしい兵器である

今回それを使うのは単純に四葉が左腕を使えないからだ

少しだけ寂しそうに笑うと格納庫を眺めつつ

「使えるならそのFA—18とかF—15使うんだけどねえ。まあ宜しくね。」

と自分のお気に入りを眺めた。そんなことは知らずに妖精達は笑いながら返事する  
「わかりました？」

妖精達の様子に和んでから装備を整えようかと執務室に戻るとそこには……

「おい怪我人、死にたいのか？アア??」

「マスター、何を考えて？」

「司令官、よっぽど死にたいみたいね？」

三人がそれはそれは美しい微笑みを浮かべていました。

「大丈夫だつて？、如月達を迎えに行くだけだぞ？一体どこに問題が……」瀕死の重傷  
おつて起きて二時間で出掛けようとする馬鹿がどこにいます？ねえ？ねえ?!」……俺？

「この出撃馬鹿があああ!!」……はい

セラフとクローの声も怖いが今一番怖いのは明石だ

さつきから表情を変えずにじつと見てくるからだ

そしてタイミングの悪いことは連続して起こる

「提督さん、装備が出来ました？」

「四葉？」「マスター？」

「えっとそのー。三十六計逃げるが勝ち!!!」

そう叫ぶとフラッシュシロケットを使って二人の視界を奪う

「ぐっ!?」「眼があ!!!」

「すまん!!」

ドゴオ!!!

四葉は謝るとセラフとクローの顎を回し蹴りで蹴り飛ばして意識を奪う

「流石ですね?。」

四葉の蹴りを半身引いて交わした明石が笑う

「お前も充分凄えよ。まあ、そう言うわけだあとを頼んだぞ?。」

「分かりました。お気をつけて」

「わかってるよ。」

そう言って装備を持ち輸送機に向かった

2時間後 横須賀上空

「提督さん、もうすぐ目標ポイントです。」

「……ん。もうそんな時間か」

四葉が鎮守府を出る前の一騒動を思い出し笑っていると妖精から悪い知らせが飛ぶ

「あー、何か艦載機が来てますか？」

「深海側だろ？120mmで吹っ飛ばせば良いじゃん。」

「いえ、多分これ……艦娘のですね。レーダーに写る反応が小さいので。」

「……………マジ？」

「マジです。」

「……………」

「……………」

両者が沈黙した直後……………

バラバラ!!! ボン!!

エンジンに被弾する

「いきなり撃たれた!?ざっけんな!!急いでオープン無線で伝えろこっちは味方だと！」

「無理ですよ!!今のでシステム死んで無線使えません！」

妖精の報告に四葉は少し笑ってから叫ぶ

「フアーツク!!!」

一言叫んで落ち着きを取り戻した後、考えを変える

「こうなりゃこっから飛び降りるしかねえ！」

「それしかないですね!ゴー!ゴー!!!」

四葉達が慌てて飛び降りるとほぼ同時に機体が大破炎上する

「あー、AC-130がああああ!!オボエトケエエ!!」

そう叫ぶ四葉だが有ることを思い出す。そう何も考えずに飛び下りたので、『パラシュートを忘れた』のだ

「何で悪いことって連続するのかねえ!!畜生! AC展開! アセンは四脚両腕オートキヤノン!」

空中でacを展開し襲ってくる艦載機を撃ち落とす

「お?下に誰がいる! タッチダウン!!!」

ドガシヤ!!!

凡そ艦娘と人間がぶつかった時に出るべきでない音を立てて着水する。

「それで俺は何にぶつかったんだ? 「お久しぶりですね、四葉さん?」……あらお久しぶりですね洋さん」

気がつくとも目の前には北海方面に住む居酒屋の女将であり死神がいた

「いきなり人の上に着艦する人がいますか?」

「いえいえ、飛行機を撃ち落とされればそりゃー着艦位しますよー。」

「ふふ、そうですね。」

「ええ、そうですねよ。」



「……………」

「えつと……………その。ごめんなさい。」

「いえ、私も見掛けない大きな飛行機を見たのでつい。敵と誤認してしまいました。」

お互いが自分の非を認めて謝罪していると懐かしい声を聞く

「提督はん？何をやってるん？」

「ンー？空中散歩かなー？」

「あの人の真上に自由落下するとかかなり凄くないか？」

「それほどかー？」

龍驤の突っ込みに苦笑するが有ることに気がつく

「あれ、お前そういうや重傷だったみたいけど動いていいのか？」

四葉の疑問に龍驤は苦笑を浮かべて

「気がついたらなおってたんや」

「何それ怖い」

暫く彼女と会話をしていたが洋と話をしていたのを思い出し彼女に振り向く

「それにしてもなぜ二人で？」

「龍驤さんの訓練ですよ。彼女筋は良いので。」

「へー？貴女がそう思うなら良いんですね。」

会話をしながら直ぐに思考回路を切り替え、話題を変え

「実は最近、機体の武装を変えましてね。もしよろしければ相手をしてくださいませんか？」

「……ちよ!?!提督はん!?!何考え…「良いですよ?」……貴女もか!?!」

彼女の了承を得た四葉は楽しそうに笑いあるものを渡す

「此方が準備出来たら信号弾を撃つのでOKなら撃つてください。それが開始の合図です。」

「ふふ、楽しませてくださいいね?」

「此方こそお願いします。」

そう言うと四葉は開始地点に向かった

5分後 四葉 side

「さてと、新装備試しますか?」

楽しそうに言いながら信号弾を撃つ

「綺麗な赤だな?」

そう言つて少し待つと遠くで光を確認する

ガシャン!!!

それを見た四葉は楽しそうに笑いながら装備を展開して叫ぶ

「扱いづらいパーツとかがって話だけど！最新型が負ける訳ねえだろおおお!!!行くぞおおおお!!!」

## デッドダンス

「邪魔だああ!!!」

ズシヤアアア!!!

四葉は武器を構えて洋の部下に斬りかかる。

『洋様のもとにはイカセヌ!!』

そう言つて立ち塞がるが……………

「貰い!!」

ガキン!!

そいつらを踏み台にして更に加速しながら近づく

「ブレオンなめるなああ!!!」

加速して速度が乗ると一気に両腕を振る

ガキイイイイン!!!

「甘いですよ?」

「硬いねえおい!?!」

四葉が全開でブレードを振るが洋はそれを弓で受け止める

「敵の前で止まるのは死を意味しますよ?」

「……っ!?!」

慌ててブラストを吹かすものの……攻撃が飛んでくる

とつきの判断で攻撃をブレードで受け止めるも……

キイイイン!!!

「ブレードが折れた!?!……しまった?!」

ダダン!!!

交わしたのは良かったものの四脚のメリットである滞空性が仇となり空爆される

『a p 70%減少』

コンソールをみて舌打ちする

「ブレードが折れたくらいで私が諦めらものか!!」

そう言ううと機体の武装が変わる

「16連迫装32 a s ミサイル l a d y!!」

腕の武装が開きミサイルが一斉に発射されるが……

『別方向に飛んでいく』

「しまった!?! a s ミサイルだから無差別だった!……ぐっ!?!」

弾を撃ちきった直後洋の攻撃を貰うそしてそのまま四葉は海に沈んでいく

「くそ?!メイソープラスターが逝かれただど?!沈んでいく!認めん!!認められるか!!この私水没とかフザケルナ!!!……ガハ!」

沈み行く四葉だがコンソールをみて薄く笑う

『mainssystem upload finish』

『Fcs変更 mode deepstyleに移行可能』

(試してみますか。扱いきって見せるさこの力)

起動すると同時に四葉の中で何かが弾けた

洋side

「浮かんできませんね、すいませんが確認に行つて下さい。」

何時までたつても浮かび上がつてこない彼に不安を覚えて部下の様子を見に行かせ  
る

直後……

「サてと、本気デ行きましようカネ?」

両腕に何も持っていない四葉が再浮上した

「……なるほど、あの子達の司令官であるだけ実力は有るようですね。」

洋からの称賛の言葉に歌いつつ歩き始める

「I, ve got from hell: find it: hound it:」

背後には黒いオーラが立ち込めている

「I, ve got to you alone. stand it. beat  
it.」

「洋様に近づかせるものか!!」

洋の部下達が攻撃を仕掛けるが……四葉はそれを全て正面で受け止める

「貰った!!」

左腕を斬り飛ばされるが……

ズルツ!!

直後腕が再生する。

「I, ve got from hell. find it. hound it.」

そして左腕にショットガンが表れそれを構える

「I can still alone. start it. feed it.」

最後に哀しそうに呟くとトリガーを引いた

バン!

そのまま洋は崩れ落ちた

『main system overheat』

『emergency cooldown』

四葉のコンソールに文字が表れたあと……

『四葉の腕が溶けていく』

「……………ぐっ」

辛うじて意識を保つが目の前に写る景色に驚く

「筋は良いようですが……まだまだ荒削り過ぎますね。振り回されてますよ？」

「……………ははっやっぱり貴女には勝てそうにないですね。」

腕の出血を気にせず話す四葉に洋は首を横に振る

「貴方は彼と違って無理をしすぎるタイプですね。体をいえ命を大切にしてくださいね？」

忠告に苦笑してそのまま彼女と別れた

(……………まだ扱いきれないねえ。)

そのまま四葉は横須賀に向かった……………



横須賀 side

「マアアアスウウウタアアア!!!」

「よおおおつうううよおおお!!!」

BAReeeeeeeeeen!!

四葉に蹴り飛ばされて気絶させられた二人が突撃してきた、それも正面玄関からではなくドックに飛び込んできたのだ

おかげで帰る準備をしていたAMIDA鎮守府第一艦隊は慌てる

「お、落ち着くのよセラフ!!まだ彼は来てないは!?!」

「クーさん落ち着くのです!!」

「落ち着け二人とも!?!」

急いで取り押さえようとするが……………

シユイイイイン

「「「おい、それアサルト……………」」」

アサルトアーマーを起動した……………

20分後……………

「それで?二人とも?弁解は?」

「四葉（マスター）が悪い」

怒った如月がAMIDAを総動員して取り抑える

「分かりました。取り敢えず後で来るみたいなので話を聞くことにしましょう。全く

……………此方も忙しいと言うのに……………」

呆れる如月だが内心は穏やかじゃなかった

（司令官……………無理しすぎよ。本当に死んじゃうわよ……………）

取り敢えず来たら一発殴ろうと決めた如月だった……………

## 横須賀にて話し合い

どうもこんにちは！AMIDA鎮守府の電です！

えっと色々あつて横須賀にいますが最悪なのです！

修羅場になつて居るのです！

「離せ如月!? 私は奴をシバくんだ!!」

「分かつてるから落ち着きなさいセラフ!!!」

如月さんがグレネードキャノンを乱射しそうなセラフさんを押さえていますし………いやその前にあんなのどこにあつたんですか!? (OIGAMIのことです、え? セラフにのらないだろつて? ……気にするな。)

「離しなさい貴女たち!? マスターは一度きちんと説教しないとイケないのですよ!!!」

「分かつてるけど落ち着け!」

「それを振るな!!」

「あぶな!? かすつた!? 光波がかすつたよ!? 私て低いんだけど!」

クーお姉ちゃんが三人を振り払おうとしてブレードを振り回しているのですが……あれはなんですか!? 光波が飛んできたと思つたら横須賀のドックの壁が溶けました!

えっと司令官さーん！早く来るのです！このままだところが倒壊してしまうのです

！

電はその場でオロオロとしか出来なかった。

え？当の横須賀の人たち？どうやら御客様が来るためそれを歓迎しに行ってるようです。

なので今ここにはAMIDAとスタッフしかいません。

皆避難したけど……

四葉 side

「全く……彼奴等は……まあ俺も悪いけどさあ。それにしても……これいったいどうして？」

横須賀のAMIDAから報告を貰い、五百蔵と磯谷の二人に挨拶をする前に止めようと考えていたら横須賀の艦娘達に包围されていた

「ちよつと？、身分証明書も出したし階級も見せたでしょ？いったい何が問題？」

四葉がケラケラと笑いながら言うがその中の一人が答える

「そんな血塗れの両腕のない怪しいのがいるか!!」

現在の四葉は本人は気にしていないが白の軍服の半分が四葉自身の血で真っ赤に

なっているのだ

どこをどお見ても変人と言うか病院に放り込むべきだ

「そりやそうだ、仕方ない……強引に行かせてもらいましようかね？遊んでやるよ、かかってきな？」

そう言うのと四葉は左肩を動かして苦笑する。

「そうだったねえ、腕……さつき持つてかれたねえ。全く」

「ゴタゴタうるさい!! さつきと捕まりなさい！」

一人が掴みかかるが……

「甘い甘い、俺、腕無くて強いよ？」

そう言うのと足を軽く払い転ばす

「全く……血の気の多い連中だ。これじゃあ鎮守府というよりは極道じゃないか、まあ面白いから良いけどさつとお!!」

殴りかかられるも上に飛び上がり右腕の上に着地してもう一回飛び上がり後ろに下がる

「クソが！お前本当に人間か！」

一人が悪態をつくがそれに軽口で返す

「人間だよ？今も昔もね？だから止めませんか？こんな不毛な……あぶな!! おい！人

の話し聞いている!？」

いきなり後ろから掴みかかれたので思わず叫ぶが相手を見て苦笑する。

「なるほど? 霧島さんでしたか。気づきませんでしたよ。」

そこには金剛型四番艦の霧島がいた

霧島は四葉を見て何かを確信する

「如月さん達の提督なのでどれ程かと思いましたが……やはりかなりの実力者のようですね?」

「洋さんとは相打ちでしたがね?」

「それでもやりあえるだけ凄いことでは?」

「何が言いたい?」

「いえ……少し手合わせを」

突然の提案に四葉は首を横に振る

「全く………何で磯谷の嬢さんはほんわか系なのに他はこんななんだ? 仕方ないねえ。少しだけ相手してアゲマスカ。」

そう言うとACを再展開する。

「悪いけどさあ、5分位だね。それが遊んでやる限界だ。」

「良いですよ、私としてもそれくらいあれば十分です!」

ドン!!

直後、霧島が懐に飛び込むがそれを軽く交わす

「おいおい? 甘い甘い。よつとお!!」

ブオン!!

四葉がブレードで峰打ちを狙うが……

カキイイン!!!

「あり? 折れた?! 何でえ!」

何故か根本から折れたのだ

「ふむ、やっぱり砲身は切れないようですね。」

「畜生!?! やっぱ、アブねえ!!!」

慌てて飛び退いて体勢を立て直す

「全く………面倒だから本気で行こうか!?! その方が楽しいだろ! ハッハー!!」

ガシャン!!

四葉がグラインドブレードを装着して突撃しようとした瞬間……

ズシャ!!

何処からか光が飛んできて

グラインドブレードの『刃が真ん中からずれ落ちる』

そして、そんな事が出来る相手を知っている四葉は飛んできた方角に振り向く

「クー……邪魔をしないでくれないか？」

そこには両腕にブレードを持った黒衣の死神がいた

「それは無理な相談です。貴方を止めるにはこれくらいの乱入はしないと……それに私だけではありませんよ？」

「何？」

クーの言葉に疑問を持った四葉が振り返るとそこには、完全装備のAMIDA鎮守府第一艦隊のメンバーがいた、それも全員オーバードウエポンを装着して

「提督、動かないでもらいたい。」

「マスター流石にやりすぎです」

「四葉、貴様には話がある。」

「……分かったよ。」

溜め息を吐くとACを解除する。

「取り敢えず磯谷さんに挨拶してくるから話はその後だ良いな？」

「了解。しかし覚悟しといてくださいね？」

「へいへい……全く……そう言うわけで良いですか、霧島さん？」

四葉が折られたグラインドブレードを解除して肩を竦める



「そうですね……また今度にしましょう。それでは」  
「ああ、次があるなら楽しませて貰おう」

そう言うのと施設内に向けて歩き始めるだが、途中で立ち止まるとまるで腕をあるように肩を動かす

直後、四葉の左腕が再生する。

「!!??」  
「!!!」

突然の事に全員が驚く

「ふむ、まだ微妙だね。うん」

そう呟くと再び歩き始めようとするが……

(あれ?横須賀の執務室どこだ?……思い出せん……)

「如月、執務室どこだっけ?」

「……覚えていないのですか?」

「悪いね。」

「はあ、全く……良いですよ。ついてきてください。」

「ありがとな。それと退院おめでとう」

「はあ、貴方って人は本当に……」

四葉の言葉に如月は呆れるしかなかった

## 会話

四葉と如月が二人並んで歩いている時のこと……

「それで？ なにか面白いことでもあったか？」

「……ええ、色々」と

如月が何かを含ませて答えるのを聞き四葉は質問する

「なら良い。それにしても……何があった？ 彼処までの重傷からの復帰……」

四葉の質問に如月は顔に苦笑を浮かべる

その顔は分からないからどう答えるべきかと悩んでいるようだった

「まあいい、それで他に何か報告は？」

「……そうですね。1つだけ」

「なんだ？」

如月が少し黙り込んでからゆっくりと口を開いた

「吹雪さんのことです」

「五百歳のおっさんのところのか？」

「ええ、どうやら彼女はあの『鳳 洋』をベースとしかつ彼女のトラウマは軍上層部が『例

外』を排除しようとして行われた結果だそうです」

それを聞いた直後、如月は四葉の纏う空気が変わったのに気がつく、それは普段から気楽に笑ったりする彼にしては珍しく……普段彼の殺気になれている如月ですら思わず身構えるほどの殺気だった

そのあと彼はポツリと呟く

「如月……部隊を集めろ」

「提督?」

「少しだけ気が変わった。今からハンバーグを作りに行くぞ」

あまりの一言に如月は驚くしかなかったが直ぐに冷静さを取り戻す

「提督、残念ですが。これは我々の問題ではなく彼らの問題です……下手に手を出すと余計な問題になるかと」

「……そうだったな。すまん珍しく頭に血が昇りすぎた。頭を冷やしてくる……先に行つていてくれ。」

「どちらへ?」

「久しぶりに煙草でも吸つてくる……」

そう言うのと外に通じると思われる道に歩いていく

如月は其を見送ると先に行くことにした

(あれ? 提督この建物こと知らないんじや…?)

如月は何か嫌な予感がしたが彼の命令に従い先に行くことにした

横須賀 鎮守府建物 屋外

四葉は煙草でも吸うと言っていたが本当の目的は別にあつた、それは……

(AMIDAに五百蔵の旦那を探して貰ったが丁度歩いて来るみたいだな……さてと、何か起きる前にも手でも打ちますか……ミスったら死にそうだなあ……まあ何とかしませぬ、あの暴走しやすそうな人だし)

そう考えた直後四葉は五百蔵に会う

「お久しぶりです。五百蔵さん」

五百蔵 side

一服終えて磯谷嬢の元に戻ろうとしたら声を掛けられた

「お久しぶりです。五百蔵さん」

どうやら四葉さんのようだ

「四葉さんか久しぶりだね……!?」

て、全身血まみれじゃないか!? 何があつたんだ?!

五百蔵が硬直していると四葉が笑いながら話す

「あー、気にしないでください。少しばかり左腕をやらただけなので。」

苦笑する四葉だが気にしないでほしいと言われ、仕方なくスルーする。

「しかし、何でこつちに?」

「如月達を迎えに来たんですよ」

「なるほどねえ……しかし、四葉さんもう少し体を大切にしてください」

「そうですね……それにしても少しお時間よろしいですか?」

「ん? 四葉さんにしては珍しいな」

五百蔵が話を聞く気になるのを確認した四葉はゆっくりと口を開く

「五百蔵提督、これは私個人の意見ですが我々は提督です。時に非情な決断をする必要  
があります。」

ブオン!!

直後五百蔵の拳が四葉に迫るがそれを左手で掴む

「そんなことはわかってる! だったら君はあの子を見捨てると言うのか!?!」

五百蔵の叫びに四葉は少しだけ首を振る

「そんなことは言っていないません。ただこれだけは覚えておいてください。貴方はあの子

の『父親』です。それだけは忘れずに……では。」

五百蔵の手を振り払い建物に向かうそして三步ほど進んだあと振り返る

「あと、お願いですから落ちないでください。俺みたいだね。っ…」

そう言うのと四葉の左腕が溶けていく

「四葉さん……」

五百蔵が驚いてるのを見て四葉は薄く笑う

「やっぱり貴方の拳を受け止めると駄目ですね。」

「……忠告ありがとう。」

「ええ、それでは。と言つても磯谷嬢に用があるのでまた会うかもしれませんね。」

そう答えると四葉は歩いていった

「はー、彼にあんなこと言われるなんてな」

五百蔵はそう言うのと少し体を動かしてから戻ることにした

横須賀鎮守府 磯谷 side

コンコンコン

「……っ？はい、どちら様ですか？」

磯谷は突然の来客に戸惑う

「AMIDA鎮守府の如月です。少しよろしいでしょうか？」

「あら？如月さんですかどうぞー」

「失礼します。」

如月は中に入ると用件を答える

「磯谷様お世話になりました。えっと今日帰りますので代表して挨拶に来ました。」

「元氣になったのなら嬉しいです。また何時でもどうぞ。」

「ええ、あと金剛さん」

「どうしたの如月??」

「榛名さんと五百蔵さん、それと吹雪さんをお願いします。」

「フフ、ワカツテるねー!」

「それでは、それにしても提督何処に行ったのかしら?」

「「え??」」

全員が硬直しているとまたドアがノックされる

「AMIDA鎮守府提督、四葉少佐です。よろしいでしょうか?」

「噂をすればなんとやら。どうぞ!」

バカン!!

直後ドアが蹴り開けられる

そこには右足を上にあげて立っていた四葉がいた

「こんな入室の仕方が悪いが腕が使えなかったのですね」

「あの、せめてドアは直していただくさいね？」

磯谷が涙目になるのを見て謝る

「わかってはいます、それにしても磯谷様今回は世話になりました。それでは……帰るよ如月」

「分かりました。」

そう言うと二人は自分達の鎮守府に帰ることにした

「……あの、ドア」

ドアを直すのを忘れていったが……

横須賀鎮守府 廊下

「提督おつそーい！」

「待ちくたびれました」

「マスター」

それぞれが思い思いに話し掛けるのを柔らかに見つめる



「さてと、帰りましょうかね。」

四葉は一度後ろを振り向くと敬礼した

(我々は今回動けません。ですが貴方達の御武運を祈りますそれでは)

敬礼を終えると四葉達は帰ることにする

懐かしの我が家へ……………

AMIDA鎮守府 明石

明石が一人パソコンのキーボードを叩くそこにはいろいろな情報が送られてきていた

「フフ、如月から送られてきたデータかなり使えるね……………けれど流石にばれるかと思っ  
たは……………私が……………」

不正に関わっていたなんてね

## 明石の過去 Part 1

「これは今から5年程前の話。」

「まだ明石が如月に会う前のこと……」

「嫌なのですか!? やめてください誰か助け!」

「動かないですよー。『グチャツ』……あーあー死んじやった」

「女は持っていたメスを台に戻すと紙を取り出す」

「実験体25387番……強化に耐えたものの肉体に変形ありと……えつと『処分』と」

「女は右手に持ったペンをクルクルとまわす」

「うーん何がいけなかったんだろう? 戦艦を中に入れたこと? それとも前段階のがそも

そも失敗だったのかな?」

「手元にある資料を眺めながら次を考えようとしていたら電話がなる」

「はいはい? どうしましたか?」

「実験は順調か?」

「大将様じゃないですか?、駄目ですなーまだ難点が多いですねえー」

「明石がそう言った直後捲し立てる」

「貴様これで何度目だ!! 成果を出しているのは良しとしよう!! だがそれでもこれで何度目だ!?!」

電話越しに怒鳴りたてる相手に明石は既に別のことを考え始め、そして思い付いたのを実行に移す

「そう言えば新しいのを思い付いたのですが?、電話では言えない内容です? この後お会いしませんか?」

「良いだろう、私も貴様にあつて直接話したいことがある!」

(フッフ、簡単なものですね)

### 2300 明石の研究室

「頼まれている研究ですが駄目ですねえ。何であんなものが出来たのか私には全く、見当が付きません。」

「お前でわからないとなるとやはりあれは化け物か……だが調べろ。何かあつたときのためにな」

「分かりました?」

そう言うとう明石は立ち上がり大将に拳銃を向ける

「き、貴様!?! な、何を考えている!?!」



今日も彼女はクルクルとメスを回す

ただ仕事のために

ただ楽しみのために……

「ほら、次はあなたですよ？」

そこには常に返り血にまみれた明石がいると言われる

何が目的かなど知るものはもう少ない、知ったものもいずれ消えるだろう

そして女はゆっくと歌う

「私のための解剖実験。貴方のための解剖実験♪」

## 明石の過去 Part 2

明石の研究所

「ふーん、ふん、ふんふーん」

明石が鼻唄を歌いながら、メモを取る。

その中身は至ってシンブルな観察記録である。

いや、普通とは言えないだろう。何しろ……

「うん、やっぱりあれね。戦艦を入れて以前仕留めたflagshipのヲ級も使ってるから面白くなってきたわね♪」

そこには異形としか言えないものがあつた

「クフフ？人間を素材にするとどこまでいくとはね」

彼女は笑いながらペンを回す

化け物について取り敢えず分かることは右肩のところにある『大将』の階級章だ

……

明石は笑いながら実験を続ける。

自分に化された使命『例外を殺すための例外を作り上げるために』

「そろそろ新しい素材が欲しいわね♪」

そう決めるとまた何かを作り始める明石だった……

同時刻 海軍大本営

「大将が行方不明だ?!」

「ああ、昨日の夜客人に会いに行くと言ったきりだ」

そこまで話をしたあと全員が沈黙する

「まさか……」

「何か心当たりでも、中将殿」

中将の呟きに大佐が質問する

「大将の部下に深海凄艦の研究をしている明石がいる」

「それが?……まさか」

「ああ、あの『化け物』を殺すための例外を作っていると言う話を聞いたことはあるだろうか?」

中将の独白に少将以上が下を向く

「多分そいつだ、以前から戦力にならない艦娘を実験台にしている。もう十年近くもだ」

「な、何でそんなのが存在しているんですか!?!」

「恐れたからだ……だから我々も黙認してきた」

「そこまで言うのだが、と答えてある決断を下す

「今度こそ死んでもらう……奴はやりすぎたんだ」

「了解しました部隊を動かして奴を消します」

明石の今後を決定するとまた次の議題について話し合い始めた……

『盗聴されているとも知らずに』

0130 明石の研究所近く

闇に紛れて動くもの達がいた、数は六。

彼等は軍上層部の手駒であり、裏切者の始末を担当している部隊だ

「いいか、今回は目標の始末だ。命乞いをされても構わず殺せ。良いな？」

「「ラジャー」」

「よし、突撃！」

そうして、彼等は研究所に突撃した。

……この後に待つのが地獄だと知らずに



同時刻、明石 side

「ふん、ふーん♪、ふ、ふーん」

突入してきた部隊を画面越しに見て明石は笑う

「いっぱい、いっぱいきた。楽しい楽しい実験台さん、ほら、遊んできなさい？私を満  
足させて？」

明石は楽しそうにボタンを押して何かのロックを外す

「グルルル!!」

そのままナニカは解き放たれた……………

それは檻を出るときに何かを落とした……………

それは……………何かの布の切れ端

## 海原を滑る姉妹

1000 AMIDA 鎮守府 執務室

四葉は珍しいことに目の前の現象に頭を抱える

「なあ、如月？」

「なんででしょうか。提督？」

「俺は大型建造をしたんだよな？」

「ええ、資源 a1120000 という限界を突破したふざけたことをやりました。」

「その結果がこれかよ！」

何が起きたかを知るには前日の事……………

前日の0800 執務室

四葉が何時も通りに書類を見たり。作戦を考えたり。

風見への新しい嫌がらせを考えたり、五百蔵さんたちに何かしらお祝いをあげようか

と考えていると……………

「テイトクサン、スコシヨイデスカー？」

妖精さんと呼ばれる

「んー?どうしたの?」

四葉が質問すると妖精達が文句を言い始める

要約すると……

- 1 最近出撃等をしていないため資材が余っている
- 2 更にバケツや開発の資材も余っている
- 3 それどころか最近建造をやっていないから暇で仕方ない!
- 4 だから建造をやりましょう!それも大型を!

と言われたのだ

「そう言われてもねえ?」

四葉が考え込んでいると妖精達が悪魔の囁きをする

「今ならa11200000できますよー?」

「よしやろう!今すぐ!」

そういつて建造をしたんだが……

「建造時間がリアル1週間の168時間?そうとうだねえ……って、はあああああ!?!」

表示された見たことのない数字に啞然とする

「はあ……取り敢えず、高速建造を頼むは」

「それでも完成は明日ですー」

「……泣けるぜ」

そういつて執務室に戻ったのが昨日のこと……

そして現在に至る……

「えつとー？取り敢えず、自己紹介を頼む『二人とも』」

四葉がそう言うのと右にいる黒髪の女が話始める

「初めまして、セントエルモ型一番艦の『エル』です。よろしくお願いいたします。」

その後隣にいた銀髪の女も話す

「同じくセントエルモ型二番艦『エマ』です。貴方が司令ですか。よろしくお願いいたしますね」

それぞれが礼儀正しく自己紹介を終えるが、四葉の頭はパニックになる

（セントエルモですかー?!何故?!ここはさあ、フレンチクルーラーとかスカベンジャーとかLLLLとかさあ、ソノ辺りじゃないの?!てか、何でこの子達?!いやわりとマジに!）

取り敢えずどうしようかと考えるが装備を見て意識を失い掛ける。

何故なら……

メイン 64連追装ミサイル

サブ ヒュージミサイル

サブ2 300ミリTEライフル

サブ3 C I W S

となっているからだ。

「……ハハハ。なにこれ？」

もうこれ、セラフやクーやLivよりやばくね？と思っていると……

「司令官さんお手紙なのです！」

電が手紙を持ってきてくれるのを二人が見た直後……

「……可愛い……ジュルリ」

「……妹にしたい……ジュルリ」

「ん??？」

何か嫌な予感がした二人だが取り敢えず電に案内をしてもらう

「……………気のせいだよな？」

「気のせいですよ、多分……」

A M I D A 鎮守府 エル&エマの部屋

電は部屋の角に追い込まれていた

「え、えつと？エマさん？」

「ふふ？何かしら？電ちゃん?！」

「目がおかしいのです！」

そう、さつきから電を見る目が怪しいのだ

それに気がついた電が必死に逃げようとするが両脇に手を差し込んで持ち上げる  
「うふふ？タノシミマシヨウネー」

「じよ、冗談じゃ」

そういつて自分のベッドに連れていこうとすると後ろから殴られる

「エマ？何をしているのです？」

「あら御姉様？私はスキンシップをやらうと思っただのですか？」

「笑わせないで……その行動はどう見ても変質者よ」

エルが冷めた目でCIWSを構える

「フフ？いくら御姉様と言っても譲れません」

そういうとゆつくりとレーザーライフルを構える

「クタバレ！このロリコンがああああ!!!」

「うるさい！このクレイジーサイコロズ！」

ズドン!!! カアオ!!

「夢なら覚めて?!」

二人が派手に撃ち合うせいで部屋が半壊する

この後、事態にブチキレた四葉がヒュージキヤノンで二人を撃ち更に被害が拡大した  
そうだ……………

## キャラ紹介&オマケ

セントエルモ型一番艦 エマ

身長160cm後半

体重(……察しろよ)

誕生日(7月21日) 理由? 読んでくれる人なら解るはず

血液型 A型

容姿 黒い髪のロングヘアーの巨乳お姉さん

イメージCV 17歳教祖様。

・性格 平常時 清楚なお嬢様、可愛い女の子が好き。

暴走時 鬼

素手喧嘩のプロ。駆逐艦娘達には凄い優しい。但しぶちきたら語気が物凄い荒くなる上に、真っ先に手が出る。

それが例え四葉であろうとも

殴る蹴る以外にも白目式アームブリーカーとラリアットが得意。



白目式アームブリーカー発動中は顔が物凄く怖い。お嬢様がしちやいけない顔になる。

妹のエマとは違いレズではない。只、駆逐艦を愛する者である。

好きな言葉は

「駆逐艦は良いぞ！最高だ！」

と言っている。その為セラフからは排除対象とされるが持ち前の装甲で耐えている趣味はお菓子作り 洋菓子を基本とする。

戦闘に置いているは戦艦までなら遠距離ミサイルカーニバルやCIWSで攻撃する

戦艦や姫級が相手になるや否や喜んで殴りかかる

そして相手の原型が留めなくなるまで殴り続ける

現在、新型兵装を実験しており支援機としての役割も行えるようになる

セントエルモ型二番艦 エマ

身長 160前半

体重（血にまみれて読めなくなってる）

誕生日 姉と同じ

血液型 A型

容姿 何処かのゴコーセンみたいな銀髪

胸の大きさ パンパカパーンの人サイズ

性格 清楚で大人しく、文武両道でかなりのお嬢様キャラ

解説 その正体は仲間の女性キャラに自身をお姉様と呼ばせたり、獲物を人気のない場所に連れ込もうとする、どっかの大井（然もターゲツトにされてる…？）も真つ青なガチ百合キャラ。

好きな部位は胸。巨乳美乳が大好き。

自身も随分と立派なモノを持つが（R J涙）其れでは満足出来ない（ロリキャラもかなり好みらしい…）。

CVは伊藤か〇 自身の邪魔をしたり可愛い女の子が酷い目にあつていたりすると問答無用で助け、傷付けている相手がいれば直ぐさま救出・殲滅活動を開始する

趣味はかなり多岐に渡るが、最近折れたサーフィンボードを修復したことでサーフィンがマイブームになっている。しかし鎮守府近くでは良い波がないためAMIDAに頼んで洞窟内に自前のサーフィン専用スペースを作ってもらった

戦闘スタイルは姉とほぼ同じだが、時折躊躇いも無しに突撃し至近距離で撃ちまくる

本人は殴るのは疲れるからと嫌がっている

でつかいもの好き。口癖は、「すつごく…、大きいです…?!」<sup>⑤</sup>?

後、諸々の意味で真正面から迫られると、かなり慌てる。例えば、真正面から告白されると、途端におどおどしたり、台詞を噛んだり吃るなどの慌てぶりを見せる。

後、純粹な子に弱い

要するに、ヘタレ

姉の新型兵装の実験にも参加しておりミサイル関係の装備見直しとバックアップを行っている

二人の兵装について

メイン 64連追装ミサイル

サブ ヒュージミサイル

サブ2 300ミリTEライフル

サブ3 CIWS

現在改修を行っており主にヒュージミサイルの火力アップをメイン（主にコジマ）として火器管制のシステムも見直している。

また現在、如月と明石による超高火力、超射程の支援兵器も開発されている

開発コードは『スターダスト』

オマケ 四葉の過去 ほぼ台詞のみ

「わ、分かった！は、話す！話すから待ってくれ！」

一人の学生が震える、周りには『両手両足をへし折られたり』、『顔の形が半分近く変えられたり』、もしくはその両方をやられたのが三十人近くいる

四葉は相手を黙って見つめる

「それで？誰がこんなことを？」

「他の学校の奴だ!!お前が以前口論になった相手が金持ちでそいつがお前を倒せば金をやるって!!」

四葉はそれを聞いて溜め息を吐く

「それでこれ?.....ツマンナイナア」

そう答えるとゆつくりと近づき『相手の足首を踏み抜く』

「ぎやあああああああ!!」

「うるさい」

「キー！」

喚く相手を詰まらなそうに『反対の足も踏み抜く』

「ねえ、答えてよ？ねえ？ねえ、」

ベキ！メキヤ！！グチャ！！

そのまま何度も何度も足を踏み下ろす

暫くやり続けて相手の足が曲がってはいけない方向にまで曲がるのを確認すると

『今度は右手の親指を踏み砕く』

「!!??」

「声にならない悲鳴をあげ床を転げ回る学生だが四葉によって足を折られた為に余計に、苦痛に苦しむ。

「もしもーし？聞こえてるー？ちよつとー……はあ……サヨナラ」

そう答えると思いつき脇腹に蹴りを叩き込んだ

ベキヤ！！

相手が完全に意識を失ったのを確認すると取り敢えずそのいる高校に向かうことにした……

次の日の新聞

『県内の高校で乱闘!!』

『学生50人以上が重傷そのどれもが社会復帰並びに生活が困難に』

『犯人は不明』

『怪我をおった一人は植物人間に』

『警察関係者によると同日の午前に別の高校でも乱闘があり三十人近くが重傷で発見され、関連性を調べている』

# トラブルは起こるものではない、全力で起こすものだ y 四葉

「なんだこれ……………」

四葉が何の気なしに書類を読んでいるとある情報に目が止まる

その内容は……………」

『BETAと呼ばれる新しい敵対勢力について』である。

「……………勘弁してくれ。風見先輩の所のネクストとか五百蔵のオッサンや洋さんみたいな化け物クラスなら何とかなるかもしれないが……………家じゃ対処しきれんぞ……………」

報告された内容に頭を抱える（こらそこブーメランになってるとか言わない）

（全く……………一度死にかけてこの体になってから考えるとハイペースで殺しに来てるねえ……………泣けるぜ）

四葉が頭を抱えていると更に問題が発生する

「あかーん！！！！」

ドッゴオオオオオオオオン！！！！

龍驤の悲鳴の後鎮守府が揺れる

「……ああ!？」

流石にブチキレた四葉がM4を取り出して龍驤の部屋に突撃するとそこには……………

「ふふ? 可愛いわよ貴女♥」

「いい気分かしら? 可愛い、妹ちゃん?」

「あ♥ふわ♥♥♥♥♥や、やめえ♥♥♥♥♥待つて二人ともおおお♥♥♥」

『何故か中破している』龍驤とそれに覆い被さるエルとエマがいた

もつと具体的に言うなら……………

『エル↓龍驤↑エマ』

こんな感じ、それはもう綺麗に挟まれており出来れば飛び込みたいような光景だった

「何やってんだお前らああああああ!」

この二人の奇行に、驚きはしないぞとばかり考えていた四葉だが流石にブチキレて

持っていたM4を思いっきりフルスイングしてぶん殴った

バキヤ!!!

哀れM4は鉄屑となりはて、二人は宙を舞う

取り敢えずの御説教(暫くお待ち下さい……………)



20分後

「全く……お前らは……」

物理的に説教を終えて腕が痛くなったため取り敢えず中断する

「提督？私は只スキンシップを」

「御姉様に同じく」

「ああ？」

朝から無駄な体力を使った四葉は苛つきつつも冷静を保ち取り敢えず二人に注意をしてから部屋を出た……

(全く……取り敢えず仕事しないと……)

AM1048 執務室

執務室に戻りさっきの書類を読み直す

(……うー、なるほどねえ。ラインアークの人達が相手になったのかあ……てことは一度は聞きに行かないとねえ♪さてど？電話してみますか)

電話を手に取り電話を掛けるが……

「あれ？繋がらん……おーいアーミちゃん風見はんの所に電話届けたあ？」

四葉がAMIDAに確認をとると……

「アミーアミーアミー（旦那あ、一応贈りましたけど届けたやつはやられたみたいでっせ？可哀想にあいつ奥さんと子供もいたって言うのに……）」

それを聞いて複雑な顔を浮かべると一度全員を呼ぶことにした

10分後

執務室に全員が揃う

「全員揃ったな？ブリーフィング始めるぞ」

そう言うプロジェクトを動かす

「今回の作戦内容は何時も通りの資源輸送船の護衛だ。因みにこれを失敗した場合3ヶ月はまともに戦えなくなる。よって気を引き締めるように。メンバーは旗艦如月

以下電、龍驤、U-511にLivとサイファーだ。質問は？」

全員が頷くのを確認するともうひとつの報告を入れる

「最近変なのが多いからな、全員にパイルバンカーを渡しておく何かあったら近距離でぶち抜いてやれ。」

それじゃあ解散と言うが……

「あー、悪いがクー、セラフ、エル、エマは残ってくれ」

四人を呼び止め、そのままもうひとつの本題に入る

「今からラインアークまで行くんだが……」

「何か問題でも？」

「珍しい、お前がそんなことを言うなんて」

四葉が言い淀むのを見てクーとセラフが不思議がる

そして彼はそこから声を弾ませて言う

「連絡とれなかったから、強襲するぞ♪」

「「「え？」」」

「ん？どうした？聞こえなかった？」

「え、えつと司令……訪ねるの間違いでは？」

辛うじて思考回路が戻ってきたエルが突っ込みを入れる

だが……

「うん？まあ、そうだねえ？……うーん？やっぱリアルサルトになるうん」

どう考えてもまともなことにはならないと四人が諦める

それを見た四葉は指示を出す

「クーとセラフは俺についてこい。エル、エマお前らは明石から装備を受け取って待機

……そうそう装備の名前を聞かれるから『スターダスト』と答えておけソレで伝わる

……ソレジャア楽しいパーティーといこうか？」

一瞬、四葉の声が変わるがそれには誰も気づかなかつた

別れて30分後………エル&エマ

「なによこれー!??!」

「こんなものを装備させますか!?!変態が!」

明石から渡された武器を見て悲鳴をあげていた

今日も今日とて問題は山積みになるby  
NWGI X /

V クー

ラインアーク鎮守府前海域

何時もの用にVOBで高速移動をする三人

「高度問題なしと……」

四葉がコンソールに映る表示を見てこのままでも問題ないと判断し、到着予定時刻を  
確認し直す

そんな中クーが話し掛ける

「マスター？大丈夫なのですか？流石に風見様に今からでも連絡した方が良かったのでは？」

クーが話した内容に隣にいたセラフも賛同する

「確かに、以前のクリスマスマスの件で恨まれている可能性がある。お前……以前何をしたんだ？あそこまでミサイルを撃たれるとは予想外だったぞ」

四葉を睨み付けるがそれを軽く無視して答える

「色々だよ。色々……な」

淡々と答えられたので会話が続かなくなる

「……そうか」

これ以上の質問は無意味と判断すると三人は黙って飛ぶことにした

「さてと、もうすぐだが………ん？」

四葉がそろそろVOBをページしようかと考えているとレーダーに反応が映る

「ミサイルか？………?!?!」

回避しようと考えた直後四葉のVOBが被弾する

「何?!」

今すぐに爆発しそうなものを見て舌打ちする

「マスター!!」「四葉!!」

二人が速度を落とそうとするが直ぐに指示を出す

「構わねえ！先に行け！クー高度を上げろ！到着直前にページして後はスラストで調節しろ！セラフ！光学迷彩を起動してクーのにしがみつけ！風見と会ったら情報だけ聞き出せ！分かったか！」

「ハイ!!」

二人が理解したのを確認するとVOBを切り離す

「オーケー！VOBページ!!」

そのまま海水にacを起動してから着水する。

「何処の馬鹿かは知らねえが楽しんでませて貰うよ?」

その顔にはまだ理性が残っていた

ラインアークside

「……堕ちたか?」

風見は報告にあつた未確認機の撃墜を確認する

「嫌、一人は海上に着水。残りは高度を上げて射程外に逃げた。多分……後、5分で到達される。」

「分かった……残りは此方で対処する。取り敢えずあの変態を沈めろ!」

「了解した。スピリットオブマザーウィル……作戦を継続する」

そう答えると主砲を構えて待ち構える。

報告にあつた変態を追い払うために

四葉side

「あぶな!!」

バシユン!!

飛んできたミサイルをライフルで迎撃し高速で飛んでくる砲弾を体を少しずらして回避する

一発でも当たれば死ぬかもしれない状況で笑う

「良いねえ………この感じ！これを待っていたんだよ！ほらもつと私を楽しませてくれ！！」

そう言つてハイブーストを吹かしてギリギリまで近付き目標を視認して、更に笑う

「……見つけた」

そしてゆつくりとライフルを向けた………

スピリットオブマザーウイلسide

彼女は目の前の状況に混乱していた

「馬鹿な………何でネクストでもないお前が近づける！」

目標を視認し、その相手が笑っているのを見て背中に寒気を覚えソレを振り払う為に連射する

「沈め！変態が！！」

そして近付いてきた四葉に至近距離で主砲を撃った

ズドン！！



(この距離だ外すわけがない……?!)

勝ったと思っていたが煙が晴れて目の前に居たのは

『左腕が無くなり大量出血している a c だった』

「クフ? ハハハ!! アーハツハー!!!」

四葉は楽しそうに笑い続ける

「良いじゃん!! 盛り上がってきたねえええええ!! この感触だよ!! 一瞬で命が消し飛ぶ感じ! これを待っていたんだよ!」

そう言うのと脚部。パーツ以外を解除する

「もう少しだけ楽しもうやお嬢ちゃん?」

そう言うのとナイフで自分の右目を刺す

ブスリ……

「ソレじゃあ、本気でイキマシヨウカネエ?」

そして狂犬が目覚める……

クー&セラフ

「セラフ! 先行するから援護お願いね!」

「あ、おい!」

セラフの準備が整う前にクーが飛び込もうとするが……………

ジャキ!!

「動かないでもらおう……………貴様はあの時の…」

「シュープリス……………ついてないわね……………」

偶々外にいたシュープリスに捕まる

(……………取り敢えずついていくか)

クーが捕まったのを見たセラフはジャミングと光学迷彩を使い後を追うことにした

……

ラインアーク鎮守府 執務室

「それで来たと?」(あの変態があああ!!)

風見はクーから事情を聴かされ取り敢えず今度こそ殺してやるとすら考えた

そんな風見の様子を見てクーが取り敢えず四葉には説教だと決めるが今は情報を聞

き出す事を優先する

「それでは風見様、本題に入らせて貰います。本日の用件はBETAについて、今の所の

風見様の見解と実際に戦った娘空の皆様の感想です。」

クーの話した内容に風見は書類読んでないのか?と思うがあの変態の事だまともな

ことを考えていないかもしれないと思うが答えることにする

受け答えも順調に進み、後はこのまま帰るだけだと判断するがトラブルが発生する  
「おい風見！今日こそババ抜きで決着を………貴様ああ!!」

部屋に入ってきたステイシスがクーを見るや否やライフルを向けようとするが  
バキヤ!!!

直後……ステイシスが部屋の反対側まで吹き飛ばされる

カチャリ

「動かないでもらおう………」

「な………んだと?」

ブーストチャージで吹き飛ばしたステイシスに向けてセラフがゆつくりとパルスマ  
シンガンを向ける

「セラフ!!!待って!!」

クーが慌てて止めようとするが……事はそう簡単には終わらない

「敵だ!!」

「ナインボール!?!」

「あんなの居たっけ!?!」

光学迷彩を解除したセラフの出現に全員が武器を構えるが更に問題が悪化する

ピチャリ…………ピチャツ…………ペチャリ

「「「???」」」

部屋の外に誰かいるのだ

「ココかナア?」

発せられた声に全員が硬直する。余りにも背中に寒気が来る声だからだ

ガキン!!

直後部屋の扉が蹴破られる

「クフ♪アハハ?!ハハハハ?!?!?見つけた!見いいいいつけたでえええ!風見さん

よおおおおお!!」

其処には真つ赤に染まった四葉が『五体満足の状態』て右肩にボロボロにしたマザー  
ウィルを担いで立っていた……………

# 狂人は啞うケラケラと

クーがシュープリスに連行されている頃

四葉 side

「ほらほらどうした!? 私はココだ! どこを狙ってるんだい!!」

四葉が海上を滑るように動き攻撃を交わしながらナイフを投げる

トス……………ズドン!!

ナイフに爆薬が仕掛けられておりマザーウィルの近くで爆発し目眩ましになる

「くそ…沈め!」

その攻撃に耐えながら砲撃するが全て避けられる

「おいおい? そんなんじや当たらないよつとお!!」

ブーストを吹かして上に飛び上がりそのまま急降下する

何て言うかココ海上だよな? と言わんばかりの変態機動である

だが一瞬動きが停まった瞬間ミサイルの雨をくらう

「やったか?」

さっきまでの行動に不安を覚え武器を構えていると……………

「ふー、死ぬかと思っただよ」

其処にはACを解除しながらも普通に海上に立つ男が居た

「貴様本当に人間か?!」

「サア? どうダロウネエ?」

ゆらゆらと立ち上がり自分の左肩を持つ

バサア!!!

そのまま軍服の上着を脱ぐ

「全く……ココまでやるはめになるとはね……悪いけどこつからは手加減なしでいかせてもらう」

ズリユ

言い終わると同時に左腕を再生する。

そして白いナイフを構える

「さあ、フィニッシュだ……」

シュトン………ズドン!!!

さつきとは比喩物にならないほど大規模な爆発が起きる

「小型のアサルトアーマー!? どうなっている!?!」

焦るマザーウィルを見つつ彼は嗤う

「答えると思う？まあ取り敢えず楽しかったよ……オヤスミ♪」  
パチン！

四葉が指を弾くと同時にマザーウィルは意識を失う

見ているものが居たら混乱するだろうが今ココにいるのは被害者と加害者のみ  
気絶しているスピリットオブマザーウィルを愉しそうに見て視線を建物に写す

「さーてと、どうせ交渉が無事に済んでるわけないし一応止めに行きますか……その前  
につと……っ！」

会う前に体を修復し肩に乗せて歩く

「さーてと？パーティー会場は何処かな？」

時間は戻って 現在 ラインアーク鎮守府 執務室

四葉の姿を見た全員が構えるなか当の本人はセラフの方を向く

「取り敢えずセラフ……おろしなさいソレ」

「しかし……「オロセ」……はい」

カチャリ

四葉の冷めた一言にセラフはパルスマシンガンを降ろすと彼の隣に立つ

「いやいや〜派手な歓迎面白かったですよ、先輩？」

そしてさつきまでの空気は何処へやら、ヘラヘラと話始める

「あれを歓迎と言いきるお前はなんなのかな?ア?!ソレとなんだよその子!?コジマ持とか聞いたことないぞ!!」

「楽しんでるだけですよ?それとこの子は如月製のスペシャルカスタムです」

「変態が!!」

「ソレ前にも聞きましたよ。まあ俺も色々楽しめたし知れたので帰りましょうかね?」

そう言うのとドアに向かって歩こうとするがそこで立ち止まると振り返る

その一瞬の間に血で汚れた軍服を脱ぎ新しいのに着替える

クーとセラフも含む全員が哑然としていると部屋に誰かが入る

「古鷹です、提督少し良いですか?……あ、えっと初めまして、古鷹型一番艦の古鷹です。」

「ああ、君が古鷹さんか。初めまして、AMIDA鎮守府で提督を勤める四葉一樹少佐です。風見提督とは殺し会うほど仲の良い仲間です」

四葉がさつきまでのキャラと空気を捨て司令部のタヌキを相手にするときの対応をする

「へ?四葉?もしかして!?!ヨツヨウ提督ですか!!」



「ん？そうだけど」

「えつとその、聞きたいことが有るんですけど良いですか!!」

「まあ、答えられる範囲で良いなら」

が古鷹の突然の豹変に驚く、そして許可を貰った古鷹がいきなり爆弾発言をする

「その右腕が『義手』てほんとはですか!」

「そうだよ、よつと!」

ゴキー! ガシヤン!

四葉が右肩を押さえると骨が外れる音がしたあと右腕がとれる

「まあ、何かと外すような物じゃないんだけどねえ?」

「……………あ、えつと何かごめんなさい。」

「良いよー、気にしなくて」

四葉はそう言うとき少しだけ寂しそうに笑い

「……………時には現実を見つめる必要だってあるんだからさ」

「……………」

四葉が呟くとセラフとクローの二人は視線を外す、二人にとって守りきれなかったあの

日の事を…………

「えつ?」

その空気に古鷹が躊躇うのに気づくと表情を元に戻す

「ああ、気にしないでくれ。独り言のようなものさ……さて、他にあるかい？」

そしてそこから答えられる範囲で答え時に解答をはぐらかして古鷹の相手を終える

「さてと、そろそろ良い時間だし帰りましょうかねえ？」

四葉が帰ろうと思いいドアに手を掛けると……………

ズダン!!

近くの壁に弾が当たる

「まだ……だ、まだ……終わっ……て……ない！」

気絶から回復したマザーウィルが四葉に発砲する

それに対して全く動じない四葉がドアから一度手を離す

「お嬢さん？喧嘩するなら結構だが……」

そこまで言うとき時的に de a p s t y l e を発動し、黒いオーラを出し

「手加減はしないで……」

背中を向けたまま警告する

『……………!?!』

その殺気に全員が武器を構える

「……………正気か？貴様、この状況で撃てるのも？」

ステイシスが皮肉を込めた挑発を言う。彼は嗤う。  
「正気？そんなものどつくに捨てたさ！」

カチャリ！バン！キーン！バン！バン！カランカランカラン……………

「ぐっ?!」「っ!!」「何?!」

ラインアークの全員が持っていた武器を落とす  
「全く……甘い甘い。取り敢えずハンドガンを落とさせたところまでは合格、でも予備の位置を把握していなかったのが駄目だったな。」

そう、今やったことは簡単なことである。まず、四葉が左脇腹に吊るしてあるハンドガンを抜いてステイシスに向けるが、直後バルバロイに右手を撃たれて銃を弾かれる。が、腰のバックホルスターから予備を取りだし反撃。

そのまま弾かれた銃が落ちる前に左手で回収し、体を横に倒して射撃し全員の銃を撃ち抜く

そして完全に倒れきる前に体を捻り立ち上がる

この間3秒

四葉からすると朝のラジオ体操レベルの内容である。

よってほとんど息を切らしておらず余裕をもって予備のマガジンを入れる

「ま、相も変わらず銃度は高いみたいだし手加減は出来そうにないね……ねえ？ 風見さん？」

余裕を持って風見に拳銃を向ける

「てめえ……!!」

風見に睨まれるが直ぐに囓う

「クスクス、まああんたは変わってないみたいだし安心したよ。そんなじゃ、帰るよーセラフ、クー」

セーフティを掛けホルスターに戻し肩を竦める

「逃げれると思うのか？」

風見からの殺気に四葉自身は窓を見る

「割れば逃げれるかと？」

「ハ、悪いがお前が飛び込んできたりして割られたからな防爆にしたんだよ！」

自信満々に答える風見を見て四葉は薄く笑う

「そうですか、なら……遠慮は要らないですね？」

「四葉?!」「マスター!？」



衝撃に動けなくなった風見達に四葉は近づくと……………

「用があるのはあんただけだ」

平淡に言い、風見以外をクーンとセラフも含み気絶させる

「さあ？ 邪魔は居なくなつた……派手にタイマンやろうぜ？ 風見さんよお!!」

そして邪魔を無くした四葉が笑いながら義手を外し右腕も再生させる

「狂人が!!! 今度こそ蹴りをつけてやるよ!!」

そう言うとお互いに激突する

## プライド

「ふっ!!」

ズドン!!!

風見に対して一気に距離を詰める四葉そして近づくなり

右手で正面突きを繰り出す

「?!」

ソレを間一髪で回避するが冷や汗が吹き出す

(アイツ本気で殺しに来た!?! てことはこっちも本気でやらないと殺られるか!?! ……  
がつ?!)

風見が距離を離したと思っていたら四葉が目の前におり腹を殴られそのまま掴まれ  
投げ飛ばされる

「アハ！あああざあみちやあああん!! 鈍ってんじゃないの?! 全くデスクワークばかり  
で弱くなったのかい? どうせなら機体を出しても良いんだよ!?! ソレくらいはハンデに  
してやるからさあ!!」

そう言うなり立ち上がった風見を掴むとそのまま外に投げ飛ばす

「ちー上等だ！そこまで言うなら……?!」

空中で機体を展開し着水しようとする風見が見たのは

『壁を蹴って落下速度を上げ此方に蹴りを入れようとしている四葉だった』

「嘘だろ?!」

ゴキリ!!

風見が腕でガードした直後何かが折れる音がする

「ぐっ!! やっぱりやるもんじゃねえ!!」

そう、いくら四葉が人間を辞めると言っても……

『装甲に蹴りをいければ足が折れる』のは当然である

しかし今の彼にとってそんなことはただの『快樂』である。

「アハ?! アハハハ!! もっと! もっと楽しんでもうぜ風見いいいい!!」

ベキヤ! ゴキ!! ミシヤ!!

「グ!!」

四葉が自分の腕が折れるのを構わず殴るおかげで腕は腫れているは、手に至っては骨が見えかけている

「てめえ……!! なに考えてやがる!!」

四葉の狂気染みた行動に手が出せないでいると四葉は啜う



「おいおい？ 殴ってこんの？ なら……シンジャエ」

直後風見の近くで何かが爆発する

「ウグ!? なんだ……今の!?!」

「ほら、止まると……シヌヨ?」バカン!!!!

直後、四葉が顔面を殴り装甲にヒビを入れる

ズリユリユ!!

「フフ? ホラ、もっとアソボウヨ?」

言い終わると同時に腕を修復するが……両手は『白く』なる

そして、四葉自身の視界に有るものが写る

(l i m i t e r c u t   d e a p s t y l e   l e v e l 2   c o o l d o w n ?

Y / N ↑)

その表示を見るなり笑いながら叫ぶ

「人生てのは事故って死ぬまでノンストップてのが俺の心理!」

「何言ってやがる、変態があ!!」

ゴキヤ!!

完全にキレた風見が四葉を蹴り飛ばし、四葉をまるで水切りの石のように水面で跳ね

させる

「はーはー、ヤバい流石にやり過ぎたか？」

風見がやり過ぎたかと思つた直後……

「まあ、そんなわけないですよ？仕方ないなあ……」

「へ、変態が!!」

「おいおい？ソレさつきも……てこれいつもの会話ですね。さてと……ちよーとばかり此方も武器と荒業やらせてもらおうよ？」

四葉がそう言うのと無線機を取り出して指示を出す

「エル！エマ！支援砲撃座標は5—1—6弾種は対地用！」

そう言うのと両手に拳銃を持つ

「さあ……パーティーといこうー！」

直後二人の真ん中で爆発が起きる

「あつぶねえええええ!!?!」

「交わしきれますか?!……半径2000キロのキルゾーンから……」

楽しそうに笑いながら拳銃を撃ち下がりながら高速で『自分に向かって飛んでくる』弾頭を撃ち確実に爆発を起こす

「どうやら、本番はここからのようだ……」

一方その頃      A M I D A 鎮守府      エル&エマ

四葉から渡された装備を試す二人だが直ぐに扱いになれる

ズドン!!!

「次弾装填! どうせなら耐久テストよ! いけるわねエマ!!」

エルがボルトを後退させ空薬莖を排出する

「わかってますけど妖精さんが過労死しそうです!!」

エマが必死に妖精さんたちに激励の言葉を掛けるものすでに死屍累々である。

「次の子呼んでこい!!」

「エイセイヘーイ」

「イヤダーシニタクナーイ」

「ダレダアンナノツクツタノー」

「シルカー、トリアエズイケー!」

「次弾装填完了! 姉さん!」

「あいよー!! 砲撃……開始iiiiiiii!!!」

バチバチ!!

150センチ砲にエネルギーが充填され……

ドオオオオオン!!

盛大なマズルフラッシュと共に砲弾が撃ち出される

「しっかし。派手に飛ぶわねアレ」

バキン!!

「「え?!」」

謎の音に二人が砲身を確認するとそこには……

『熱に負けて割れた砲身があった』

「……姉様？」

「言わないで」

そして悪いことは続くものである

「ダ、ダンヤクニヒガー?!?!」

「ニ、ニゲロー?!?!」

「え?!えつと……と、とびこめえええ!!!」

直後AMIDA鎮守府の数少ない地上施設が吹き飛んだ……

戻って風見&四葉

「アレ？おーいエル？エマー？援護！援護は？管制室！ちゃんと援護しろよ！！」

目に見えて四葉が慌てるのを見て攻撃を仕掛ける

「何でか知らんが攻撃が来ないみたいだな……貫った！！」

「……………勝機！」

しかし、そんなことで終わる四葉ではなく……『敢えて懐に飛び込み右ストレートを放つ』

ガン!!!

グシャ!!!

お互いの拳が相手の顔面に当たる

「ぐっ!!」

装甲があるとはいえ衝撃により脳震盪を起こしかける風見

「っ!!」

かたや装甲がついているせいで顔の形が恐ろしいことになる四葉

「ぎっけんなあああ!!」

「もう一発!!」

そして互いに倒れることなく最後の一撃を放つ

『メキヤ!!』

先に風見の拳が四葉を捕らえる

「……やつぱり、風見さんは……強いねえ……」

そう呟くと海面に膝をつく

「無駄にタフなやつだ、変態め……それで本当の目的は？」

風見は気が付いていたあの一瞬四葉が拳を『僅かに引いて当たるのを遅らせた』ことを

「嫌何、アレですよ。人間何処までやれるのかなー？てね」

肩を竦めて負傷した箇所を治す

「その為だけにあそこまで派手にやったのか？」

「ええ、あれくらいしないと風見さんは本気で来ないと思ひましてね。」

風見が呆れていると四葉は背中を向ける

「それにもしかしたら会うのはこれで最後になるかもしれないし……」

「ん？今なんて言った？」

「気にしないでください、ちよつとばかり痛かっただけです。それじゃ、そうそう面白いの残しておくんで後で見えておいてください。それと古鷹さんに言っておいてください。」

そこまでいうと少し躊躇ってから苦笑を見せ話す

「理想でものは案外壊れやすいものです。では」

ソレだけいうと風見の視界から四葉が消える

「!？」

慌てて周りを見渡すがそこには誰一人居なかった……………

ラインアーク鎮守府

「……………何人たりとも私には勝てない、すまんが上がりだ」

セラフが手に持ったトランプを置く

「何故だ!?!なぜこの私が!!」

(そりゃあ……………分かりやすいもの……………)

ババ抜きにて現在10連敗したステイシスがソファーに倒れ込む

「……………セラフやりすぎ」

「嫌、一応手は抜いてる」

クーが頭を抑え呆れていると……………

「それにしても1つ良いか？」

「何かしら? シュープリス?」

シュープリスが近づき質問をする

「奴の……四葉の目的は？」

「さあ？あの人かなり気まぐれよ？」

「……説明になってないぞ」

「答えたつもりよ？」

「ふざけているのか？」

「あら？やるなら相手するわよ？」

二人が戦闘モードに入る直後……

「なにやってんだか……」

転移装置を利用して先に戻ってきた四葉が二人の間に入り制止する

「マスターお疲れさまです。」

「ああ、まあ相も変わらさずボッコボコにされたけどね？」

「……懲りない人です」

「そう言うなよ、さてと悪いが先に帰る。これ風見に渡しといて」

そう言うなり s d カードをクーに投げ渡すとまるで初めから居なかったように消える

「……………え？あの、マスター？ちよ……………はあ……………バカ」



クーが渡された物を見て少しだけ楽しそうに笑うとソレを机におき誰かに電話を掛ける

「……………あ、明石？私だけどそう迎えお願いね。」

それから10分後

「ただいまー」

風見が帰ってくる

「四葉の奴は？」

「先に帰りました。それと風見様、マスターがこれを」

机に置いておいたsdカードを渡す

「……………変態からのプレゼント……………嫌な予感がする。」

「問題はないかと……………タブン」

「……………」

「……………」

クーの一言に凄く嫌そうな顔をする風見

それを視線を外して誤魔化すクー

暫くして諦めて貰うことにする

「取り敢えずあの変態に言つといてくれ……………今度から来るなら一言入れろ」  
「一応、伝えておきます。」

彼女は楽しそうに笑うと窓を見る

「迎えが来たようですし。それでは……………セラフ帰るわよ？」  
暫くすると建物の真横にヘリが到着する

「ちよつとー！二人とも早くしてよ!!」

中から服が焦げてしまっているエマがてを伸ばす

「分かっているはそれでは風見様また会いましょう。」

クーがヘリに乗るとセラフは風見の方を見る

「イレギュラー……………アイツの言う通りの人間だな」

「何?」

「気にしないでくれ。では、世話になった」

そう言うどヘリに乗り帰還する…………

AMIDA 鎮守府 執務室

四葉は現状に冷や汗をかく何故ならば…………

「えっと誰？」

「外に倒れてました」

「え？」

そう目の前に美女が居たからだ……

## 四葉を継ぐ（かもしれない）もの

「えつと……どちら様？」

四葉が目の前の美女に驚く

明石から人が倒れていたと聞き会うことになり最初に戻る

AMIDA鎮守府にいるのは全員美女だがそれよりも上と思える程だ

まあ、そんな事はさておき………現状ここに人が倒れていた若しくは流れ着くなど余り無いのだ（合つても困るが………）

「気が付いたらここにいた」

女性は淡々と答える

「いや、あの………名前は？」

「名前？コテン」

「………」

「………」

気まずい沈黙が流れる

「覚えてない」

「え?……………」

二人が黙っていると明石があるものを見つけ

それは彼女のものと思われる白いハンカチだ

「クーデルカで書いてありますのでソレが貴女の名前では?」

「そうなのかな?」

何処までもふわふわした空気に二人は戸惑う

「取り敢えず……………家に居て貰うけどいいかな?」

「えっと、宜しくお兄ちゃん?」

ミシヤ!!!

「え?……………お、おいお前ら!?誤解だ!!!」

四葉が視点を入り口に動かすと…………

「マスター?」

「四葉……………貴様あ……………!!!」

「あらあらあ?」

「司令官?」

クー、セラフ、エル、エマがとてつもなく良い笑顔をしているのだ

「明石!?説明してくれ!!」

「鎮守府の前の海に浮いていたから助けましたマル」

「説明になってねえええええ!!?」

四葉が混乱していると……

ムギユ

「えつとく? 取り敢えず落ちつく?」

「ふもが?!」

四葉の顔がクーデルカの胸部装甲に埋もれる

……この後唐沢やら、パルマシやら、6万パイル等が炸裂しました

20分後……

「取り敢えず……落ち着いた?」

「「後でゆつくり話しましょう」」

「……泣けるぜ」

無事に生き残った四葉

「えつとく、あの喧嘩は駄目ですよ?」

騒動のなか、そんなものはなかったと言わんばかりの空気を放つクーデルカ

(この女なんて神経してやがる!?)

そう流れ弾が当たらないようにしていたとはいえ何時飛んでくるかもしれないなか普通に居るのだ

四葉は背中に何か寒いものを感じた……………しかし、それでも尚危ないものに手を出すのがこの男だ

「まったく……………取り敢えず誰でも良いから空き部屋に案内してやれ」

取り敢えず今は装備の確認等をしたいため皆に後のことを任せる

「フフ? イキマシヨウネー子猫ちゃん」

「アラ? 私が連れていきますわよ? 御姉様?」

「えつとくよろしくお願いしますね?」

エル&エマに連れられて部屋を出る

「……………あのマスター?」

「どうかしたのかクー?」

「あの二人に任せても大丈夫なのですか?」

「……………あ」

「……………どうなっても知りませんからね?」

クーは珍しく冷たく言う。と部屋を出た

尚この後、凄く良い顔をした二人が廊下に倒れていたそうだ  
「い、ち、そ、う、さ、ま、で、し、た、？」



## キヤラ紹介 クーデルカ

### 四葉クーデルカ

A M I D A 鎮守府の防波堤近くにて浮いていたのを明石に保護され、身元も保証できないため明石が適当に四葉の妹として戸籍を作った。

また、軍部の情報を弄り一応A M I D A 鎮守府の司令官補佐

(要するに何かあったときの代わり)として登録している)

その為一応階級は四葉と同じ少佐である

身長 160前半

体重 平均的

体型 出るところは出ていて括れています。胸？軽空母涙目のレベルで立派です

容姿 腰まである白い髪 瞳の色は翡翠色をしています

服装は白いワンピースで中に水着着用

顔は美人、美少女と言うよりは美女である

性格 のんびり屋さん何時もふわふわとしており何を考えてるのかわからない。しかし真面目な時は真面目にやる、真面目な時は黙っており放つ空気も剃刀の様に鋭くな

るためすぐにわかる

趣味 流れるプール

しかしAMIDA鎮守府にそんなものはないので何時もAMIDAに浮き輪を引っ張ってもらい地下の特設プールで遊んでいる。

てかプールで遊びたいために年中水着

仕事もプールでやっている

それもあり書類はよく濡れないためにと防水性のある箱を持ってやっている

口調 やけに語尾を伸ばしかつほとんど疑問系で終わらせる。

使用機体 Melancholy angel 『憂鬱な天使』

四脚 右手にライフル左手にバトルライフル右肩にパルスマシンガン左肩に6万パイルを装備している

機体名の由来は一度ACに搭乗後クーデルカの顔が憂鬱そうに見えたためLivが名付けた

戦法はオールマイティー、状況に合わせて距離を取る

後ろを取られたとしてもブーストチャージの要領で後ろを振り向き逆にパイルをお見舞いする

弱点は装備の関係上短期決戦又は長期形の相手に弱い

因みに乗ってる間はずっと黙っている

捕捉 一応四葉の秘書として働いている。が何時ものんびりしておりいつ仕事をし  
てるかわからない。だが気が付いたら書類が終わっており予定時間より早く終わるた  
め、全員不思議に思っている。

本人は「頑張れば出来るよー?」

と言っているが徹夜コースとしか思えないような書類を半日で終わらせる辺り色々  
と可笑的い。

捕捉2 セラフのメモ

この前入ったあの女だが色々可笑しい

まず、堅気に思えない……………だが私の殺気に気づかないと見ると堅気と思えるがあ  
体の身のこなし……………

気になって明石に調べさせたが奴は強化人間ではないようだ……………そうだな今度AC  
を、組ませて相手をしてみよう

捕捉3 クーのメモ

えっと、私は何を見ているんでしょうか?

クーデルカさんに頼まれてACの操縦のやり方とアセンブルの仕方を教えました

僅か30分足らずで組んだ機体に

一通り動かし方を教えただけなのにセラフと張り合う……いえそれどころか攻撃を的確に交わし致命傷を与えていつてます……まさか……彼女は……

あ………気が付いたらセラフが負けています………

#### 捕捉4 明石の検査報告

セラフから彼女の身体検査を頼まれて一応、真面目に、やれる限りの（睡眠薬で眠らせて）検査をしたが彼女は至って普通の人間だ

ただ少しだけ気になることが二つある

1つは無意識の内に相手の射程圏内に入らないようにしていることもう1つこれは私個人が気になることだが………

ACをすぐに乗りこなすまさか彼女はドミ………（ここからは字が掠れて読めなくなっている。てか寝惚けて書いているのか涎で字がふやけてしまっている）

#### 捕捉5 四葉のメモ

新しいあの子だけどうもやけに高い実力を持っているようだ………てかセラフがやられるとかまじかよ

それと明石………書類によだれ垂らすくらいならきちんと寝ろ!!!!

全くあいつは………（この後報告書に掛けるような内容ではなかった!ので削除しました

b  
y  
如月  
)

## 憂鬱な天使は何を見る？

AMIDA 鎮守府執務室 1000

「え？私を試したい？」

クーデルカはセラフの発言に戸惑う、此処に来てもう一週間がたち如月や他の娘とも仲良くやっていけると思っていたからだ

「ああ、変に思わないでくれ。貴様も此処にいるなら少しは訓練した方が良いと思っ  
な」

「あ、そうなんですか。そうですね、何時までも書類だけだと体にも悪いですしね。」

クーデルカが理解するがある疑問をもつ、そう訓練するのは良いが……

「あの、セラフさん？私機体有りませんが？」

「……そうだったな、彼奴に借りてくると良い」

そう言われテクテクと四葉に借りに行くクーデルカ

AMIDA 鎮守府 四葉一樹 自室

「それで機体を借りたいと？」

「駄目ですか？」

上目遣いで頼まれ、思わず倒れそうになるのを耐えてクーデルカを真つ直ぐと見る  
「ま、良いけどさ。最近乗ってなかったから」

そう言うのとクーデルカに機体データを渡す

「死なない程度に頑張れよ？ 後機体は好みに変えて良いから」

「ありがとうございます」

クーデルカが礼を言い部屋を出る

四葉は彼女が部屋を出て誰も居ないことを確認すると煙草を取り出す。

最近吸ってなかったが色々あったためまた吸い始めたのだ

(全く……………最近体がだいぶ疲れてるな……………適度に休憩しないと……………)

苦笑しつつ煙草に火を付けようとするが落とす

「……………はあ。」

落とした煙草を拾うと今日は止めておこうと決めた四葉だった

AMIDA 鎮守府 演習場

「えつとセラフ本当に……………本当にやるの？」

クーはセラフからの提案に困惑する、何故なら…………

『AC乗るのが初めての人間を二時間で使い物にするよう言われたからだ』

「まあ、私の勘だが……あいつは『例外』になりえる。

それを見極めたい」

セラフの澱みの無い目を見てクーも覚悟を決める

「わかったは……やって見せる」

そう言うのとアリーナで待つクーデルカに教えることにした

取り敢えず基本動作とその応用後は実戦で気を付ける事などについてを自分で考えさせながら教えていった

それから2時間後、クーは自分の考えが甘かったと知る……

二時間後 アリーナ セラフvsクーデルカ

「く、クーデルカ!? 貴様本当に素人か?!」

「……………(コクリ)」

そう、セラフが完全に押されているからだ。

飛んでくるミサイルは全てパルスマシンガンで迎撃

近付けばバトルライフルとKEライフルで牽制&攻撃を、離ればハイスピードミサイルで追い討ちとかなり上げつないことをやる

「ち、こっとなつたら!!!」



やる予定はないと決めていたブレード光波を繰り出すが……

「そつち………」

バシユ!!!

「な!?!」

ギリギリまで引き寄せて急反転して避ける

「……………おしまい」

ガキイン!!!

最後にセラフを蹴りとばして演習を終わらせる

が……………イレギュラーを排除する者もまたイレギュラーである

「ふざけるな……………こんな……………こんなことで私が!!!」

『プログラム変更』

セラフがもう一度立ち上がる

《修正プログラム 最終レベル》

持っていたパルスマシンガンをK A R A S A W Aへ

肩のグレネードをマルチロックミサイルに

《全システムチェック終了》

《戦闘モード起動》

そして本気をだす

《ターゲット確認》

《排除開始》

「……………角度修正……………右に5度」

セラフが本気をだすがクーデルカはそれを冷静に判断  
やることは変えず、引き撃ちを続ける

「……………修正……………0.2秒」

「沈め、イレギュラー!!!」

セラフが一気に距離を詰めブレードをふる、確実に止めをさす、その気迫で

「……………そ、……………」

しかしその気迫に負けずクーデルカは懐に飛び込む

ガキャン!!!

「が?!」

謎の音がした直後セラフは気を失う

カラン……………

アリーナの床を砲弾とはまた違う空薬莖が転がる

「……………状況終了。クーデルカ帰還します」

淡々と終わったことを告げ、セイフティーエリアに戻る

クーデルカがセイフティーエリアに戻ると同時に

クーがセラフに駆け寄る

「セラフ大丈夫!」

「……………う、ぐ?!……………あ、ああ」

「何があったの、あの一瞬で」

「わからんだが……………」

セラフは床に転がる空薬莖を見るそれはH E A T弾頭だった

そこから考えられることはただ一つ

「あの女、パイルバンカー積んでいたのか?」

クーもセラフの見ていた空薬莖を見るがある疑問をもつ

「ねえセラフ？彼女……あなたより『後に』動いたよね？」

「……………ああ」

セラフはあの時のことを思い出す。

あの一瞬確実に『自分』が『先に動いていた』

「……………え？」

「…ちよつと待つてよ！貴方のムーンライトよね!？」

「クー落ち着け。わたしも混乱してるんだ」

二人が彼女の使ったと思われる武器について考える

「確かにパイルバンカーなら有り得なくはないけど……………」

「嫌それでも……………」

「訳が分からない……………」

二人は暫くその場で呆然とした

その頃、セイフティエリア クーデルカ 機体の中

「……………」

無言で機体の中で目を閉じる

考えるのは先程の模擬戦

「初めてなのに何だか不思議な気がした？」

少ししか教えて貰ってないがまるで長年使ってきたように体に馴染んでいたのだ

「まあ、気のせいかも？」

そう言うのとACCから降りる

「そういうえば……名前どうしようか？」

暫く気だるげに機体を眺めていると後ろから声をかけられる

「クーデルカさんどうかしたの？憂鬱そうな顔して？」

「あ……えつと……たしか？Livさんだっけ？」

「そうだよ？それにしても大丈夫？」

「うん、ちよつと考え事……」

「どんなの？相談に乗るよ？」

Livに言われて少し躊躇った後にクーデルカは少し微笑んでから答える

「えつとね、機体に名前をつけてあげようと思っただけど……」

『Melancholy angel』てのはどう？」

Livの発言の意味が分からず首を傾げる

「えつとね……クーデルカさんて天使みたいな人なんだけどさつき物凄く憂鬱な顔をし



取り込まれる直前、潜水凄姫はある文字列を見るそこには……『……IID』とだけ書かれていた

## 遭遇

1000 AMIDA 鎮守府 執務室

「……おい」

「……さあ?」

四葉とクーデルカの二人がある情報に疑問をもつ。

それはある遠征班からの話だ、その内容は

『潜水凄姫の亜種と思われる存在が確認された、が…』

深海凄艦とは違い同種すら襲っているらしい』

「……なんだこれ?」

「……さあ?」

「……………(———)」

「……………(、△、)」

暫く執務室に沈黙が訪れる

「ま、いつか(何かあったら殺せば良いし)」

「そうですね(皆に何かあったら……………フフ)」



四葉とクーデルカの二人が一瞬、表情を変えるがすぐに仕事に戻る  
カリカリカリ

執務室にペンを走る音だけが続く

そんな、何気ない何時も通りの……………

「マスター!!!遊ぼう!!!」

日常が訪れる筈が無かった

部屋に飛び込んで来たのはシユトリゴンだった

「んー?何して遊びたいんだ?」

勢いよく入ってきた彼女を叱らず淡々と質問する

「模擬戦!!」 ガシャン!!

シユトリゴンがショットガンを向けるが……………

「遅い」「甘い」

四葉はナイフを投げ、それと同時にクーデルカがそのナイフをキャッチして押し倒すと同時に首にナイフを突き付ける

「え?……………え?」

「完璧だな、クーデルカ」

それだけ言うと四葉が外出用の上着を取る

「提督?どちらへ?」

シユトリゴンを押さえ付けるクーデルカが目を細める

「少し横須賀に行つてくる」

「……………何故?」

「如月にプレゼントをな?」

「了解しました。お気をつけて」

「ああ、まあ直ぐに帰るよ」

四葉はそう言うと格納庫に向かう

A M I D A 鎮守府 格納庫

「さてと?今回はどれにしようかな」

四葉が目の前にある戦闘ヘリを眺めるそこにはハインドにアパッチもあったが選ん

だのは……………

「まあ、こいつだな」

何時ものポルシェ911に乗り横須賀に向かった四葉だった

その頃、クーデルカ達はというと……

「遅いです」

殴りかかってきたシュトリゴンに足を掛けて転ばせる

「なんで?!」

倒されたのを横目にピクシーが距離を測るために下がるが……

「く……………!!」

微妙に間合いを詰められ動きにくくなるそしてクーデルカの動きを邪魔するために蹴りを入れるが

「そうきますか?」

それを交わして足をつかみ転ばせる

「だー、また負けたあ〜!!」

「何で、負けるのかなあ!」

先に倒されていたシュトリゴンが悔しそうに見つめると少し笑ってから

「動きが読みやすいのよそれに一瞬間が出来るからよそれを少なくすれば勝てるわよ?」

彼女による教導は暫く続きそうだ

それからかなり時間がたった後 横須賀 宝石店近くのカフェ

車から降りた四葉が席に座る男に話し掛ける、男の見た目は30代程だった

「あんたがj a c k e tか？」

その男は四葉を見て人の良さそうな笑みを浮かべカセットテープを向ける

『ええ、初めまして？狂人さん？』

「ふ、初対面にそう言われるのは初めてだ。で？『p a y d a y』は何時だ？」

『今からですよ？』

そして、四葉《サイコパス》とj a c k e t 《ソシオパス》は遭遇する

## jewelry store

横須賀 宝石店前

「OK、お前ら。この店はお前らの試験にはうってつけだ。警備の人数は少ないし監視カメラもない。ショーケースも割つても問題ない。窓にはブラインドも掛けられるから外から見られる恐れもない」

(簡単ねえ?)

四葉は外から様子を見るが頭を抱えなくなる、何故なら裏から入ろうにも警備員がいるしそもそも裏への道が金網で塞がれているのだ

(んー、どうしようかなあ?)

四葉が横を見るとそこには……

『既にマスクを被って仕事モードになっている二人がいた』  
(おい!?!ばれたらどうすんの!?)

四葉が慌ててjackpotにジエスチャーを送るが……

『落ち着いてください』

「大丈夫ですよ?」

二人はそう言うと同時にジェスチャーで

『とつととマスクを被ってください直ぐに終わらせるので』  
と指示を出す

「え？ちよお前ら何を……『stay down!!』『eat the dirt!!』」

正面から堂々と押し入ってjackが警備員を銃殺

雲龍がM4を突きつけて民衆を黙らせる

「Don't move」

慌ててマスクを被った四葉は預かっていたECMを起動して警備員の無線を邪魔して民衆を縛り上げる

そしてECMが切れた後それぞれが応答する

「あー、すまんすまん。ちよつと躓いてコケちゃった。安心してくれ問題は何も無い  
ああ、問題はない」↑四葉

「ごめんなさい、お握りが三つもあったことにビックリしたのです。それ以外は何も問題はありません、ええありませんとも？だから後で漬物もください」↑雲龍

『問題ありません、ですので警備に戻ります』↑jack

適当に返した

「全く、横須賀で仕事してる時点ですら俺にはヤバイんだけどねえ？全くどうするんだ

「この後？」

四葉が近くにいる市民を雲龍と協力して縛りながら質問する

『取り敢えず、ガラスを割って寶石を積めて逃げましょう。』

jacke tはそれに対して左手でガラスを割りながら右手でカセットテープを再生する

「了解、それでベイン？何か変わった様子は？」

状況確認のためにベインに連絡をつける

『問題ない、あとは積めるだけだ』

「了解……（こころも簡単だと嫌な予感がするぜ）」

四葉が鞆を車に積めていると……

「貴様ら！何をしている!!」

有り難く無いことに警官に見つかる

「ちっ!!グッドナイト!!」

直ぐ様鞆を車に投げ込み愛銃のM E Uピストルで警官の頭を撃ち抜く

サプレッサー越しに45口径のくぐもった発砲音が響き、警官が物言わぬものになり倒れる

そしてこれまたタイミングの悪いことに

「ひ、人が撃たれた!!」

「誰か警察を!!」

死体が民間人に見られる

「くそ！出せ!!」

鞆を積み終えた四葉がスモークグレネードを投げる

それと同時に彼等に乗せた車は猛スピードで出発した

こうして彼等の初めてのpaydayは取り敢えず成功した

某所 とある歯医者

「なるほど、彼が四葉かふむ今度この歯医者に行くのか……………」

男はハッキングした監視カメラから四葉を見ていた

「やはりまだ必要なのだよpaydayが」

男は楽しそうに笑うと、手にゴム手袋をつける

同時刻

鎮守府 サーバルーム

「あ？懐かしい人達が動いていますね、まあ、そんな事は関係ないですね」



女はキーボードを叩き続ける

「見つけたばかりのあれを深海に流しましたが問題は無いようですね……………」

そのままディスプレイに映る有るものを楽しむ

「クスクス……………例外を消すには飛びきりの例外を……………楽しませてもらいましょう」

女は嗤う嗤い続けた、とびっきりの悪夢が始まるのを

強盗から二時間後　A M I D A 鎮守府

四葉が如月を呼び出す

「君に渡すものがある」

「え？」

# 歯医者 Christmas planning

AMIDA 鎮守府 執務室

四葉が個人的に如月を呼び出す

「もう、司令官たらどうしたの？」

「如月、これ受け取ってくれないか？」

「えっ……これ……」

彼が彼女に見せたのは……

「カッコカリじゃない本物の指環だ」

「……………」

そのまま彼女の左手を取る

「俺だつて長くない、それでも今俺がお前に向けられる物があるならそれはこういうものだ……受け取ってくれないか？」

「司令官………ありがとう………」

如月が笑うのを確認すると四葉も楽しそうに笑った

尚、この後普通に夜を過ごしました

次の日 AMIDA鎮守府 から少し離れた町の病院

「んー、歯の健康を確認するのも良いかもね」

四葉が一人で順番を待つ、そして待ち時間に新聞を読むそこには……………

『白昼堂々の強盗!!』

『昨日、横須賀の宝石店にて強盗が発生した。強盗達は警備員を射殺したのち、宝石類総額500万相当が盗まれた』

『日本でこの様な強盗は前代未聞で現在警察は主犯と思われる3人を探している』

暫く新聞を眺めていると……

「四葉さーん、四葉一樹さーん？」

「あ、はい」

「今回が初めてですね？」

「ええ。」

見た感じふつくらとした女性が四葉を案内する

「先生、四葉さんをお連れしました、さあお掛けになってください」

「あ、どうも」

椅子を指示された四葉が上着を脱ぎ椅子に座る

「ああ、貴方が四葉一樹さんですか」

そこには顔をマスクで隠した黒人の男がいた

見た感じは40後半程である

「それで、四葉さん御仕事は……あー、見た感じ海軍の人かな？」

歯医者は四葉を少し見てからゴム手袋を着ける

「ええ。」

「てことは提督ですか？」

「そうです」

椅子に座った四葉を彼は見下ろす

「それでは始めます。口を開けて」

言われた通り口を開ける四葉

「うん、歯並びも良いし虫歯も無さそうだが少し歯茎が腫れてますね。歯間ブラシして

ますか？」

「ひひえ（いいえ）」

口を開けたまま否定する

「そうですか、話は変わりますが横須賀海軍博物館はご存知で？そこには数々の美術品

があります」

「はあ」

歯医者がいきなり訳の分からない事を話始めたため怪しがる四葉

「実は私の患者の中には珍しいのを収集している者がおりましてね？」

「何が言いたい？」

「おや？こここまで言っても興味を持たないのかい？私は持つてくれると思ったんだがね

四葉少佐？」

歯医者の上からぬっと見つめると……

「それともこう言った方が良いかね？『フェンリア』」

「……!?!」

仕事の時の名前を呼ばれて慌てた四葉が逃げ出そうとするが

「フリーズ」

助手の女性に押さえ付けられ顔にメスを突き付けられる

そんな彼を上からねつとりとした視線で見つめる

「悪いが我々は患者に対してにプライドを持つている。それも絶対のだ」

「だが……彼等は歯間ブラシを使わない。それが彼女の心に傷をつけるのだ」

メスを突き付けられた四葉は冷や汗を浮かべつつ

「分かりました。今日からやります」

「OK、良いよ離して」

女性が離れるのを確認すると四葉は一度溜め息を吐いてから質問する

「それで？何が目的だ」

「言わなくても分かっているだろう？」

「悪いが俺は横須賀の人に顔は割れている。いくらマスクをしているとはいえ次仕事をしたら確実に面がバレておしまいだ。下手したら横須賀の金剛か北海の鳳 洋に殺されかねん。」

四葉が歯医者をじつと見つめる

「そうだ、だからこそ来週だ」

「ああ？」

「実は君に依頼したい品は来週。東京に向けて出発するそれを襲って貰いたい」

「……………私のメリットが無い」

「まあ、取り敢えず聞いてくれ、それが終わった後君達を裏のカジノに御招待しよう」

「ギャンブルはやらない主義でね」

四葉が呆れて肩を竦めるが歯医者は近くの椅子に腰掛ける

「あのカジノに有るのはただのサイコロとカードではない」

「……………?」

混乱していると話を続ける

「どうだ?面白くないかね?」

「悪いが失礼する」

面倒事になる前に帰ろうとする四葉だったが…………

「そう言えば…………以前、君が誘拐し関係者を殺したときの生き残りがいるんだが知りたくないかい?」

「何?」

あの時の生き残り?そんな馬鹿な?

混乱している四葉を嘲笑うように男は続ける

「正確には本当の黒幕さどうだ?知りたくないかい?」

「交換条件てか?」

「わかるだろ?君にもそうであるように私にも『給料日』は必要なのだよ」

マスクを外した歯医者は楽しそうに話した

(喰えない奴だ…………だが…………)

暫く躊躇った後で彼の手を取る

「分かった、その話乗ろうだが依頼は『彼』を通じてくれ」

「分かっているとも、そうそう盗んできて貰いたいものだが『diamond』だ」  
「ダイヤモンド？そこらのじゃないのか？」

『the diamond』だ所持したものに不幸をもたらすと言われるな？」

そこまで言われて有ることを思い出す。3週間程前にそれを盗もうとした強盗団が逮捕されているのをそして……

「その中の一人は死んでいるんだよな確か？」

「死体の『一部』は東京湾から上がったからな」

歯医者の言葉に顔をしかめる今度こそ年貢の納め時になるかもしれないから

「それで？計画は？」

それでも彼は止まらない、彼女達が安全に暮らす為ならどんな事でもやると決めてい  
るから

「それは後日説明しよう、それでは宜しく頼むよ？後、歯磨きは欠かせずに？」

「そうさせて貰う」

歯医者者に別れを告げ、次の仕事のために計画を練るかと考えた四葉だが外に出た直後  
携帯の着信に気がつく

(この番号は？知らんなまあ一応出るか)

「もしもし？」



「久し振りデスネ？ 四葉提督？」

「あら、金剛さんお久し振りです（このタイミングまさか!?）」

歯医者と話をしていて時以上の冷や汗が出るが相手に悟らせずに話す

「どうかしたんですかいきなり？」

「いえ、1つ聞きたいのデスガ」

貴方、この前の強盗に関わっていませんヨネ？」

「何のことですか？（やはりそう来ますか）」

「あくまでしらを切るつもりデスカ」

冷めた声で言われるのを真剣に返す

「身に覚えの無いことを言われたら誰だつて不思議がりますよ」

「そうデスネ、ではこれだけは言っておきます。私の家族に手を出したらどうなるか覚悟しておいてください」

壁に背を預け、煙草に火をつける

「お言葉ですが、私は友人に銃を向ける気はありません。」

「……分かりました。今日の所は引きます。ですが如月を悲しませナイヨウニ」

「そうですね、その忠告だけは受け取っておきましょう」

四葉はそう答えると電話を切った

(止まらないですよ、歯車は動き始めたあとは駆け抜けるだけです)  
冬の空を見つめ四葉は鎮守府に帰った……………

そして1週間が過ぎて……………

「Don't move!!」

計画は実行される

## ゆく年くる年 レッツパーティー

12月31日 1900 AMIDA鎮守府執務室

「……………さてと? お前ら……………」

四葉が執務室に全員を呼び集合させる、呼ばれた面々は以前の事を思いだし既に戦闘準備を整えている

「いや、その今回は派手なことはやらない」

「「え!」」

四葉からの意外な一言に全員が啞然とする

「司令官さん、頭を打つたのですか? コジマでも浴びますか?」

「何故そうなる電」

「司令官……………そんなに疲れているなら如月が癒してもいいのよ?」

「お前には毎日癒して貰ってるよ」

駆逐艦二人に言われて首を横に振る

「いいかお前ら……………今日は12月31日だ。」

静かに語るが全員は…………

「「それで？」」

「年末だよ？」

「「イベントの季節の度にラインアークに襲撃仕掛けまくった人が何を言っているのですか？」」

全員からの事実によるボディブローが彼の精神にダメージを与える

「ウグ！ま、まあ、そんな事はさておき今年は色んな仲間も増えたいし歓迎会と忘年会を開こうと思うんだよ」

「ふん、お前らしくないが……それは良いな」

セラフが肩を竦め他の艦娘たちも賛成する

「それじゃあ……皆この後準備なく俺は飯を作っておくから」

「「了解!!」」

「はい、それじゃあ解散！」

セラフ達が部屋を出たのを確認すると彼はボンヤリと窓に右手を向ける

（本当に色んな事があったな……：先ずは風見さんと知り合って派手にやってその後はハインツさん達、それでもって五百歳さんだろ？）

窓から見える星空を取ろうとするように手を伸ばす

（俺は色んな人達とあってきて色んな物を貰って……また失ってもきたんだよな

……)

一度手を引つ込め義手を外す……そして……

『ズリユリュ!!』

腕を再生してもう一度『白くなっている』腕を伸ばす

(最初に死にかけてからここまで堕ちちまった……そして今……全部を捨てようとしている……)

ポケットから煙草を取りだし、窓を開けて煙草に火を着ける

(彼奴等の為て言い聞かせてるけどさ結局は怖いんだろうな……俺自身、何時深海側になるかもしれないし……だから早めに別れようとしている……そして何より……俺が人を殺すことに快感を覚えている……酷いな全く)

溶けていく腕を見ながら口元に笑みを浮かべる

(まあ、それでも俺は駆け抜ける。何処の誰かは知らねえが彼奴等に手を出す前にぶつ殺してハッピーエンドにしてやる)

覚悟をもう一度決めると今日のパーティーに向けての準備に向かった……

解散から暫くしてパーティーが始まる

「それじゃあお前ら！今年一年御苦労!!」

四葉が赤ワインを掲げ、それに合わせて全員がグラスを上げる

「今後もこの戦争は続くと思うんだけど俺達は俺達のやり方でいく。だから死なずに生き残るぞ！そんなじゃあ乾杯！」

四葉の声に合わせて全員が一気に飲み干した

「よし、皆後は楽しんでくれ！後、クーデルカ悪いが話がある。少し来てくれ」

AMIDA 鎮守府 港

冬の夜風が彼と彼女の間を通り抜けていく

「どうしたんですかお兄様？」

港についたときからずっと黙っていた四葉一樹にクーデルカは質問する

「嫌、何お前に頼み事がある」

「??？」

「もしだ……もし俺に何かあったらお前は彼奴等の事をきちんと守ってくれ。」

彼の真つ直ぐな目に彼女も頷く

「まあ、そんな事あったら困るんだけどな……さてと戻ろうかパーティーは始まったばかりだしな」

そう言うのとクーデルカの手を握り会場に戻った四葉『兄妹』だった

???  
s i d e

ああ、なんて愚かでそして美しいんですか貴方は。

それでは舞台の上で踊ってください哀れな道化師。

貴方が盤面を引っくり返すなら私はそれを全て滅茶苦茶にしましょう。

それが例外を消す為に作られた私の指名ですから……

## THE diamond

「OK、お前ら今回は生け簀かない歯医者からの依頼だ。フェンリアとダラスから報告はあつたがまさかアイツの再審請求を通せるとはな……まあい取り敢えず奴からの依頼を完遂するぞ。カジノはjackie達に任せるとしてフェンリア、ダラス、チエインズ、ホクストンの四人は護送車を襲つて貰う。」

タブレットに送られた情報を整理していく

襲撃ポイントは首都高速道路、通称C1と呼ばれる場所

その銀座区間

作戦はベインに考えがあるらしい、よつて四人は何故か高速の下で待機する

「で？何で？」

高架下にて煙草に火を着けようとするが着かないため諦める

「良いじゃないかよフェンリア東京の景色を眺めれるんだぞ？」

フェンリア（四葉）が愚痴るのをホクストンが宥める

因みにだがこのホクストンは偽者だ、本物は今世界で一番安全なこの国の刑務所に入っている



「そうだけ、俺達なんて余所者だから目立つから観光もできやしないんだぞ？」

チェインズからも突っ込みをもらいそう言うものか？と言う顔をする

「お前ら……そろそろ時間だぞ」

はしやく三人をリーダーのダラスが忠告する

「つつてもさあダラス、何考えてるんだベインの奴」

フェンリアの愚痴に3人は暫く黙って有ることを思い出す

「そう言えば昔、金塊を盗んだときのとにてるな」

「そーいやあつたな」

「まさか、アレ？」

3人が顔をしかめているとベインから連絡が入る

『お前ら！準備は良いか？』

「「OK!!」」

確認の連絡に威勢よく答える

『トラックready?』

『ready!!』

『ブリッジready?』

『ready!!』

そして他からの連絡を聞いて全員が頭に疑問符を浮かべた直後

「なあ、ベイン？まさかだが……………」

フェンリアの言葉は途中で途切れる、何故なら……

『とてつもない轟音と共にダイヤを積んだトラックが上から落ちてきてフェンリア達の間隣のビルに墜落した』

『お前ら！何してる！行け!!』

ベインに言われて慌てて扉を蹴破るとそこには車が宙ぶらりんになっていた

「ワーオこりやまたスゲーな」

「取り敢えずとつととドアを吹き飛ばしてと」

フェンリアがドアにC4を仕掛けようとする中から何か落ちる

それは爆弾解体用の暴爆スーツを着て手に軽機関銃を持っていた

「ブルドーザー！何でいるんだよ!？」

「下がれフェンリアいくらお前て…………「邪魔だあ!!」…………え?」

3人が銃を構えようとするより先にブルドーザーのバイザーを剥ぎ取り…………

「ドオオオオラアアア!!」

グシヤアアア!!

片手で持ち上げて床に叩きつけ……

「グツドナイト!」

動けなくした所を顔面に弾丸を食らわせ、物言わぬ物に変える

「ウルフも大概のキチガイだと思っていたがお前も大概だよ!」

ホクストーンが焦るがフェンリアは躊躇うことなく答える

「こんなもの倒しちまえば簡単だろ?」

「そうだけど……いやきつと何かが可笑しい!」

理解できるか!と行動で表すがそんな事を気にせず金庫にc4を張り付ける

「そんじゃあ後はドカンと!!」

ド派手な爆音と共に金庫の扉が開く

「ふーん?これがあの『diamond』ねえ?」

爆発の方向を上手く調節し中身を無事においたフェンリアが箱の中身を見て眩  
く

その宝石はまるで見たものを吸い込むような何かがあるがこんなただの石ころと  
思っている四葉はそれを箱に戻す

「OK、お前ら急がないと今の爆発でsatが要請されたようだ国内で派手にやりたく  
ないだろ?」

「そうだな、弾はあるがやらないのがベストだな」

ダラスの合図を元に直ぐにその場から離脱した

都内某所のセーフハウス

「そんじゃああの男には俺から渡しておくよ」

一仕事終えた彼等はセーフハウスにて取り敢えずの乾杯をする

「おう、俺等も少しばかり観光したいしな。」

「アハハ、警察にだけは御注意を」

「分かってるよ」

四葉は奪取した箱を胸のポケットに入れて取引の場所に向かった……

同時刻 ????

「ええ、私です。今からそちらに向かうようです。舞台の準備を……『ネズミはあがつた』以上です」

何者かが何処かに連絡をかけた

## t r a p

2000 東京 某所

「えーと？確かこの辺だよな？」

四葉が指示された場所に辿り着くそこは至つて普通のビルだった

(……………この5階か……………ん?)

何者かの気配に気が付き銃を向ける

「そこにいるのは分かっている出てこい」

四葉の警告に暗闇から出てきたのは鶏頭だった

『相変わらず気配を読み取るのは得意なようですね?』

手をヒラヒラさせながらカセットテープを再生する

「何だお前かよ Jack et……で、何のようだ?」

ホルスターに銃を戻し確認をとる

『貴方が一人で行くと聞いたので。護衛は必要ですよね?』

「お前がいたら確実に殺戮になっちまうよ」

『違いありません』

「……そこは冗談で否定して欲しかったよ」

溜め息をついてから目的の部屋に向かう

「突き当たり……ここか」

ゆつくりとドアを開けて中に入る

部屋の中は何もなく月明かりが部屋を照らしていた

「さてと待ちますか」

『ええ、ですが彼が来るのですか?』

「そんな訳無いだろ、あいつは表にも裏にも出ない。」

四葉の『歯医者』に対する評価に jacket は黙る

彼の言っていることが正論だからだ

そして暫くしていると

カチャリ

部屋の外に誰かが要るようだ

二人が銃を構えて待ち構える

そして中に入ってきたのは一人スーツを着た男だった

「あんたが『受取人』か?」

四葉が確認を取るとそいつは首を縦に振る

「OK、これが約束の品だ」

四葉がポケットから箱を取りだし投げ渡す

「ご苦労、彼には伝えておくよ」

男が部屋から出ようとした直後

「なあ、一つ聞いても良いか？」

「何だ？」

四葉に呼び止められた男が少し怪訝な顔をしながら振り替える

「あんた、『歯間ブラシ』は使っているか？」

「はあ？そんな物は使っていないが？」

「そうか……………」

質問の意味が分からないという顔をした直後……………

バシユ!!!

サプレッサー越しの鈍い音がして男は崩れ落ちる

『フェンリア？何を考えているのですか？』

jacke tが四葉に疑惑の目を向けると彼は少し笑う

「こいつは偽者だよ……………あの男と関わっているなら質問の意味が分かるものだよ……………」

さてどうしましょうね？」

四葉が銃を戻して窓に視線を写す

「………ん？………っ!! jacket 伏せろ!!」

『!!??』

突然の叫びに jacket も慌てて伏せると窓から大量の銃弾が撃ち込まれる

「ちっ!! 奴等最初から穩便に済ませる気は無かったのかよ!!」

鞆から隠し持っていたMP5を取りだし jacket に投げ渡す

「取り敢えず使え! それと脱出するぞ!」

『OK、背中には預けますよ』

「は、サンキュー! ……よっとお!!」

四葉がドアを蹴り開けると目の前にショットガンを持ったのが居たので四葉は、その

まま蹴り飛ばす

「死ね……」

蹴り飛ばして動けなくした後顔面に銃弾を浴びせる

「ゴーゴーゴー!!」

四葉が廊下を駆け抜け階段まで辿り着き扉を開けようとした直後………ドアが吹き

飛ぶ



「がはあ!？」

『フェンリア!!』

jacke tが駆け寄って四葉に肩を貸す

「すまん……………」

『礼は生き残ったらすよ?』

「ハハ、そうだな……………」

四葉は無事な素振りを見せるがjacke tは気が付く破片が体に刺さっておりこのままだと不味いことも

『追手は無いようですね』

「みたい……………」

四葉が出血で意識が朦朧としつつも車の鍵を取り出す

二人が車に乗ろうとした直後、眩しい光が二人を照らす

「警察だ!両手を挙げて動くな!!」

『ついてませんね?』

「全くだ……………jacke t頼みがある」

警察に気づかれないように頼み事をする

「俺を撃て」

『フェンリア?』

「ここで俺を撃てば彼奴等は動揺する。その間に逃げる」

『……………分かりました』

jack etは銃を放り投げると見せかけて四葉の左足と胸を撃つ

「ぐっ!!」

『必ず助けに行きます!』

jack etの声を聞きながら彼は意識を手放す

警察 side

「畜生! あつちは人質だったのかよ!?! 急いで病院に運べ!」

二人組の男を包囲したと思っていたら片方がもう一人を撃った恐らく仲間割れと思うがあの手際の速さ、確実に人質のほうだ

「おい、君! 大丈夫か!」

「げ、ガハ!」

目の前で男が血を吐く

「おい安心しろ直ぐに救急車がくる!」

警官は彼に応急処置を施し声をかけつつける

「畜生、何で最近はこう言うのが多いんだよ!?」

次の日 AMIDA 鎮守府

「提督遅いですねー?」

クーデルカが書類を整理しているとドアがノックされる

「はいはい? どうぞー鍵は空いてますよー?」

「失礼します。」

中に入ってきたのは髪の毛の長い女だった

「あらー? どちら様ですかー?」

「本日付でここに配属に成りました『雲龍』です宜しくお願ひします」

「そうなのですか? よろしくお願ひしますね??」

クーデルカが優しく笑い迎え入れる

「ええ、よろしくお願ひします。司令官」

「私は補佐官ですよー? 本人が居ないのでもう少し待ってくださいね?」

「分かりました」

雲龍がほんの少し表情を変えるがクーデルカはそれに気が付きつくも気のせいとした

二人が挨拶を終えた後執務室の電話が鳴る

「はいはい？ AMIDA 鎮守府司令官補佐官の四葉クーデルカですが？ え？ 提督が逮捕された!?」

そして微妙に歪み始めた歯車は無理矢理回り始める……

雲龍 side

あの人の指示でここに移動することになりましたがまあやれるだけやってやりますよ

……

て、逮捕されたあ!? 何やってんですかあの人!?

# キヤラ設定 雲龍

雲龍

元、マイアミ鎮守府所属の例外殺しの例外

とある事件によりAMIDA鎮守府に移ることになる装備は

烈風

彗星一二型甲

流星

火炎放射機と44マグナムに日本刀

増設しておりそこにアサルトライフル

(AR-15をカスタムしてフルオート化して下にグレネードランチャーを取り付けてある)

(尚、火炎放射機とかは全部四スロットの中だけ……)

火炎放射機は純正より威力を下げて燃料の効率を良くしている

44マグナムはロングバレル化とグリップ交換をして扱いやすさをあげてある

一応……艦載機も積んでるだつて空母だし

艦娘だよ一応……だよな？

普段はおっとりしていてフワフワした感じの掴み所がない尚、戦闘時は中破してから白色の鶏のマスクを被る。

多分、艦娘

上司による特訓によりちよつと変わった能力を持っている

1 インスパイア

大破した艦娘相手に熱いシャウトを掛けて中破若しくは小破にまで戻す。尚、大抵は「Get the fuck up!!」や「stand up baddy」と英語で呼び掛ける

時折、「貴女はまだいけるでしょ!!」や「痛いと思ったからいたいんですよ!!」と無茶を言う……それも日本語で

2 ナインリブス

1度だけ大破級のダメージを無効化する

3 スワンソング

大破して動けなくなつたときに発動する奥義

移動速度は落ち、10秒間だけ有りとあらゆる攻撃を無効化して行動する。尚、10秒経過するとその場から動けなくなる実質轟沈する可能性もある

4 ピストルメシア

3 のスワンソング発動後の能力、拳銃で相手を倒したとき復活する。

5 ソシオパス

彼女の本性と言えるもの中破以降常時発動

白の鶏のマスクを被り日本刀を使い始める。

敵を切り殺せば殺すほど体力が回復する

尚、一度発動したら殲滅しきるか戦闘不能になるまでこのまま要するに乱戦向き

きつと艦娘

補足

一撃でダウンさせられたりした場合上記の能力は使えない。

マイアミ鎮守府所属時は色々とやって来た。

時に宝石強盗、時に核弾頭、時にヤギを盗んだりした

尚、ヤギの件はちよつとトラウマになっているらしい

ヤギの時の事を聞くと遠い目をして

「あんなのは2度とやりたくないです……てか何でヤギ……ああ、なんであんなことに

……（、△、）

以前所属していたマイアミ鎮守府は鎮守府と言うより訓練施設としての意味合いの方が強い

以前の司令官の事を聞いてもやんわりと煙に巻かれる

自分と同じような存在に惹かれるらしく時折相手に不思議な質問をする

例『Do you like hunting other people?』（他人を傷つけるのは好きか？）これは主に味方にか

『Do you know what time is it?』（これから何をされるか分かるよな？）此方は敵に対して

味方に対しては天使とも思えるほどすぐ優しく時に厳しいが敵には異常がつくほどの暴力を振るう

それこそ生かしては帰さないと言うほど

以前所属していた司令官の使っていたマスクと似ているのを使っているため裏社会からは

『ソシオパスの忘れ形見』とも呼ばれる

相手が深海凄艦だろうが艦娘だろうがそれこそ人間でも関係無く殺すときは殺す。

尚、この子に手を出すともれなく色んな所に喧嘩を売ることになりもれなく『ホット



ライン』が届けられる

届いたらどうなるかって？

勿論言わなくても分かるだろ？まあ、生きては帰れないな。

趣味 美味しい食事を食べることに

通常時の台詞「あら？私が出るの？良いよ？」

「艦載機の皆さん、発艦してください」

小破「痛い……頭にきました」

中破以降 「It probably seems that I'd like

to die. (どうやら死にたいようですね)」

大破(スワンソング発動)「Where is a sacrifice? (生け贄は

何処?)」

銃撃を始めるとき(グレネードランチャーを構えて)

「Say hello to my little friend!! (私の友達に挨拶

しな!)

ピストルメシアで復活

「フフ? マダマダアソビマシヨ?」

オマケ ホットラインの、時の話

男が椅子に座らされて殴られつづける

そして途中で両手を挙げる

「お、おいもうやめてくれ！知ってることはすべて話した！」

それでももう一発殴られる

「ボスは危ないときは隠れるんだよ！普通そうだろ!？」

分かったかバカ野郎」

男が悪態をつくとマスクを被った奴がスマホを手に持たせる

「なんだよこれ？」

コーン……………コーン……………コーン

そして目の前に現れたのはバットを持った『白の鶏マスク』

「お、俺じゃない?!俺じゃないんだ!!」

ゆっくりと近づいてくる

「電話なら掛けるからやくそくする!？」

男はその場で震え出す

「金なら払う!?!約束する！『給料』が受け取れるんだぞ!？」

その場でゆっくりとバットを振り上げる

「ヤメロ!? ヤメテクレ!!」

グシヤ!!

直後、男の頭は叩き割られた

「殺す必要があつたのか?」

「生かしたところで正体がバレるかもしれないしねだから殺した」

女はマスクを外すと銃を取りだし男の死体に向けて二発発砲してから立ち去った

……

## 現状とパーティ?

ポーン ポーン

静かな病室に機械の放つ電子音だけが響く

「司令官の容態は?」

「動脈ギリギリの所を弾丸が貫通……取り敢えず命に別状はない……」

如月からの質問に医者は何かを隠しながら答える

「何か問題でも?」

「容態じゃないほうだ……」

「……」

「君だって聞かされてるだろ?彼のやったことを、我々は医者だが只それだけだそこから先は『上』の判断だ」

「司令官……どうして……」

如月が震えているのを見て医者はもう時間だからと彼女を退室させた

「起きてるんだろ？フェンリア」

「全く……寝てるフリも疲れるよ」

如月が病院から出たのを確認すると身体を起こして少し伸ばす

「てかお前歯医者だろ……」

「案外、白衣を来ているとバレないものだ」

「……………（それで良いのかよ）」

無言で睨み付けていると彼は笑う

「まあ良いだろう、しかし君の現状は最悪だ。ベインが何とか手を尽くしているみたい

だが確実に刑務所に20年は確定だな」

『歯医者』からの宣告に彼は表情を変えない

「で？」

まるでそんな程度かと返す

「ふむ、そこで悲観しない辺り流石だな」

「あなたの事だ何か面白い plan でもあるんだろ？」

「ああ、ホクストンの移送計画と被るようにして警備を軽くしてある」

「??？」

「その時に君の知り合いが助けてくれるはずだ」

「如月……………いや、彼奴等を巻き込むきか?」

四葉が『歯医者』を睨み付ける

「ふふ、彼等だよ」

歯医者 of 言葉に四葉は溜め息を吐く

「良かった……………」

「本当に君はあの子達の事が大切なんだな」

皮肉に対して笑って返す

「大切な家族だからな……………心配するのは当然さ」

「フフ? 本当に面白いよ君は」

「そんなじゃ、もう少しだけ寝る」

四葉はそう言うのと横になり眠り始めた

「そうかい、おやすみ」

『歯医者』はそれだけ言うのと静かに部屋を退出した

同時刻上層部 国家安全対策室

「それで? 奴はどうするんだ?」

「刑務所に放り込むのは確定だな」

現在の議題は四葉の処分についてとその移送計画についてだ

「延期は出来ないのですか? 『ジミー ホクスワース』の護送と被るため面倒なのですか」

護送チームの責任者が日程に難色を示すと、スーツの男が資料を手に持つ

「四葉もどうやら『payday gang』と関わりがあるようだなら逆にこれを利用して片方だけでも確実に護送して地下に詰め込むだけだ」

そしてそこに書かれている護送計画を見て全員が啞然とする何故なら

『護送当日、東京23区全てを封鎖し確実に護送できるように警戒体制にする』と記されていたから

「長官? な、何を考えているのかね?」

陸軍大臣が文面に間違いがないか再確認をするが見直したところで文が変わるわけでもない

「何、簡単なことじゃないか。鼠が紛れ込むかもしれないなら鼠しかいないようにするだけだ」

「いや、しかし………これではどんな混乱が起きるか分かっているのかね!」

警察庁長官に対して怒鳴り込むがそれをやんわりと流す

「国家の非常事態とでもしておけ」

「ふざけているのか貴様!!」

「ふざけているのは貴様等の方じゃないのか?」

「何だ?!」

「一般市民がいる状態で護送してもし連中に襲われてみる。

奴等は銃撃戦のプロだそれも躊躇いもなく無反動砲にグレネードランチャーを使う  
そうじゃないか。

その事を考えてみろ下手をしたら流れ弾で一般市民に犠牲が出る。その時の責任は  
誰がとるのだ?」

「しかしだ!!こんなこと出来ると思えるのかね!!」

陸軍大臣が思っていることを海軍大臣が代弁する

「全く……これだから頭の堅い方達だ。君、例の資料を」

長官の隣にいたスーツの男が全員に資料を配る

「実は地下と言うのは開発はしたものの放棄されたと言う場所が多い。地上はダミーと  
してこの地下ルートを使う異論はないな?」

「それなら、まあ良しとしよう」



「陸軍としてはあまり受け入れたくないがこれも国家のためだ」  
「ありがとうございます。」

それぞれからの返答を聞き会議は終わる

そして全員が部屋から出たあと長官付きの秘書官が電話を掛ける

「やあ、Bain」

「やってくれたかい？」

「ええ、例のルートを通るようにしました後は当日次第です。」

「ありがとう」

「いえいえ、それでは」

そして、秘書は電話を切ると暗い部屋から出ていった

AMIDA鎮守府

「状況は最悪です。司令官の証拠がほぼ反論不可能な域にまであります。」

クーデルカの、一言から会議が始まる

「どうにかできませんか?」

「無理ね、普段なら裏どうし、バレる前にやるができるけど今回は表で派手にやり過ぎた。奪還なんてしようものなら色々と面倒になるわよ?」

クーが、質問をするが別から返される

そこには髪がボサボサになったエルがいた

「悪いけど明石と徹夜で情報を調べたけど最悪ね。強盗に殺人にまあ呆れるほど。まるで犯罪のロイヤルストレートフラッシュユね……ここまでくると裁判官も笑顔で死刑宣告する内容ね、それでどうするの?」

遠征から帰ってきたばかりの如月を見る

暫く下を向いていたが顔をあげる

「何があつたかは分かりませんがあの人から話を聞かないといけませんなので奪還作戦をします」

「「了解!!」」

「司令……今作戦は私の独断で事にします。良いですか?」

「仕方ないけどそうするしかないもんね。お願いしますね如月ちゃん」

そして彼女等も動く

護送当日

『ジミーホクスワース』

payday gangと呼ばれる犯罪集団の1人

仲間からはホクストンと、呼ばれていた

その男が地下の通路をゆつくりと歩く

同時刻

四葉一樹

両手を手錠で塞がれ足には鎖を巻き付けられて歩かされる

(んー、どうしようかなあ?)

辺りを観察するが見えるのは殺風景なコンクリート

そして、交わることの無い二人の男がそれぞれの場所でそれぞれ有るものを見つけて  
床に滑り込みそれぞれ蹴られる

「貴様何をしている!」

ホクストン「Look at this (見てくれ!)」

四葉「これ見てくれ!!」

二人はそれぞれ1\$紙幣を見せびらかす

ホクストン&四葉「I, m rich!!! (俺は金持ちだ!)」

ホクストン「It's payday fellas! (給料日だぞ!!)」

四葉「給料日になったぞ!!」

壁に向かって叫ぶが何も起こらない

護衛達はイラつき警棒を取り出して近づく

ホクストン「I said it's fuckin PAYDAY motherfu...」(給料日だて言ってるクソや……)

四葉「給料日だて言ってるんだろぅがああ……」

二人の叫び声は途中で爆音と共に共にかきけされる、なぜなら壁が吹き飛ばされたからだ……

## G u n t r e t

時間は壁が吹き飛ぶ少し前

「OK、お前らは今回フェンリアの奪還に行ってもらおう。あいつは入ったばかりの新入りだが腕は確かだ。そんなもって現役の海軍将校、俺達にとつても色々とお得な相手だ。」

まあ、そんな裏話はさておきだ良いニュースと悪いニュースだ。

良いニュースは奴のいる場所とルートは決まってる。

悪いニュース？ああ、簡単なことだ。

俺もこれは想定外なんだが彼奴等東京をまるごと封鎖しやがった。いやな、アメリカ政府から確実な護送を言われているからここまでやるとは思わなかったぞ……………」

イヤホン越しに聞こえる呆れ声に男は笑う

『気にしたら負けですよ』

普段から黙っている男が突然答えるのに相手は少し戸惑う

「ジャケツト…………お前が答えるなんてな…………まあ良い。少しばかり日本とアメリカの司法に中指を立ててやるとしようか。地下の壁を吹っ飛ばして速攻でトンズラするぞ。」

それと弾薬はたっぷりと用意しておけコソコソやるわけじゃないしな。  
さあ、派手にやってやれ！」

時間は戻り……

『GO!GO!』

「!?」

バスバス!!

突入と同時に近くにいた警護官三人を撃ち殺す

「クリア!!」

『フェンリア、大丈夫ですか?』

爆発によりちよっと飛ばされた四葉を回収する

「アホかお前!C4の量が多すぎだ!!俺を殺すきか?」

本気でキレル四葉にジャケットは何を言ってんだかと軽く返す

『死んではないでしょ?』

「お前な……「動くな」……シット」

瓦礫の下にいた女性警護官がジャケットに銃を向ける

「両手を挙げ……『バン!』……」ドサリ

しかし言いきる前に頭を撃ち抜かれ骸になる

「ナイスだよ」

『そちらこそ』

それは左手に拳銃を持った四葉がジャケットの服を貫通させて撃つたのだ。

常人なら不可能だがこの変態に出来ないことはそうない

「二人とも急いでくれ！爆発を聞かれているからもう来るぞ！」

「はいはい分かったよ……全く……何でこんなに時間が掛かったんだよ？」

四葉が愚痴ると白いスーツ……嫌、全身を防弾のスーツで身を守る男が叫ぶ

「ウルセー！此方だつて忙しいんだよ!!」

「OK、悪かったつて、で君達は何て呼べば良いかな？お二人さん？」

四葉が名前を確認する

「ソコルだ、よろしく」

「クローバーよ、足引つ張らないですよ？」

「ハイハイ、まあ頼むよ」

そう言うのと軽く肩を回し、死体から銃を奪う

「それで？逃走用の車はどこかな？」

『此方です、フェンリア。』

「じゃあエスコートたの……（バン!!）……ち、急ぐか!! フォローする頼むぞ!!」  
彼等が慌てて外に出る

その頃、国家安全保障部（別名、無能の集まり）

今、会議室は大混乱に陥っていた

「何?! ホクストンが強奪された!?! どういうことだね!?!」

現場からの突然の報告に頭を抱える、そしてそんな男に悪夢が追加される

「ちよ、長官!?! 四葉の護送班もしゅ、襲撃されましたあ!!」

「フアーッック!!」

男は叫ぶと同時に机に突っ伏す

「長官! 指示を!!」

「この際プライドは抜きだ!! 陸軍と海軍に連絡しろ! 奴を取っ捕まえろ!! いや、この際殺しても構わん!!」

「わ、わかりました!」

そして事態は全員の想定を越える……



AMIDA鎮守府side 時刻は襲撃10分前

「ポイントはココ。地下のトンネルです。コソコソやる気は有りません。壁を吹っ飛ばして回収して速攻で逃げます」

如月が入手した情報をもとに四葉の奪還ポイントを決める

そこはjacket達から600メートル離れた場所だった

「如月、変な反応がある」

「どういうことですかセラフ？」

「妙な反応だ数は3人場所は反対のトンネルで600メートル先」

「警護班では？」

「壁の先だぞ？」

「警戒を続けてください、嫌な予感がします」

セラフとの話を終わると無線を繋げる

「此方如月、クー、Livそっちは？」

「此方クー、脱出ポイントにて待機しかし……全面封鎖のせいで簡単には動けないな」

「そうだね、クーさん………此方Liv不味いですよ……警察無線を傍受してますがどうやら彼方さん誰かに逃げられたらしくて日本の真ん中でドンパチ銃撃戦をやっているようです……如月大丈夫ですか？」

二人からの報告に渋い顔をするが作戦続行を指示する

「時間です、こうなったらそれを利用します。全員セーフティー解除作戦をか……『ズドン!!』何?」

突然の衝撃に二人は構える

「クソ!!四葉のいる方角だ連中奴を消すきだったか!!」

セラフがある意味の勘違い（普通の反応）をする

「全員直ぐに地上を確認!急いで救出します!」

「GO!GO!」

そして如月達もライフルを手に取り目標に詰め寄る

時間は戻り 現在

「smoke!!」

「ありったけ焚いてやれ!!」

「行くぞ!!」

「フェンリア!?!ちよつとヤバくないか!?!」

「相手をするのは面倒だ!車はある出せ!!」

『ソコル!クローバー!follow me !!』

用意してあったピックアップに全員が飛び乗る

『GO!』

「グッ!?……足を撃たれた!」

が、直後足を撃たれた四葉が荷台から落ちる

『フェンリア!!』

jacke tが飛び降りてフラッシュバンを投げる

「クソ!? 奴ら彼奴をどうするきだ!」

「如月! 逃げられるぞ!!」

「L i v ! 火力支援!!」

「無理です! あの人に当たります!」

「逃げられるぞ!!」

「撃て!! 撃ちまくれ!」

如月達がライフルを撃ちまくるが猛スピードで車は去る

「ソコル、次の角を右ね」

「わか「違うな。左だ」……え?」

「少し寄り道する。」

二人が驚いていると j a c k e t が笑う

『場所は?』

そして死神も楽しそうに言う

「警察庁だ、なあに軍を調べて出なかつたんだ。調べるならな?」

## Deadman's hand

都内某所 四葉のもう一つのセーフハウス

部屋の鍵を開けて中を確認してから中に入る

「感謝するお前たち、だがな一つだけ分からんことがある。

連中は俺の事について知りすぎている。

それこそ俺が身内にしか分からないこともな、あの層で最低で自分の保身の事にか興味のないゴミ虫達に分かるはずがない、もしかしたら凄腕の調査官がいるのかもしれんがな？

まあ、取り敢えず知りすぎているからな死んでもらうしかない。

「ここまでできて脅迫とか司法取引とかまどろっこしいのは抜きだ直接行ってその虫けらを探す。」

一息に話すと金庫の鍵を開けて中から全員分のライフルを渡す

「ん？どうやって調べるかだど？だから言っただろ？」

普通だったら内通者や裏取引も考えに入るかもしれないけどそんなのは面倒だし時間

が掛かる

え?.....お前頭大丈夫か?だと?

あー、まだ平気だ。とにかく今から警察庁に殴り込んで俺をはめた糞のどぶねずみ野郎を見つけてやる」

四葉が楽しそうに話ながら自身の予備の武器と弾薬を持ち出す

「あー、お前ら? フェンリアはあんなのだぞ?」

ペインによるフェンリア（四葉）の説明を聞かされるが二人は呆然とする

「あー、フェンリア? ーっただけ聞いていいか?」

「何ですかソコル?」

さっきまで黙っていたと思うていたが流石に取り出したものを確認する。

「それ..... 『ミニガン』だよな?」

なんと取り出されたのはM134 『ミニガン』である

名前だけだとまともに見えるだが実際は携行可能のレベルにまで小型化したガトリングである

「そうだよー総弾数300発予備も入れれば600発だ室内でぶつぱなすには丁度いいんでな」

(どこが!?)

「安心しろ予備弾薬もたっぷりあるぞ？」

そう言うなり部屋からじやらじやらと弾薬の入った箱を引きずる

「jacketerこれ積んどいてー」

『フェンリア……………弾はこれで足りるのですか？』

(そこかよ!?)

もう何がしたいかわからない二人だが船に乗った者として素直に諦める

「さてと……………『人生最大の給料日』といこうか？」

それから20分後

警察庁前

「で?どうやって入るんだ？」

「そうねー、正面からやりあうのはバカじゃない？」

ソコルとクローバーの二人が正面を見てあきれる

何故なら……………

『盾を持った機動隊が入り口を完全封鎖してるからだ』

「ここは普通に考えて裏口からとか？」

「けどあるか？」

「んー、まあ案外あるんじゃない?」

二人がどうやって侵入しようかと考えてると二人の肩が叩かれる

「取り敢えず決めたから乗って?」

フェンリアがマスクを被り車に乗る

「で?どうやって行くの?」

「なあに簡単さ取り敢えずシートベルトしてるな?よし……………突っ込む!!」

「え?」

二人が呆然とする間にアクセルを全開にする

ブオオオオオオン!!

ガツシヤアアアア!!!!

警官隊を引き倒して正面玄関に乗り込む

「よし、始めようか?」

「なんだ貴さ……………『ダーイ?』……………」

近づいてきた警察官を Jacke<sup>ト</sup>tが撲殺する

そして 提督<sup>サイコパス</sup>と提督<sup>ソシオパス</sup>が動き始める



## 狂人（提督）

時間は四葉が突撃してくる前

警察庁 会議室

今この場の空気は最悪だった

四葉が強奪されたのはまだ良かった……まあ実際はよくないが……

ホクストンの脱獄騒ぎの時に多くの警官隊が銃撃戦で死亡、お陰で公安からは睨まれるは政府にも文句を言われるはめになり場の空気は最悪だった

その空気の中、警察庁長官が嫌味を言う

「で……？？ホクストンの護送は失敗して四葉にも逃げられたと？この件どうするのかね？ん？」

長官からの嫌味に担当者は苛立ちを隠せない、そもそもあの時、護送計画が変更されてなければ無事にすんでいた筈なのだ、なのに直前になって変更されたせいでの様だ（この糞狸何時か絶対ぶつ殺す）

担当者が苛立ちを隠しながら謝罪の言葉を言う前に救いの手が差し伸べられる

「まあまあ、奴がまだ東京都内にいるのは分かっているから後は包囲網を狭めて捕まえる

ただだ。それに軍の連中は海上のパーティーに出払ってる派手にやるなら今のうちだ、だろう？」

それは前日に来ていた秘書の男だった

「まあそうだが………奴が最後に目撃されたのは？」

「浅草だそうですね」

「目的が見えない………いったい何をやりたいのだ？それにしても情報は？」

1 度切り換えるために分かっている情報を整理する

「カメラに残ってる映像から分かるのは………少ないな」

全員がカメラに残っていた映像を見るが四葉が床に滑り込んで何かを叫んだ後、壁が吹き飛ばされ煙が晴れたときには奴がいなくなっていた

それを見て何とも言えない空気になった後、長官が話す

「取り敢えず、全域封鎖を利用して奴等を見つけろこの際殺しても構わん………嫌、確実に殺せ」

「し、しかし！そんなことをやったら………『ガツシャアアア!!』………はあ?!」

突然の轟音に全員が慌てて下を見るとそこには車が正面から警官隊を引いて突っ込んできたのだ

「ハア?!ふざけんな何処の糞野郎だ?!」

担当者が慌てて防犯カメラの映像を確認する

「は、はは………最悪だ」

彼等が目にしたのは………悪夢としか言えない光景だった

警察庁 1階 ロビー

いきなりの侵入者に警官が駆け寄る

「何だ貴さ………「死ねよ」ガッ、？」

しかし男が言い終わる前に頸動脈をナイフで切り裂く

「邪魔」

クローバー達がついてくる前に1人で進み淡々と殺す

「な、何を考え………「五月蠅い」………」

廊下を進みながら出てきた奴の頭に的確に鉛玉を叩き込む

『フェンリア前に出すぎですよ？』

「は、ほぎげバットでぶん殴って殲滅してるのはどいつだ？」

四葉が仕留め損ねたり隠れている相手を *jacke t* は近づいておもいつきり撲殺する

「さてと？こつちかなー？」

『左では？』

「右じゃねー？」

二人が悩んでいると両方から警官隊が表れる

『両方かー』

それに驚きもせず四葉はミニガンをjackpotはM4を撃つ

二人が淡々と会話しながらごみ掃除を続ける

そして一階のロビーは血の海になった

（駄目だこの二人!?!）

クローバーとソコルがもう色々と駄目だと思っているとベインから連絡が届く

「取り敢えずシステムは止めた連中最上階だ」

「バカと煙はなんとやられてか？」

『権力者は高い場所を求めるものですよフェンリア、それが死刑台とは思ってないようですか？』

「ハハハ、そうだな」

お互いマスクを被ってるため素顔は見えないが声だけでも分かる……完全にイカれていることだ

「さてと？じゃあさつとさといきますか？」

『Please me follow』

痛みに呻く警官の頭を撃ち抜きのんびりとそれこそハイキングにでも行くようにエ  
レベーターに向かった

そして楽しそうに銃口でボタンを押す……

その頃 AMIDA 鎮守府

「状況は？」「最高に最悪です」

クーデルカの質問に如月が返す

あまりにも状況が悪すぎるからだこれじゃあいくらなんでも誤魔化しは不可能しか  
も当の本人は絶賛警察官を大量虐殺中

それでもってマスコミ（ただ単にその場にいた記者団）全員を人質にしてるようだ。

「本当に裁判官が笑顔で死刑宣告するわよこれじゃあ……」

エマが頭を抱える

「考えが読めない……あの人の狙いは？そもそも誰が得をしていた？そして……誰

が不利になる?」

クーデルカが執務室をうろうろしながら考える

そして何かに気がつき立ち止まる

「……………ちよつと待つて?そもそも『行動が早すぎる』

?」

「どういうことですか?司令官代理?」

「だつていくらなんでも可笑しいわよ普通脱獄した次の日に襲撃をかけるかしら?」

「確かに……………あの人なら1度潜つて暫くしてから動くはずです。」

「なのにそうせずに直ぐに動いた」

「動かざるを得なかつたてことか?」

セラフが持つていたライフルを置く

「恐らくね。そして早く動かないと余計な邪魔が入るとも思つてるかもしれないわね

……………明石に頼みましょう」

クーデルカはそう決めると明石に電話を掛ける

20秒ほどしてから明石が出る

「どうかしたのですか司令官代理殿?」

「調べて欲しいものがあるの、彼に関する情報そして……………」

彼を嵌めたがつている連中のリストを用意してもらえる？

「了解です、少し時間をください。」

彼女等も動き始める彼の狙いについて……

??side

不味いですね……まさかここまで早く動くとは彼方に私の事はバレていないようですが私も対策を取るとしましょう

四葉一樹提督貴方にはここで退場してもらいましょう。

さて、その為にも……今は演じましょう。

『AMIDA鎮守府』の一員として

そう遠くない未来 某所にて

??side

裏切り？ああ、この世界じゃあよくある話だ。

そうだな、あの時はああ、お前かて奴が裏切ったな

まあそうだな……君の知りたい事に関しては殆んど情報は残ってない。

そうだよ？彼は『残しすぎてない』

説明がわからん？そうだな、じゃあ話の続きといこうか、

『あの日あの場所で何があったか』



## 袋のネズミを誰が笑う？

警察庁 最上階

「くそ?! 何で開かない!!」

四葉達に襲撃され、逃げ出そうと考えるが画面に表示されるは errorのみ

「急いでバリケードを作るんだ!! 増援が来るまで入られないようにするんだ!!」

隊長が部下を使つてエレベーター前にバリケードを建てる

「長官、取り敢えずこれで問題は有りませんが。奥の金庫にお逃げください。」

「わかった………なんとかするんだぞ?!」

「分かつております、おい見張っている。私は本部に無線を飛ばして増援を要請する。」

「了解!!」

部下達を見守つた後、隣の部屋でまず携帯を着ける

『ベイン? 私です。連中は奥の金庫に閉じ込めておきました』

『OK、ならあとはうまく逃げろ』

『了解』

VIP達を金庫に送り届けた後、隊長は隣の部屋に入り無線機を叩き壊した後、窓ガラスを破る

「隊長何かあったのですか?!……ここ、これは?!隊長何を!」

が、部下に現場を見られ詰め寄られる

「何を考えているんで……ガ?!」

「悪いな、俺も大金が掛かってるんでな!」

しかし自然な動作で部下の首を掻ききり逃げ出す

10分後

〈チーン!〉

「撃て!!撃ちまくれ!!!」

エレベーターの到着と同時にありつただけの弾幕が張られる

「撃ち方止め!!、死んだな間抜けどもが」

隊長が居なくなったことに気がつかない

隊員達がアサルトライフルを撃ちまくりエレベーターを蜂の巣にする

「よし、誰か見てこい!」

「了解！」

そして隊の一人がエレベーターに近づく

「え?.....誰もいな.....」(ゴトリ)

誰もいないことを言おうとした直後そいつの首が落ちる

『Please me attention (皆様にお知らせします)』

エレベーターから一人の男が日本刀片手に降りてくる

『Happily you were chosen as a victim of

a slaughter. (貴方達は幸運にも虐殺の被害者に選ばれました)』

そしてそれはカセットテープを鳴らす

『You were chosen as a victim of a slaughter.  
h t e r .

(これより全員殺します。)

「ひ、ひい?!」

恐怖で逃げようとする隊員の一人に刀を突き刺し絶命させる

『good—bye (ではさようなら)』

そして楽しそうにその場にいた全員をバラバラに斬り殺した

『皆さん?終わりましたよ?』

「相変わらずえげつねえ」

「……………（もういやこの二人）」

三人がエレベーターから降りて外の惨状に顔がひきつるもなんとか立ち直る

「まあ、護衛はいないし後はオープンセサミー！てな……………マジ？」

扉を意気揚々と蹴り開けた彼が見たのは巨大な金庫だった

それと防爆スーツを着て軽機関銃を持ったやつが3人

『ブルドーザー』

「jackkin sit!？」

jackketが飛び退くと同時に全員が一度下がりに隣に隠れる

直後軽機関銃の弾がドアを撃ち抜いていった

「どうする？流石にアレはどうにかしないとヤバイぞ」

「言われても今手持ちの銃と予備弾薬だどぎりじゃね？」

「けどこのままでどじり貧出しねえ」

取り敢えずで作った（死体からかき集めた）バリケードと弾薬を確認するが使用銃火器が短機関銃だったため弾が足りないのだ

馬鹿四人が気楽に会話をするが現状ドアにありったけの弾が撃ち込まれている破られるのも時間の問題だ

「……あれ、やるかあ」

四葉が気楽そうに義手を外す

ズリユ！

直後腕を再生するがそれは人の腕とは言えない物だった

長さは一メートルを少し越えるくらいで長く細い

そして『化物』はそれを振るう

「ソレジャア、ヤリますか」

そのままドアを開けて外に出るとまず一人つかんで壁に叩きつける、中でグチャグチャになる音が聞こえるが気にせず残り二人にそれを叩きつける

三人を軽く片付けると窓から放り捨てる

「OK……オワツタナ」

少し寂しそうに笑うと金庫のドアにテルミットを仕掛ける

金属が熔けていくのを眺めながら持っていた拳銃を再装填

「クスクス。さあ、ラストダンスも終わつたしカーテンコールももうすぐだ……後は君の死をもってグランドフィナーレだ」